

那覇市文化財調査報告書第43集

# 天 界 寺 跡

— 首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告 —

2000年3月

那覇市教育委員会



上：本堂跡の全景

下：〃の完掘状況



上：東地区の全景  
下： “ の建物跡

## 序

この報告書は、沖縄県都市計画課の首里城公園整備事業に伴う埋蔵文化財「天界寺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

天界寺跡は円覚寺・天王寺とともに琉球王府時代の三大巨刹に挙げられている著名な臨済宗の寺院であります。寺院の創建については、尚泰王によって15世紀の中頃に建立され、第1尚氏から第2尚氏へ受け継がれていきます。その後、火災により焼失しますが、17世紀中頃に復旧され、明治末までの約400年間の長きに亘り存在したことが知られています。このように、天界寺跡は幾多の変遷が窺えられるが詳細については不明な点が数多く見られます。

天界寺跡の発掘調査は、これまで市街路事業に伴う調査より本堂跡等が確認され多大な成果が報告されています。

今回の調査においても、前述した歴史的背景や発掘調査の成果を踏まえ、1995～1996年の2ケ年に亘り調査を行いました。遺跡の上面は戦後の住宅建設や造成工事などで、部分的に破壊されていましたが、それでも数多くの成果が得られました。

特に、本堂跡の背面に展開された建物跡等が確認されたことは、画期的なことだと考えられます。また、出土遺物として天界寺の境内に葺かれた瓦等が多量に得られ、往時の寺院を彷彿させるものでありました。その他にも天界寺で用いられた仏具・青磁・白磁・青花・タイ産の陶器・備前陶器などの貴重な資料が数多く発見されました。

これらの成果より、この本報告書が「天界寺跡」の一端を理解する資料を提供したものとと思われます。また、この報告書によって、広く埋蔵文化財の理解と認識を深める資料として活用されんことを願います。

末尾になりましたが、発掘調査及び資料整理にあたり、多大なるご協力を頂いた関係各位のみなさまに対して深く感謝申し上げます。

那覇市教育委員会  
教育長 渡久地 政吉

# 例 言

1. 本報告書は平成7年度に実施した「天界寺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は「首里城公園整備事業」に伴うもので、沖縄県都市計画課の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査・資料整理に際し、下記の方々に指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。
  - 高宮 廣衛 (沖縄国際大学)
  - 森本 朝子 (福岡市教育委員会)
  - 森村 健一 (堺市教育委員会)
  - 神谷 厚昭 (沖縄県立博物館)
  - 島袋 洋 (沖縄県教育委員会)
4. 本書をまとめるにあたって、首里城線街路事業に伴う「天界寺跡」調査報告書を参考にした。特に、中国陶磁器等の編年については、金武 正紀氏の下記の研究論文等を基本にまとめた。
  - a. 金武 正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号  
沖縄県立博物館 1989年
  - b. 金武 正紀「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320  
ニューサイエンス社 1990年
5. 発掘調査では法面地区・東地区に分け調査を実施したが、資料整理・報告書の段階で法面地区の東側については東地区に含め、法面西側については西地区として取り扱った。本書で特に、ことわりがないものは、すべて東地区の出土資料である。
6. 本書の執筆と編集は下記のとおりである。
  - 編集 宮良 文子・慶田 秀美の協力を得て、島が行った。
  - 執筆 渡久地政嗣 第Ⅱ・Ⅳ章、第Ⅴ章第1節
  - 當銘 由嗣 第Ⅵ章13
  - 島 弘 第Ⅰ・Ⅲ章、第Ⅴ章第2節、第Ⅵ章1～12・14～24、第Ⅶ章
7. 本書に掲載した空中写真および地形図・国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。
8. 第3図は嘉手納宗徳氏複写の首里古地図を複製した。
9. 出土した資料については、すべて那覇市教育委員会文化財課で保管している。
10. 挿図(実測図)は、1999年発行の「天界寺跡」の凡例に準じる。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	てんかいじ あと							
書名	天界寺跡							
副書名	首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	島 弘・渡久地政嗣・當銘由嗣							
編集機関	那覇市教育委員会文化財課							
所在地	〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8				TEL 098-853-5775			
発行年月日	西暦 2000年 3月 10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんかいじ 天界寺跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりきんじょうちょう 首里金城町	47201		26度 12分 53秒	127度 43分 02秒	19950801 ～ 19960325	1,045	首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天界寺跡	宗教遺跡	グスク時代 琉球王府時代	本堂跡 溝 土壇 ピット群など		土器 石器 瓦 白磁 青磁 青花 天目 褐釉陶器 等		18世紀代の伽藍配置が確認された。	

# 目 次

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査体制および成果の記録	1
第Ⅱ章 位置と環境	5
第Ⅲ章 調査経過	6
第Ⅳ章 層序	8
第Ⅴ章 遺構	10
第1節 遺構概略	10
第2節 遺構内遺物	20
第Ⅵ章 出土遺物	34
1. 白磁	34
2. 青磁	44
3. 青花	65
4. 瑠璃釉	73
5. 鉄釉	73
6. 色絵	73
7. 三彩	73
8. 翡翠釉	73
9. 褐釉陶器	76
10. 韓国産陶磁器	80
11. ベトナム産陶磁器	80
12. タイ産陶器	80
13. タイ産半練（土器）	83
14. 円形土製品	89
15. 瓦質土器	91
16. 備前陶器	92
17. 瓦	95
18. 埴	107
19. 銭貨	111
20. 青銅製品	120
21. 鉄製品	128
22. 玉類	134
23. 石製品	139
24. 陶製品	140
第Ⅶ章 まとめ	143

## 挿 図 目 次

第 1 図	那覇市の位置		
第 2 図	15世紀代に建立された宗教関係の位置図…	3	
第 3 図	首里古地図…	4	
第 4 図	グリッド設定図…	7	
第 5 図	層序断面図…	9	
第 6 図	主な遺構配置図…	12	
第 7 図	Ⅱ地区本堂跡・参道跡…	13	
第 8 図	基壇石積立面図…	14	
第 9 図	Ⅰ地区竪穴状遺構及びピット群…	15	
第 10 図	東地区建物跡…	16	
第 11 図	東地区三殿内屋敷跡…	17	
第 12 図	東地区三殿内神女(ノロ)屋敷跡・石敷…	18	
第 13 図	東地区三殿内神女屋敷跡便所・石組遺構…	19	
第 14 図	ピット・西 (No.8・9・25・38・40) 出土遺物…	21	
第 15 図	ピット (No.2・9・18) 出土遺物…	22	
第 16 図	ピット (No.23・31・43・60) 出土遺物…	23	
第 17 図	ピット (No.49・61・78・101) 出土遺物…	24	
第 18 図	ピット (No.102・103・104・107) 出土遺物…	25	
第 19 図	土壇・西 (No.1) 土壇 (No.2・4) 出土遺物…	27	
第 20 図	土壇 (No.1) 出土遺物…	28	
第 21 図	土壇 (No.5) 出土遺物…	29	
第 22 図	土壇 (No.6・7) 出土遺物…	30	
第 23 図	土壇 (No.8・不明) 出土遺物…	31	
第 24 図	土壇 (No.不明) 出土遺物…	32	
第 25 図	白磁：碗・皿…	40	
第 26 図	白磁：皿・盤…	41	
第 27 図	白磁：杯…	42	
第 28 図	白磁：蓋・壺・香炉・脚台…	43	
第 29 図	青磁：碗…	54	
第 30 図	青磁：碗…	55	
第 31 図	青磁：碗…	56	
第 32 図	青磁：碗…	57	
第 33 図	青磁：皿…	58	
第 34 図	青磁：皿…	59	
第 35 図	青磁：皿…	60	
第 36 図	青磁：盤…	61	
第 37 図	青磁：盤…	62	
第 38 図	青磁：杯・搗鉢・香炉・瓶・袋物…	63	
第 39 図	青磁：水滴・壺…	64	
第 40 図	青花：碗…	69	
第 41 図	青花：碗…	70	
第 42 図	青花：皿・盤…	71	
第 43 図	青花：杯・高足杯・水注・瓶…	72	
第 44 図	瑠璃釉：小碗・瓶、鉄釉：小碗 色絵：碗、三彩、翡翠釉：皿…	75	
第 45 図	褐釉陶器：壺・鉢、白釉陶器：壺…	78	
第 46 図	褐釉陶器：鉢・搗鉢・壺…	79	
第 47 図	韓国産陶磁器、ベトナム産陶磁器 タイ産陶器…	82	
第 48 図	タイ産半練(土器)：蓋…	87	
第 49 図	タイ産半練(土器)：蓋・壺型・鉢型? 器種不明…	88	
第 50 図	円形土製品…	90	
第 51 図	瓦質土器：植木鉢・鉢・炉 備前陶器：搗鉢…	93	
第 52 図	備前陶器：大甕…	94	
第 53 図	高麗系瓦出土分布図…	100	
第 54 図	高麗系瓦：平瓦…	101	
第 55 図	高麗系瓦：平瓦 大和系瓦：軒丸瓦・丸瓦…	102	
第 56 図	軒瓦出土分布図…	103	
第 57 図	明朝系瓦：軒丸瓦…	104	
第 58 図	明朝系瓦：軒丸瓦…	105	
第 59 図	明朝系瓦：軒平瓦…	106	
第 60 図	埴出土分布図…	109	
第 61 図	埴：Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類…	110	
第 62 図	銭貨出土分布図…	115	
第 63 図	銭貨…	116	
第 64 図	銭貨…	117	
第 65 図	銭貨…	118	
第 66 図	銭貨…	119	
第 67 図	青銅製品：八双金具・鍍金具・鋌 座・切羽・燭台…	124	
第 68 図	青銅製品：釘・留具・装飾金具・ 円形状金具…	125	
第 69 図	青銅製品：指ぬき・用途不明・簪…	126	
第 70 図	青銅製品：煙管…	127	
第 71 図	鉄製品：釘…	131	



第72図	鉄製品：鎌・刀子・毛抜き・ 金具類・用途不明……………	132
第73図	釘出土分布図……………	133
第74図	玉類：勾玉・棗玉・平玉・丸玉・ 装飾品？……………	137
第75図	玉類出土分布図……………	138
第76図	石製品：碁石・碁石代用品・砥石・ 用途不明……………	141
第77図	陶製品：人形・用途不明……………	142

第29表	青銅製品（煙管）計測一覧……………	122
第30表	青銅製品計測一覧……………	123
第31表	青銅製品（簪）計測一覧……………	123
第32表	鉄製品出土一覧……………	128
第33表	鉄製品計測一覧……………	129
第34表	鉄製品（釘）計測一覧……………	130
第35表	鉄製品（釘）長さ別出土状況……………	130
第36表	玉類出土一覧……………	134
第37表	玉類観察一覧……………	135
第38表	石製品観察一覧……………	139
第39表	陶製品（人形）観察一覧……………	140

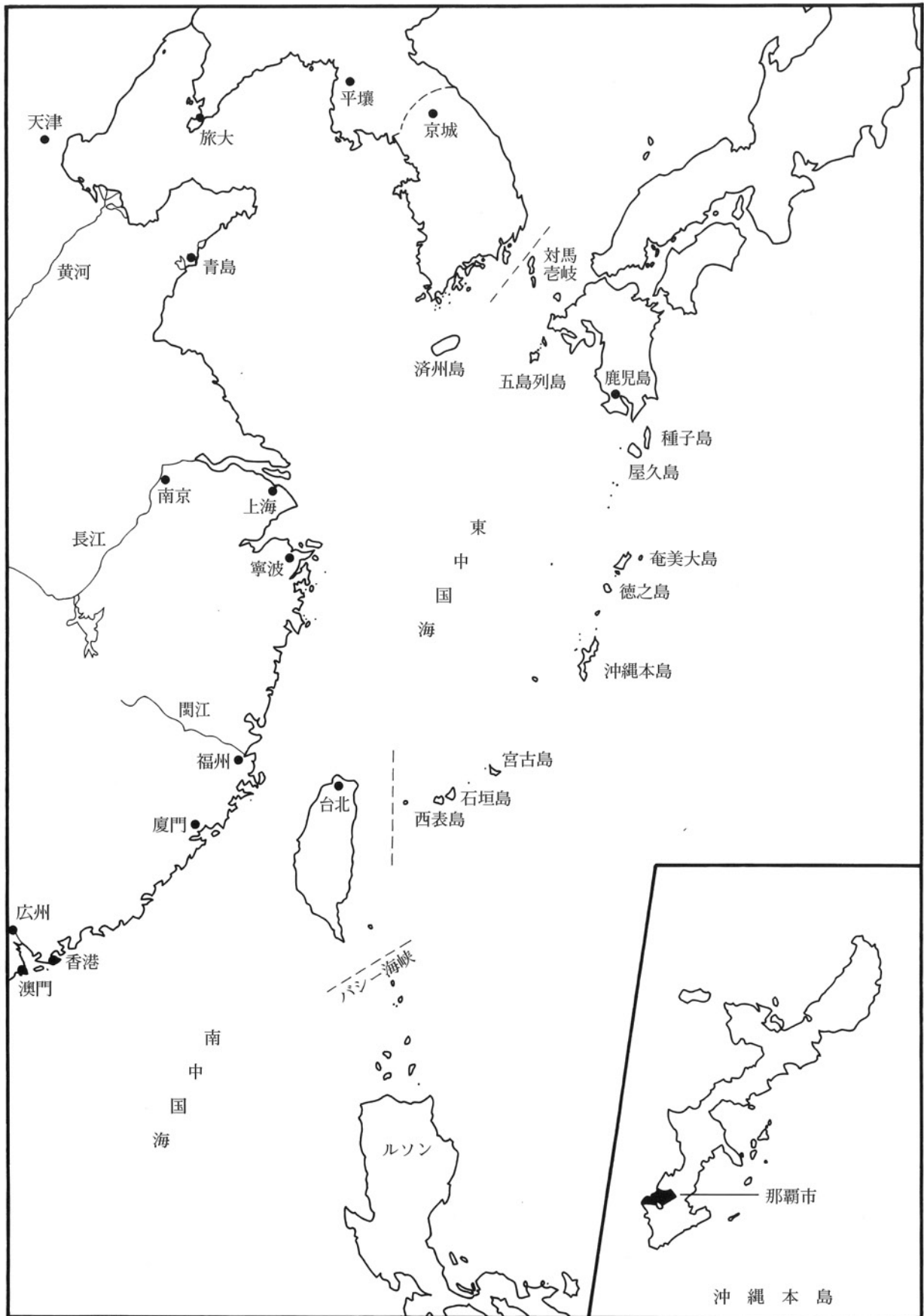
## 表 目 次

第1表	ピット内出土遺物観察一覧……………	20
第2表	土壌内出土遺物一覧……………	26
第3表	土壌内出土遺物観察一覧……………	26
第4表	遺物出土一覧……………	33
第5表	白磁観察一覧……………	36
第6表	青磁観察一覧……………	46
第7表	青花観察一覧……………	66
第8表	三彩出土一覧……………	73
第9表	瑠璃釉観察一覧……………	74
第10表	鉄釉観察一覧……………	74
第11表	色絵観察一覧……………	74
第12表	褐釉・白釉陶器観察一覧……………	77
第13表	タイ産褐釉陶器出土一覧……………	80
第14表	韓国・タイ・ベトナム産陶器等観察一覧……………	81
第15表	タイ産平練（土器）観察一覧……………	84
第16表	円形土製品観察一覧……………	89
第17表	瓦質土器観察一覧……………	91
第18表	備前陶器観察一覧……………	92
第19表	高麗系平瓦出土一覧……………	96
第20表	高麗系瓦観察一覧……………	96
第21表	明朝系瓦（軒丸）出土一覧……………	97
第22表	明朝系瓦（軒平）出土一覧……………	97
第23表	明朝系瓦（軒丸）観察一覧……………	98
第24表	明朝系瓦（軒平）観察一覧……………	99
第25表	埴観察一覧……………	99
第26表	埴出土一覧……………	108
第27表	年代別出土状況……………	111
第28表	錢貨計測一覧……………	112

## 図 版 目 次

図版1	上：本堂跡全景 下左：本堂跡右排水路半裁状況
図版2	礫敷遺構の変遷
図版3	上：東地区（三殿内跡）の全景 下：東地区の完掘状況
図版4	建物跡と参道
図版5	主な土壌とピット群
図版6	三殿内と神女（ノロ）屋敷跡
図版7	神女（ノロ）屋敷と便所遺構
図版8	層序
図版9	層序
図版10	ピット・西（No.8・9・25・38・40）出土遺物
図版11	ピット（No.2・9・18）出土遺物
図版12	ピット（No.23・31・43・60）出土遺物
図版13	ピット（No.49・61・78・101・102） 出土遺物
図版14	ピット（No.103・104・107）出土遺物
図版15	土壌・西（No.1）土壌（No.2・4） 出土遺物
図版16	土壌（No.1）出土遺物
図版17	土壌（No.5）出土遺物
図版18	土壌（No.6・7・8・不明）出土遺物
図版19	土壌（No.不明）出土遺物
図版20	白磁：碗・皿
図版21	白磁：皿・盤
図版22	白磁：杯

- 図版 23 白磁：蓋・壺・香炉・脚台
- 図版 24 青磁：碗
- 図版 25 青磁：碗
- 図版 26 青磁：碗
- 図版 27 青磁：碗
- 図版 28 青磁：皿
- 図版 29 青磁：皿
- 図版 30 青磁：皿
- 図版 31 青磁：盤
- 図版 32 青磁：盤
- 図版 33 青磁：杯・搦鉢・香炉・瓶・袋物
- 図版 34 青磁：水滴・壺
- 図版 35 青花：碗
- 図版 36 青花：碗
- 図版 37 青花：皿・盤
- 図版 38 青花：杯・高足杯・水注・瓶
- 図版 39 瑠璃釉：小碗・瓶、鉄釉：小碗  
色絵：碗、三彩、翡翠釉：皿
- 図版 40 褐釉陶器：壺・鉢、白釉陶器：壺
- 図版 41 褐釉陶器：鉢・搦鉢
- 図版 42 褐釉陶器：壺
- 図版 43 韓国産陶磁器、ベトナム産陶磁器
- 図版 44 タイ産陶器
- 図版 45 タイ産半練（土器）：蓋
- 図版 46 タイ産半練（土器）：蓋・壺型・鉢型？  
器種不明
- 図版 47 円形土製品
- 図版 48 瓦質土器：植木鉢・鉢・炉  
備前陶器：搦鉢
- 図版 49 備前陶器：大甕
- 図版 50 高麗系瓦：平瓦
- 図版 51 高麗系瓦：平瓦  
大和系瓦：軒丸瓦・丸瓦
- 図版 52 明朝系瓦：軒丸瓦
- 図版 53 明朝系瓦：軒丸瓦
- 図版 54 明朝系瓦：軒平瓦
- 図版 55 埴：Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類
- 図版 56 錢貨
- 図版 57 錢貨
- 図版 58 錢貨
- 図版 59 錢貨
- 図版 60 青銅製品：八双金具・鎧金具・鉞  
座・切羽・燭台
- 図版 61 青銅製品：釘・留具・裝飾金具・  
円形状金具
- 図版 62 青銅製品：指ぬき・用途不明・簪
- 図版 63 青銅製品：煙管
- 図版 64 鉄製品：釘
- 図版 65 鉄製品：鋏・刀子・毛抜き・金具類・  
用途不明
- 図版 66 玉類：勾玉・棗玉・平玉・丸玉・  
裝飾品？
- 図版 67 石製品：碁石・碁石代用品・砥石・  
用途不明
- 図版 68 陶製品：人形・用途不明



第1図 那覇市の位置

# 第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯

## 第1節 調査に至るまでの経緯

沖縄県都市計画課では、「首里城公園基本計画」に基づいて沖縄の歴史・文化の中心にある首里城とその外苑を公園として整備事業を押し進めてきた。その事業計画のひとつである総合休憩所地下駐車場入口及びその周辺の整備事業が計画された。同計画の段階で当教育委員会としては当該地域については、景泰年間（1645年頃）に尚泰久王によって創建された天界寺の寺院跡が所在しており、沖縄の仏教史を知るためには重要な遺跡であるとの回答をした。

当教育委員会はその歴史的背景等を踏まえて、沖縄県都市計画課と埋蔵文化財「天界寺跡」について、速やかに協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

その後、沖縄県都市計画課は平成6年11月4日付けで文化庁長官に文化財保護法第57条の3の規定に基づき「埋蔵文化財発掘通知」を提出した。

これについて当教育委員会は文化庁の指導により、同年12月2日付けで「工事着手前に発掘調査を実施」するように送付通知した。

その結果、調査に要する経費は沖縄県都市計画課が負担し、調査を当教育委員会が実施することになった。

調査は平成7年8月18日より開始された。

## 第2節 調査体制及び成果の記録

### (1) 調査体制

発掘調査及び報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	嘉手納是敏
	〃	〃	渡久地政吉
事業所管	〃	文化課 課長	高江洲 隆（平成5～7年度） 金武 正紀（平成8～11年度）
調査総括	〃	主 幹	金武 正紀（平成5～7年度）
事業事務	〃	主幹兼係長	古塚 達朗（平成9・10年度）
	〃	係 長	佐久川 馨（平成7・8年度）
	〃	〃	真鏡名充子（平成 11年度）
		主任主事	我那覇生男（平成6～8年度）
		主 事	池原 幸美（平成9・10年度）
調査員	那覇市教育委員会	主 査	島 弘
	〃	主任主事	内間 靖
調査補助員		臨時職員	山城 直子
		臨時職員	渡久地政嗣

(2) 発掘調査作業員

新垣キク・新垣良子・太田吉光・翁長スミ子・嘉味田千枝子  
兼次宏吉・金城郁恵・小浜信子・新里準子・謝花和子・謝敷時子  
瑞慶覧長祐・瑞慶覧繁美・津波古朝子・津波古トヨ・桃原佐恵美  
中原ミツ子・仲村トヨ子・野国昌広・細川道子・真栄城千枝子  
宮城恵子・宮城澄子・宮城新一・三輪美佐子・山内利江子

(3) 成果の記録（資料整理及び協力者）

洗浄・注記・接合：慶田秀美・西銘定子・島袋明子・瑞慶覧綾・神谷直美・徳盛 恵  
仲地和美・新垣のぞみ・東江なおみ

実 測 ：宮良文子・慶田秀美・西銘定子・国吉真由美・島袋明子・瑞慶覧綾  
神谷直美・徳盛 恵・宮城かの子・金城礼子・玉城京子・伊計めぐみ  
仲村貴子

分類・集計・計測：慶田秀美・西銘定子・島袋明子・徳盛 恵・仲村貴子・津波古清美  
伊良波美千代

拓 本 ：西銘定子・仲地和美

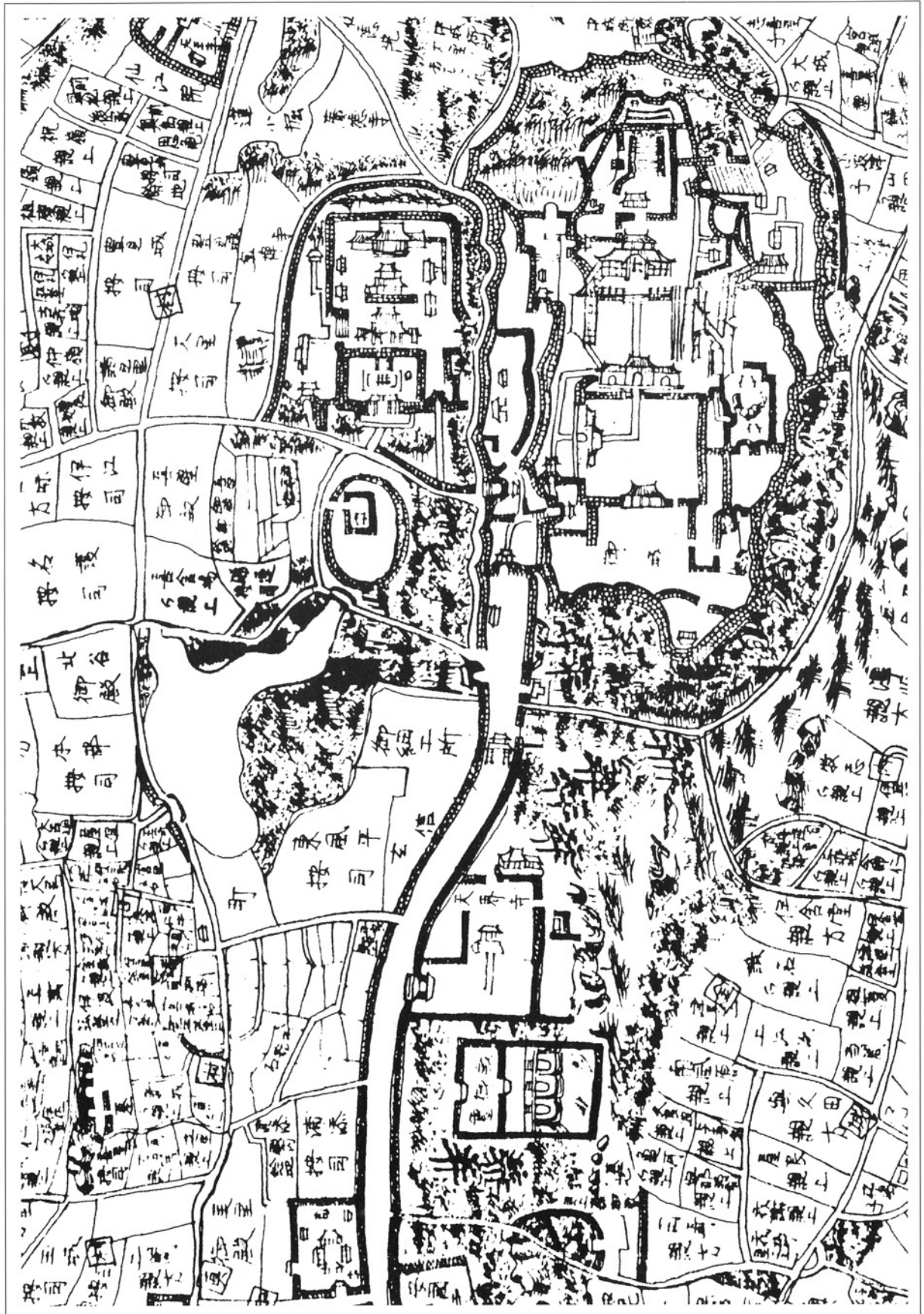
復 元 ：国吉真由美・島袋明子・徳盛 恵・宮良文子・西銘定子・慶田秀美  
瑞慶覧綾・仲地和美

ト レ ー ス ：宮良文子・慶田秀美・西銘定子・富山園美・国吉真由美・瑞慶覧綾

撮影・現像・焼付：国吉真由美・島袋明子・瑞慶覧綾・仲地和美・栗山初美・知念美智子  
富山維佐子



第2図 15世紀代に建立された宗教関係の位置図 (S=1:50,000)



第3図 首里古地図 (1700年頃の首里)

## 第Ⅱ章 位置と環境

天界寺跡は沖縄県那覇市首里に所在する。那覇市は東中国海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村と隣接する県内人口の約1/4 (301,890人)を擁する沖縄の政治、経済の中心都市である。

本市はほぼ略三角形を呈し、東南に約11km、南北に8kmを測り、総面積37.89km<sup>2</sup>を占める。地形的には、東中国海側の標高2～10mの沖積平野を琉球石灰岩の台地が取り巻き、大きく低地と石灰岩台地に分けられる。台地は東中国海に流れ込む安謝川、久茂地川、国場川によって分断され、北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地、小禄台地の各丘陵を形成する。これにより、市内は首里地区、那覇地区、真和志地区、小禄地区に大きく分けられる。

首里地区は首里台地一帯に展開する地域である。標高70m～135m程の通称：ハンタン山の頂上には琉球王府時代の王城、首里城があり、復元整備された深紅の王宮と琉球石灰岩の城壁が南国の青空に映えている。また、城周辺には多くの琉球王府時代の史跡があり、首里の史跡散策は琉球王朝を偲ぶ魅力的な観光コースとなっている。ところで、首里城を中心とする王府の史跡分布は大きく2方向を示しており、ひとつは城壁北側に接して、円覚寺、弁財天堂、龍澤を中心とする地域であり、ひとつは首里城から那覇市街へ続く琉球王国第一の道、綾道大道に添って展開する玉陵、安国寺、守礼門などのある地域である。本遺跡はその綾道大道の道筋にあり、首里城と玉陵との間に位置する。ここは、首里城の表玄関口にあたり、まさに王府祭祀の中核をになう位置にある。

天界寺は景泰年間(1450～56)創建と伝えられる琉球三大寺の一つであり、第一尚氏の菩提寺であった。広大な寺域には、七堂伽藍が整備され、琉球国由来記に「その巧美精尽す」とたたえられている。ところが、この県下最大規模の仏寺も廃藩置県に伴う俸禄撤廃の憂き目にあい、明治末期には廃寺となったようである。その後、尚家の果樹園が経営され、西側敷地には首里城内の三御嶽を統合、替地した三殿内が建てられ、戦前までノロの居宅も兼ねて使用された。戦後は、首里地区の戦災者の仮収容地となり、その後は宅地化が進み、現在に至る。寺跡の面影を残す史跡としては「天界寺の井戸」と伝えられる石造掘り抜き井戸があるのみである。

### 参考文献

1. 『第37回那覇市統計書』 那覇市1998年3月
2. 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年



## 第Ⅲ章 調査経過

調査は第1次調査を1995年8月1日～1995年10月31日、第2次調査が1995年10月18日～1996年3月25日にわたって行われた。調査は公園地区事業地内に係るのみであったが、グリッドは街路地区に合わせる形で長方形の変則的なグリッド設定を行った。設定は街路地内のセンター杭を用いて、No.1とNo.3を繋ぐ線を基準線とし、No.2より南北に4m、東西に3.5mの長方形のグリッドを設定した。グリッドの配置は第4図に示したとおり、北から南にかけて「1・2…」、西から東にかけて「あ・い…」と付した。グリッド読みは南西杭を読み「かー1」と呼称した。

さらに、調査地区を法面地区と東地区に分け地区割りを行った。以下、調査経過に略述する。

### 第1次調査（1995年8月1日～1995年10月31日）

第1次発掘調査は街路本体の法面に係る両サイド5mを対象に実施した。

調査は街路本体部で確認された基壇を追う形でえー8から11のグリッドより調査開始した。表土層（攪乱土）を落とすとコンクリート基礎（トイレ跡？）や塩ビパイプ等が検出され、さらに、ゴミを燃やしたと思われる土壌などが確認された。それに伴う形で近・現代の赤瓦などの出土が見られた。

表土層を除去後、天界寺跡の遺構群が本格的に露出し始めた。遺構は基壇の南北において約4mの石積みが発見され、蓋石を伴う溝が確認された。

その他に古地図に描かれている天界寺の門より延びる小礫群も検出され道状遺構と解した。また、綾門大道（県道50号線）との合流地点では大形の切石の根石が確認され、寺院を取り囲む石垣の一部と推察された。

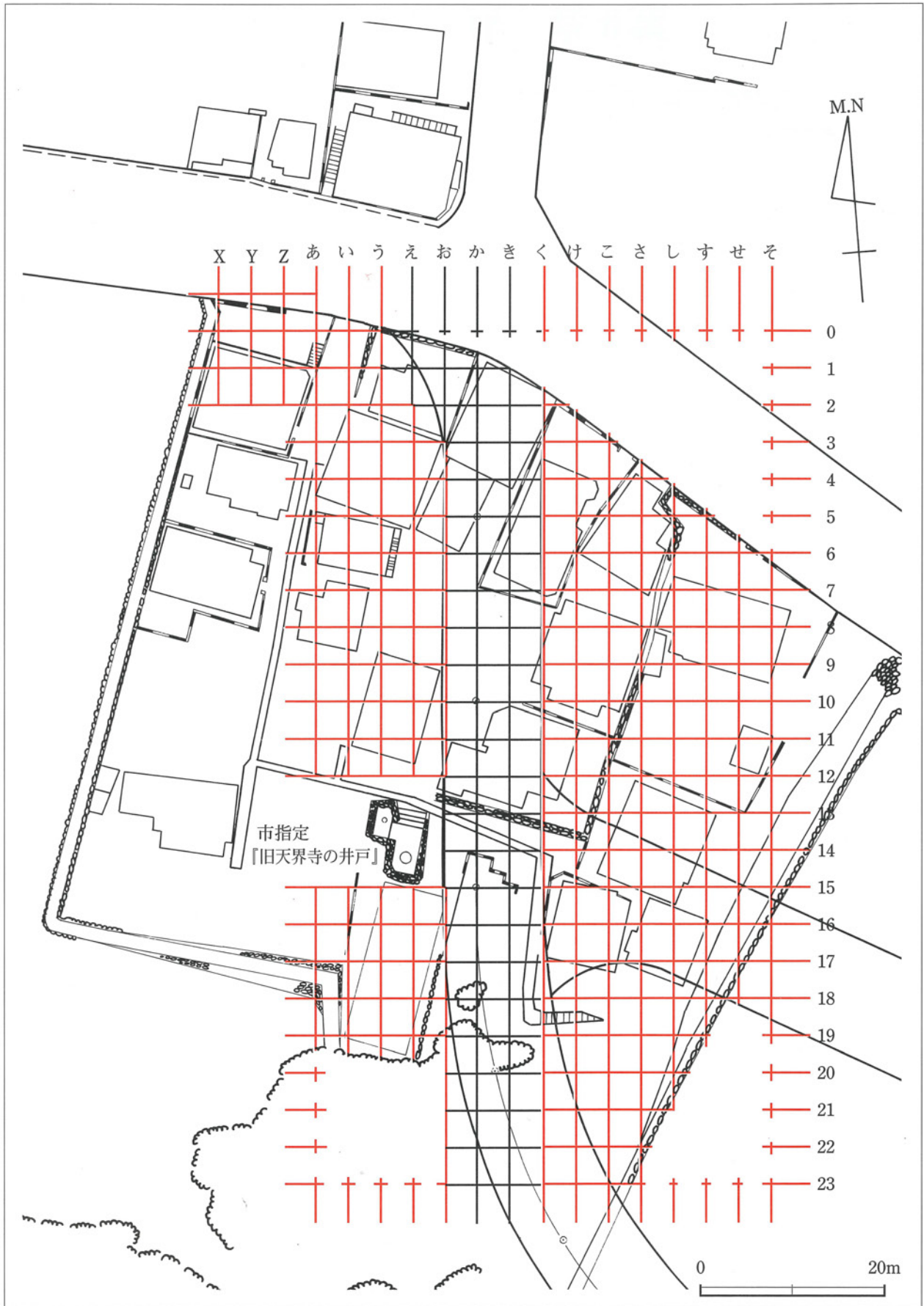
さらに、地山からは夥しい数の柱穴及び土壌が発見された。第1次調査は溝状遺構・道状遺構・根石群・柱穴・土壌等の写真・図面等の記録を作成し10月31日に終了した。

### 第2次調査（1995年10月18日～1996年3月25日）

第2次調査は第1次調査とオーバラップする形で東地区をメインに調査を押し進めた。さらに、第1次調査と街路地区で確認された遺構面に併せて、天界寺跡の全体像を掴むために慎重に調査を進めた。

調査は東地区全体の表土剥ぎより行い、グリッド設定後に地区南側の石灰岩付近より開始した。調査は南側から北側へと徐々にグリッドを広げていった。合わせて、街路地区で確認された基壇跡の背面部（東地区）にも調査開始した。東地区は調査が進むに連れて廃藩置県後に首里城内の三御嶽を統合した三殿内と呼ばれる拝所跡とそれを管理するためのノロ屋敷跡が発見された。その三殿内を完掘後、当該期の造成土（赤土）も確認され、東地区においても大規模な平場造成が行われていることが判明された。その造成土を発掘後、その下位よりプライマリーな遺物包含層（第V層）が発見された。本層より多種多様な出土遺物が得られた。その後、第V層を掘り上げるたびに、地山面に大小のピット群が多数発見された。そのピット内からも多くの遺物が出土した。

それら遺構などの写真・図面書きなどを繰り返し行い翌年の3月25日に調査は終了した。



第4図 グリッド設定図

## 第Ⅳ章 層 序

本地区一帯は現地形では、ほぼ平坦地をなしているが、発掘調査の結果、北東側に近世期の造成層が確認されるなど旧地形は北東方向へ緩傾斜をなしていたものと思われた。一帯の地形改変は、その後も一部の攪乱箇所を除き、基本的には盛土造成に依ったと考えられ、堆積層は北東側に比較的厚く、且つ複雑に堆積し、南西側の堆積層は薄く単純であるといった傾向が見られた。

さて、確認された層序は、基本的に第Ⅰ層（攪乱・整地土層）・第Ⅱ層（混砂利土層）・第Ⅲ層（暗褐色土層）・第Ⅳ層（混赤褐色土層）・第Ⅴ層（黒褐色土層）・第Ⅵ層（地山）である。以下に個々の土層の特徴について記述する。

第Ⅰ層：戦後の整地層及び攪乱層で現代相当の遺物が多く得られた。石灰岩礫層（上位）と淡褐色土の攪乱層（下位）で構成される。攪乱層は部分的に地山まで及ぶ場所も見られた。本層は地区のほぼ全域に見られた。

第Ⅱ層：暗茶褐色を呈し、細かい砂利が多量に混入する。本層も地区のほぼ全域に見られる。層厚は平均して25cm程で、場所によって60cm程の厚さがあり、地山に及んでいる。上面からは近・現代相当の遺物や赤瓦の廃棄土壌などが確認され、戦後復興期の時代層と考えられる。

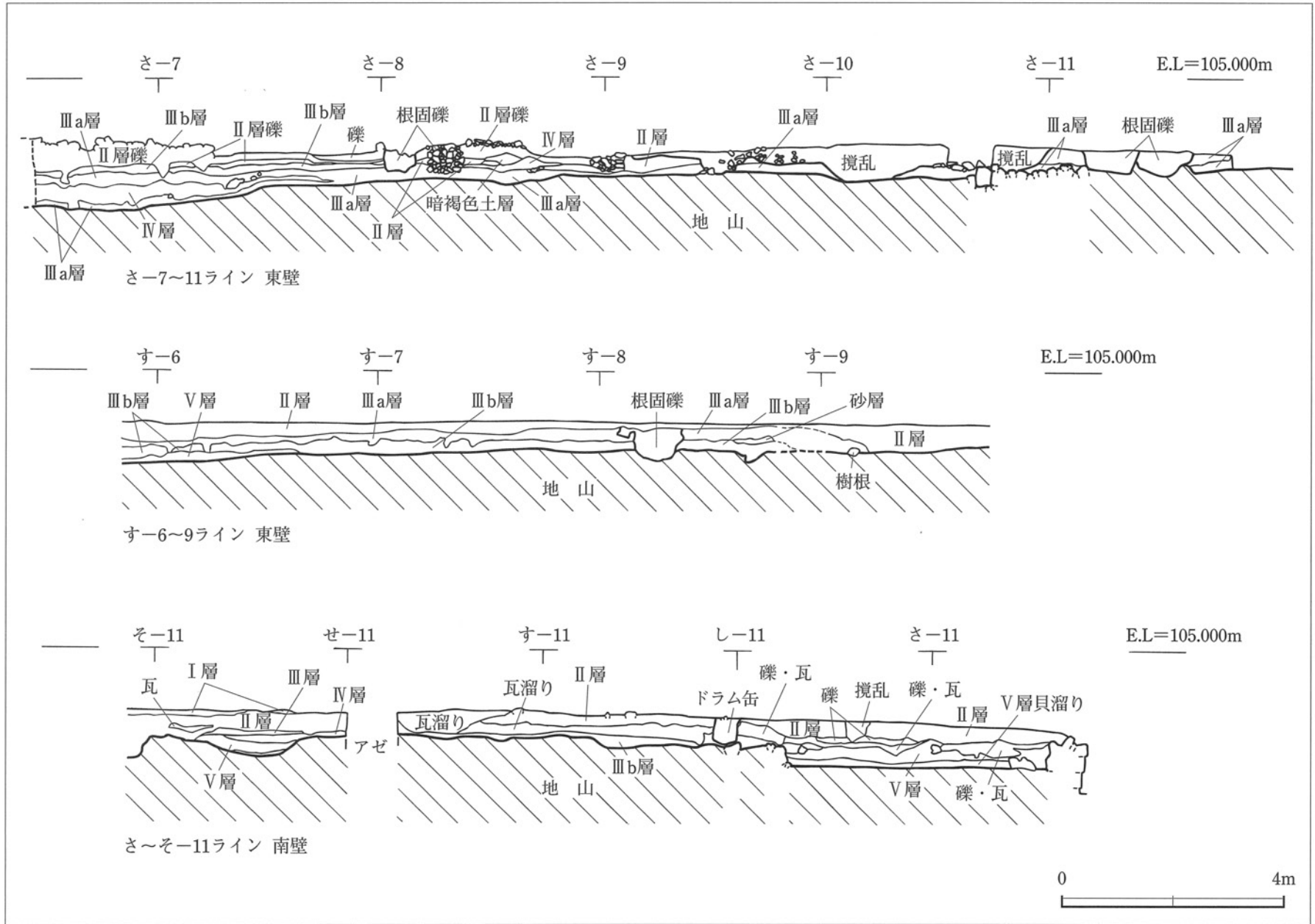
第Ⅲ層：暗褐色を呈し、砂利の混入はあまり見られない。本地区の北側一帯に分布する。上面は「三殿内」の礎石根固石、炊事屋敷床石、屋敷縁石、便所跡などの遺構が検出された。出土遺物は近世～近代の遺物を主体とする。層厚は最も厚くなる「すー6グリッド」付近で40cm程である。下位に「Ⅲ層造成土層」と称する赤褐色土（方言名：マージ）の無遺物層がある。いずれも北東側に厚く堆積し、南西側へは漸次薄くなる。

第Ⅳ層：赤褐色土と黒褐色土の混土層で北東側の狭範囲に堆積が見られた。遺物は下層の第Ⅴ層と同様の傾向を示す。

第Ⅴ層：黒褐色を呈し、焼土粒と炭化粒が微量に混入する。「さ・しー6～12グリッド」を中心に分布している。層厚は平均して20cm程で、特に「こ・さー11」付近の参道縁石跡では40cm程度と厚く堆積している。

第Ⅵ層：地山の赤褐色土層で無遺物層である。本層の上面に天界寺Ⅱ期のピットや参道跡などが確認された。

第5図 層序断面図



# 第Ⅴ章 遺 構

## 第1節 遺構概略

天界寺は、文献資料によれば景泰年間（1450～1456）に琉球国王尚泰久によって創建されている。創建当時の寺院施設については、資料が乏しく詳細は不明である。その後、火災により焼失し、順治年間（1644～1661）には、七堂伽藍を備えた琉球王国を代表する寺社として復旧整備されている。このことから天界寺の遺構配置は復旧整備が行われた17世紀中期を境にⅠ期（創建～焼失）とⅡ期（七堂伽藍整備～廃寺）の二つの時期に分けられると推定された。ところでⅡ期（近世）の天界寺域における寺院施設については文献資料によって遺構位置の推測がある程度可能であった。具体的には18世紀の天界寺の様子が描かれている「首里古地図」（1700年）があり、山門、参道、本堂、寢殿、井戸と思われる各施設と、境内を画する石垣が描かれている。また、清の冊封副使、周煌が編纂した「琉球国志略」1757（乾隆22）年巻7 祠廟寺院附によれば、「山門、佛殿、内殿、僧室、客座」の各施設が記録されている。

平成6年度の発掘調査で基壇の一部が検出され、首里古地図の寺域中心部に描かれた本堂跡と目された。今年度の発掘調査は本堂基壇の全体像の把握及び上記文献資料の各寺院施設の遺構検出及び天界寺創建期、天界寺以前の遺構検出を目標とした。

### 本堂跡

街路地区において遺構背半部が検出された遺構である。今回の調査において上面は攪乱されていたものの、全体規模が良好に検出された。遺構は緩斜面を基壇周縁に添って凸状に切土整形し、基壇を周辺より突出させる形で造り出している。同様に切土整形によって基壇背後に尾廊を造り出している。

基壇法面は人頭大の石灰岩礫の野面積みで周囲を縁取る。平均基壇高約35cmである。基壇内部はこぶし大の石灰岩礫を密に敷き詰めた整地面が見られ、微粒砂岩の建物礎石の基礎となっている。この整地面では周縁部に漆喰及び埴が検出される。基壇側面には左右両方向に翼廊と思われる縁石を伴う高部があり、基壇との接合部に蓋石を被せた排水溝が取り付く。ところで、Ⅰ地区からⅢ地区へ広がる地山直上の第Ⅴ層は上記の切土範囲では観察されず、基壇の上部覆土層である第Ⅲ層が堆積する。相反して基壇内には造成以前の旧地形及び第Ⅴ層の堆積が見られた。関連する遺構としてⅢ地区に赤褐色土層の広がりが観察された。切土造成によって生じた廃土を活用したものと思われる。

### 礫敷き遺構

基壇北側に広がる遺構である。基壇側面と平行する縁石を配し、基壇との敷地境界としている。こぶし大の石灰岩礫が密に敷き詰められ、基壇内の石灰岩礫の整地面と同様の状況を示している。この整地層の直下層に第Ⅴ層を保持する点についても同様である。一部にサンゴ砂利の敷設面が確認された。寺院施設に伴う基礎部と思われるが、礎石等は検出されず、施設の規模は不明である。なお、基壇翼廊と推定される部分は当該遺構に接続する。

### 竪穴状遺構

基壇南側（Ⅰ地区）から検出された遺構である。一帯は基壇周辺の切土造成によって、現況では

一段高くなっている。遺構は隅丸方形に掘り込まれた竪穴状を呈しており、周縁に石灰岩礫の石組みが見られる。遺構内にはピット、土壙、溝状遺構などが検出された。

### 東地区の遺構

東地区は本堂基壇の背面から東側に広がる一帯で、現況は東端に記念運動場跡の擁壁が隣接しており、便宜上、この擁壁までを調査範囲とした。ところで、一帯の旧地形は地山の検出レベルから略東西方向に緩傾斜をなしていたと思われるが、17世紀中頃の本堂基壇周辺における大規模な切土造成工事によって一帯は段状地形となっていて、本地区区は一段高所に位置している。この切土造成工事の境界は南北に展開する土留石垣によって区画される。

当該地区の出土遺構は、おおむね3つの時期に分けられるようである。近代期の三殿内屋敷跡に伴う根固礫群や屋敷縁石。17世紀後半～の天界寺の建物跡、参道。15世紀後半～のピット群である。

### 建物跡

首里古地図に描かれた寺域東側の建物跡に推定される遺構である。古地図には大小の2棟連結（掛け造り）の建物として描かれており、遺構の出土状況も裏付けている。ピットは浅底の隅丸長方形に代表され、礎石の設置痕と思われる。母屋は3間（5.5 m）×4間（7.4 m）。連結する家屋は、3間（5.6 m）×2間（3.5 m）の規模を測る。

### 参道跡

Ⅱ地区の本堂基壇の尾廊から伸びる参道跡である。両側面に縁石を伴うが、北側の縁石は2列検出され、参道側面へのアプローチとして階段の機能も想定されたが確証を得るに至らなかった。南側縁石では地山を凸状に切土整形して参道を造り、本堂の造成と同様の手法を用いている。参道末端では縁石および切土造成はL字状に屈曲し、L字内部は凹部となるため、正面観では参道が基壇状の石垣に接続するかの印象を受ける。擬似的な基壇としての効果を志向したものと考えられる。

### 土壙

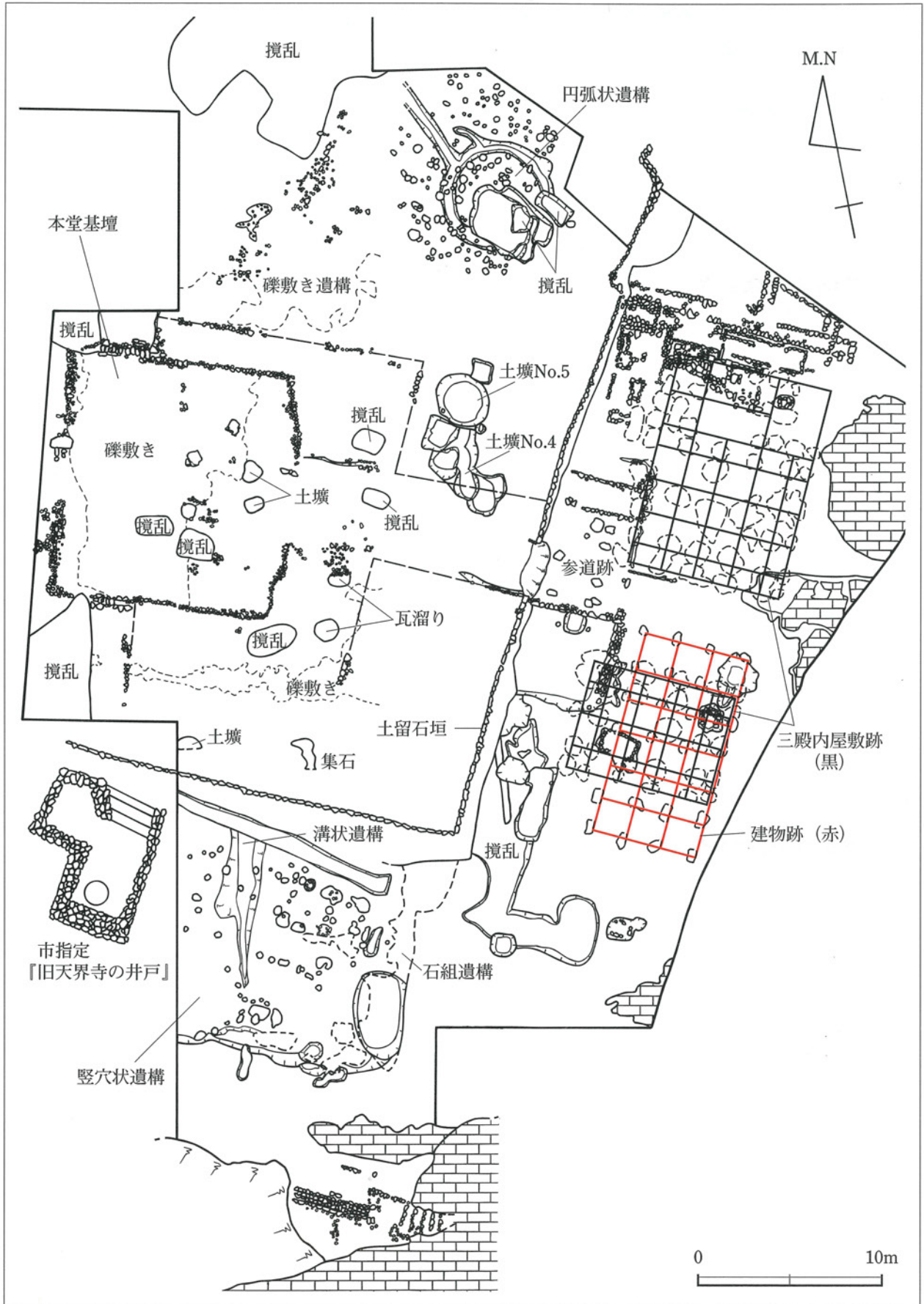
土壙は合計15基検出された。そのうち土壙No.4・5からは瓦、埴が大量に検出された。いずれも一括廃棄された状況を示す。廃寺以降、寺域は尚家の果樹園が経営されていたと言われ、後の土地利用の際に周辺から廃棄されたものと考えられる。

### 円弧状遺構

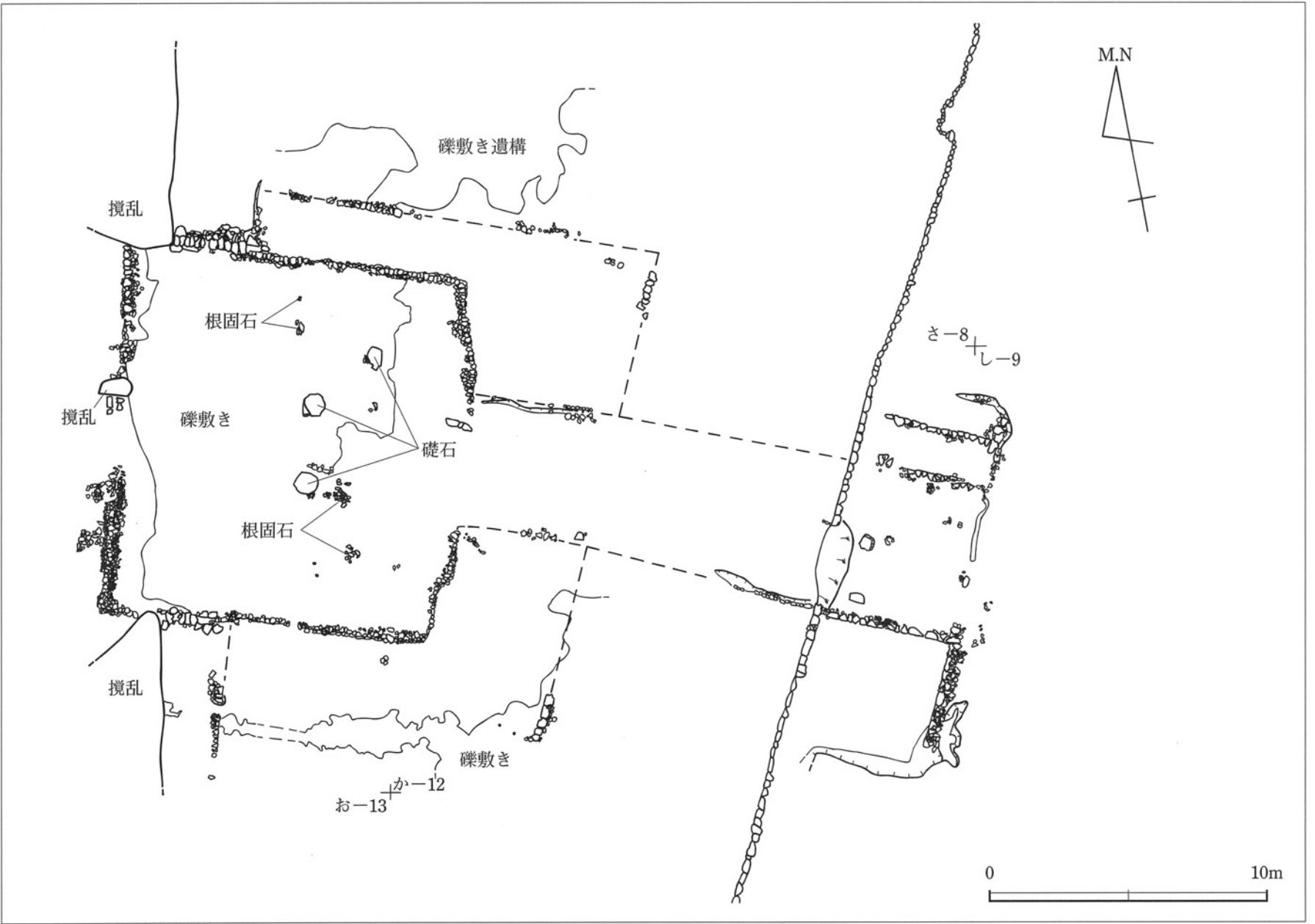
け・こー5・6グリッドの地山直上面で、ほぼ真円形の周溝遺構が検出された。直径6.2m。特異な形状から寺院施設に関連するとも考えられるが、中心部に攪乱を受けているため判然としない。

### 三殿内屋敷跡

三殿内は天界寺の廃寺（明治末頃）以降に建立された建物で今次の戦災によって消滅した。検出された遺構は、礎石根固礫、炊事屋敷石敷、屋敷縁石、便所跡などである。



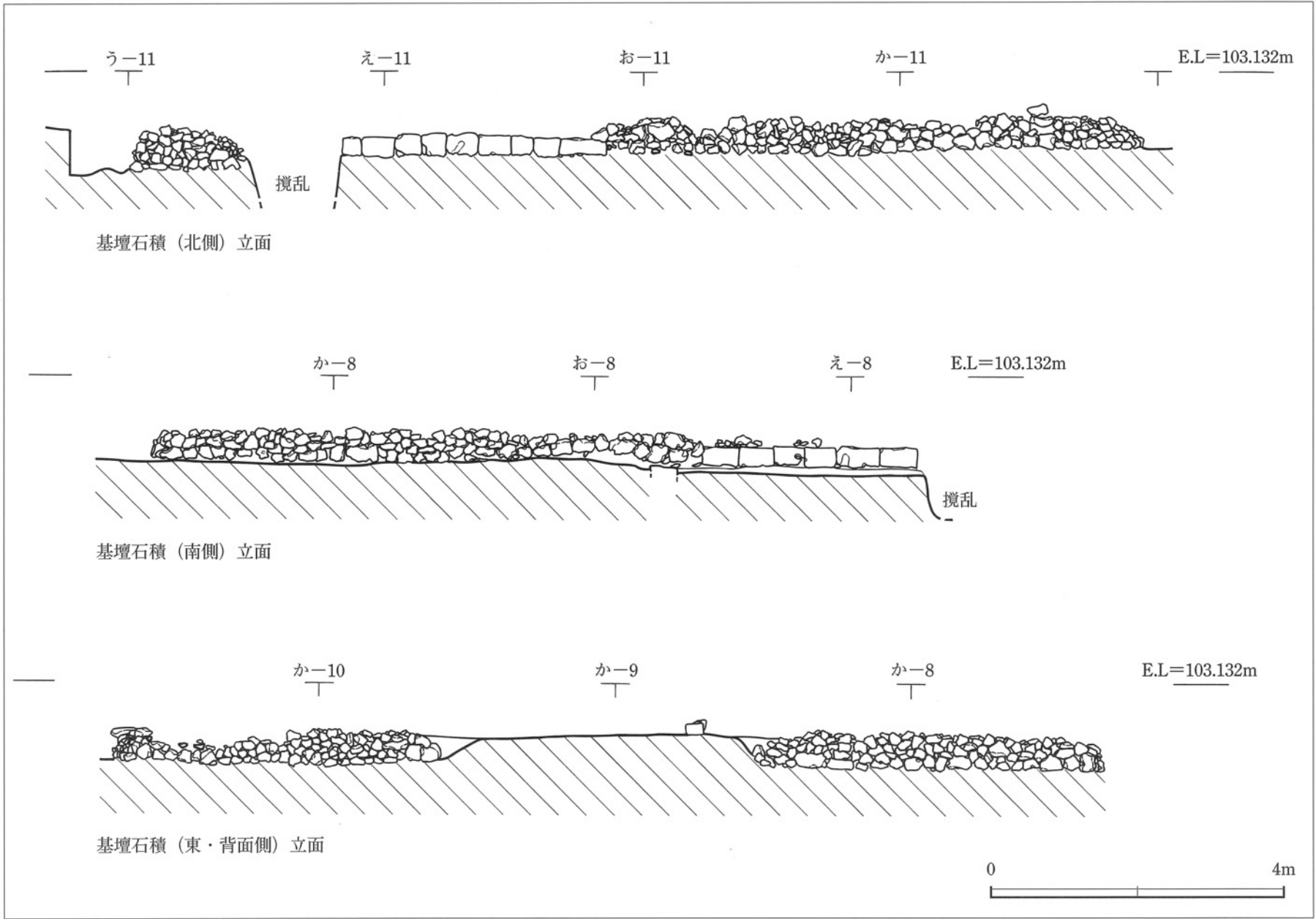
第6図 主な遺構配置図

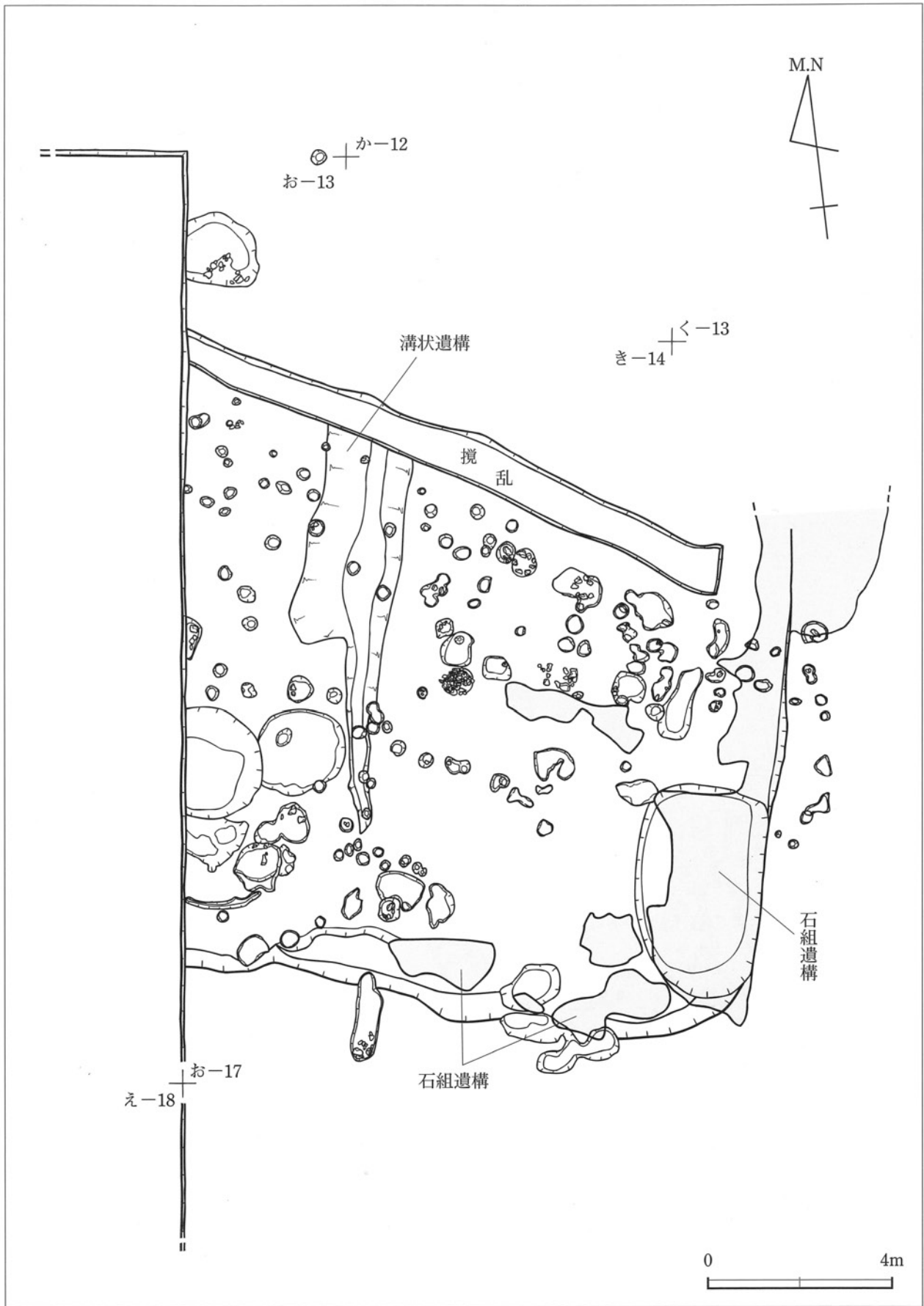


第7図 II地区 本堂跡・参道跡

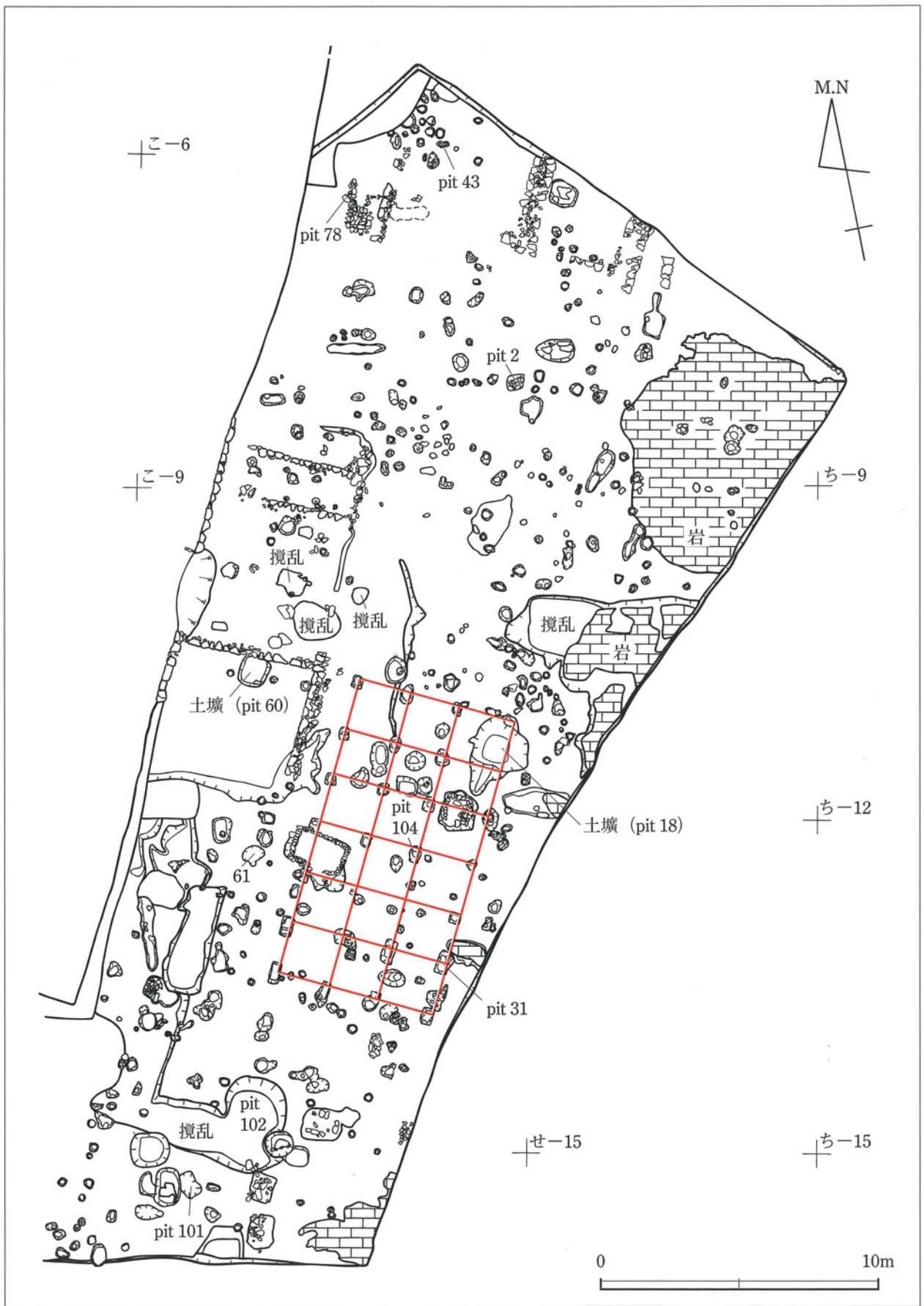


第8図 基壇石積立面図

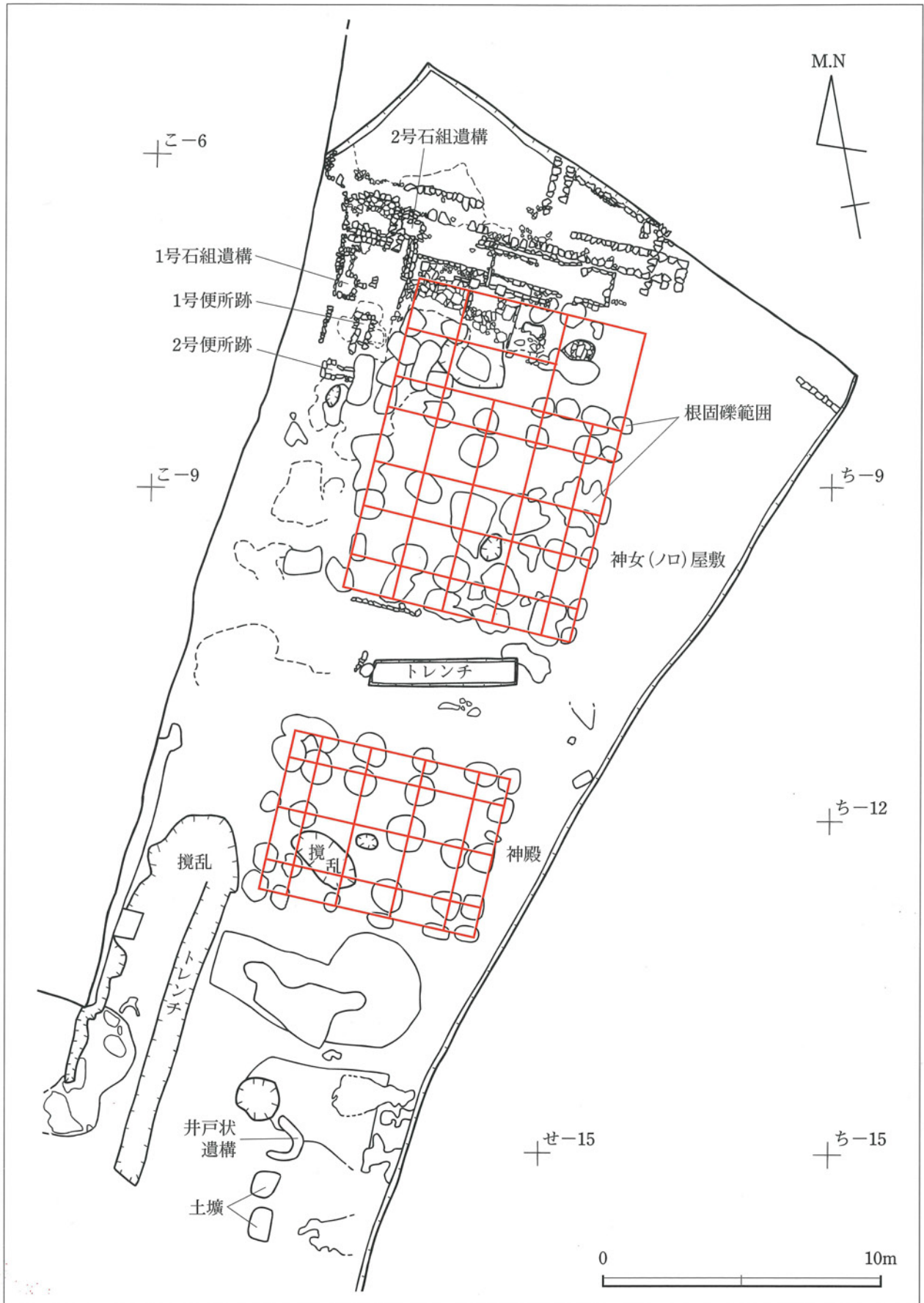




第9図 I地区 竪穴状遺構及びピット群

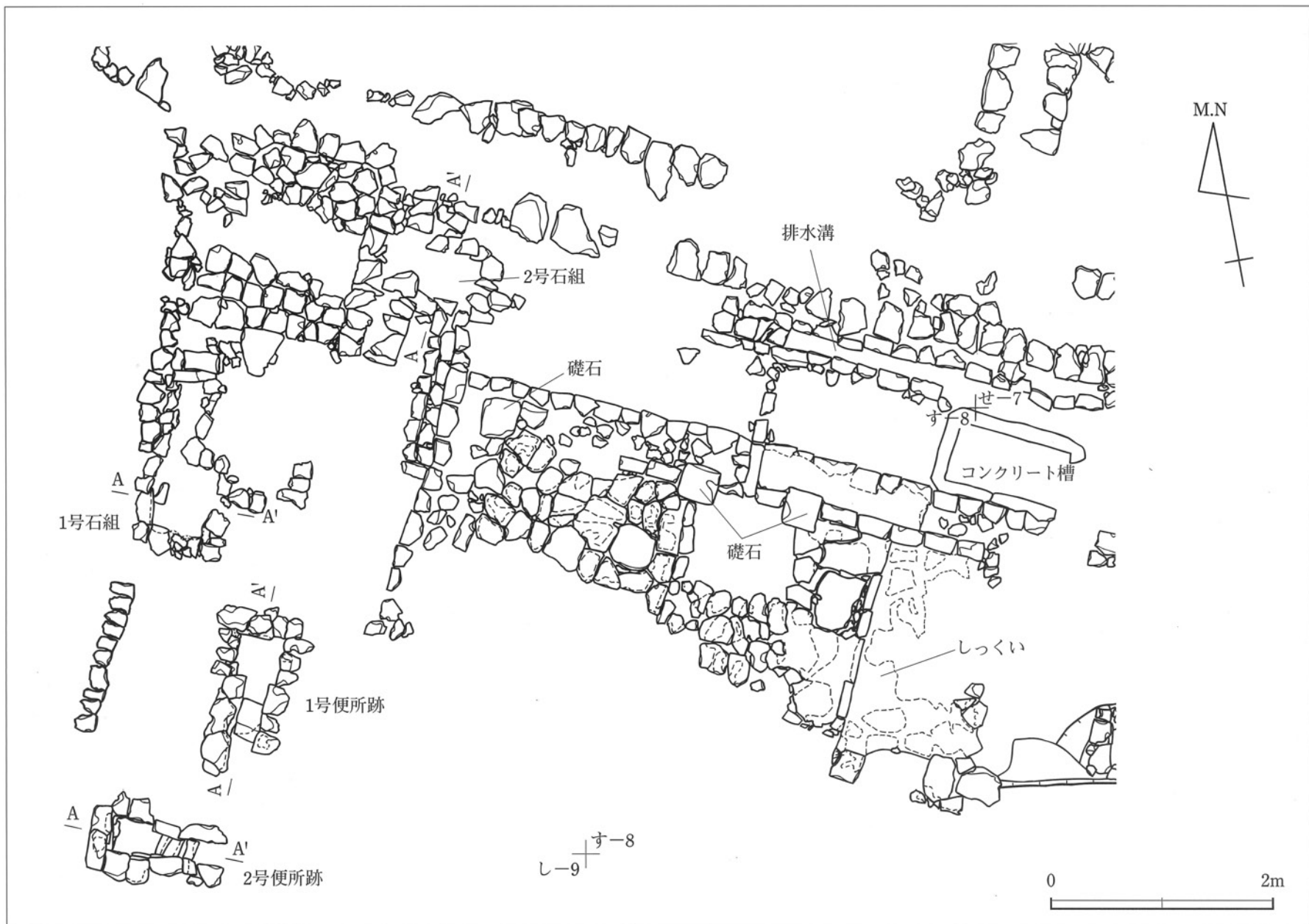


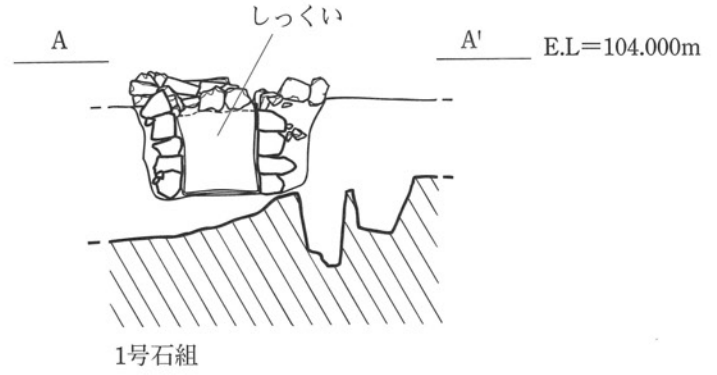
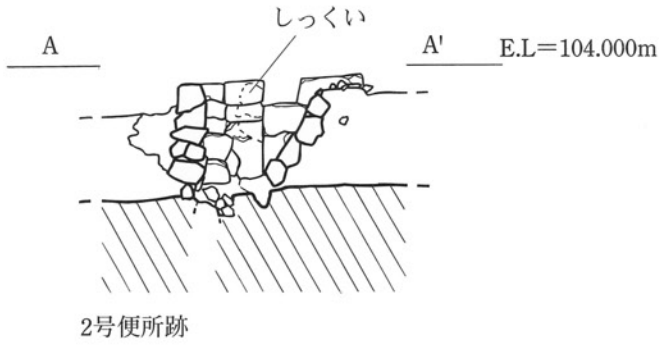
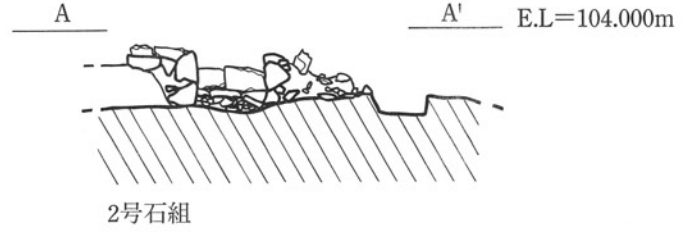
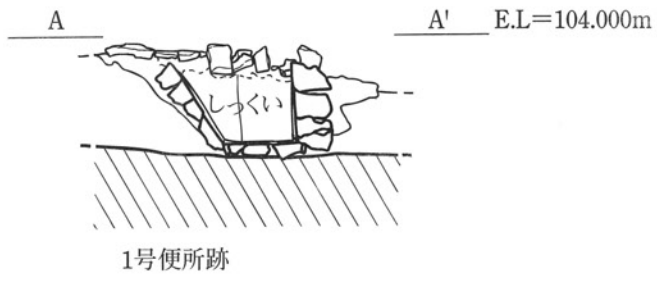
第10図 東地区 建物跡



第11図 東地区 三殿内屋敷跡

第12図 東地区 三殿内神女(ノロ)屋敷跡・石敷





## 第2節 遺構内遺物

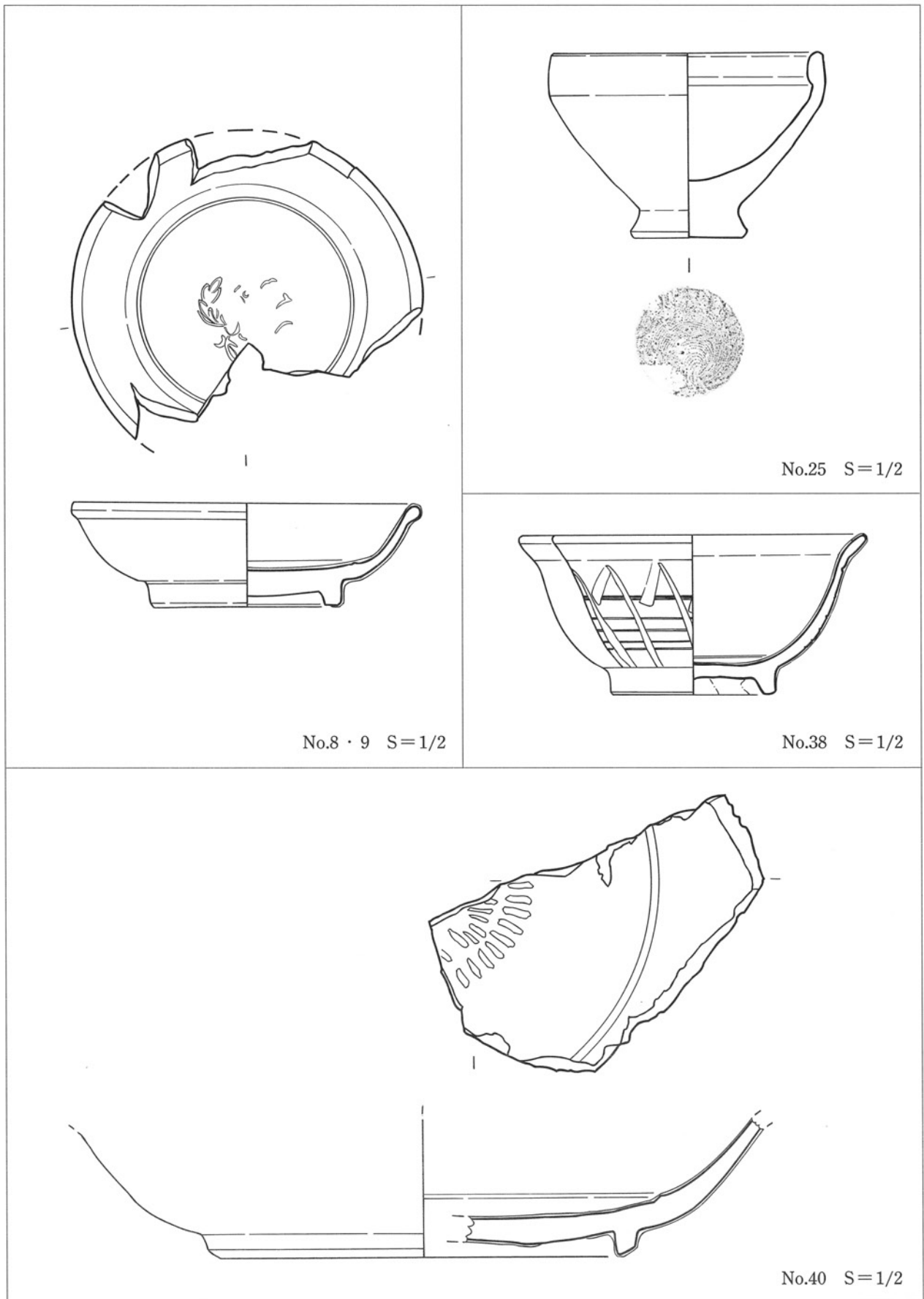
### (a) ピット内の遺物

ピットは第10図に示したとおり大小合わせて238(東地区110、法面地区128)が検出された。

ピット群の殆どは、掘立て柱の建物跡と思われるが、中には、径が大きく掘り込みの深いピットも確認された。プラン等の検討は前項で報告されているので、ここでは、ピット内より得られた遺物の観察表を示した。

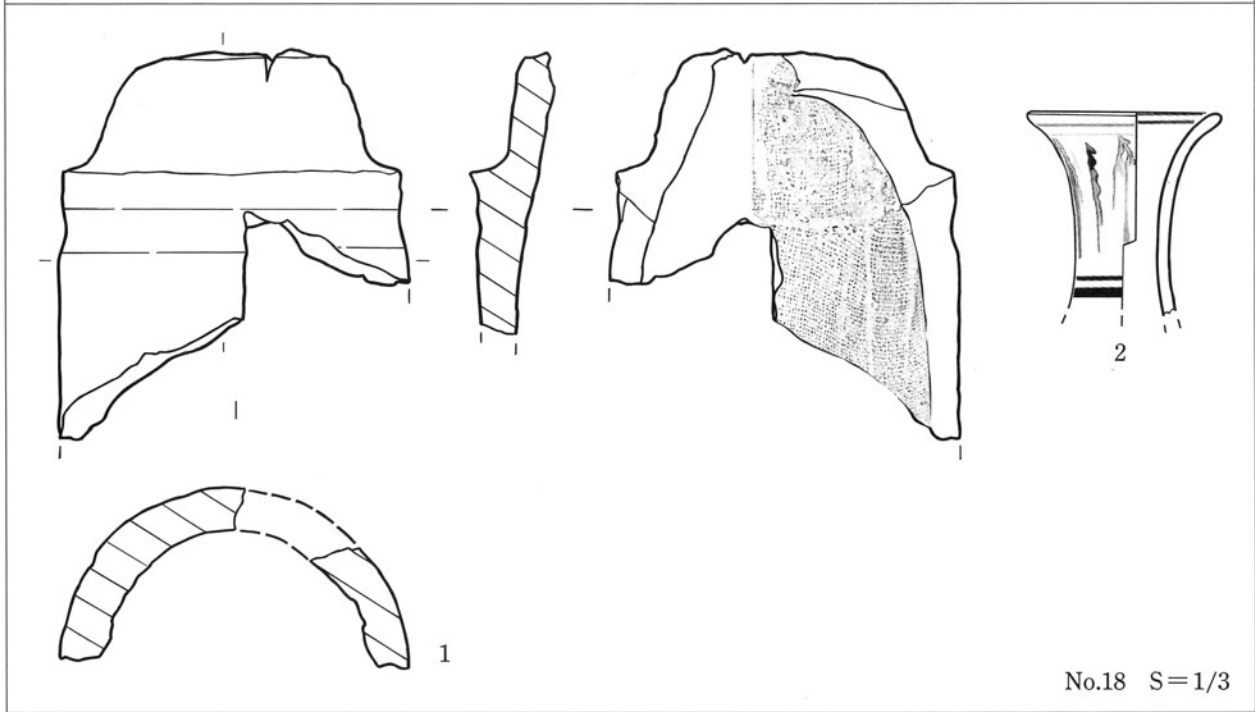
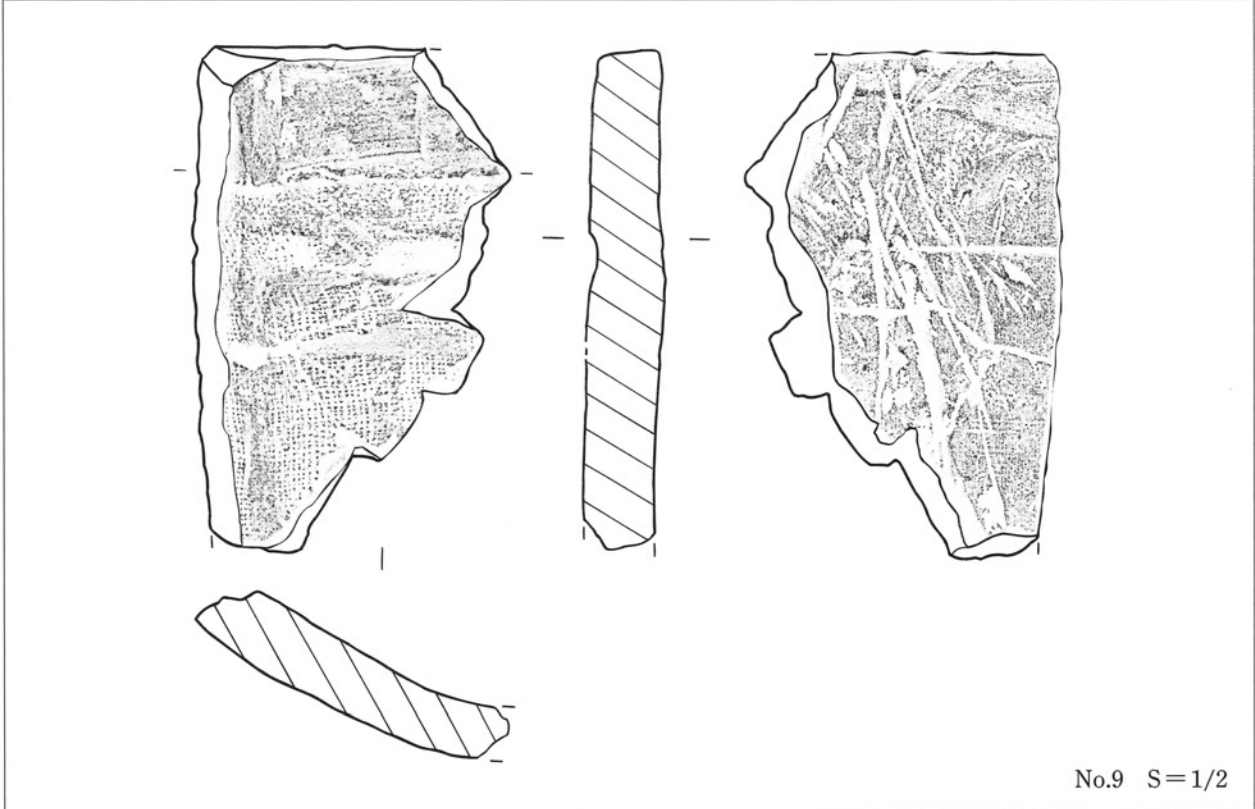
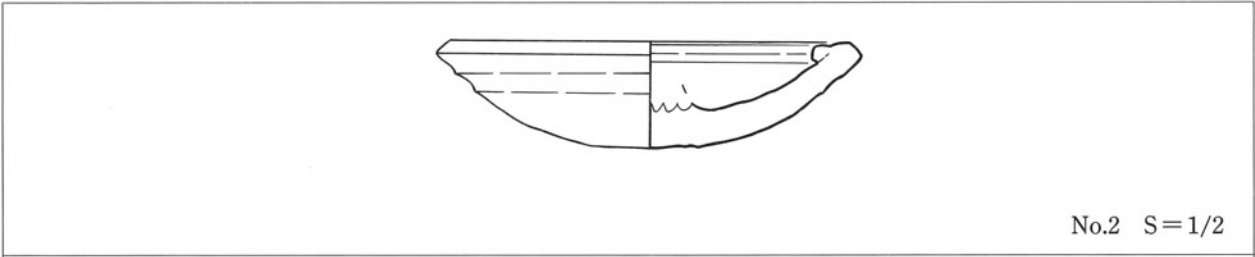
第1表 ピット内出土遺物観察一覧

遺物番号	種別	計測値 (cm, g)			特徴
		口径	器高	底径	
pit8・9(西)	青磁	12.6	3.8	6.9	玉縁皿。見込みに印花文。素地は灰白色で微粒子。高台内は露胎。
pit25(西)	無釉陶器	9.8	6.7	4.2	タイ産焼締。台付内湾形鉢。口縁部内部に有段。底面にはロクロ左回転の糸切り痕が残る。素地は粗粒子で黒・灰・茶褐色の粒子を含む。
pit38(西)	青磁	12.6	5.8	6.0	外反碗。篋彫り蓮弁文。素地は淡白色の微粒子。高台内は露胎。
pit40(西)	青磁	—	—	15.5	盤の底部。高台内は蛇の目釉ハギ。素地は淡黄白色で粗粒子。2次焼成を受けて釉薬が黄白色を呈す。断面にスス痕が観察される。
pit 2	土器	最大径:11.2	—	—	タイ産半練の蓋。摘みは破損。素地は灰褐色で粗粒子。黒色の粒子が散見。底面は篋削り調整。
pit 9	瓦	—	厚さ:2.0	—	明朝系平瓦。色調は灰色で外面に紐の圧痕と布目痕が観察される。端部には分割のための割り棒痕が見られ、断面は未調整、割面ままである。
pit18-1	瓦	—	厚さ:2.6	—	明朝系丸瓦。色調は灰色で外面に玉縁との境で細い凹線がその他は布目痕が観察される。両端部には割り痕が見られる。断面は割面のままである。
pit18-2	色絵	7.6	—	—	瓶。2条の圈線を口縁内外と肩部に巡らす。頸部には赤・緑によって芭蕉文を描く。2次焼成品である。素地は灰白色で微粒子。黒色の粒子を含む。
pit23	陶器	23.6	—	—	備前産の搦鉢。色調と素地とも灰白色で白色の粒子が見られる。田土。口縁部に2条凹線を巡らす。
pit31	青銅製品	—	厚さ:0.2	重さ:3.8	頭部を丸く折り曲げた扁平な製品である。先端部は破損。
pit43	埴	—	厚さ:4.5	—	外面にスス痕が付着。端部に凹線の調整痕が顕著。芯部は灰褐色を呈し、サンドウィッチ状断面。ガラス質の鉱物や白色の粒子が観察される。
pit49	青磁	15.0	7.3	6.1	雷文碗。見込みに圈線と印花文。灰白色の微粒子。高台内に蛇の目釉ハギ。
pit60	白磁	17.4	—	—	外反碗。素地は灰白色で微粒子。黒色の粒子が散見。見込みに圈線。貫入が顕著。高台脇から露胎。
pit61	古銭	外径:2.15	穿径:0.70	重さ:2.38	無文銭。外縁なし。
pit78	貝製品	長さ:2.5	幅:2.5	厚さ:0.9	チョウセンサザエの蓋の縁辺部を打割した製品。
pit101-1	陶器	10.4	—	—	火入れ?。縁部で一端窄まる筒形の器形。灰白色の粉粒子。口唇部内面より外面に灰釉を施す。外面には具須で文様を描くが全体構図は不明。貫入は顕著。
pit101-2	青花	—	—	8.0	碗底部。外面に文様全体の構図不明。素地は黄白色の粉粒子。見込みは蛇の目釉ハギで畳付け露胎。光沢は見られない。
pit 102	古銭	外径:2.35	穿径:0.65	重さ:2.58	寛永通宝:江戸-1624。楷書。
pit103	陶器	12.7	—	—	翡翠釉の口折れ皿。部分的に翡翠釉が器面より剥落。特に口折れ内面は顕著。素地は白色で微粒子。
pit104	青磁	9.4	—	—	小碗。外面に縦位に凹文が見られる。蓮弁の略?。素地は灰白色の微粒子。
pit107-1	瓦	—	厚さ:2.5	—	明朝系丸瓦。色調は灰褐色で外面に紐の圧痕と布目痕が観察される。端部は割り棒痕が見られ玉縁・断面ともヘラ調整がなされている。
pit107-2	瓦	—	厚さ:1.9	—	明朝系平瓦。色調は芯部に灰褐色、内外は黄灰色を呈する。外面に紐痕と布目痕が観察される。内面は篋ナデ調整である。

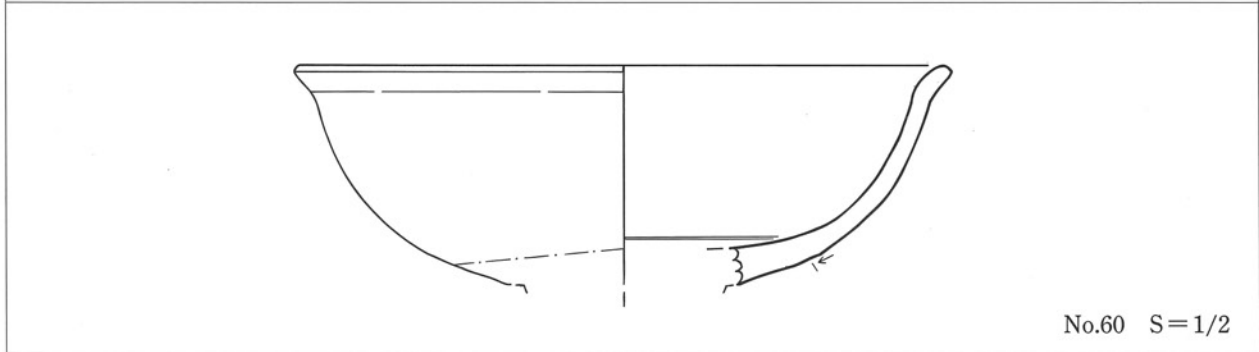
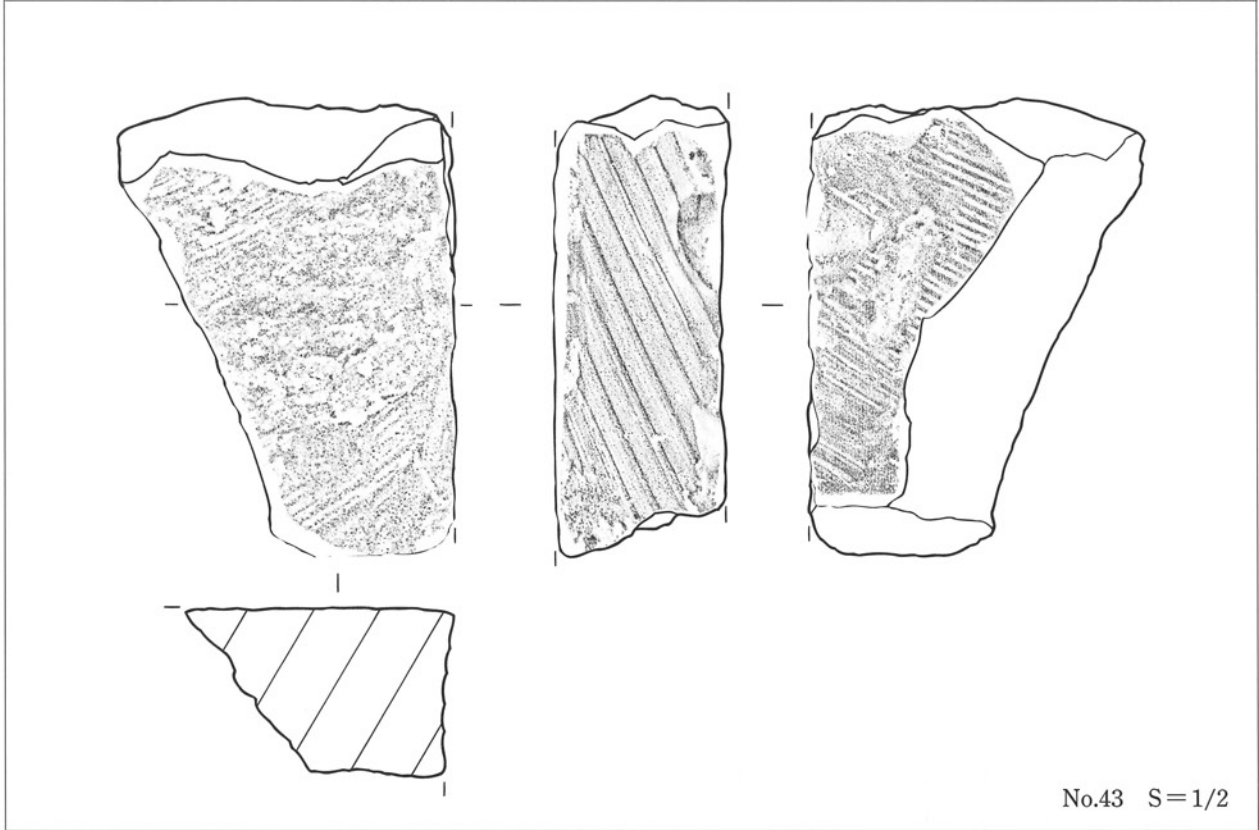
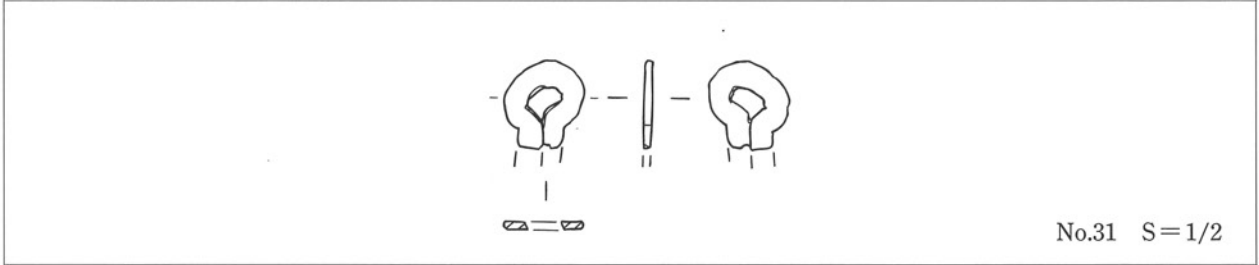
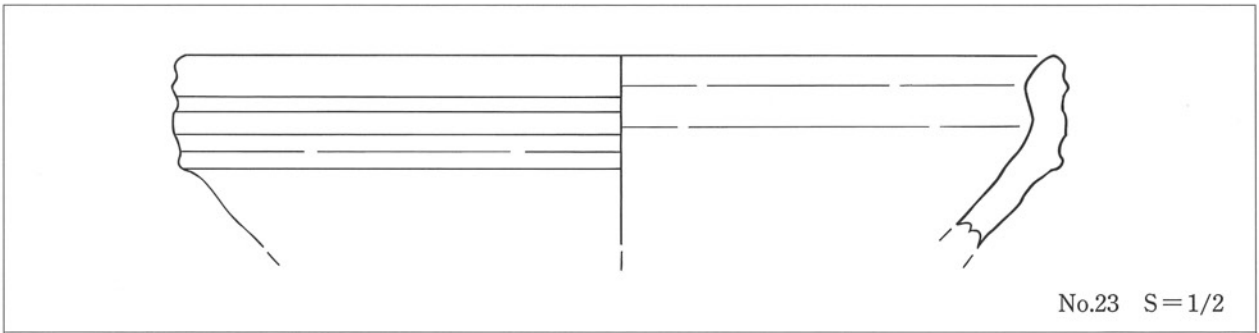


第14図 (図版10) ピット・西 (No.8・9・25・38・40) 出土遺物

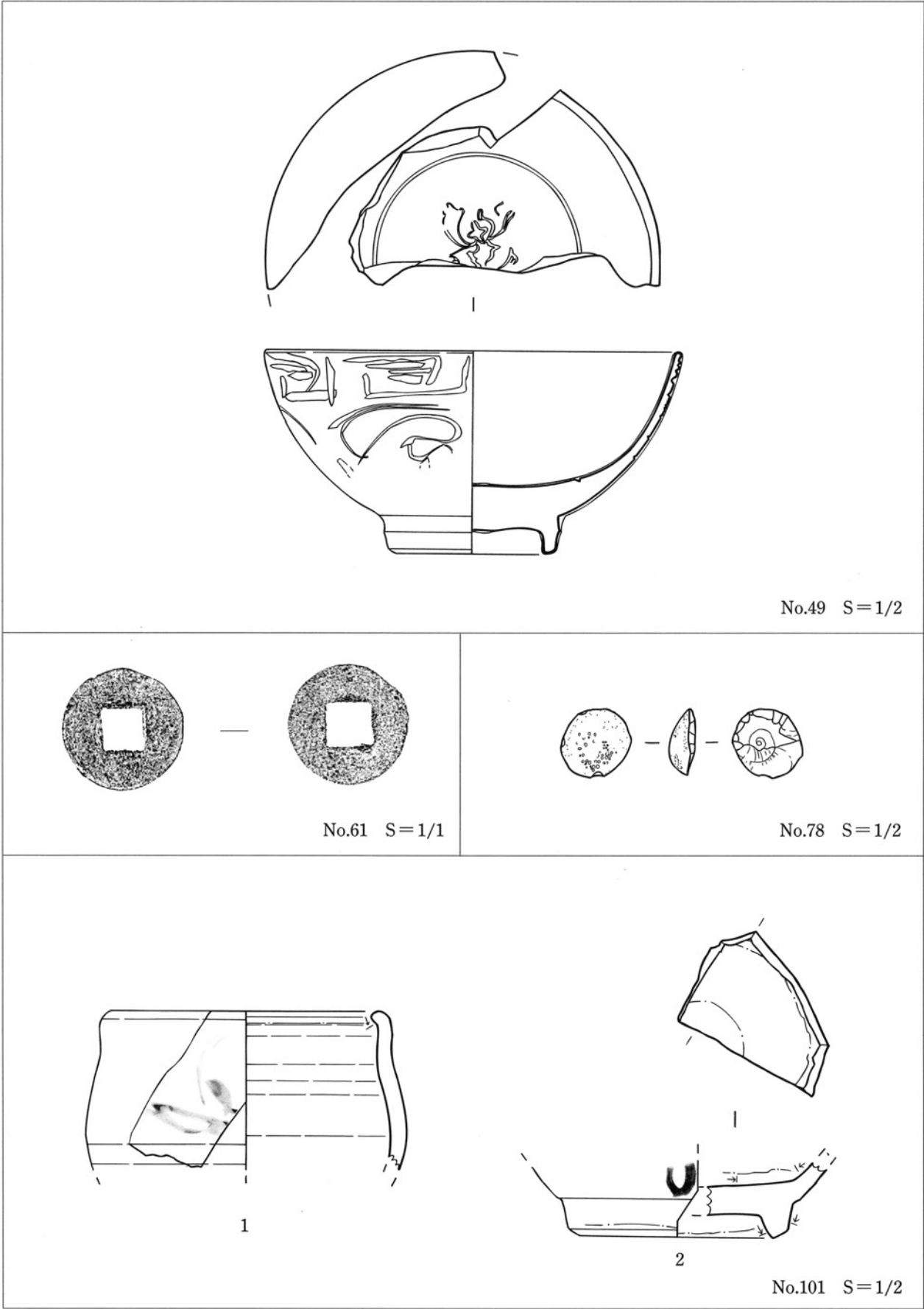




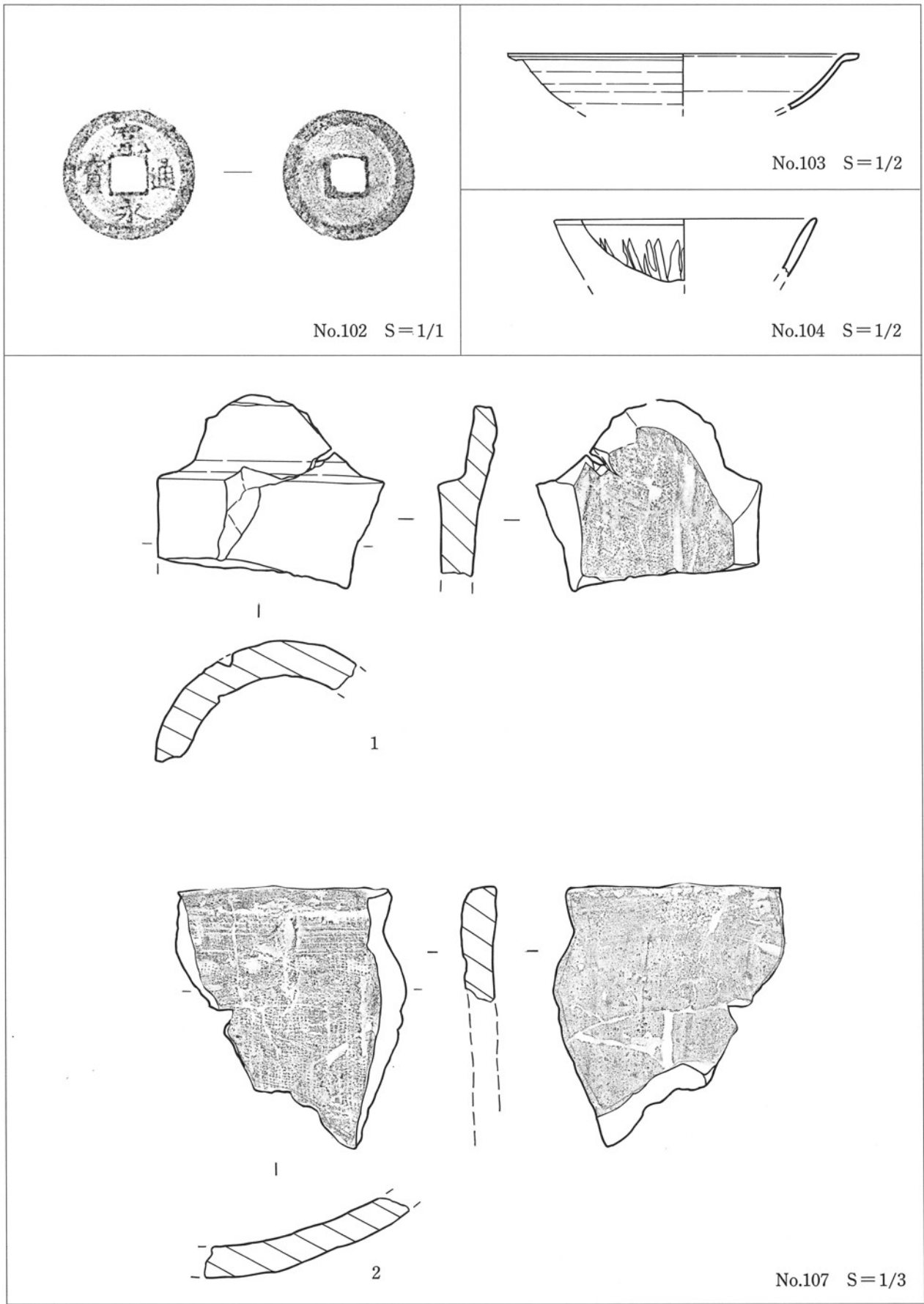
第15図 (図版11) ピット (No.2・9・18) 出土遺物



第16図 (図版12) ピット (No.23・31・43・60) 出土遺物



第17図 (図版13) ピット (No.49・61・78・101) 出土遺物



第18図 (図版13・14) ピット (No.102・103・104・107) 出土遺物

## (b) 土壌内の遺物

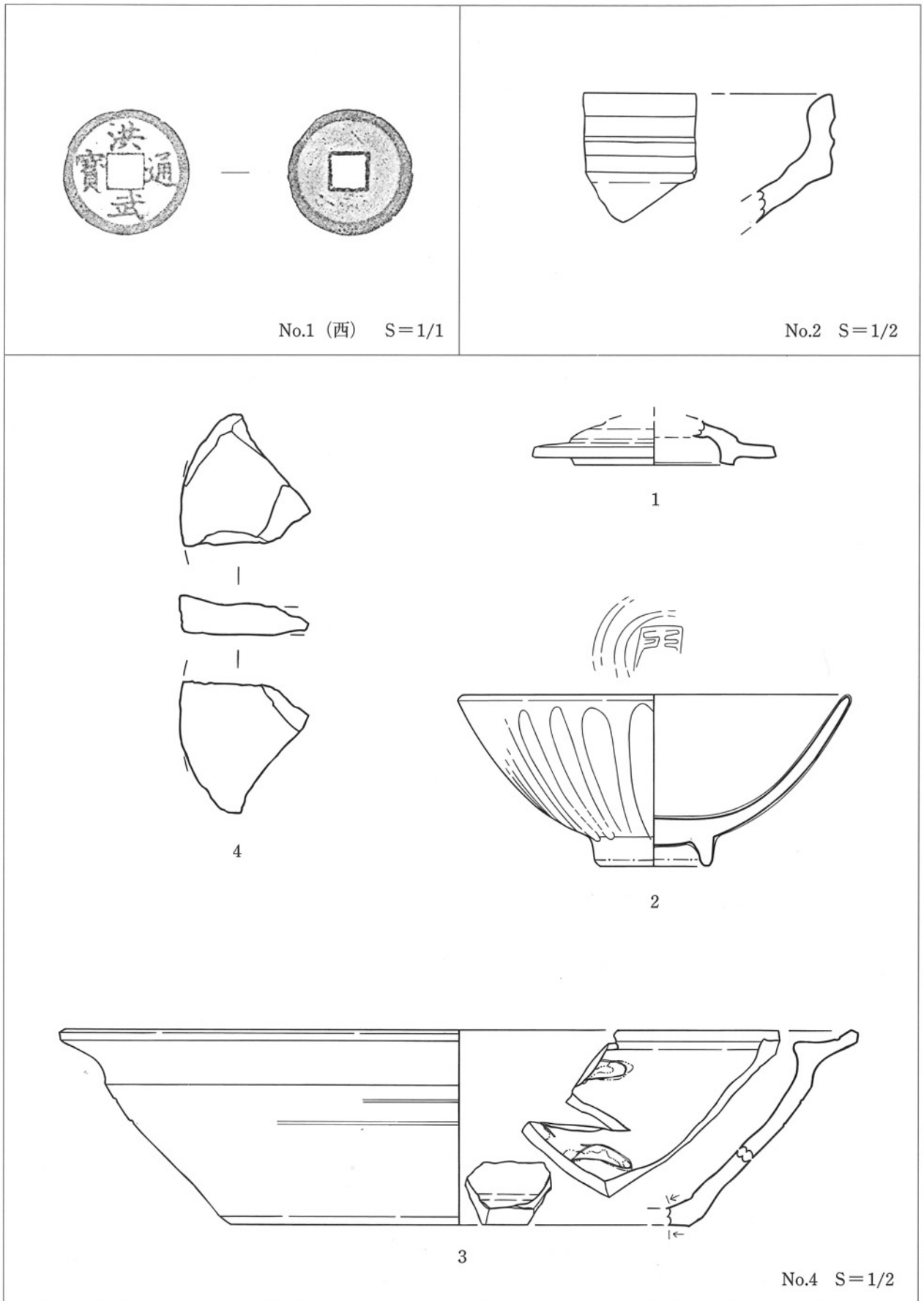
ここでも、土壌内より得られた遺物の観察表を示した。

第2表 土壌内出土遺物一覧

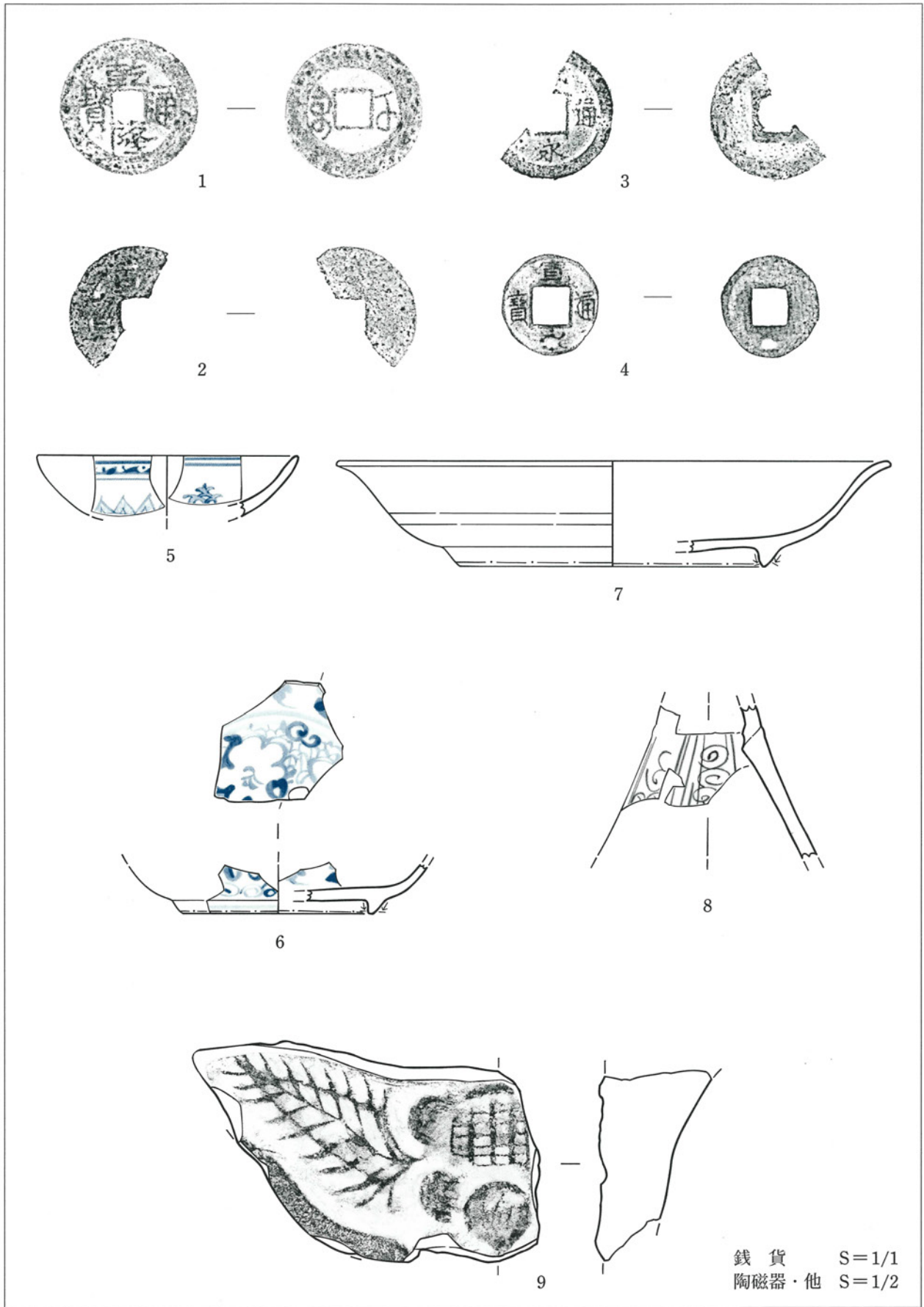
土壌 No.	種類													合計
	白磁	青磁	青花	五彩	三彩	緑釉	タイ産 半練土器	褐釉陶器	備前陶器	凹形土製品	高麗系瓦	明朝系 瓦当	埴	
土壌 No.1 (西)	5	9									1			15
土壌 No.1	3	9	5					1				9		27
土壌 No.2									1			1		2
土壌 No.4	1	8	2		1					1		4	183	200
土壌 No.5		1	2									1	245	249
土壌 No.6	8	1	7	1			1					2		20
土壌 No.7		5	2											7
石積み土壌		1											1	2
No不明土壌	5	25	12	2		1		1			2	1	2	51
合計	22	59	30	3	1	1	1	2	1	1	3	18	431	573

第3表 土壌内出土遺物観察一覧

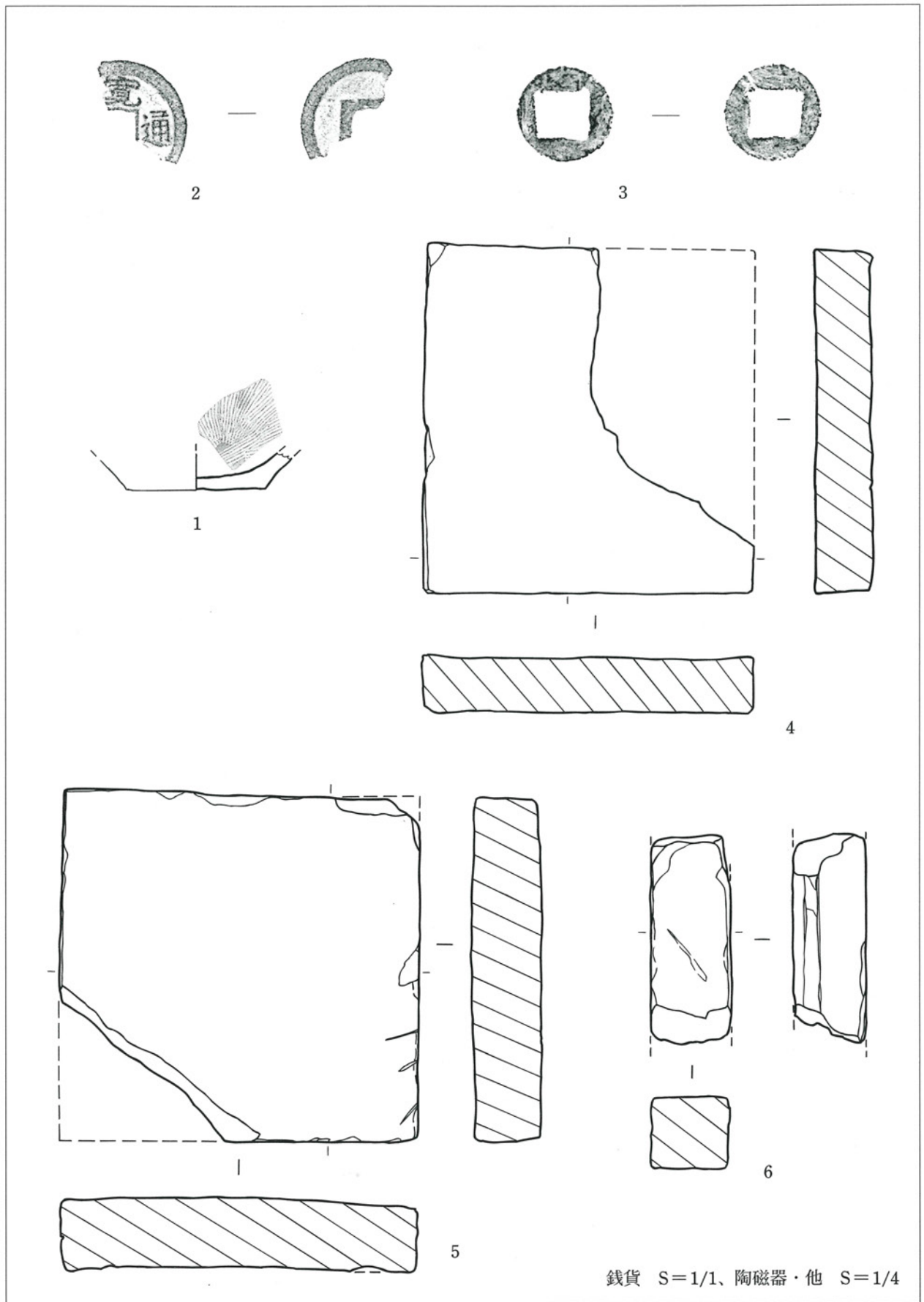
遺物番号	種別	計測値 (cm, g)			特徴	
		口径	器高	底径		
土壌NO1 (西)	古銭	外径: 2.20	穿径: 0.62	重さ: 3.20	洪武通宝: 明-1368	
" NO1 -1	古銭	外径: 2.51	穿径: 0.52	重さ: 4.20	乾隆通宝: 清-1735 背面に満州文字。	
" -2	"	-	-	重さ: 1.70	"。摩滅が著しい。	
" -3	"	外径: 2.40	穿径: 1.10	重さ: 2.00	"。背面孔の周囲を方形に縁取り。鉄錆びが付着。	
" -4	"	外径: 1.86	穿径: 0.66	重さ: 1.30	"。「永」にレンズ状の孔が穿たれている。外縁は多角形の切断痕が観察される。2次製品と思われる。	
" -5	青花		9.4	-	碁筒底皿。外面に波濤文と芭蕉文、内面は圏線と葉文。素地は灰白色の微粒子。	
" -6	"		-	-	皿の底部。外面に唐草文、内面は圏線と十字文内部に梵字状文を描く。素地は灰白色の微粒子。畳付けは露胎。	
" -7	白磁		20.0	3.8	11.0	外反皿。素地は灰白色で微粒子。畳付けはやや三角形を呈し、露胎。
" -8	磁器		-	-	-	緑釉の瓶。外面に下がり蓮弁文を描く。素地は淡灰白色の微粒子で内外面とも透明釉が施されている。緑釉はその上から施している。頸部内部で繋ぎ目が観察される。
" -9	瓦		-	-	厚さ: 2.3	明朝系軒平。花芯は格子文、葉脈が明瞭な文様である。黄褐色と灰褐色のサンドウィッチ状を呈する。軒平C
" NO2	陶器		-	-	-	備前産の鉢。破片だが取りあえず鉢で扱った。色調と素地とも灰白色であるが、部分的に淡橙褐色の箇所も見られる。白色の粒子が散見できる。田土。口縁部に2条凹線を巡らす。
" NO4 -1	"		8.8	-	5.8	白磁の蓋に近似しているが釉薬が施されていない。黄白色の粗粒子。
" -2	青磁		14.2	6.2	4.4	直口碗。凹形の蓮弁文。見込みに圏線二条と印字文。素地は灰白色で粗粒子。高台は小ぶりで畳付けのみ露胎。釉薬の発色は悪い。
" -3	陶器		14.5	7.0	16.6 (推定)	二彩の皿。安定感のあるベタ底より逆ハの字状に立ち上げ、口縁部を受け口状に成形するものである。緑釉を基調に黄釉を施す。文様は内面に沈線と曲線で描くが全体の構図は不明。素地は芯部をコゲ茶に内外を黄白色のサンドウィッチ状呈する粗粒子。釉薬は内外面に施すが底面のみ露胎。
" -4	土製品		-	-	厚さ: 1.1	凹形土製品。素地は淡桃灰褐色で粗粒子。
" NO5 -1	陶器		-	-	10.0	播鉢。外・底面に黒褐釉を施したもので、素地は淡紫色で粗粒子。素地には白い筋状の土と茶褐色の粒子が観察される。播目は8本一組と思われる。
" -2	古銭		-	-	重さ: 1.30	寛永通宝: 江戸-1624 楷書。
" -3	"	外径: 1.77	穿径: 0.99	重さ: 0.60	-	無文銭。
" -4	埴	長さ: 25.3	厚さ: 4.0	-	-	方形で灰褐色を呈し、粉末が指頭につく。埴の分類I類A1cのものである。
" -5	"	長さ: 25.5	厚さ: 5.1	-	-	方形で橙灰褐色を呈し、手触りが滑らか。I類A1aのものである。
" -6	"		厚さ: 5.3	-	-	方柱状で灰褐色、手触りがザラザラする。IV類A1bに該当するものである。
" NO6 -1	古銭	外径: 2.27	穿径: 0.50	重さ: 4.30	-	洪武通宝: 明-1368 背面に一銭。
" -2	青花		9.8	5.1	4.2	小碗。外面に仙芝祝寿文。畳付けは露胎。
" -3	色絵		14.6	6.6	7.4	碗。緑・赤・コゲ茶・黄の釉薬を用いて外面に草花文を描く。灰白色の微粒子。高台は高く畳付けは三角形を呈する。畳付けは露胎。
" NO7 -1	古銭		-	-	重さ: 0.60	寛永通宝: 江戸-1624 楷書。
" -2	"	外径: 1.28	穿径: 1.30	重さ: 0.30	-	無文銭。
" -3	青花		-	-	4.5	小碗。菊花唐草文を外面に描く。畳付けは露胎。
" NO8	古銭	外径: 2.46	穿径: 0.36	重さ: 3.00	-	至道元宝: 北宋-995 草書。
" NO不明	"	外径: 2.29	穿径: 0.65	重さ: 2.30	-	寛永通宝: 江戸-1624 楷書。前面に鉄錆びが付着。
" "	"	外径: 2.24	穿径: 0.61	重さ: 2.80	-	隅丸方形。鉄銭。鉄錆びが顕著。
" "	"		-	-	重さ: 1.40	判読不明。
" "	瓦	直径: 16.2	厚さ: 1.5	-	-	明朝系軒丸。色調は赤褐色。漆喰が付着。軒丸C
" "	青磁		19.2	-	-	無文外反碗。灰白色で微粒子。高台内に蛇の目釉ハギ。
" -1	古銭	外径: 2.34	穿径: 0.67	重さ: 1.80	-	寛永通宝: 江戸-1624 楷書。
" -2	"		-	-	重さ: 1.50	"。



第19図 (図版15) 土壙・西 (No.1)、土壙 (No.2・4) 出土遺物

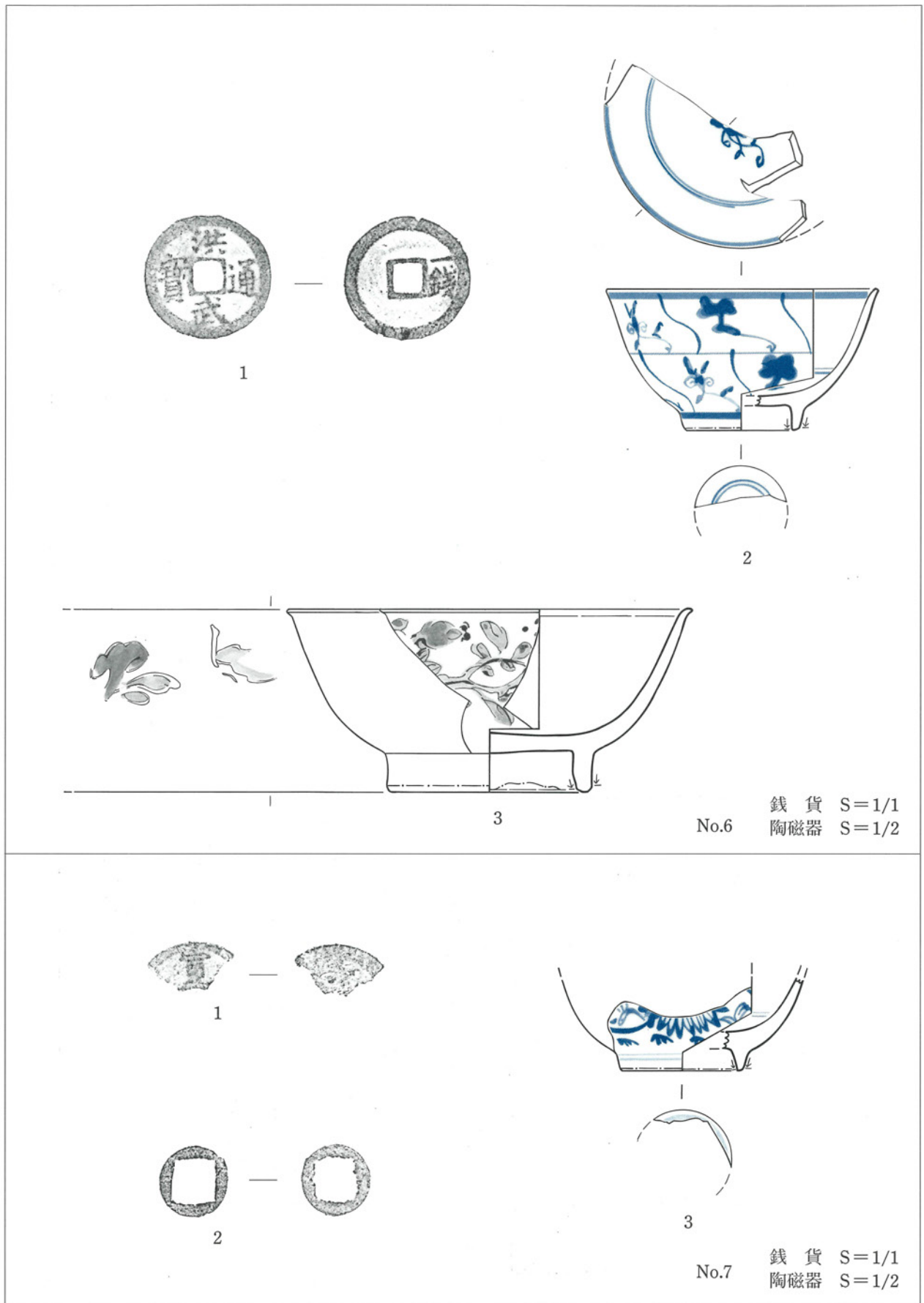


第20図 (図版16) 土壙 (No.1) 出土遺物

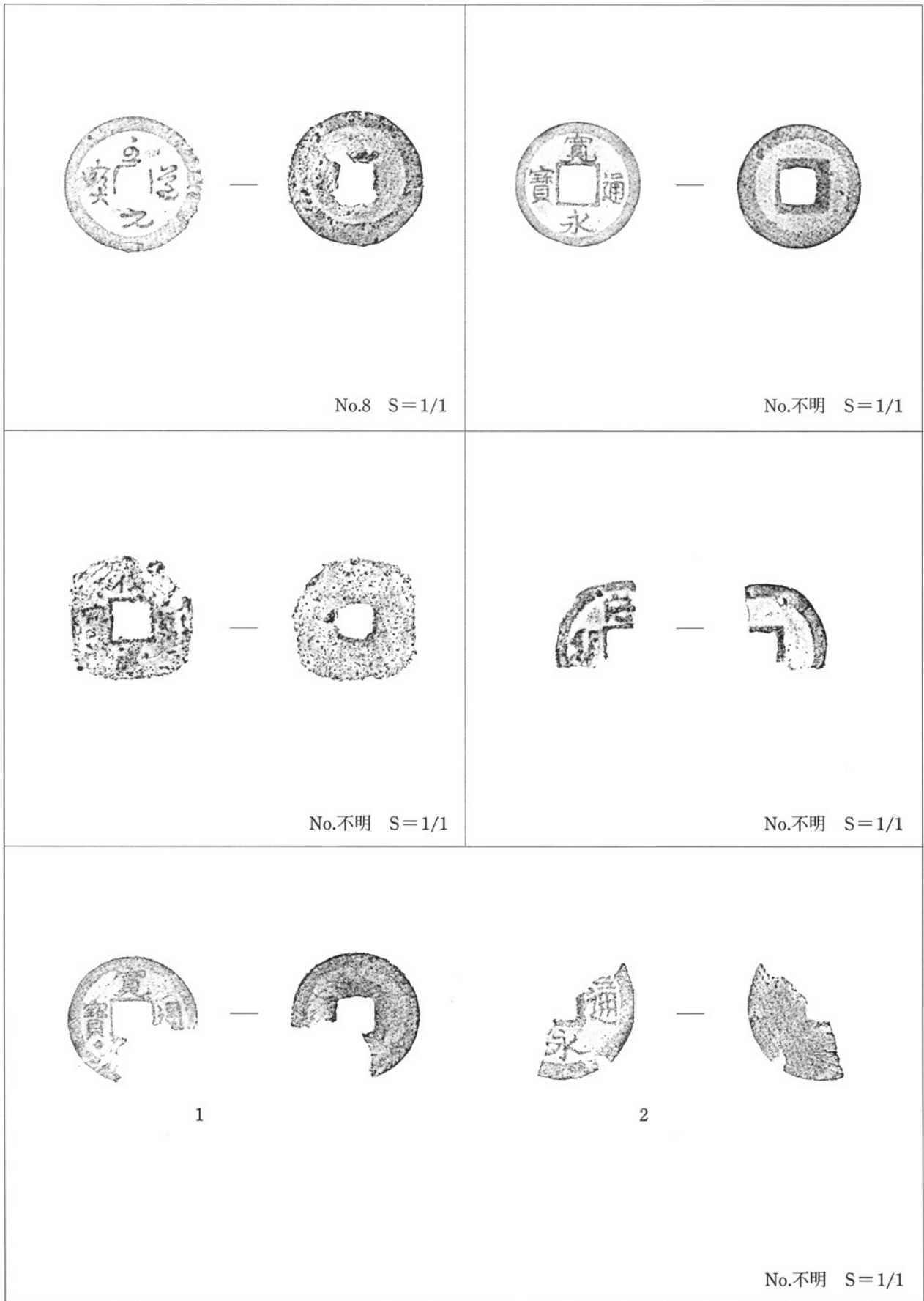


第21図 (図版17) 土壙 (No.5) 出土遺物

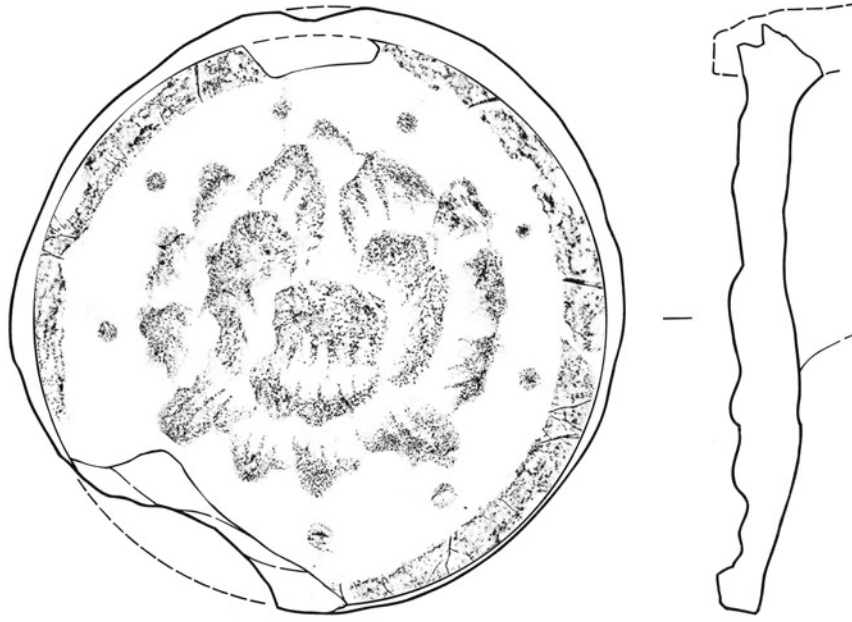




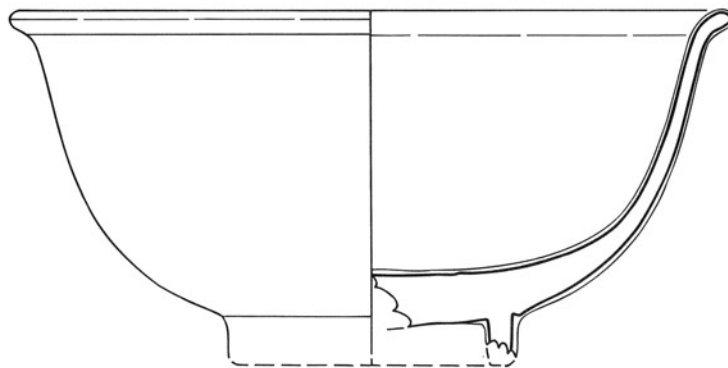
第22図 (図版18) 土壙 (No.6・7) 出土遺物



第23图 (图版18·19) 土壤 (No.8·不明) 出土遺物



No.不明 S=1/2



No.不明 S=1/2

第24図 (図版19) 土壙 (No.不明) 出土遺物

第4表 遺物出土一覧

種類 層序	白磁	青磁	青花	天目	五彩	三彩	瑠璃釉	翡翠釉	黄色釉	高麗青磁	ベトナム産 陶磁器	タイ産 陶磁器	タイ産 半練土器	円形 土製品	褐釉陶器	備前陶器	瓦質土器	高麗系瓦	明朝系 瓦当	埴	合計
I層	68	238	180	4	6	12	1		1		6		4	3	19	1	2	16	49	80	690
II層	125	368	276	2	3	7	6				4	2	11	1	27	4	10	11	48	98	1003
II層磔敷き面	19	26	19												2		1		11		78
IIIa層	61	320	103	2	1	7	6			1	2	5	15		51	7		37	13	17	648
IIIb層	8	102	9	3	1					1		1			12		1			16	154
IV層	36	288	37	2		2		1			1	5	7		34	1	1	11	7	10	443
V層	61	497	34	6	1		1				1	1	14	1	46	5	2	67	2	1	740
V層貝溜まり	16	62	10	1							1	1	5	3	12	2		1			114
基壇内II層	3	18																		4	25
基壇内III層		1													1						2
基壇内III層 磔敷き面	2	14	1														1	1	1		20
基壇内III層 排水遺構	1																				1
基壇内V層	12	48					1						3	1	6		2	12			85
基壇内V層 炭集中部	3	26	1																		33
基壇内V層 溝状遺構															1						1
II層根固め石内	2	12	5																		19
I層溝状遺構						1							2		1				1	1	6
II層溝状遺構	2	3	2	2																	9
V層溝状遺構	2	2	1																		5
II層土留め遺構	2	6	5												5						18
V層土留め遺構	3	3	5												1						12
V層竪穴状遺構	11	27	12			3						1	1		5	1			1	8	70
埋葬人骨			2																		2
不明	15	48	35		1								4		4	1	3	9		46	166
合計	452	2109	737	22	13	32	15	1	1	2	15	16	66	9	227	22	23	168	133	281	4344

1. 三彩・円形土製品・瓦・埴以外は口縁部、底部を集計
2. 金属製品等は各項目にて示す
3. 埋葬人骨は戦没者。

# 第Ⅵ章 出土遺物

## 中国産陶磁器

中国産陶磁器は白磁・青磁・青花・三彩・天目等が得られた。中でも青花が目についた。時期的には、14世紀～17世紀代の幅広い年代で見られた。

以下、種類別に記述する。

### 1. 白磁

器種としては、碗・皿・杯・壺・香炉・盤等の6器種が得られた。特に、皿類が数多く見られ注目を引いた。分類は器種で分け、器種毎との特徴により細分を試みた。以下、分類系統図を示す。個々の記述は観察表に示した参考されたし。

#### 碗 (第25図1～3)

##### I. 直口碗

- II. 外反碗
  - 1種：灰白色で厚手の外反碗である。
  - 2種：白色で薄手の外反碗である。

#### 皿 (第25図4～8、第26図1～10)

- I. 直口皿
  - 1種 (挟り)
    - a：高台脇から外底まで露胎のもの。
    - b：器体全面に総釉のもの。
  - 2種 (挟り無し)
  - 3種 (平底)
    - a：薄手で素地が灰白色で微粒子のもの。
    - b：厚手で素地が淡黄灰色で粉粒子のもの。

- II. 外反皿
  - 1種：薄手の皿
  - 2種：薄手の菊花皿
  - 3種：端反りの薄手皿

#### 杯 (第27図1～17)

- I. 外反杯
  - 1種：腰部から緩やかに外反するもの。 a. 挟り無し
  - 2種：口縁部で外反し、肩部に稜を持つもの。 b. 挟り有り
- II. 内湾杯
  - 1種：素地が黄白色で粉粒子で、高台脇から露胎。
  - 2種：素地が灰白で微粒子で、灰白色に発色するもの。高台脇を丁寧に削り稜が見られるもの。
- III. 面取り杯
  - 1種：素地が黄白色で粉粒子で、高台脇から露胎。
  - 2種：素地が灰白で微粒子で、灰白色に発色するもの。高台脇を丁寧に削り稜が見られるもの。

#### IV. 腰折れ杯

高台脇より立ち上げ、腰部で折り曲げ外反する杯である。素地は黄白色で粉粒子である。

#### V. 端反り杯

底面より端反りに立ち上げる薄手の杯で、高台は厚く碁笥底状に成形する。畳付けは露胎にする。素地は灰白色で微粒子で、灰白色に発色する。

#### VI. 小杯

型成形品。

#### 壺 (第28図5)

##### 短頸壺

胴部を膨らませ口縁部で外反させるものである。素地は灰白色で薄い透明釉を内外面に施すが、畳付けと口唇部は露胎。

#### 蓋物 (第28図1～4)

壺・水注等の蓋と思われるものである。

#### 香炉 (第28図6)

腰折れの香炉で、口部でやや外反するものである。釉薬は高台脇から見込みまで施す。

#### 脚台 (第28図7)

ハの字状に開く脚台で、素地は白色で透明釉を施すが、畳付けと見込みは露胎。

第5表 白磁観察一覧(碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 台 径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第25図 図版20の	1 直 口 碗		16.2 — —	淡灰白色で 粗粒子	内外面に薄 い透明釉を 施す	不明	淡 灰 白 色	あり	し-14 II
” ”	2 外 反 碗	1	15.8 — —	灰白色で微 粒子	” 高台脇から 露胎	見込みに 圈線と 印花文	灰 白 色	なし	う-3 IV い-3 IV
” ”	3 ”	1	17.0 7.3 5.8	”	” 高台は露胎	”	”	あり	え-9 基壇V

(皿)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 台 径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第25図 図版20の	4 直 口 皿	1a	10.4 3.0 4.1	淡黄白色で 粉粒子	高台脇から 外底は露胎	なし	淡 黄 白 色	見込みに細か い貫入	す-12 II
” ”	5 ”	1a	8.2 2.2 4.2	灰白色で 微粒子	” であるが、 畳付けに釉 薬が残る。	”	灰 白 色	なし	く-5 V
” ”	6 ”	1b	8.8 2.1 4.6	”	総釉がけ	”	”	”	き-12 II
” ”	7 ”	”	9.5 2.3 4.0	”	”	”	”	”	す-6 I
” ”	8 ”	”	7.8 1.6 4.3	”	” 加熱を受け 2次焼成品	”	未 発 色	”	せ-7 II
第26図 図版21の	1 ”	2	9.8 2.9 4.4	淡黄白色で 粉粒子	高台脇から 外底は露胎	なし	淡 黄 白 色	見込みに細か い貫入	こ-12 V
” ”	2 ”	”	10.4 3.0 3.6	”	”	”	”	”	え-8 基壇V
” ”	3 ”	”	8.2 2.0 4.8	”	” 加熱を受け 2次焼成品	”	未 発 色	不明	さ-11 II
” ”	4 ”	3b	8.8 2.0 4.1	淡燈白色 粉粒子	外面と口 唇部は露胎 僅かに外面 釉垂れ。	”	灰 白 色	なし	I 灯明皿

## (皿)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第26図 図版21の	5 5 外 反 皿	1	10.2 2.5 4.9	淡黄白色で 粉粒子	見込みに蛇 ノ目釉ハギ 高台脇から 外底は露胎	〃	淡黄 白色	見込みに細か い貫入	えー12 Ⅲa
〃 〃	6 6	1	12.1 2.7 5.6	〃	〃	〃	淡灰 白色	〃	こー12 Ⅳ
〃 〃	7 7	1	15.4 3.9 8.3	灰白色で 微粒子	三角状の畳 付け露胎 砂粒が付着	〃	淡白 色	なし	しー15 Ⅱ
〃 〃	8 8	3	12.2 2.2 6.0	〃	〃	〃	〃	〃	せー7 Ⅱ
〃 〃	9 9	型成形	7.3 1.7 5.3	〃	畳付けから 外底面は露 胎	〃	〃	〃	せー10 Ⅱ層根固め 石内
〃 〃	10 10	〃	7.4 1.8 3.6	〃	総釉がけ	見込みに 吉祥文	〃	〃	しー16 Ⅱ
〃 〃	11 11	盤	21.3 4.8 7.5	淡白灰色 微粒子	高台は露胎 見込み蛇ノ 目釉ハギ。	なし	淡灰 白色	貫入 あり	せー7 Ⅱ こー5 V

## (杯)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第27図 図版22の	1 1 外 反 杯	1a	8.4 3.7 3.7	淡黄白色 粉粒子	高台脇から 外底露胎	なし	淡黄 白色	なし	えー7 基壇V
〃 〃	2 2	1a	8.6 3.7 3.4	〃	畳付けから 露胎。	〃	〃	〃	えー5 Ⅲb
〃 〃	3 3	1a	8.8 4.1 3.4	〃 上記2点に 比べて薄手	〃	〃	〃	見込みに細か い貫入。	えー10 Ⅰ
〃 〃	4 4	1	8.2 — —	白色 微粒子	内外面に施 釉。	〃	灰白 色	なし	さー11 Ⅲb
〃 〃	5 5	1a	8.4 3.0 3.2	〃	高台脇から 外底露胎	〃	〃	〃	さー12 V

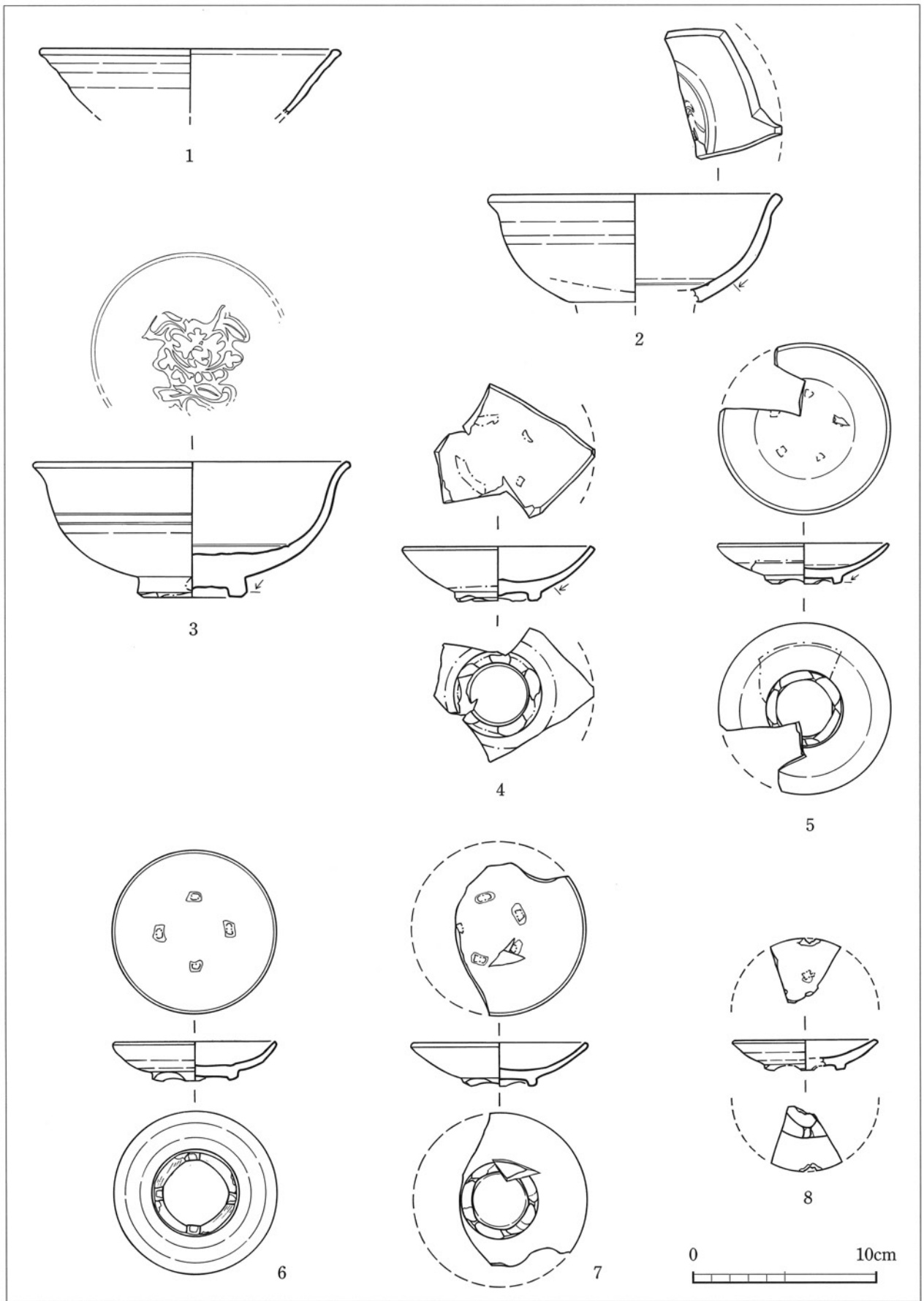


## (杯)

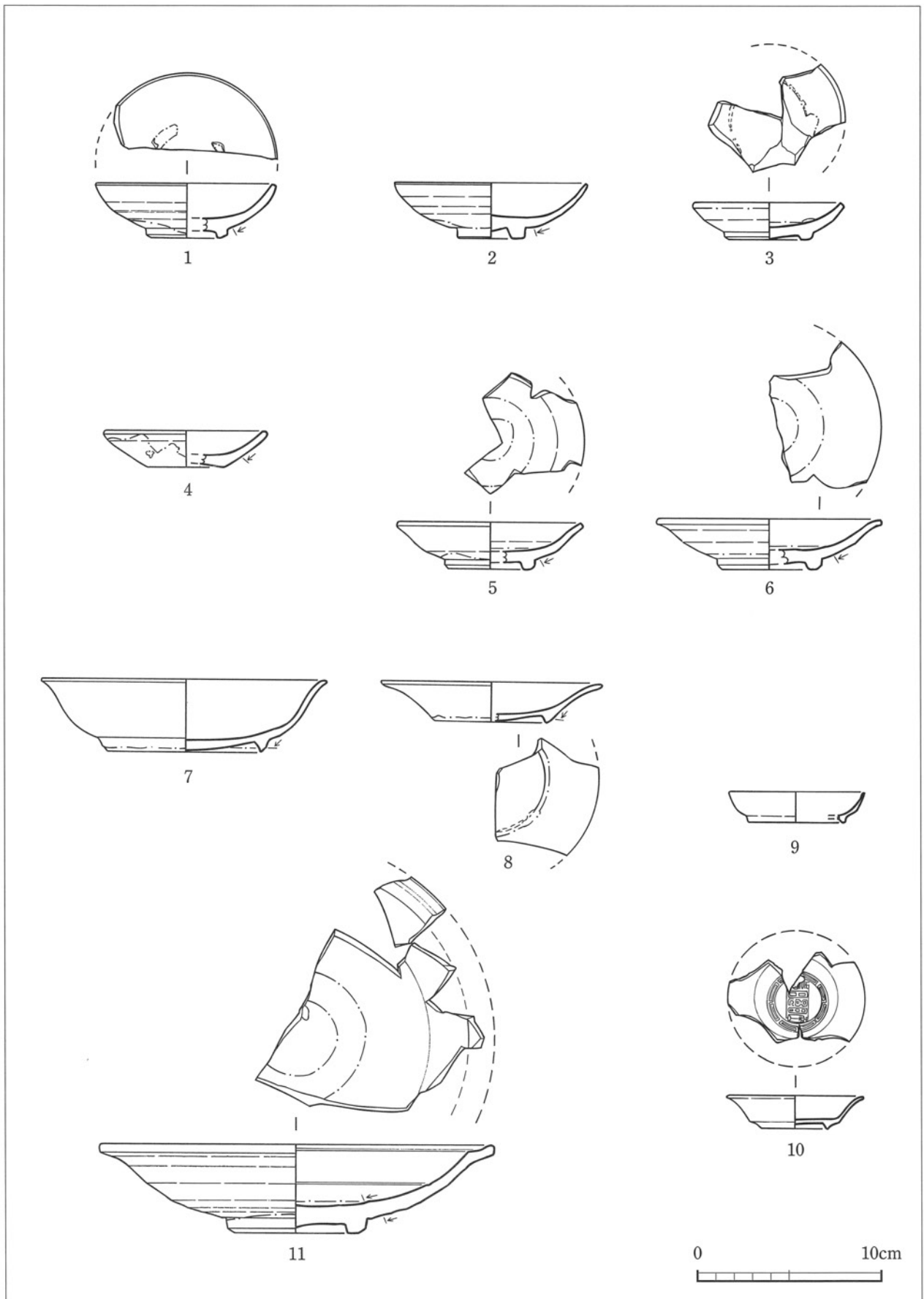
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 27 図 図版22の	6 6	1	9.1 — —	白色 微粒子	内外面に施 釉。	なし	灰 白色	なし	う-3 Ⅲa
” ”	7 7	2b	8.6 3.3 3.9	淡黄白色 粉粒子	高台脇から 外底露胎。 畳付けに抉り あり。	”	淡 黄 白 色	”	さ-11 Ⅳ
” ”	8 8	2	7.5 2.7 3.6	淡灰白色 微粒子	高台脇から 外底露胎。	”	淡 灰 白 色	細かい 貫入が 見られ る	さ-11 Ⅴ
” ”	9 9	1	8.0 3.6 3.2	淡黄白色 粉粒子	”	”	淡 黄 白 色	”	い-3 Ⅴ
” ”	10 10	1	8.5 3.3 4.4	”	” 畳付けに抉り あり。	”	”	なし	さ-11 Ⅴ 畳付けにス痕 2次焼成品。
” ”	11 11	2	7.2 2.3 3.5	白色 微粒子	高台脇から 外底露胎。	”	灰 白 色	”	さ-8 Ⅱ
” ”	12 12	1	8.0 3.2 4.2	淡黄白色 粉粒子	” 畳付けに抉り あり。	”	淡 黄 白 色	”	さ-14 Ⅳ
” ”	13 13	1	7.8 3.2 3.7	”	”	”	”	”	い-3 Ⅲa
” ”	14 14		8.8 — —	白色 微粒子	内外面に施 釉。	”	”	あり	こ-5 Ⅴ
” ”	15 15		8.6 — —	”	高台脇から 外底露胎。	”	”	”	し-6 Ⅲa
” ”	16 16		6.2 3.7 3.6	淡灰白色 微粒子	三角状の 畳付け露胎。	”	淡 灰 色	なし	く-17 Ⅴ 竪穴状遺構
” ”	17 17		4.4 2.0 2.6	”	やや台形状 の畳付け露 胎。	”	淡 灰 白 色	”	す-7 Ⅱ

## (蓋・壺・香炉・脚台)

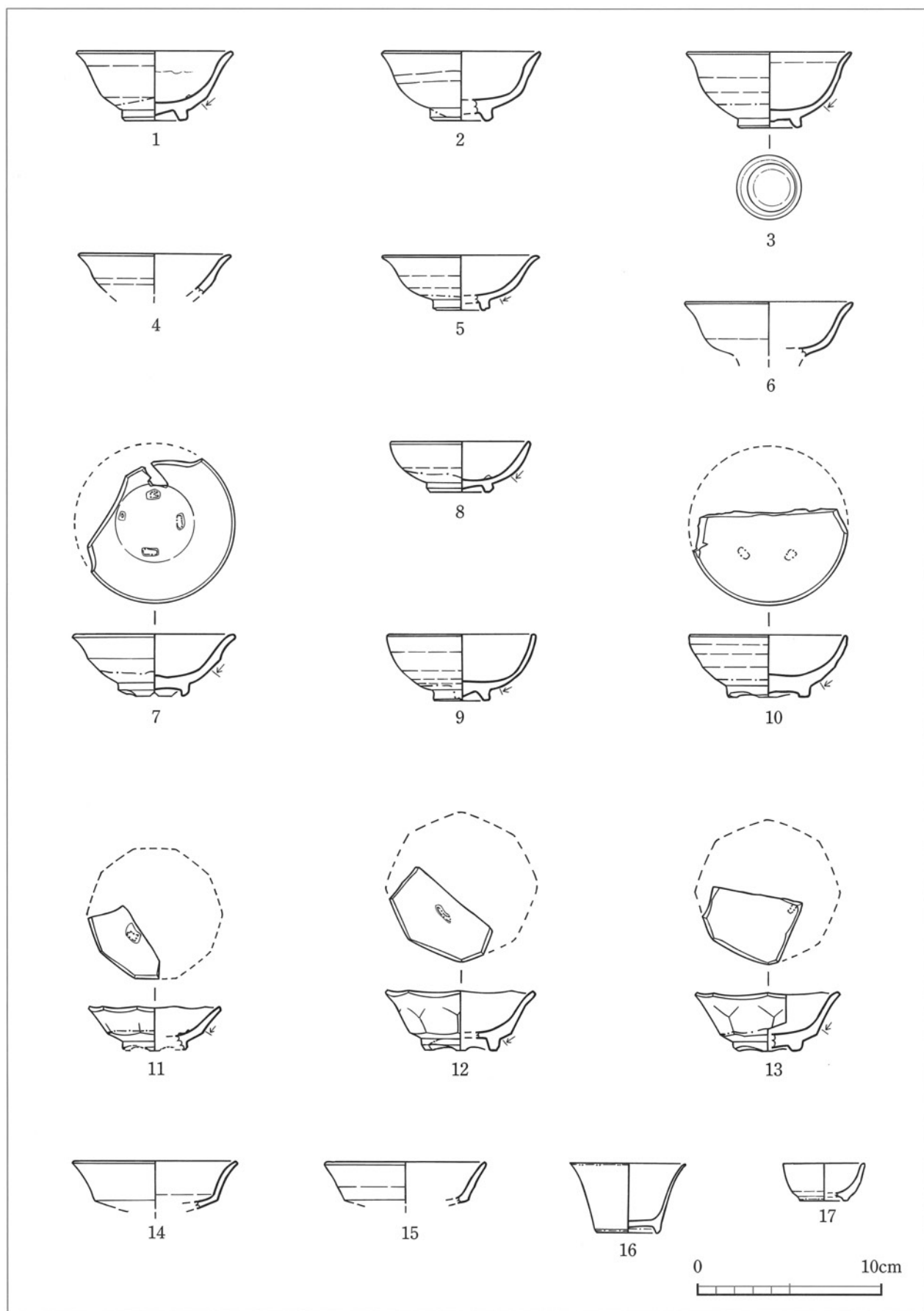
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第28図 図版23の	1 壺 の 蓋 ?		4.4 1.6 2.2	淡白色 微粒子	内面は露胎	なし	淡灰 白色	なし	え-4 V
” ”	2 蓋		10.0 — 7.4	淡黄白色 微粒子	”	”	淡黄 白色	細かい 貫入が 見られ る	し-15 II
” ”	3 ”		— — 6.6	淡黄白色 粉粒子	”	”	”	”	え-5 II
” ”	4 ”		7.4 — 5.6	”	底内面は 露胎。	”	”	”	さ-12 V
” ”	5 壺		10.8 — 8.0	淡白色 微粒子	口唇部と 高台は露胎 2次焼成	”	淡灰 白色	”	こ-12 V
” ”	6 香 炉		10.2 — —	淡灰白色 微粒子	高台脇と 見込みは 露胎。	”	”	”	し-10 IV
” ”	7 脚 台		— — 7.4	淡白色 微粒子	畳付けとその 内側、見込み は露胎。	”	乳白 色	なし	え-4 I



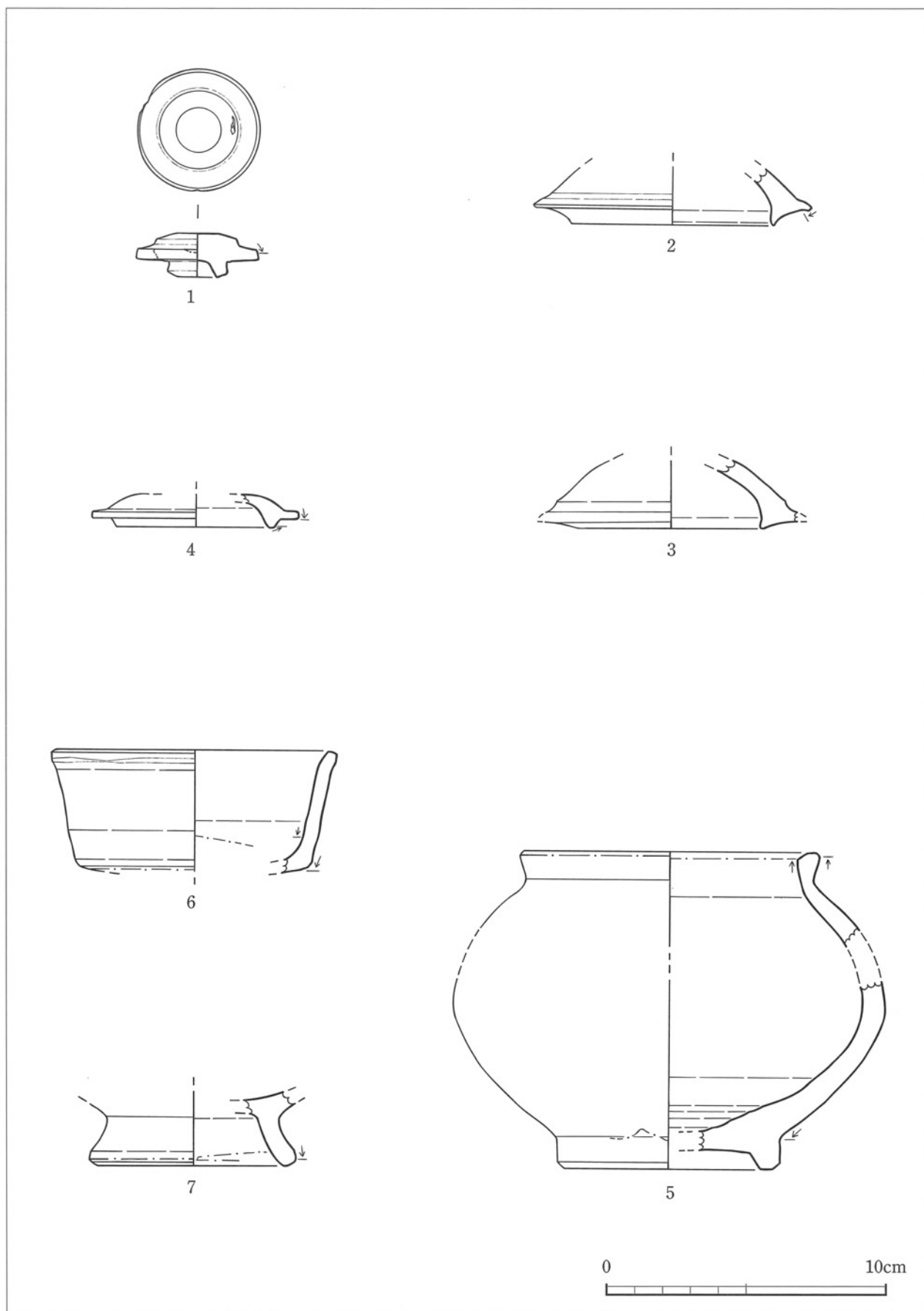
第25図 (図版20) 白磁: 碗 (1~3) ・皿 (4~8)



第26図 (図版21) 白磁：皿 (1~10) ・盤 (11)



第27图 (图版22) 白磁:杯 (1~17)

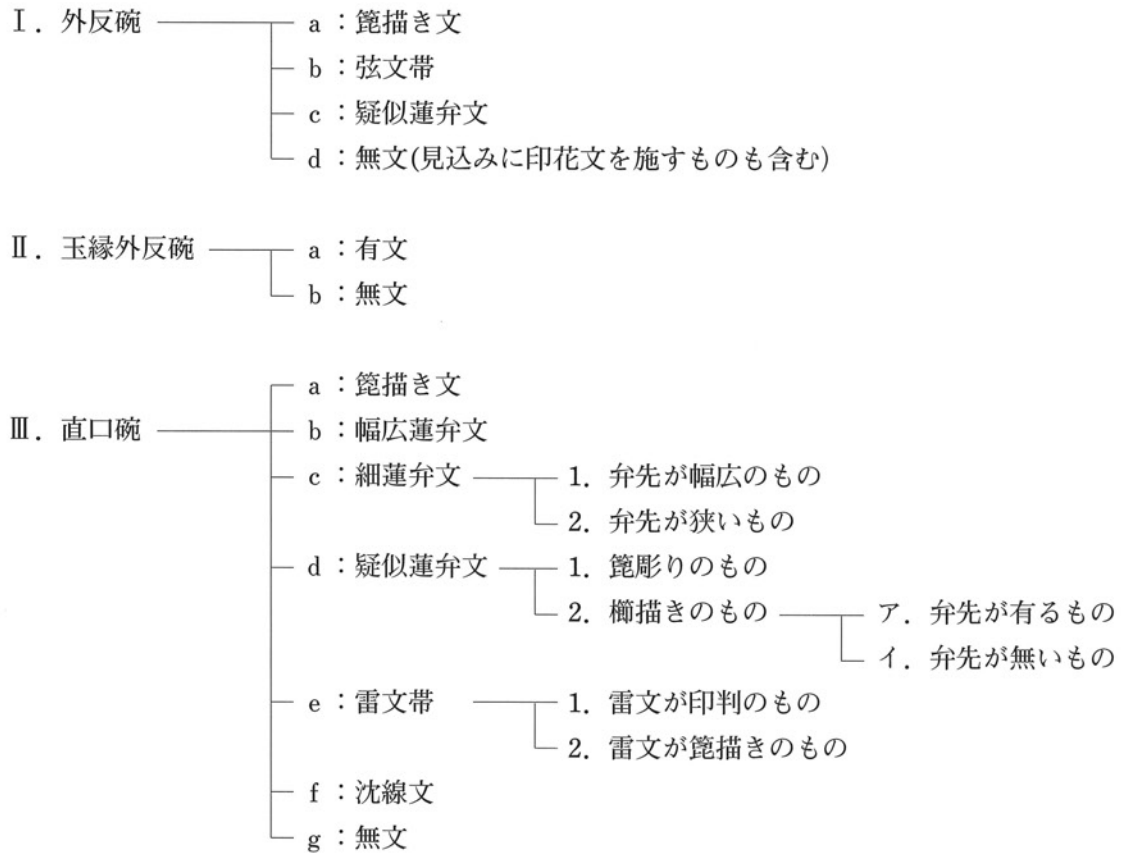


第28図 (図版23) 白磁：蓋 (1~4) ・壺 (5) ・香炉 (6) ・脚台 (7)

## 2. 青磁

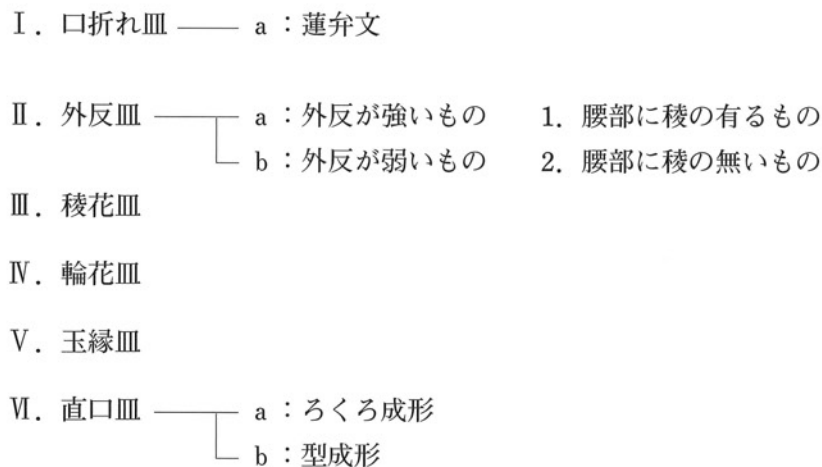
器種としては、碗・皿・盤・杯・壺・瓶・香炉・挿鉢等の7器種が確認された。その他にも、器種がよく解らないものがいくつか確認された。その中で、最も多く得られたものは、碗類である。以下、分類系統図を記す。個々の記述は観察表に示した。

### 碗 (第29～32図)



第31図3については、外面細蓮弁文、裏面に雷文が見られるが、今回は取りあえず、外面を優先してⅢ c 2の分類に含めた。将来は分類可能なものである。

### 皿 (第33～35図)



## 盤 (第36・37図)

口縁部の形状によって下記のとおり大きく分けた。

I. 顎縁 ——— a : 単篋のもの  
                              b : 櫛描きのもの

II. 短顎縁 ——— a : 単篋のもの  
                              b : 櫛描きのもの

III. 丸顎縁 ——— a : 単篋のもの  
                              b : 櫛描きのもの

IV. 逆L字状 ——— a : 単篋のもの  
                              b : 篋描きのもの

V. 玉縁 ——— a : 単篋のもの  
                              b : 櫛描きのもの  
                              c : 沈線文

VI. 直口 ——— a : 単篋のもの

## 杯 (第38図1～5)

第38図1～5に示したもので、口縁部が輪花の外反杯と鼈甲口の2種の杯が見られた。底部は碁<sup>註</sup>笥底状のみ得られた。今<sup>註</sup>婦仁城の例を参考にすると直口の杯に成るものと思われる。

## 擂鉢 (第38図6)

同図6に示した1点<sup>註</sup>が得られた。やや内湾ぎみに立ち上げ縁部で僅かに窪み、口唇部を丸みに成形したものである。内面に櫛搔きによる播り目が施されている。

## 香炉 (第38図7・8)

第38図7・8に示した。2点とも小ぶりのもので直口の香炉である。

## 瓶 (第38図9～11)

第38図9～11に示したもので、9が八角形の口縁部、10・11は撫で肩の瓶である。

## 袋物 (第38図12)

第38図12に示した。丸みのある八角形の胴部に蓮弁文を施したものである。その胴部の上下部に釉薬の剥離痕が見られ、水注が想定されたが判然としなかった。



### 水滴 (第39図1)

第39図1に示したもので、船形水滴の破損品である。外面の船体には唐草文、船尾の覆屋には網代を模した格子状の文様を施している。船上の船尾側には小孔、船首には口部を大きく開口する。船内には孔のある仕切が設けられている。全体に薄い透明釉を表面に施し、底面は露胎である。素地は灰白色で微粒子である。うー7第I層とえー6第V層より出土。

### 壺 (第39図2)

第39図2に示したもので、酒会壺と呼ばれているものである。口縁部を内傾ぎみに成形し肩部より丸み持たせながら底部へ至る器形を呈する。文様は縁部に2条、腰部には1条の界線を施し、胴上部と胴下半部に区画を設けている。胴上部には篋彫りの花文を描き、胴下半に篋彫りの蓮弁文を巡らしている。底部は落とし底である。厚い釉薬を内外面に施し、口唇部は露胎である。素地は淡い灰白色で微粒子。きー7第II層、こー12第IV層と第V層より出土。

〈註〉金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告書』今帰仁村教育委員会 1983

第6表 青磁観察一覧 (碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第29図 図版24の	1 1	I a	15.6 — —	灰白色で 微粒子	内外面に厚く 施す。	肩部に沈線 篋描き文	淡 緑 色	あり	うー3 V
” ”	2 2	I c	15.6 — —	”	内外面にやや薄く 施す。	口唇部に刻目 篋彫りと沈線 篋彫り	”	”	こー12 IV
” ”	3 3	I d	12.9 — —	灰褐色 粗粒子	内外面に薄く 施す。	なし	灰 緑 色	なし	こー5 V
” ”	4 4	I d	14.2 — —	”	内外面にやや 薄く施す。	”	”	”	えー5 Z-1 V
” ”	5 5	I d	15.3 — —	淡灰白色で 粗粒子	”	”	淡 緑 色	”	たー10 II
” ”	6 6	I d	15.5 — —	”	” 加熱を受けた 2次焼成品	”	灰 褐 色	”	うー3 V
” ”	7 7	I d	16.2 — —	”	内外面にやや 薄く施す。	”	灰 緑 色	細かい 貫入 あり	うー10 基壇内V
” ”	8 8	I d	16.8 — —	淡黄白色で 粗粒子	”	”	黄 土 色	”	けー4 V

(碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第29図 9 図版24の 9	I	d	20.0 — —	淡灰白色で 粗粒子	内外面にやや 薄く施す。	なし	灰緑色	細かい 貫入 あり	え-4 V
” 10 ” 10	I	d	19.4 — —	淡灰色 微粒子	内外面にやや厚く 施す。	”	淡緑色	なし	す-8 IV
” 11 ” 11	I	d	14.8 7.4 6.4	”	” 外底面蛇の目釉ハギ	”	緑褐色	細かい 貫入 あり	く-6 I か-5 V
” 12 ” 12	I	d	14.3 8.0 5.9	淡白色 粗粒子	内外面に薄く 施す。	見込みに 印花文	淡緑 灰色	”	く-4 V
” 13 ” 13	I	d	17.4 8.6 7.6	灰褐色 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面蛇の目釉ハギ	”	灰黄 緑色	”	う-3 お-2 お-6 V
第30図 1 図版25の 1	II	a	15.7 5.9 7.6	灰白色で 粗粒子	内外面に薄く施す。 高台内外底面は 露胎。 2次焼成品。	内面に区画 を設けた草花 文の型押し文。	淡緑 色	あり	す-7 III b
” 2 ” 2	II	a	18.0 8.1 7.0	”	”	”	灰緑 色	”	う-3 V
” 3 ” 3	II	a	17.2 9.0 6.5	” 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 高台内蛇の目状に釉 ハギ。	外面にラマ式 蓮弁文。内面 には雷文帯と 刻花文、見込 み花文を施す。	淡緑 色	”	さ-11 I さ-12 III a さ-10 V し-10 II
” 4 ” 4	II	a	15.8 — —	” 粗粒子	内外面にやや 厚く施す。	外面に篋描き による蓮弁文	”	”	え-9 基壇内 V
” 5 ” 5	III	a	15.2 7.6 6.8	” 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。 高台内蛇の目状に釉 ハギ。	内外面に篋描 文。	”	”	え-5 V
” 6 ” 6	III	b	15.3 7.9 6.9	灰白色で 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面蛇の目釉ハギ	外面に蓮弁文 沈文。内面は 篋描きと見込 みに鹿を描く。	”	なし	え-8 基壇内 V
” 7 ” 7	III	b	13.2 — —	灰褐色 粗粒子	内外面に薄く 施す。	外面に蓮弁文	灰緑 色	”	す-7 III b さ-9 IV
” 8 ” 8	III	c 1	16.0 — —	灰白色で 微粒子	内外面にやや厚く 施す。	外面に蓮弁文 沈文。 内面は篋描き	淡緑 色	”	す-12 II
” 9 ” 9	III	c 2	16.8 8.5 6.8	淡灰白色で 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面蛇の目釉ハギ	”	淡濃 緑色	”	え-9 基壇内 V

## (碗)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高 台 径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第30図 10 図版25の 10	Ⅲ	c2	13.8 — —	淡灰白色で 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面蛇の目釉ハギ	外面に蓮弁文 沈文。 内面は篋描き	淡 緑 色	なし	え—6 Ⅲa
第31図 1 図版26の 1	Ⅲ	c2	15.8 — —	〃	内外面にやや 薄く施す。	〃	淡 緑 色	〃	く—8 Ⅲa
〃 2 〃 2	Ⅲ・	d1	14.8 — —	〃	〃	外面に篋によ る疑似蓮弁文 内面に篋堀り の文様が全体 の構図は不明	〃	〃	う—5 Ⅱ
〃 3 〃 3	Ⅲ	c2	13.0 — —	〃	〃	外面は蓮弁文 内面雷文帯 雷文と篋描き 文	〃	〃	え—5 Ⅰ
〃 4 〃 4	Ⅲ	e1	16.6 — —	灰白色で 微粒子	口唇部は薄く施し 内面を玉縁状に表現 それ以外は内外面に 厚く施す。	雷文と印花に よる菊花文が 施されている。 雷文	緑 色	〃	く—8 Ⅲa
〃 5 〃 5	Ⅲ	〃	16.4 — —	〃	内外面にやや 厚く施す。	雷文 草花文の印花	淡 緑 色	〃	さ—11 Ⅴ
〃 6 〃 6	Ⅲ	e2	16.1 — —	〃	〃	雷文と刻花文 刻花文	緑 色	〃	さ—9 Ⅱ
〃 7 〃 7	Ⅲ	〃	14.6 — —	淡灰白色で 粗粒子	内外面にやや 薄く施す。	〃	黄 緑 色	あり	う—8 Ⅱ 礫敷面
〃 8 〃 8	Ⅲ	〃	15.8 — —	〃	〃	〃	〃	なし	し—11 Ⅱ
〃 9 〃 9	Ⅲ	〃	17.3 — —	〃	内外面に厚く 施す。	雷文と刻花文 刻花文	淡 緑 色	〃	え—8 こ—10・11 Ⅴ
〃 10 〃 10	Ⅲ	〃	15.0 — —	〃	〃	〃	〃	〃	き—9 Ⅳ
〃 11 〃 11	Ⅲ	〃	16.7 — —	灰色 粗粒子	〃	雷文と刻花文	〃	〃	く—4 Ⅴ
〃 12 〃 12	Ⅲ	〃	16.2 — —	淡灰色 微粒子	内外面に薄く 施す。	〃	黄 緑 色	〃	え—3 Ⅳ
〃 13 〃 13	Ⅲ	〃	14.0 — —	淡白色 粗粒子	〃	雷文と蓮弁文	淡 緑 灰 色	〃	さ—11 Ⅳ し—11 Ⅱ し—12 Ⅲa
〃 14 〃 14	Ⅲ	〃	14.2 7.3 6.2	淡灰色 微粒子	内外面に厚く施す。 外底面は蛇の目状に 露胎。	雷文と蓮弁文 圏線と印花文	淡 緑 色	あり	さ—11 し—9・10 Ⅴ 貝溜まり

## (碗)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第31図 15 図版26の 15	Ⅲ	e2	14.2 7.0 5.5	淡灰色 微粒子	内外面に厚く施す。 外底面は蛇の 目状に露胎。	雷文と蓮弁文 圏線と印花文	黄 銅 色	なし	さ-11 V貝溜まり
第32図 1 図版27の 1	Ⅲ	〃	13.8 — —	〃	外底面は露胎。 施す。	雷文とワマ式 蓮弁文	淡 緑 灰 色	〃	こ-12 V貝溜まり さ・し-10 V
〃 2 〃 2	Ⅲ	〃	14.7 — —	〃	内外面にやや 厚く施す。	〃	淡 緑 色	〃	さ-12 V貝溜まり こ-10 I
〃 3 〃 3	Ⅲ	〃	15.2 6.6 6.5	灰白色 粗粒子	〃	雷文と区画文 圏線と印花文	濃 緑 色	〃	さ-11・12 V貝溜まり
〃 4 〃 4	Ⅲ	f	13.8 — —	淡白色 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。	口縁端部に沈 線を囲繞	淡 緑 色	〃	せ-10 II せ-8 III根固石内
〃 5 〃 5	Ⅲ	g	15.0 — —	灰白色 粗粒子	内外面に薄く 施す。	なし	淡 緑 灰 色	あり	た・ち-8 I
〃 6 〃 6	Ⅲ	〃	15.8 — —	〃	〃	〃	〃	なし	さ-11 V
〃 7 〃 7	Ⅲ	〃	16.0 7.4 6.4	淡灰白色で 微粒子	内外面に厚く施す  外底面は蛇の目状に 露胎。	〃 圏線と印花文	淡 緑 色	あり	し-9・10 IV

## (皿)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第33図 1 図版28の 1	I	a	12.2 3.3 6.8	灰白色で 微粒子	内外面にやや 厚く施す。 外底面は露胎。	籠彫りによる 便化した蓮弁 文 印花文	淡 緑 色	あり	さ-11 IV・V さ-12 V
〃 2 〃 2	I	〃	12.2 3.3 6.8	〃	〃	蓮弁文と口唇 部に籠描き草 花文	黄 緑 色	なし	す-8 IV
〃 3 〃 3	II	a1	12.9 3.5 5.8	〃	内外面に薄く施釉 外底面は蛇の目 釉剥 2次焼成品	内外面に 籠描き草花文	淡 緑 色	あり	こ-12 IV
〃 4 〃 4	II	〃	13.1 3.5 5.7	〃	〃 外底面露胎?	〃 見込みに圏線	〃	なし	く-4 IV
〃 5 〃 5	II	〃	11.6 2.9 5.6	灰白色 粗粒子	〃 手触りがザラザラし 2次焼成品と思われ る。	幅広の草花文	〃	あり	く-8 III a

## (Ⅲ)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第33図 図版28の6	Ⅱ	a1	11.7 2.8 5.3	灰白色 粗粒子	内外面に薄く施釉 外底面は蛇の目釉剥 手触りがザラザラし 2次焼成品と思われる。	幅広の草花文 見込みに印花 文	暗 緑 色	あり	く-8 Ⅲa
” ” 7 7	Ⅱ	”	12.2 3.5 5.7	”	内外面に薄く施釉 外底面は蛇の目 釉剥 釉薬は未発色?	見込みに印花 文	淡 緑 色	なし	こ-10・11 さ-11 Ⅴ
” ” 8 8	Ⅱ	”	12.2 3.6 5.8	”	” 手触りがザラザラし 2次焼成品と思われ る。	”	”	なし	く-8 Ⅲa さ-10 Ⅴ貝溜まり

## (Ⅲ)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第34図 図版29の1	Ⅱ	a2	11.8 3.3 5.8	灰色 微粒子	内外面に薄く 施す。 外底面は蛇の目 釉剥	内面に草花文 見込みに印花 文	濃 緑 色	なし	う-10 基壇内Ⅱ
” ” 2 2	Ⅱ	”	12.7 3.7 6	”	内外面にやや厚く 施す。 外底面は蛇の目 釉剥	見込みに菊 花の印花文	”	”	え-5 Ⅳ
” ” 3 3	Ⅱ	”	12.3 3.7 6.6	”	内外面に薄く施す。 高台内側より外底 面は露胎。 口縁部端部はやや 玉縁ぎみ	見込みに印花 文	淡 緑 色	”	さ-9 Ⅳ
” ” 4 4	Ⅱ	”	12.2 4.5 6.6	灰黄色 粗粒子	内外面にやや厚く施す。 外底面は蛇の目釉剥 外底面に墨痕が見ら れるが判然としない	なし	”	あり	さ-12 Ⅱ 根固め石内
” ” 5 5	Ⅱ	”	11.6 3.6 6.3	灰白色 微粒子	内外面に薄く施す 見込みと外底面は 露胎	”	”	なし	え-10 Ⅰ
” ” 6 6	Ⅱ	”	12.1 3.4 6.7	”	内外面に薄く施す 施す。 外底面は露胎。	”	”	”	う-9 Ⅰ
” ” 7 7	Ⅱ	b2	12.8 3.8 6.8	”	内外面にやや厚く 施す。 外底面露胎	見込みに印花 文	淡 緑 色	あり	す-7 Ⅴ
” ” 8 8	Ⅱ	”	14.8 4.2 8.8	”	”	不明	”	”	す-9 Ⅲa
” ” 9 9	Ⅱ	”	11.8 3.5 5.9	灰色 粗粒子	内外面に薄く施す 施す。 外底面は露胎。かな り加熱を受け釉薬に 気泡が見られる	なし	淡 灰 緑 色	不明	す-8 Ⅳ

## (Ⅲ)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第34図 10 図版29の 10	Ⅱ	b2	12.0 3.7 6.4	灰色 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面露胎	見込みに印花 文	淡 緑 色	なし	え-7 Ⅲa
第35図 1 図版30の 1	Ⅲ		11.4 2.8 5.9	〃	内外面に薄く施す 外底面は露胎	内面口縁部に 唐草文 見込みに印花 文	濃 緑 色	あり	し・す-6 Ⅱ
〃 2 〃 2	Ⅳ		11.9 — —	灰色 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。	篋彫りの区画 文 篋彫りの蓮弁 文	淡 緑 色	〃	え-8 基壇内Ⅴ 炭集中部
〃 3 〃 3	Ⅳ		12.2 — —	灰白色 微粒子	内外面に薄く施す	篋彫りの蓮弁 文	淡 緑 色	〃	う-3 Ⅴ
〃 4 〃 4	Ⅴ		12.4 3.4 7.2	灰白色 粗粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面は露胎	見込みに印花 文	〃	〃	う-10 Ⅱ
〃 5 〃 5	Ⅴ		13.8 3.8 8.2	灰白色 微粒子	内外面にやや厚く 施す。	なし	濃 緑 色	なし	し-11 Ⅲb
〃 6 〃 6	Ⅵ	a	9.4 3.3 5.4	〃	〃 蛇の目釉薬剥ぎ?	蓮弁文	淡 灰 緑 色	〃	く-4 Ⅴ く-5 Ⅲa き-6 Ⅲa
〃 7 〃 7	Ⅵ	〃	10.8 3.4 6.1	〃	内外面に薄く施す 外底面は露胎。	内面に幅広の 略蓮弁文	淡 灰 緑 色	〃	え-7 Ⅱ き-7・13 Ⅰ・Ⅱ
〃 8 〃 8	Ⅵ	b	7.5 — —	〃	内外面にやや厚く 施す。	蓮弁文 沈線による 蓮弁文	淡 緑 色	〃	く-17 Ⅴ 竪穴状遺構
〃 9 〃 9	Ⅵ	〃	7.0 2.2 4.0	〃	内外面にやや厚く 施す。 外底面は露胎	いわゆる菊花 Ⅲ	〃	〃	し-11 Ⅱ

## (盤)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第36図 1 図版31の 1	Ⅰ	a	23.2 — —	灰白色で 微粒子	内外面に厚く 施す。	幅広の篋描 文	緑 色	なし	し-8 Ⅲb
〃 2 〃 2	Ⅰ	〃	23.4 — —	灰白色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す。	〃	濃 緑 色	あり	こ・さ-11 Ⅰ
〃 3 〃 3	Ⅰ	〃	22.9 5.8 8.3	〃	〃 高台内側脇まで 施釉	〃 見込みに印花 文	淡 黄 緑 色	〃	さ-10 Ⅳ さ-11・12 Ⅴ

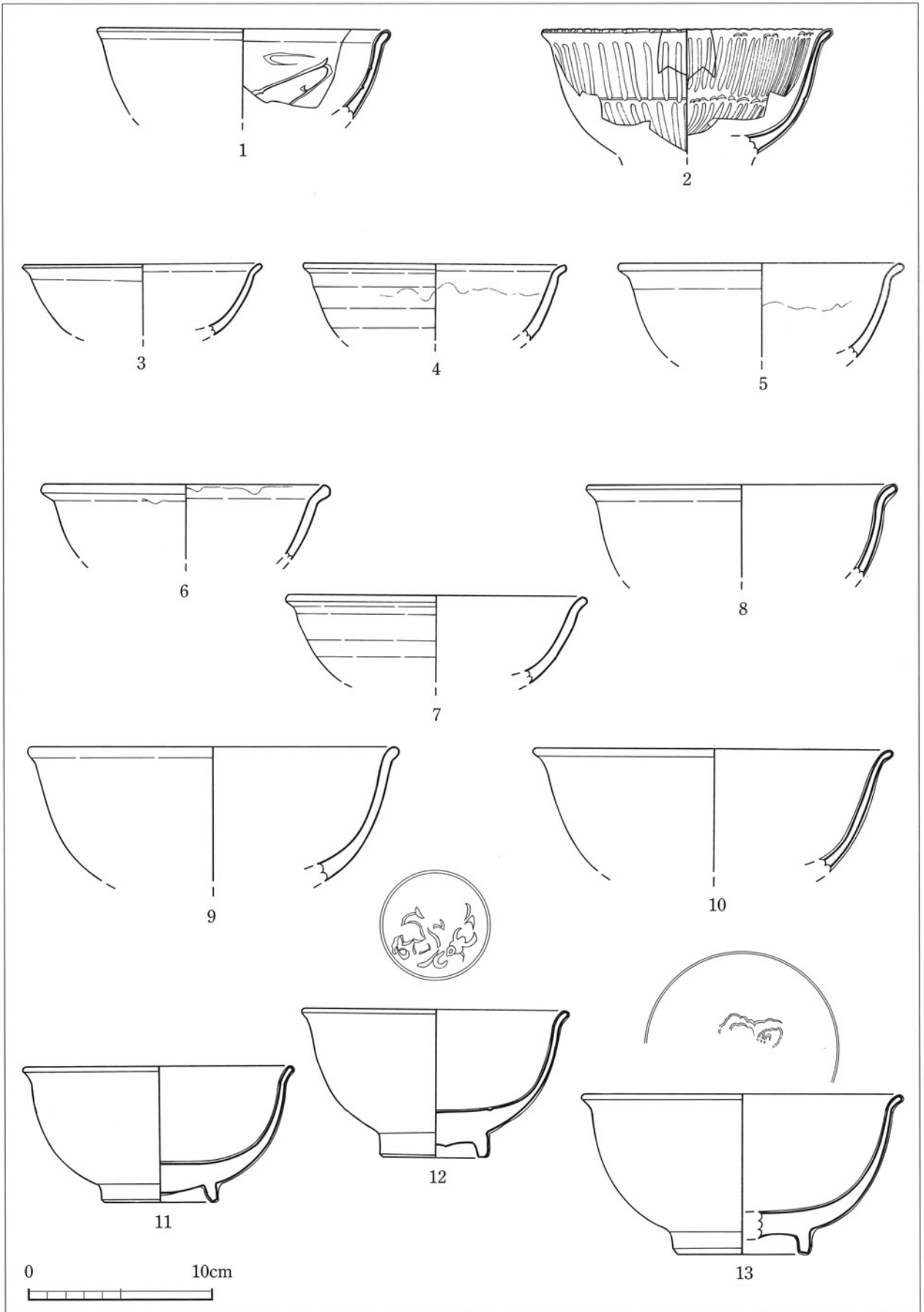
(盤)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点	
第36図 図版31の	4 4	I	b	24.1 — —	灰白色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す。 高台内側脇まで 施釉	8本一組の櫛 描文	淡 黄 緑 色	あり	Y-0 I
” ”	5 5	I	”	25.0 — —	”	”	4本一組の櫛 描き文	緑 色	なし	く-4 V
” ”	6 6	II	a	23.1 — —	”	内外面にやや 厚く施す。	幅広の篋描 文	”	あり	さ-10 V
” ”	7 7	II	”	25.0 6.0 8.6	”	”	稜花皿 ラマ式蓮弁文 と 幅広の篋描文	”	”	さ-12 III a
第37図 図版32の	1 1	V	a	23.4 — —	灰白色 粗粒子	”	幅広篋描文	”	”	さ-8 V
” ”	2 2	V	c	26.6 — —	白灰色 微粒子	内外面に薄く施す	内面に沈線文 見込みに圏線	淡 緑 色	あり	こ-5 V
” ”	3 3	V	b	22.2 — —	”	”	櫛描き文	”	なし	う-3 II
” ”	4 4	V	”	23.7 — —	淡白色 粗粒子	”	”	淡い 緑 色	あり	え-5 V
” ”	5 5	IV	”	23.4 4.9 10.2	黄白色 粗粒子	内外面に薄く施す 高台内側脇まで 施釉	稜花皿 ラマ式蓮弁文 と幅広篋描 文。見込みに 印花文。	淡 黄 緑 色	”	き-5 V く-5・6 III・V さ-8 IV す-7 V
” ”	6 6	IV	”	25.8 6.4 9.2	灰白色 粗粒子	内外面に薄く施す 畳付けは露胎。	鑄蓮弁文 圏線 魚文	淡い 緑 色	”	さ-11 IV
” ”	7 7	底 部	”	— — 11.0	灰白色で 微粒子	内外面にやや厚く 施す。 外底面は蛇ノ目状釉 剥ぎ、目痕が残る	篋描き文 七宝繫ぎ文と 唐草文	”	なし	こ-12 V 貝溜まり

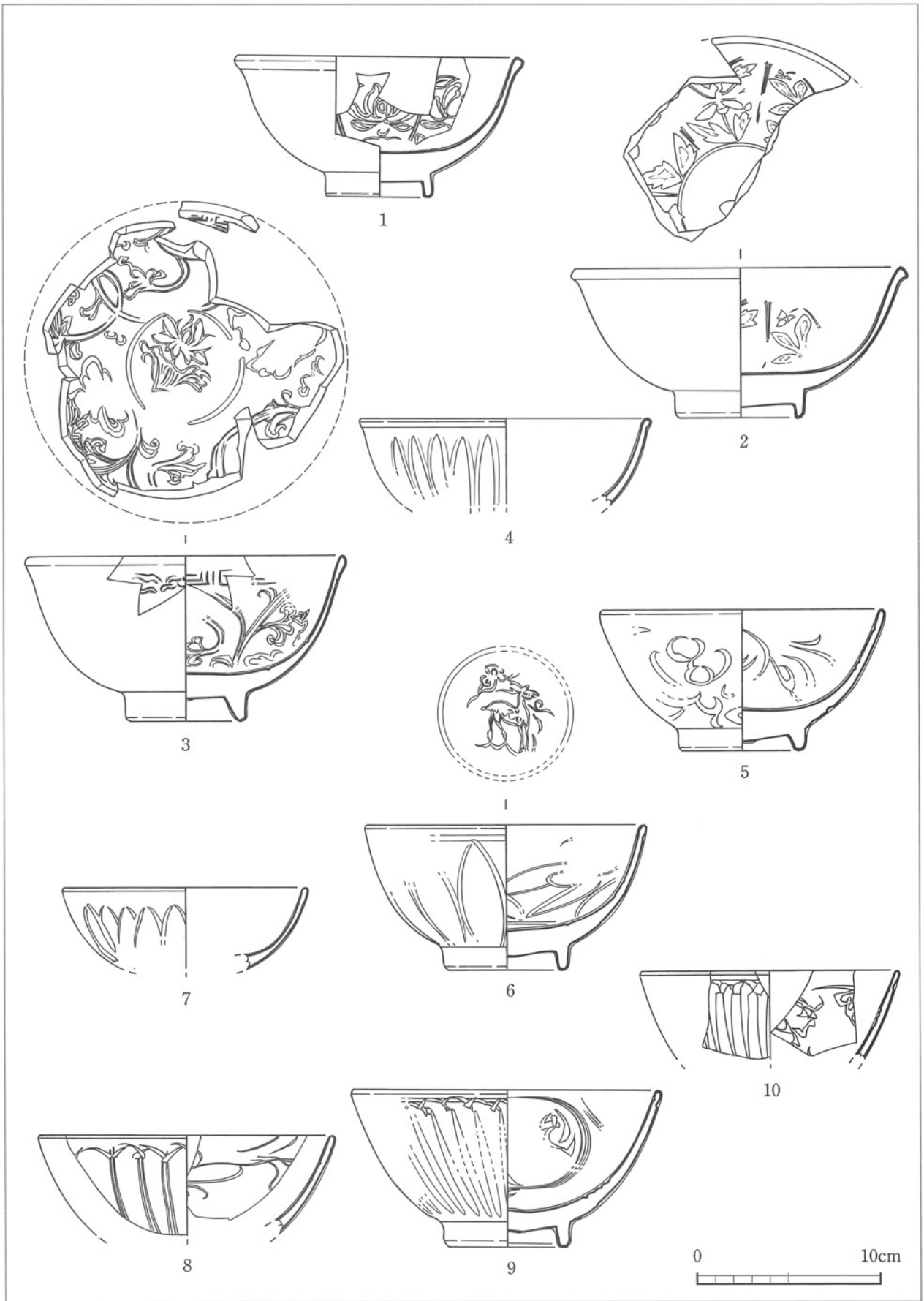
## (杯・播鉢・香炉・瓶・袋物)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第38図 図版33の	1 1	外 反 杯	11.8 — —	灰白色 粗粒子	やや厚手の釉 薬を施す。	籠彫り蓮弁 文 刻花文	濃 緑 色	細かい 貫入が 見られる	え-11 Ⅲa
” ”	2 2	鼈 甲 口	15.6 — —	”	”	沈線 籠彫り蓮弁文	淡 緑 色	”	し-7 I す-8 II す-7 Ⅲb し-12 IV
” ”	3 3	”	12.3 — —	”	”	籠彫り蓮弁文	”	”	さ-11 IV
” ”	4 4	碁 笥 底	— — 3.0	黄白色 粗粒子	やや薄手の 釉薬を施す。 脇から外底 面は露胎。	不明。	淡 黄 緑 色	”	い-3 I
” ”	5 5	”	— — 4.0	白色 粗粒子	” 畳付けより 外底面は露 胎。砂粒が付着	”	”	なし	く-5 V
” ”	6 6	播 鉢	16.0 — —	淡黄白色 粗粒子	縁部内面より 外面にかけて 施釉。	なし	淡 緑 色	細かい 貫入が 見られる	い-4・え-2 う-3・き-6 V
” ”	7 7	香 炉	4.9 4.4 3.2	灰白色 微粒子	”	なし	”	”	く-8Ⅲ さ-11 V貝溜まり
” ”	8 8	”	6.8 — —	”	”	”	淡 緑 色	なし	え-10 II お-8 V か-5 V
” ”	9 9	瓶	5.5 — —	”	内外面にやや 厚く施釉。	沈線を八等 分に区分。 その間に梵 字文?を施す	”	不明	さ-11・12 V し-12 Ⅲa
” ”	10 10	”	— — —	灰白色 粗粒子	”	頸部と胴部 の境目に 沈線を2条 巡らす。	”	なし	え-5 IV
” ”	11 11	”	— — —	”	内外面にやや 薄く施釉。	肩部に沈線 と草花文を 描く。	”	細かい 貫入が 見られる	不明
” ”	12 12	袋 物	— — —	灰白色 微粒子	内外面にやや 厚く施釉。	胴部に蓮弁 文を施す。	”	なし	き-9 基壇内V

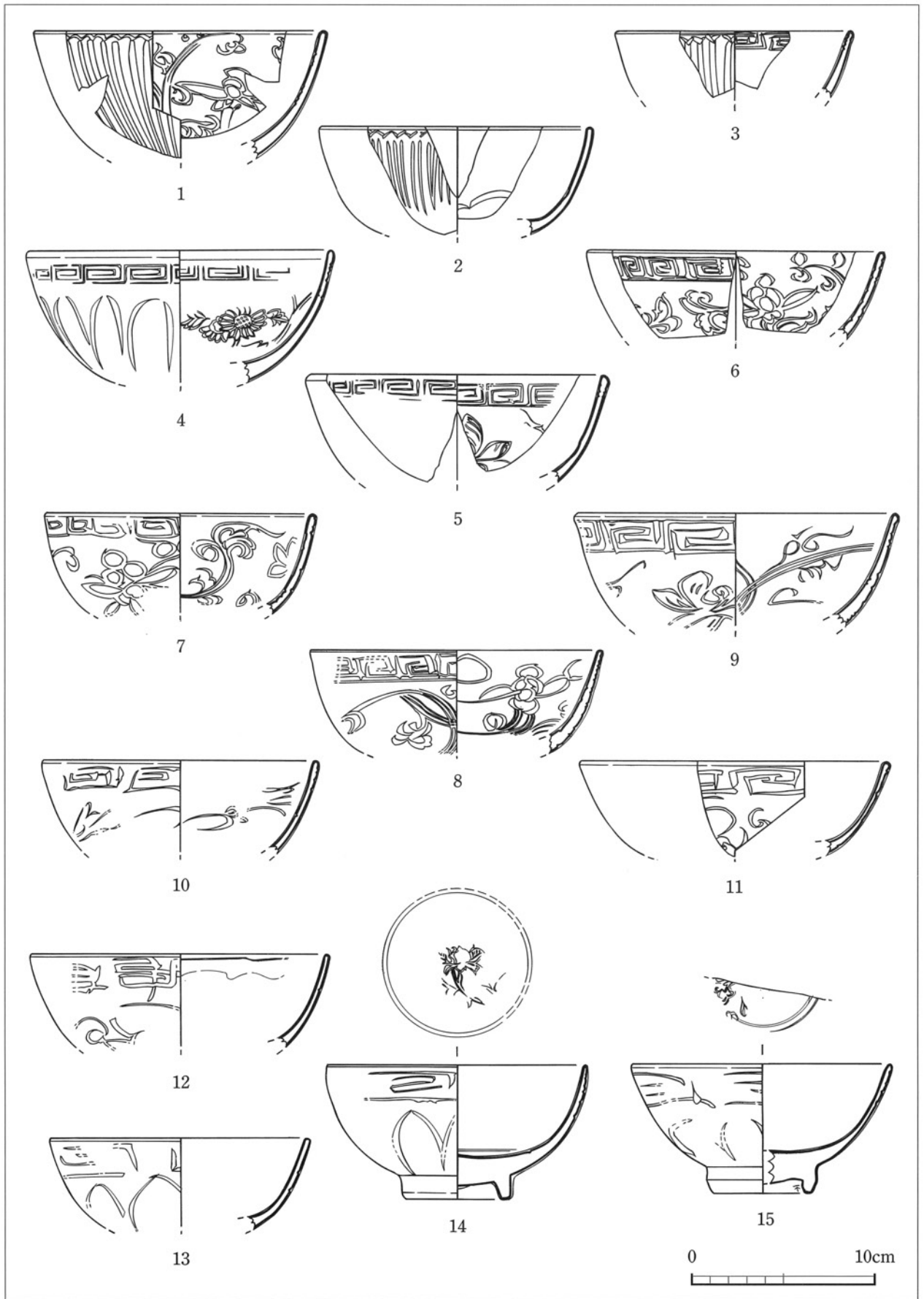




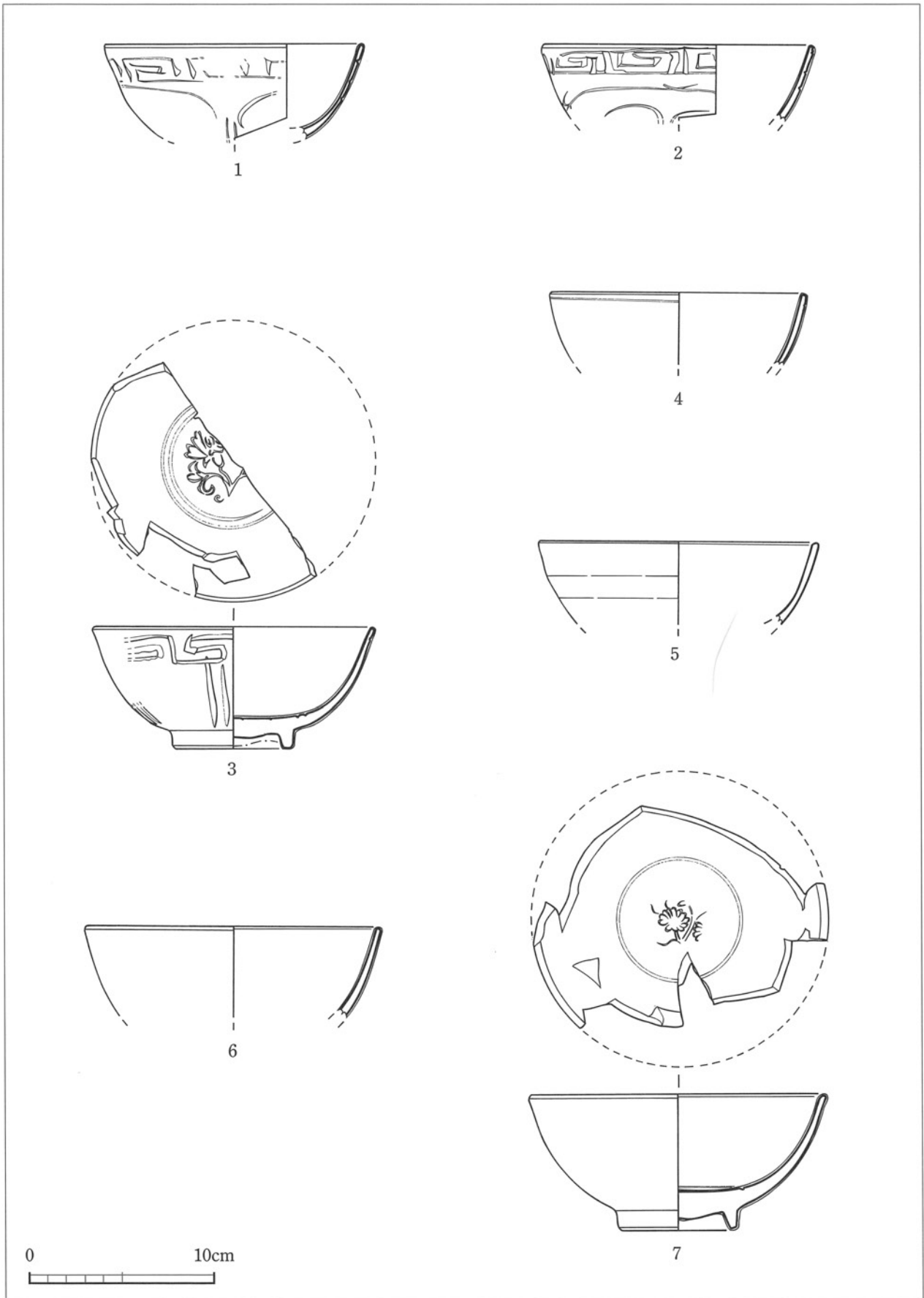
第29图 (图版24) 青磁：碗 (1~13)



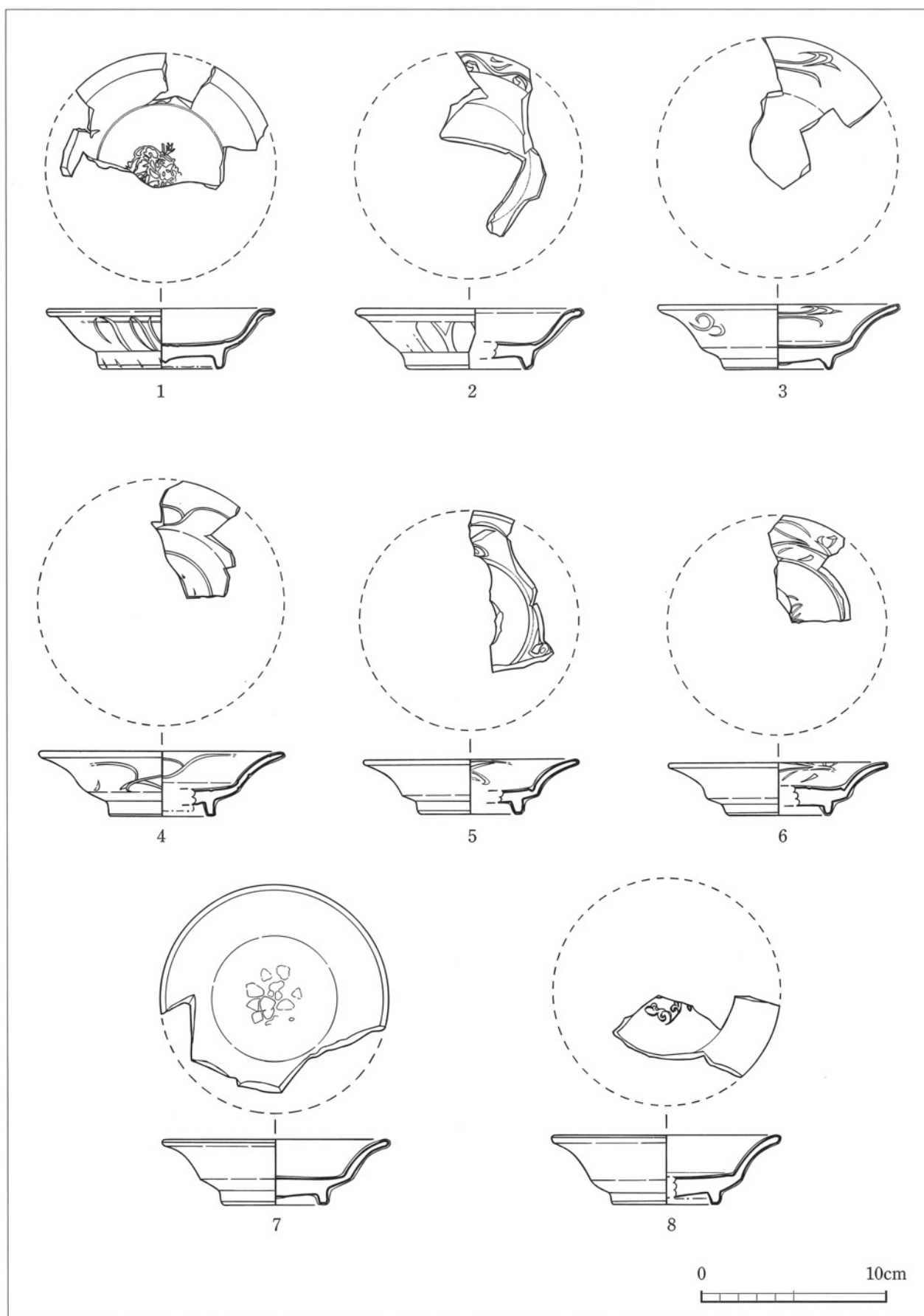
第30图 (图版25) 青磁：碗 (1~10)



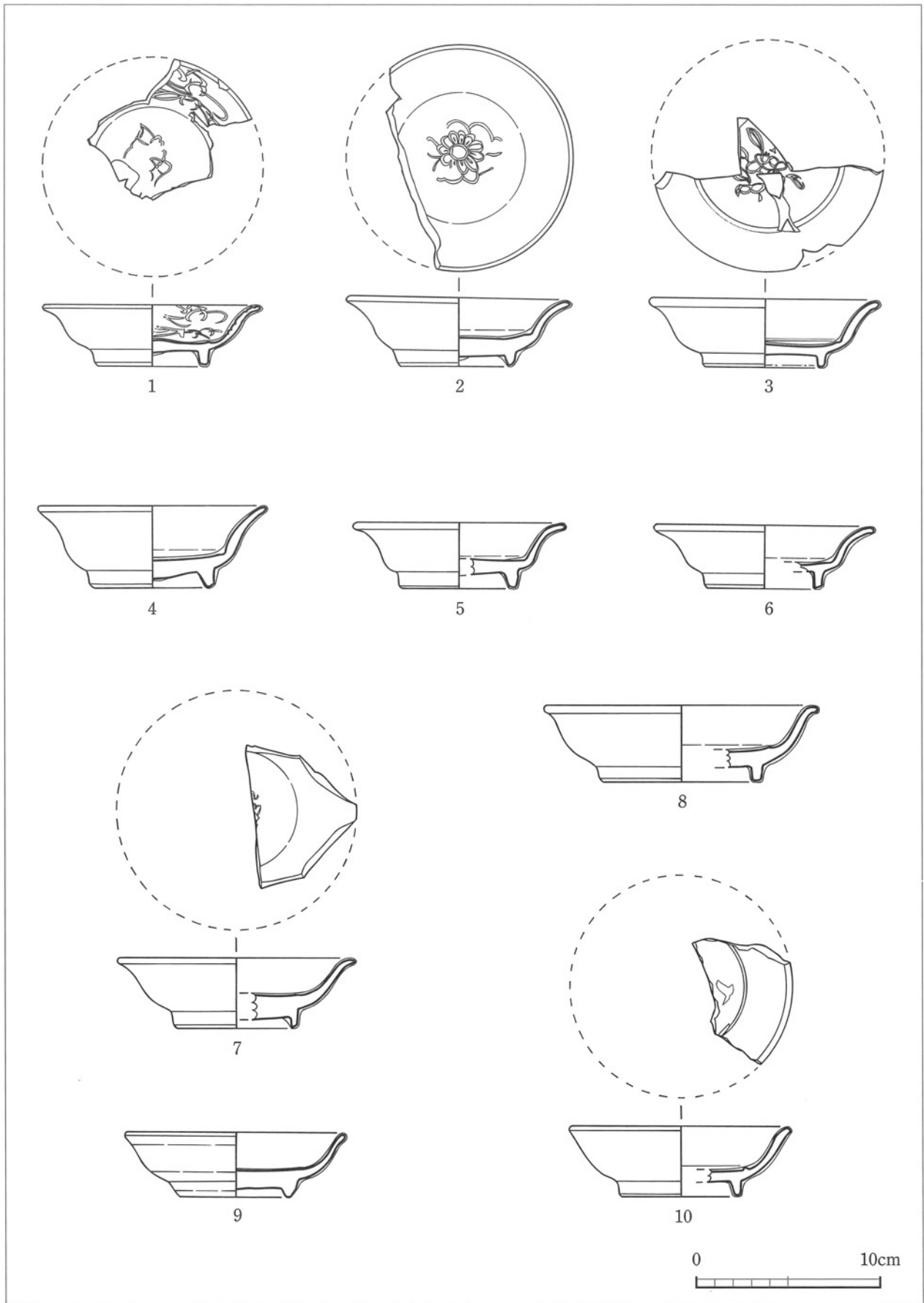
第31图 (图版26) 青磁：碗 (1~15)



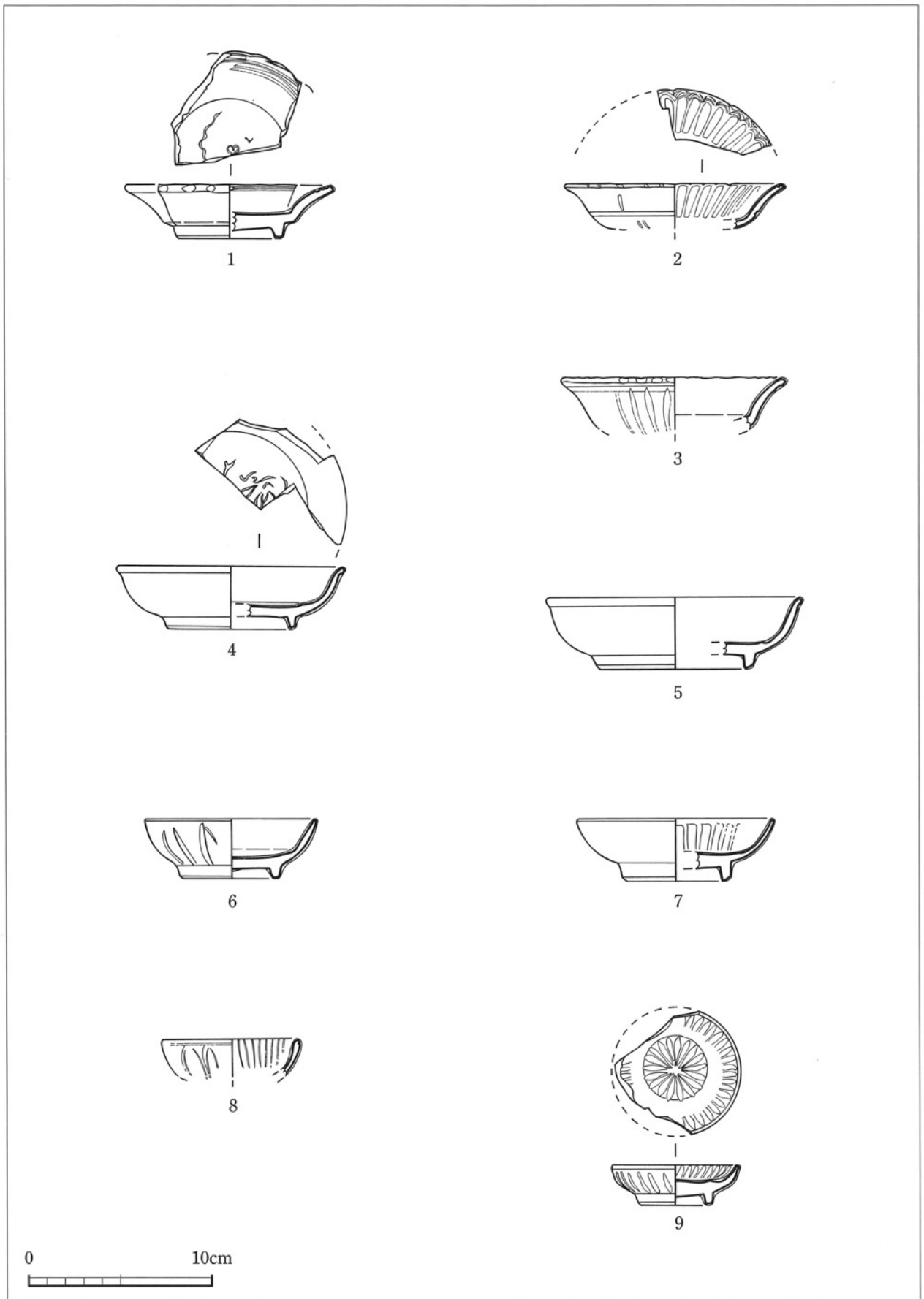
第32图 (图版27) 青磁：碗 (1~7)



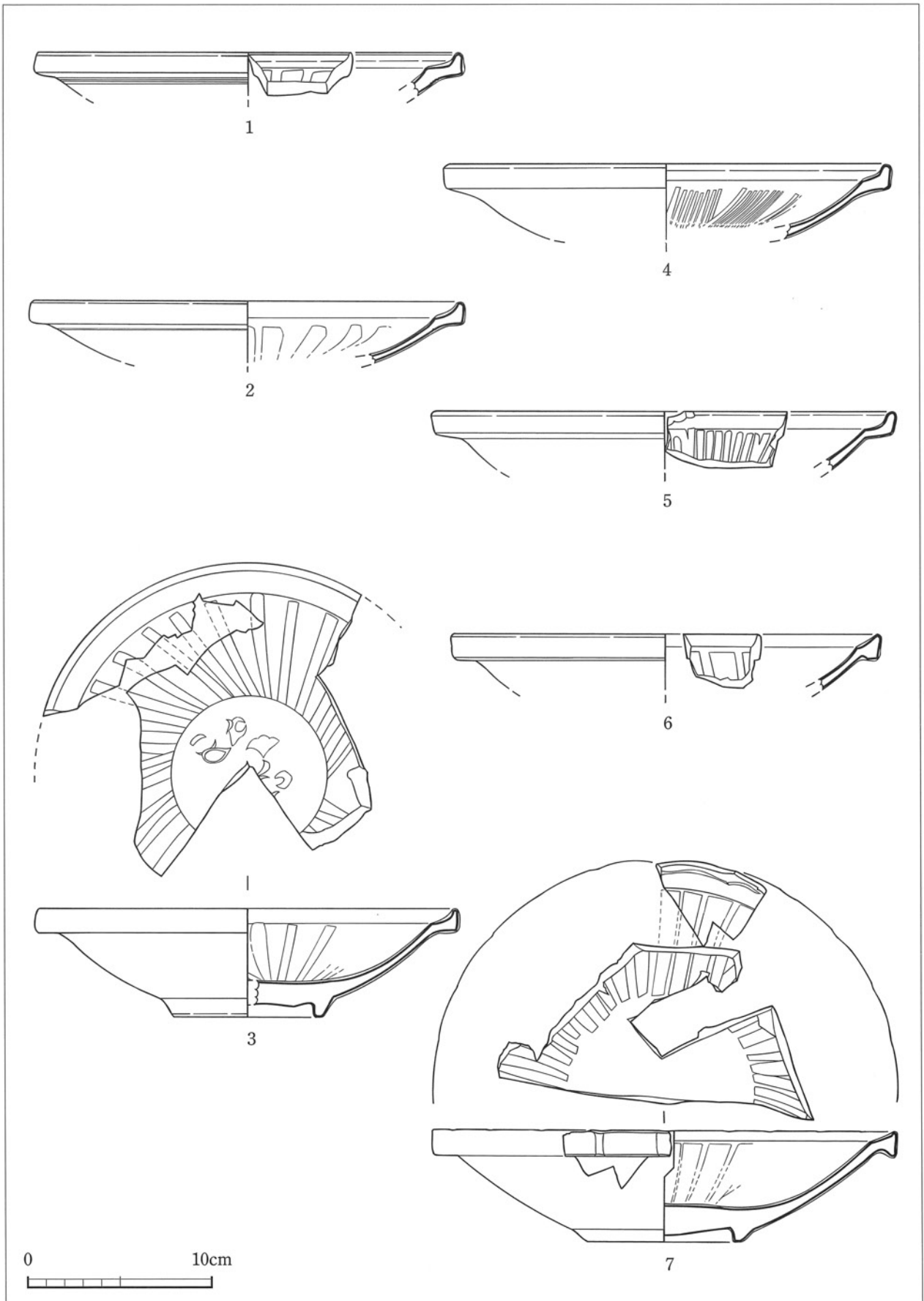
第33图 (图版28) 青磁：皿 (1~8)



第34图 (图版29) 青磁：皿 (1~10)

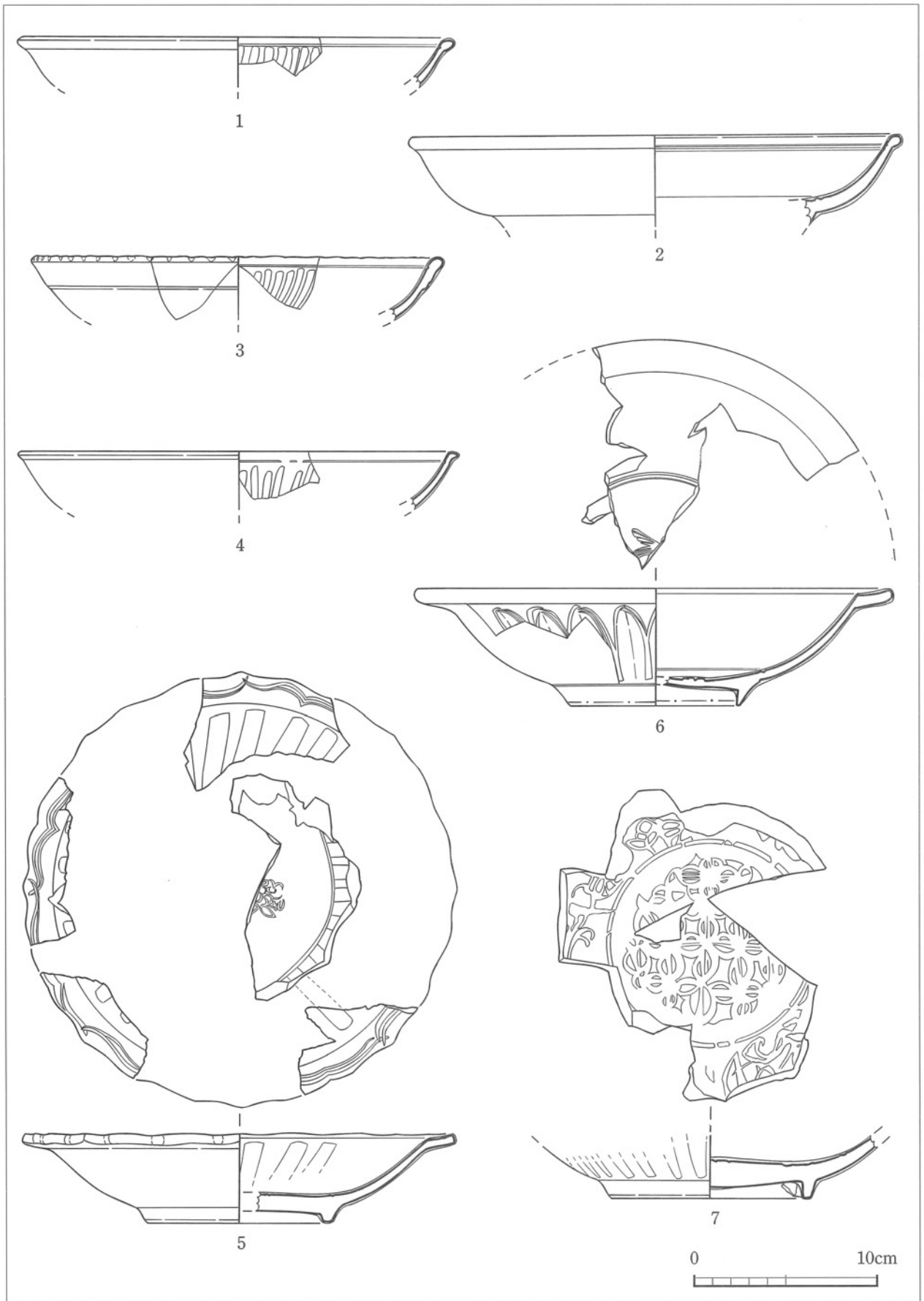


第35図 (図版30) 青磁：皿 (1~9)

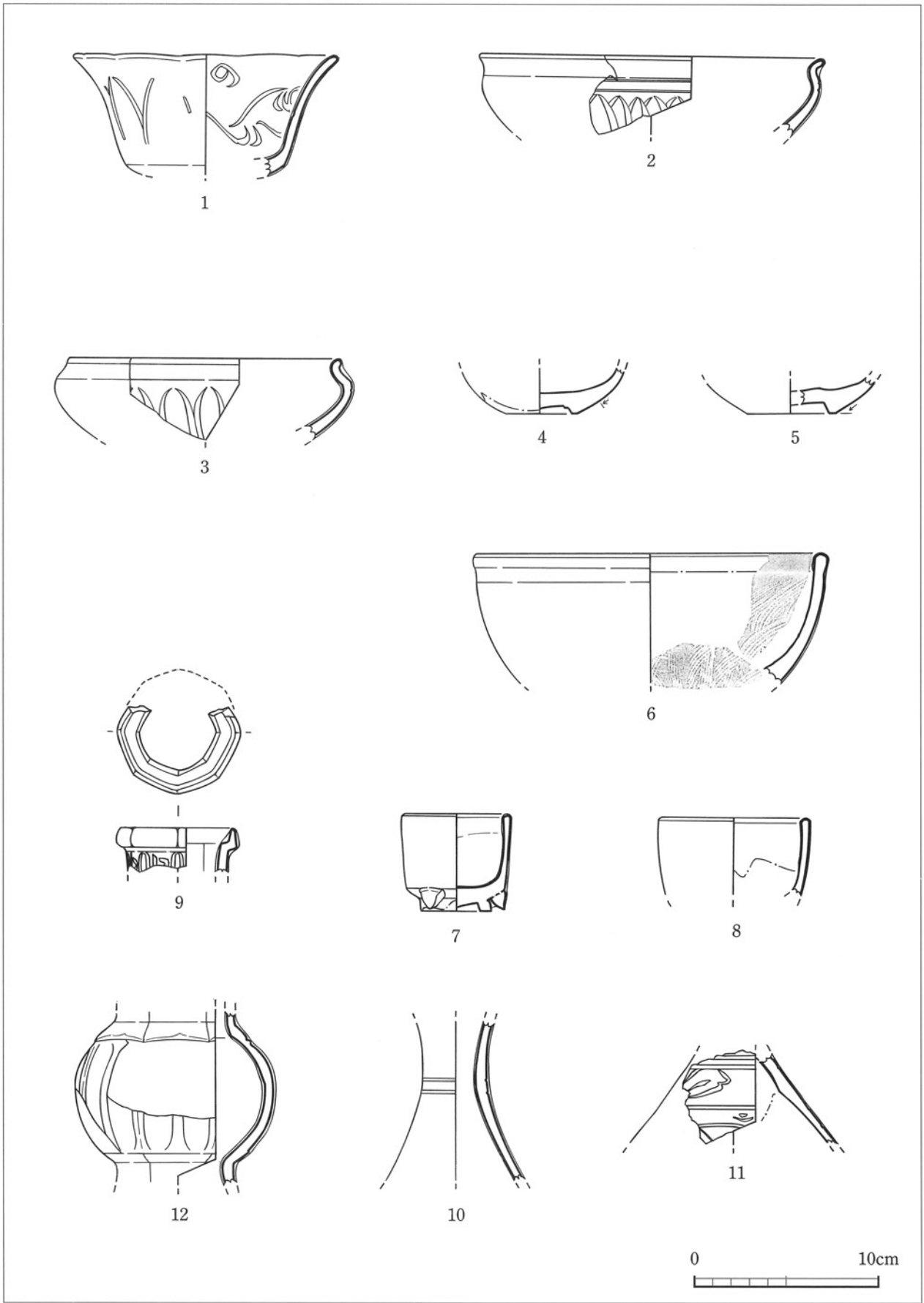


第36図 (図版31) 青磁：盤 (1~7)

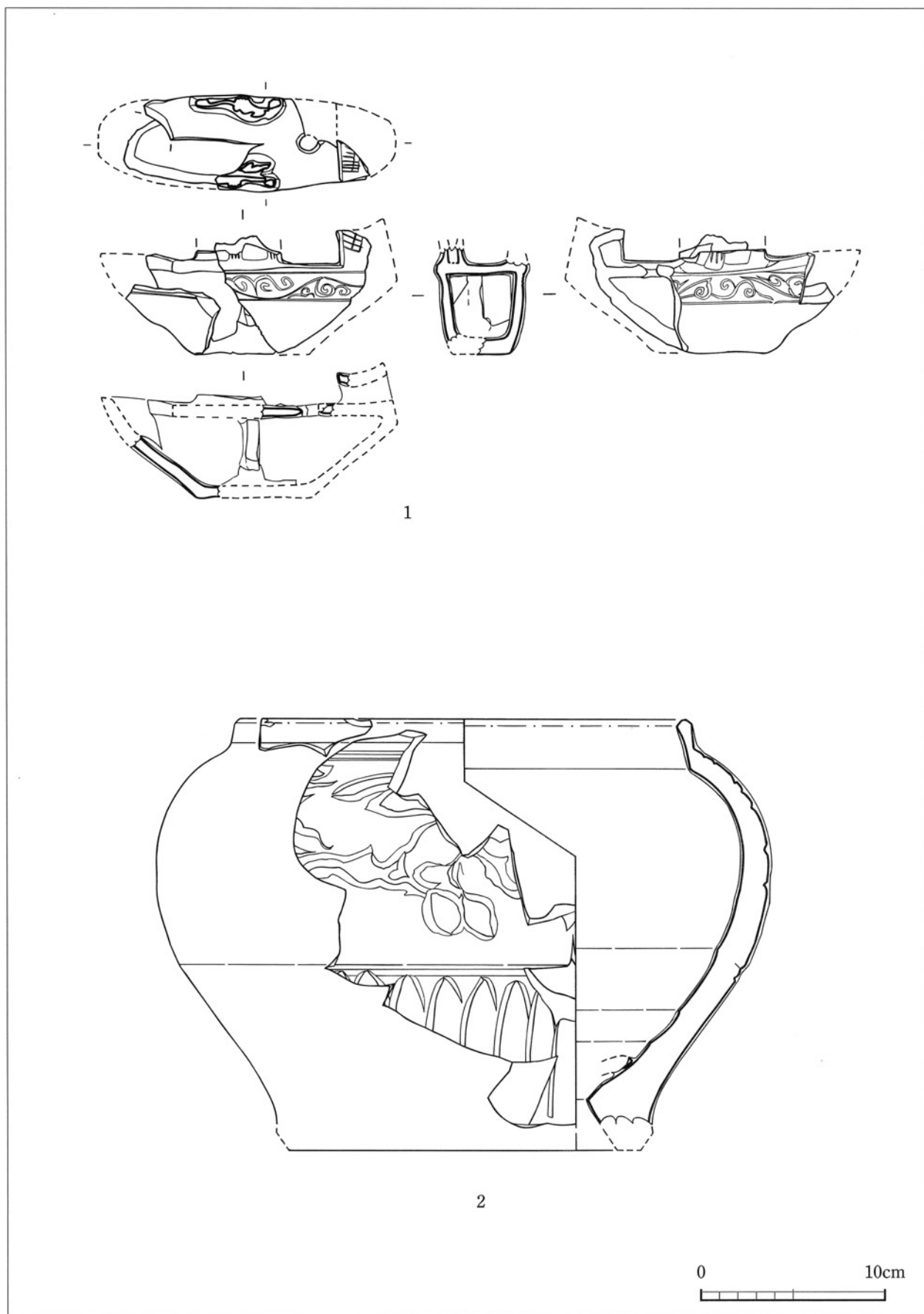




第37图 (图版32) 青磁：盤 (1~7)



第38図 (図版33) 青磁：杯 (1~5) ・播鉢 (6) ・香炉 (7・8) ・瓶 (9~11) ・袋物 (12)



第39図 (図版34) 青磁：水滴 (1) ・壺 (2)

### 3. 青花

第40～43図に示したものである。碗・皿・鉢等が見られた。以下、碗より記述する。

#### 碗（第40図、第41図1～5）

- 外反碗 a：薄手の碗で、唐草文等を施すもの。  
b：厚手の碗で、草花文や寿文等を施すもの。  
c：口縁部をS字状に外反させるもの。

- 直口碗 a：外面にアラベスク文を描く腰折れの碗のもの。  
b：外面に印判手の碗である。  
c：内湾ぎみに立ち上げ抽象的文様を描くもの。

#### 小碗（第41図6～9）

- 外反碗 a：外面に唐草文等を施すもの。  
b：外面に菊花文等を描くもの。  
c：口唇部が輪花で、仙芝祝寿文を描くもの。

#### 皿（第42図1～6）

##### 内湾皿

- 小皿：碁笥底の底部から内湾しながら立ち上がるものである。外面に波濤文系と芭蕉文・圏線を描き、内面は見込みに葉文や文字文等を施す。  
大皿：小皿よりも内湾がきつく、内外面に文様を施す。

##### 外反皿

- 小皿 a：高台よりやや膨らみながら立ち上がり縁部で外反するものである。外面に花唐草文を描き、内面に圏線を巡らすもの。  
b：口縁部を受け口状に成形したものである。  
中皿：小皿 a よりも外反がきつく、内外面に文様を施す。  
大皿：口縁部を屈曲させ、縁部に文様を施すもの。

#### 盤（第42図7）

稜花の顎縁盤が1点得られている。外面には凹凸が見られないが、内面は全体に菊花状に凹面が見られる。型成形かと思われる。文様は内外面とも圏線によって上下に区画され、外面には宝相唐草文を描き、内面は七宝繫文帯と菊花唐草文を施す。見込みにも文様が見られるが破損しているため不明。

第7表 青花観察一覧(碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	貫入	出土地点
第40図 図版35の	1 1 外 反 碗	a	12.0 — —	灰白色で 微粒子	内外面にやや薄く 施す。 2次焼成の加熱を受けている。	圏線と唐草文 波濤文帯	不明	こ・さ-11 V
〃 〃	2 2 〃 〃	a	12.5 — —	〃	〃	〃 梵字文帯 内面は呉須の発色 が悪い	なし	さ-9・10 IV せ-9 III b
〃 〃	3 3 〃 〃	a	15.3 7.4 6.2	黄白色 粉粒子	〃 焼成が不良で全体に 黄褐色に発色。 畳付けと内側は露胎。	内外に雷文帯 圏線 宝相華唐草文 見込みに梅文	〃	え-8 基壇内V 炭集中部
〃 〃	4 4 〃 〃	a	— — 5.9	灰白色 粗粒子	〃 畳付けと内側は露 胎。	高台脇に波濤文? 見込みに圏線と草 花文	あり	さ-11 V す-10 III a・b
〃 〃	5 5 〃 〃	c	14.8 — —	〃	内外面にやや厚く施 釉	圏線 雲文? 「ダミ」技法	〃	さ-8 V
〃 〃	6 6 〃 〃	b	13.0 5.9 6.8	灰白色で 微粒子	〃 畳付けは露胎。	圏線と寿字文 見込みに抽象的な 文様。 外底面に「和美」の 銘あり	なし	そ-10 II し-15 II
〃 〃	7 7 〃 〃	〃	— — 7.3	〃	〃	〃 外底面に「○美」の 銘あり	〃	せ-11・13 II
第41図 図版36の	1 1 直 口 碗	c	13.0 — —	灰白色で 微粒子	内外面にやや薄く 施す。	圏線 豹皮状文	なし	す-8 IV せ-7 V
〃 〃	2 2 〃 〃	〃	12.4 5.5 5.6	〃	〃 畳付けは露胎	〃 梵字文と崩れた蓮弁文 発色が悪い	〃	そ・た・ち —8 I
〃 〃	3 3 〃 〃	a	12.4 — —	黄白色 粗粒子	〃 全体的にやや黄褐 色に発色。	外面に渦巻き文帯と圏線 アラベスク	あり	く-16 V 縦穴状遺構
〃 〃	4 4 〃 〃	b	14.4 — —	灰白色 微粒子	〃	花文の印判手	なし	さ-15 I
〃 〃	5 5 〃 〃	〃	— — 9.1	〃	〃 見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付けとその内外は 露胎。	〃	〃	け-8 I
〃 〃	6 6 外 反 碗	a	8.5 — —	灰白色 粗粒子	〃	圏線 宝相華唐草文 口唇部内面は帯状に圏線 見込みに圏線	〃	さ-10 V
〃 〃	7 7 〃 〃	b	9.8 — —	淡白色 微粒子	〃	圏線と菊花文	なし	た-8 I

## (碗)

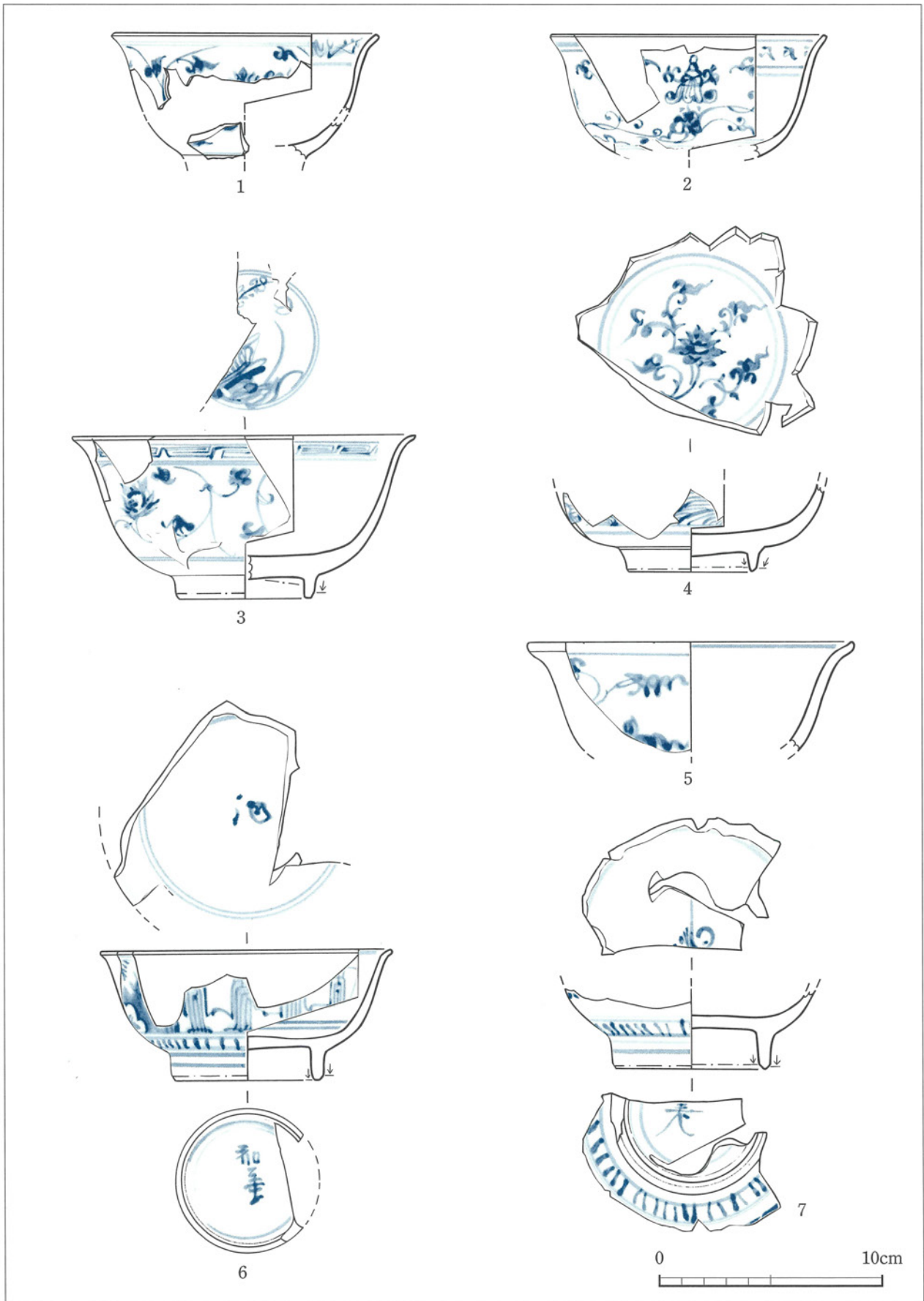
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高 台 高 径	素 地	施 釉	文 様	貫 入	出土地点
第41図 図版36の	8 8 外 反 碗	c	6.9 3.8 2.6	淡白色 微粒子	内外面に薄く 施す。	内外面に唐草文	〃	い-11 IV
〃 〃	9 9 底 部		— — 3.4	〃	〃 畳付けは露胎。	〃 外底面に銘あり	〃	せ-10 II

## (皿・杯)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高 台 高 径	素 地	施 釉	文 様	貫 入	出土地点
第42図 図版37の	1 1 内 湾 皿	小 皿	9.6 2.5 3.0	淡灰白色で 微粒子	薄い透明釉 施す。碁筭 底の畳付け は露胎。	波濤文 芭蕉文 圏線 菊花文	なし	せ-7 V
〃 〃	2 2 外 反 皿	小 皿 a	12.5 3.3 5.2	〃	〃 碁筭底の畳 付け露胎	渦巻文 圏線 十字花文		い-3 IV
〃 〃	3 3 底 部		— — 8.0	淡灰白色で 微粒子	〃 畳付けは露胎 砂粒が付着。	〃	なし	し-6 III a す-6・7 III b
〃 〃	4 4 〃		— — 7.6	灰白色で 微粒子	〃	呉須の発色が鈍い 宝相唐草文 圏線 玉取り獅子文?	〃	く-17 V 土留め遺構内
〃 〃	5 5 内 湾 皿	大 皿	18.0 2.6 9.4	白色で 微粒子	失透釉を薄く 施す。 碁筭底状の 畳付け露胎	渦巻き状の唐草 文を内外に施す。	〃	さ-11 V
〃 〃	6 6 外 反 皿	大 皿	16.7 — —	黄白色で 粗粒子	やや厚手の 透明釉を施 釉。	呉須の発色が鈍い 圏線 略四宝禪文	あり	く-14 V 土留め遺構内
〃 〃	7 7 盤		25.2 4.6 15.8	灰白色で 微粒子	薄手の透明釉 畳付けと その内側は 露胎。	圏線 宝相唐草文 七宝繫文帯 菊花唐草文	なし	し-9 V 貝溜まり さ-11 V
第43図 図版38の	1 1 杯		3.2 2.0 1.9	淡白色で 微粒子	〃 型成形。	豹皮文 草花文 圏線	〃	し-15 II
〃 〃	2 2 杯		— — 2.2	〃	碁筭底部は露胎。 見込みは蛇ノ目 釉ハギ。	腰部に圏線	〃	さ-20 I
〃 〃	3 3 高 足 杯		— — —	灰白色で 微粒子	内外面に薄く 施釉。	圏線 全体の構図は不明。	〃	く-17 III a
〃 〃	4 4 〃		— — —	黄灰白色で 粗粒子	〃 脚部の内面は 露胎。	圏線 見込みに寿字の 略字?	〃	た-8 II

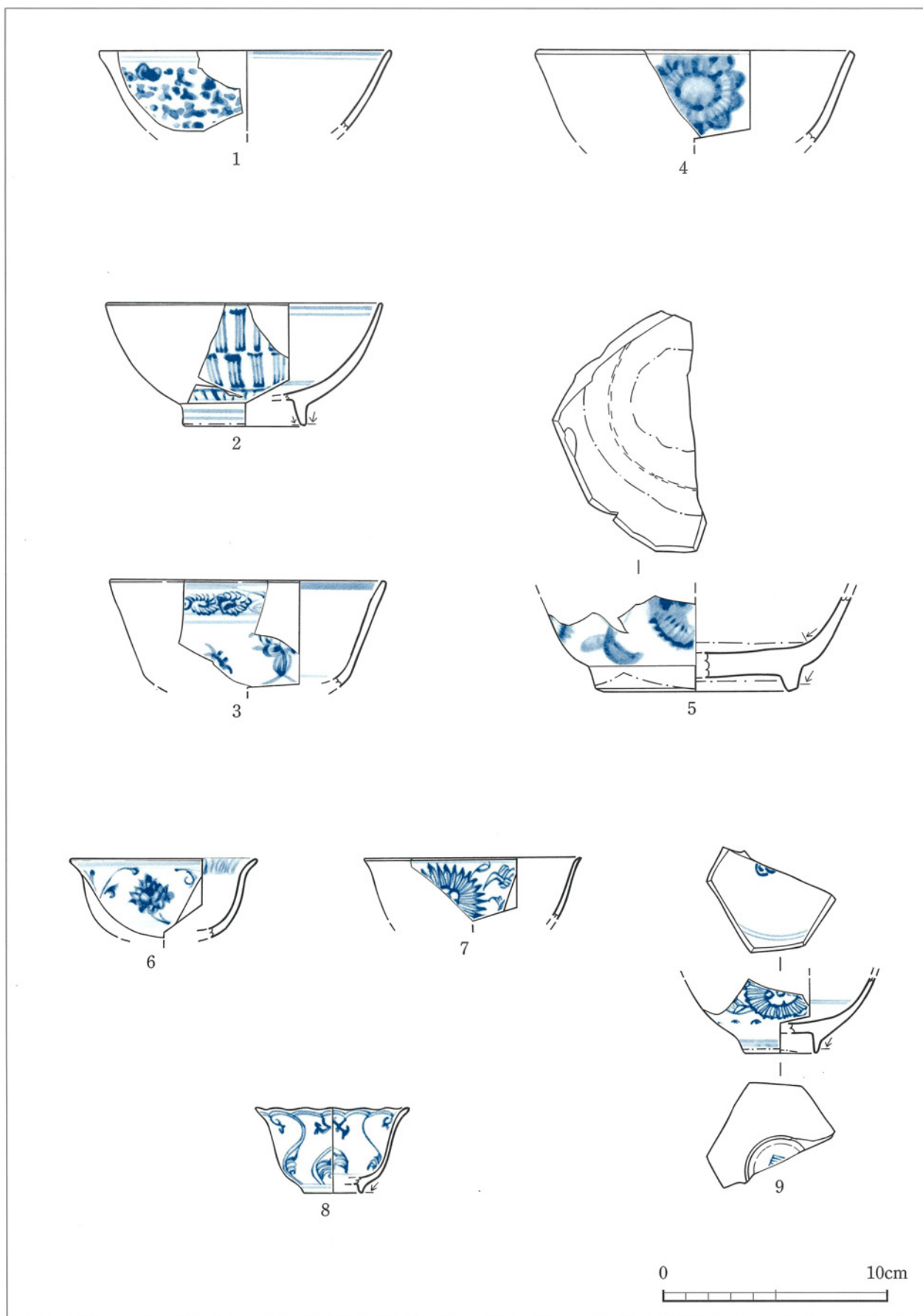
## (高足杯・水注・瓶)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 台 径	素 地	施 釉	文 様	貫 入	出土地点
第43図 図版38の	5 5 高足杯		— — 4.0	灰白色で 微粒子	底面から脚部 内面は露胎	〃 発色が鈍い	なし	く-16 V
〃 〃	6 6 水注			〃	透明釉を薄く 施釉。	圏線 雲文?	〃	し-9 IV
〃 〃	7 7 〃			〃	〃	卍文と抽象的な文様。	〃	さ-12 V貝溜まり
〃 〃	8 8 〃			〃	〃	取手に沿って縦位 に施す。 抽象的な文様。	〃	さ-10 V貝溜まり
〃 〃	9 9 〃			〃	〃	〃	〃	す-14 II
〃 〃	10 10 〃			〃	〃	取手に沿って縦位 に施す。	〃	し-10 IV
〃 〃	11 11 〃			〃	〃		〃	え-7 I
〃 〃	12 12 小瓶		2.0 — —	〃	〃	圏線を2条	〃	不明
〃 〃	13 13 瓶		7.0 — —	灰白色で 微粒子	〃	圏線 芭蕉文	〃	〃
〃 〃	14 14 〃		— — 9.0	〃	〃 畳付けは露胎。 2次焼成品である。	宝相唐草文 渦巻文 圏線	〃	こ-12 IV せ-10 II
〃 〃	15 15 〃		— — —	〃	〃	草花文 圏線 連弁文	〃	く-8 IIIa
〃 〃	16 16 〃		— — 7.9	〃	〃 畳付けは露胎。 砂粒が付着。	圏線 連弁文 上記15より具須が滲む。	あり	こ-12 IV く-8 IIIa
〃 〃	17 17 〃		— — 6.4	〃	〃	〃	なし	こ-10 I

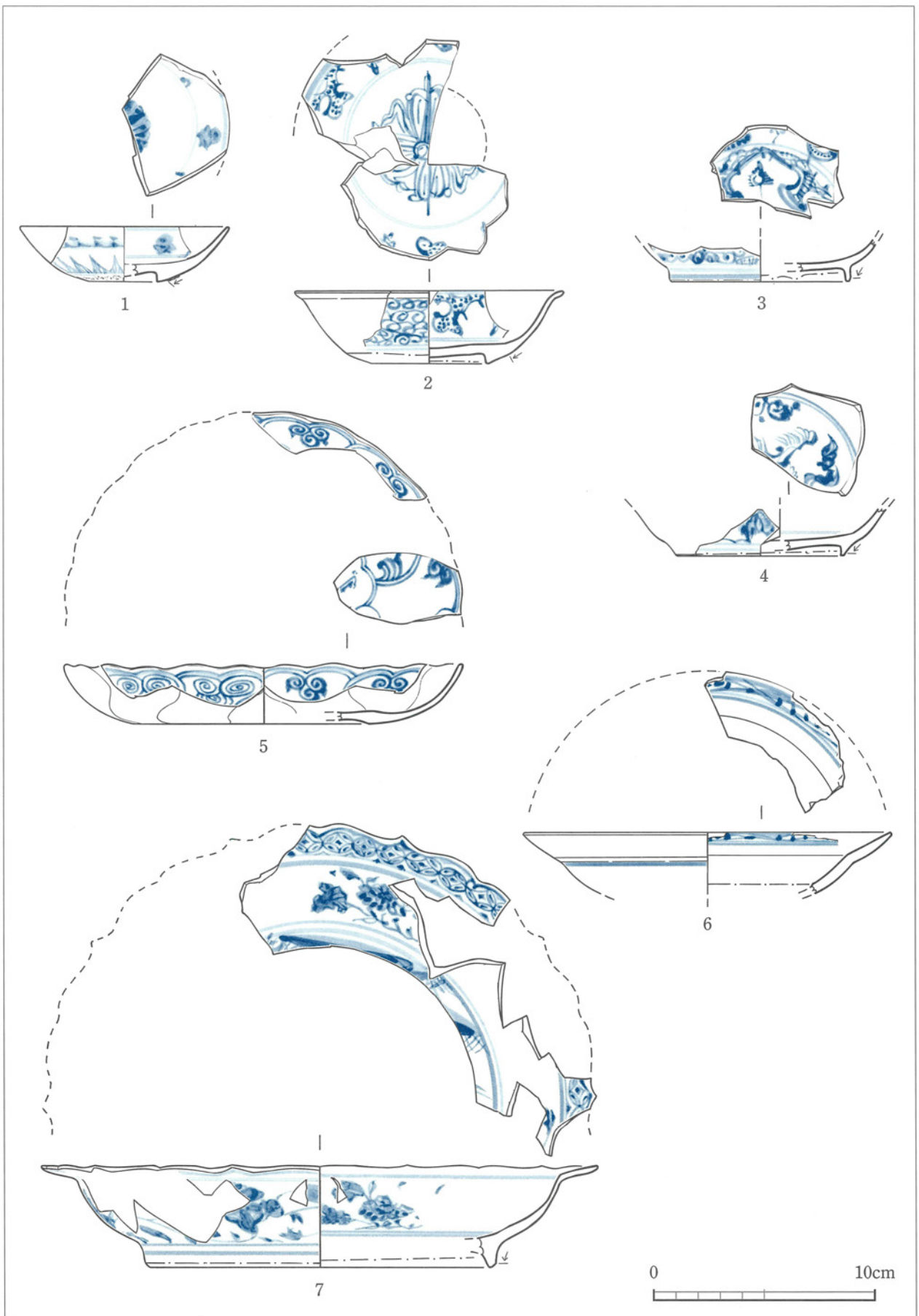


第40图 (图版35) 青花：碗 (1~7)

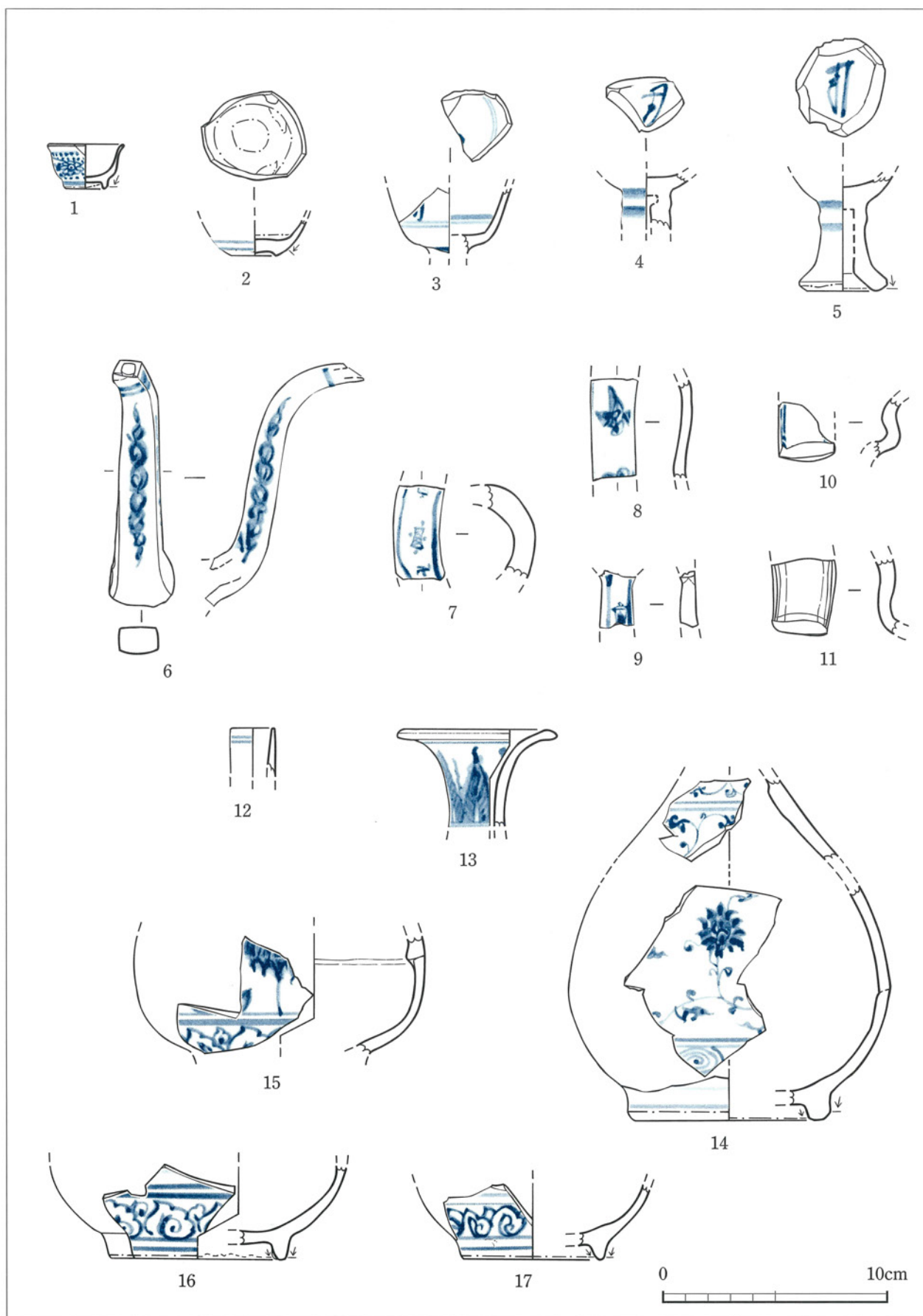




第41图 (图版36) 青花：碗 (1~9)



第42図 (図版37) 青花：皿 (1~6) ・盤 (7)



第43图 (图版38) 青花：杯 (1·2) ·高足杯 (3~5) ·水注 (6~11) ·瓶 (12~17)

#### 4. 瑠璃釉 (第44図1～3)

第44図1～3に示した。得られた器種は小碗・瓶の2器種であった。外面は瑠璃釉で内面に透明釉を掛け分ける特徴を持つ。

#### 5. 鉄釉 (第44図4～6)

第44図4～6に示した。器種は小碗のみが確認された。鉄釉を外面に内面には透明釉を掛け分ける特徴のものである。畳付けは露胎である。文様は口唇部内面と見込み及び外底面に見られる。

#### 6. 色絵 (第44図7～9)

第44図7～9に示した。7は薄手の碗で、逆ハの字状に開く器形を呈するものである。8・9は高台が高い外反碗で、文様は赤色を基調に緑色・黄色等用いて波濤文・草花文・蓮弁文等を描く。

#### 7. 三彩 (第44図10)

第8表に示したとおり破片で90点の出土であった。街路地区で57点、公園地区で33点である。得られた器種は壺・瓶・袋物・水注・鉢・皿等の6種類が確認された。その中で第44図10に示したものは底部付近の資料で桃褐色の素地に外面に白化粧土を施し、全体に緑釉を基調に施釉し、底面に黄釉が見られる。内面は露胎である。外面には羽・鱗をイメージしたと思われる格子状の文様を描く。型成形品で長軸に沿って合わせ口が観察される。すー9第Ⅲa層より出土。

#### 8. 翡翠釉 (第44図11)

第44図11に示したもので、菊花の小皿である。淡桃褐色の素地に白化粧土を施し、高台内と畳付け以外に青緑釉を施す。高台内は濃紫の釉薬を塗布されるが、畳付けは白化粧土のみである。素地には僅かに黒色の粒子が散見できる。底径は7cmを測る。さー11第Ⅳ層より出土。

第8表 三彩出土一覧

層序	種類	地区	壺			瓶			袋物	水注			鉢			皿			器種不明			合計
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	蓋	取っ手		
I層	P		1	3		1			1	4								1	1	12		
	G		1					7		2								1	1	12		
II層	P								4	1								1		7		
	G		2			1		12		3										18		
Ⅲa層	P			1					4										1	7		
	G							3	8	2			1				2			16		
IV層	P				1					1										2		
	G							2	1											3		
V層	P																			0		
	G								1	1			1		1					4		
V層 竪穴状遺構	P			1						2										3		
	G																			0		
溝状遺構	P					1														1		
	G							1												1		
土壙No4 集石	P											1								1		
	G							1												1		
瓦溜まり ウラゴメ	G							1												1		
	G							1												1		
合計			4	4	1	3	1	1	28	1	29	5	1	1	1	1	5	1	2	1	90	

※ P=公園地区、G=街路地区

第9表 瑠璃釉（小碗・瓶）観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	素地	施釉・器形	文様	出土地点
第44図 図版39の	1 1	小碗	8.4 3.6 3.4	白色で 微粒子	外面に瑠璃 内面は白釉 型成形。	しー11 II うー10 基壇内V
” ”	2 2	瓶	6.6 — —	” 粗粒子	内外面に瑠璃	けー5 V
” ”	3 3	”	7.0 — —	白色で 微粒子	外面に瑠璃 内面は白釉	おー16 III a せー7 II

第10表 鉄釉（小碗）観察一覧

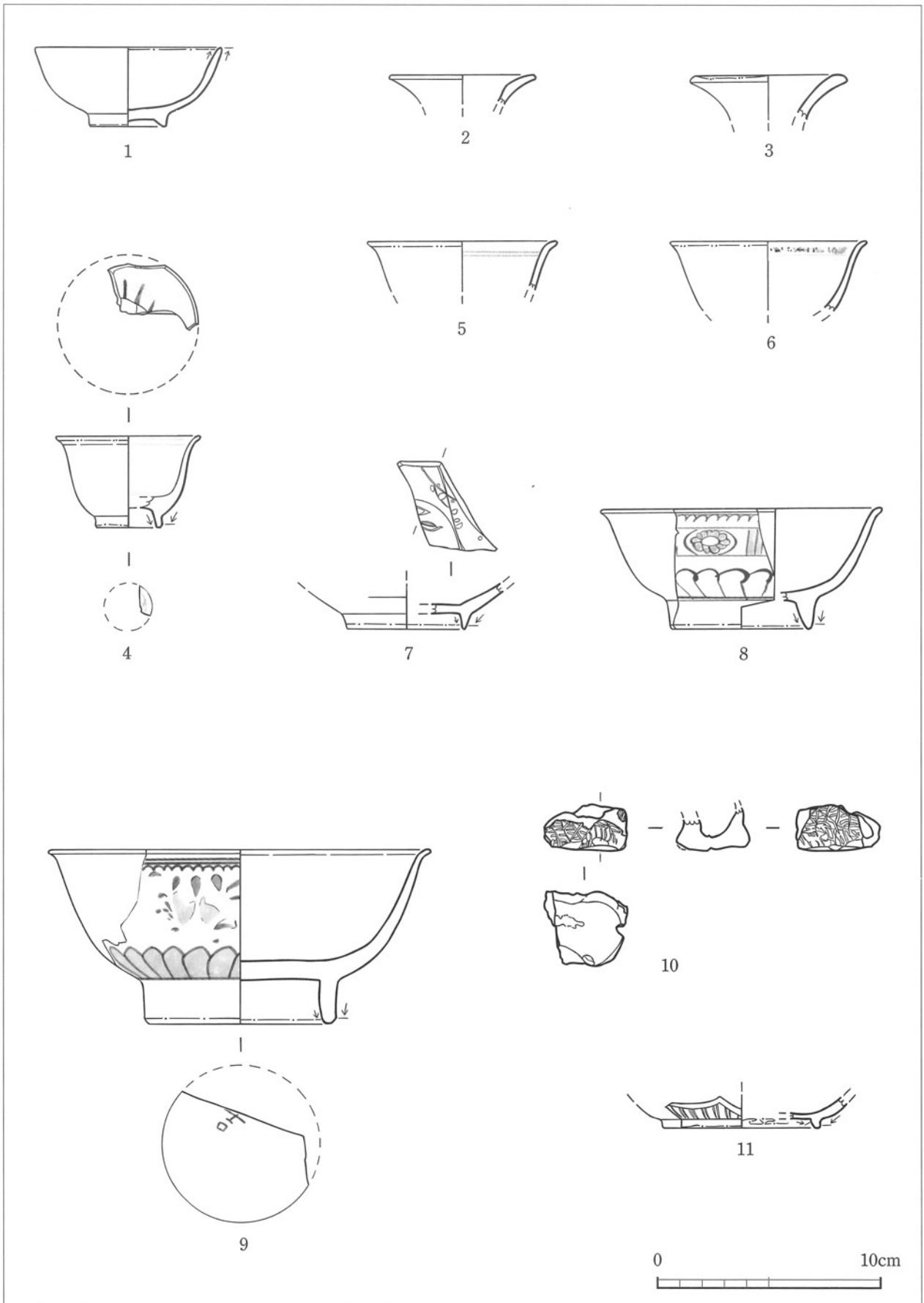
(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	素地	施釉・器形	文様	出土地点	
第44図 図版39の	4 4	小碗	6.7 4.2 3.0	白色で 微粒子	外面に鉄釉 内面は透明釉 畳付けは露胎。	外面は無文 内面に圏線 見込みの文様は不明。	さー12 II
” ”	5 5	”	8.6 — —	”	”	口縁部に内面に 圏線。	さー12 II きー12 III a
” ”	6 6	”	8.8 — —	”	”	口縁部に内面に 波濤くずした文様帯。	きー8 II

第11表 色絵（碗）観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	素地	施釉・器形	文様	出土地点	
第44図 図版39の	7 7	碗	— — 5.4	白色で 微粒子	見込みが平坦。高台か ら直線的に開く。 畳付けは露胎。	腰部に圏線。 内面に文様の 剥離痕が見られる。	いー3 I
” ”	8 8	”	12.6 5.5 6.3	灰白色で 微粒子	畳付けは露胎。 内底面は白釉 畳付けと脇は露胎	波濤文 花文 蓮弁文	たー8・9 I
” ”	9 9	”	17.1 7.9 8.2	”	畳付けは露胎	” 外底面に吉の 銘が見られる。	さー14 III a しー15 II



第44图 (图版39) 琉璃釉：小碗 (1) · 瓶 (2 · 3)、鉄釉：小碗 (4~6)  
 色絵：碗 (7~9)、三彩 (10)、翡翠釉：皿 (11)

## 9. 褐釉陶器

第4表に示したとおり、口縁部・底部片で227点得られた。器種としては壺・鉢・播鉢等の3器種が確認された。特に壺形が多く、大きさにバリエーションが見られた。以下、分類概念を記す。個々の資料の観察は第12表に示した。

### 壺 (第45図1～3、第46図3・4)

#### 小型壺

- a : 口唇部断面が台形状のもの。
- b : 口唇部断面が玉縁状のもの。

#### 中型壺

- a : 口唇部断面が三角状のもの。
- b : 口唇部断面が玉縁状のもの。
- c : 口唇部断面が方形状のもの。

#### 大型壺

- a : 口唇部断面が長方形で、口唇部が丸みのもの。
- b : 口唇部断面が方形で、口唇部が平坦のもの。

### 鉢 (第45図4・5、第46図1)

鉢形は内湾器形で口唇部を受け口状に(45図4・5)と嘴状に成形したもの(46図1)の2種見られた。前者は褐釉が内外面に僅かに観察されるが、殆どは剥落したものである。口唇部をやや幅広く成形し窪みを設け、合わせ口状に作られている。内面には赤色顔料が付着が顕著に観察される。

後者も内湾ぎみの器形で、縁部で一端締め、口唇部を嘴状に成形したものである。釉薬は茶褐色を呈し発色が悪い。釉薬の範囲は現況では内外面に施すようである。

### 播鉢 (第46図2)

ほぼ完形品で全形を知り得る資料である。高台付の底部より内湾ぎみに立ち上げ、口唇部を嘴状に成形するものである。釉薬は肩部付近より口唇部内面まで施す。播り目は9本一組の櫛目で底面より播り上げる。口唇部内面では櫛目の間に間隔を設ける。標品は従来口縁部の資料が知られていたが、底部の形状が確認されたことは重要かと考える。

### 白釉陶器 (第45図6・7)

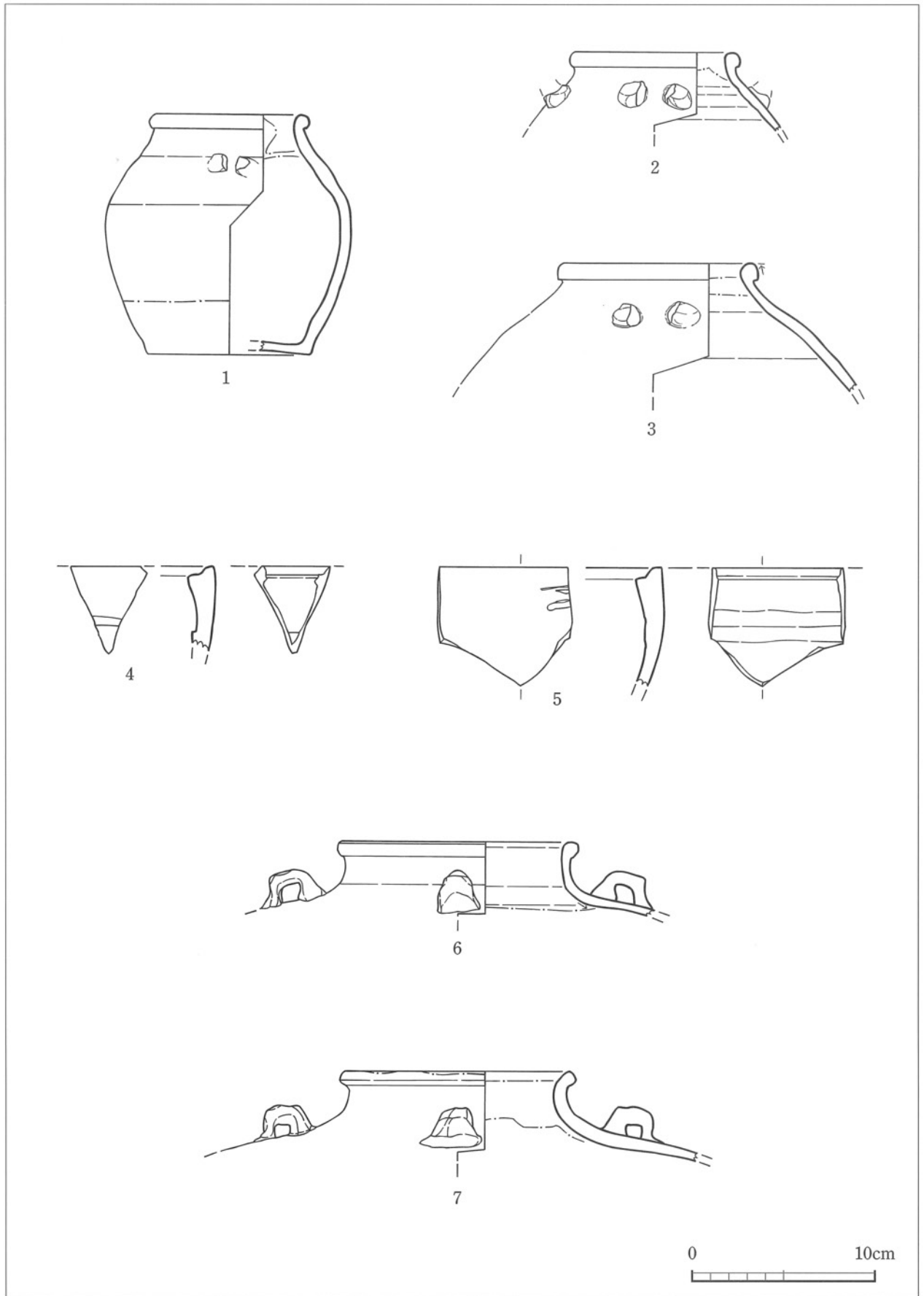
口唇部を玉縁状に作り、肩の張る器形を呈する。その肩部に縦耳が4つ付く。縁部内面から外面まで白釉が施されている。縁部内面下位には褐釉を施釉。

第12表 褐釉・白釉陶器観察一覧

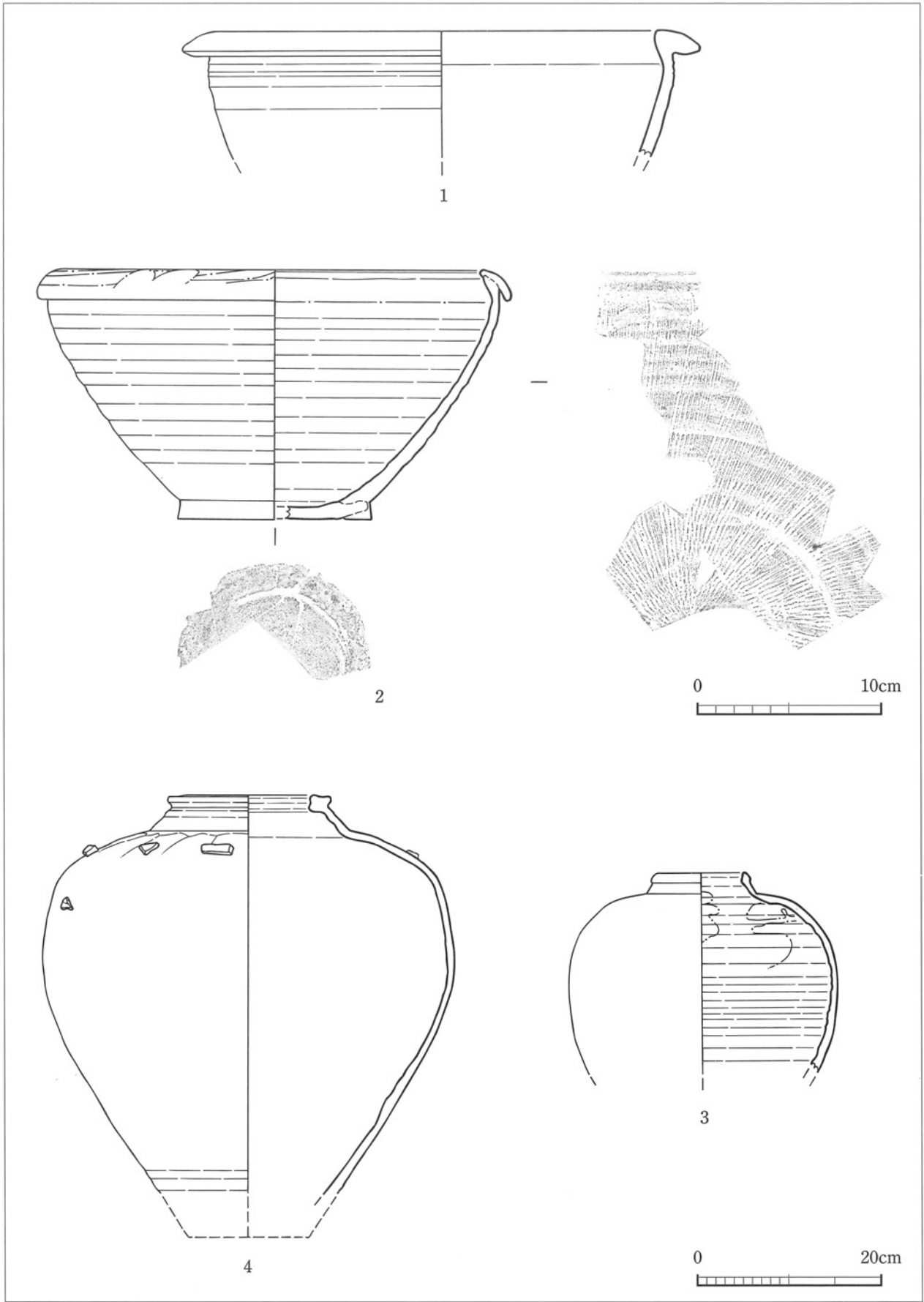
(cm)

挿図番号 図版番号	器種	類	口 器 高 台径	素 地	施釉・特徴	出土地点
第45図 1 図版40の1	小型 壺	b	8.6 13.0 9.0	赤褐色で粗粒子 灰白色の粒子を 含む。	内・外面に薄く施すが 胴下半部と頸部内面下は 露胎。 横耳が3ヶ頸部に施す。	お-6・7 Ⅴ・Ⅲ a え-6 Ⅳ
〃 2 〃 2	中型 壺	b	9.2 — —	赤褐と灰褐色の2 微粒子。 灰白色の粒子を 僅かに混入。	内外面に薄く施す。 光沢が見られる。	し-10 Ⅲ a・Ⅴ
〃 3 〃 3	〃	c	10.7 — —	灰褐色の粗粒子 灰白と茶褐色の 粒子を含む。	〃 口唇部はとくに薄い。	さ-10 Ⅳ・Ⅴ
〃 4 〃 4	鉢 受け 口	受 け 口	— — —	淡紫色の粗粒子 灰白と茶褐色の 粒子を含む。	薄い釉薬を内・外面に施釉。 剥落が著し内面には赤色 顔料が観察される。	う-4 Ⅳ
〃 5 〃 5	〃	〃	— — —	淡桃褐色で粗粒 子 灰白と茶褐色の 粒子を含む。	無釉? 内外面に赤色顔料の付着 が観察される。	う-4 Ⅳ
〃 6 〃 6	白 釉 壺		13.0 — —	赤褐色の粗粒子 石英・灰白色の 粒子が散見	薄い釉薬を頸部内部から 外面まで施釉。 光沢なし。口唇部は玉縁状。 縦耳が4ヶ貼り付く	す-7 Ⅴ
〃 7 〃 7	〃		12.8 — —	明赤褐色で粗粒 子 石英・灰白色の 粒子が散見	〃	さ-10 Ⅳ
第46図 1 図版41・42の1	鉢	嘴 状	23.7 — —	〃 白色の粒子が 散見。	茶褐色の釉薬を内外面に 施釉。 光沢なし。	え-4 Ⅳ
〃 2 〃 2	擂 鉢	〃	22.3 13.5 10.4	赤褐・灰褐色の 粗粒子。 白色の粒子が 散見。	薄い釉薬を施釉。 器表面に輪積み痕が顕著。	う-5 Ⅲ・Ⅳ え-4. 5 Ⅴ
〃 3 〃 3	中 型 壺	a	9.2 — —	淡桃褐色で粗粒 子。 白色や石英の粒 子が顕著。	頸部内面より外面にかけて 施釉。 肩部に窯着痕が筋条に見られる。	う-4・5 Ⅲ・Ⅴ き-4 Ⅴ け-4・5 Ⅴ
〃 4 〃 4	大 型 壺	b	18.0 — —	暗茶褐色で微粒 子。白・茶褐色 粒子が散見。	内外面に施釉。 肩部に窯着痕が見られる。	お-5 Ⅱ





第45図 (図版40) 褐釉陶器：壺 (1~3) ・鉢 (4・5)、白釉陶器：壺 (6・7)



第46図 (図版41・42) 褐釉陶器：鉢 (1) ・播鉢 (2)、壺 (3・4)

## 10. 韓国産陶磁器 (第47図1・2)

破片で3点得られた。3点とも碗である。素地は灰褐色を呈し微粒子である。その素地に白象嵌で文様を描く。第47図1は外面に2条の沈線、内面に沈線と竹管文を描く。小破片のため全体は不明。

同図2は縁部と胴下半部に沈線を巡らし、その間に花文を描く。裏面は同様に縁部と胴下半部に沈線を巡らし、その間に竹管文を充填する。全体の構図は不明。

## 11. ベトナム産陶磁器 (第47図3～6)

第47図3～6に示したもので、小杯・合子・瓶の3器種が確認された。4・5の合子の2点は、口径や文様・素地・釉薬の施し方等より対のものと思われる。6の瓶は高台をハの字に成形し、胴下半部で膨らむ撫で肩の器形のものである。本標品は部分的に加熱を受けており、特に頸部から肩部にかけては、釉薬が焼けていることが顕著に見られる。また、内面の頸部以外の肩部以下には細かい打割痕が観察される。

## 12. タイ産陶器 (第47図7～11)

口縁部を外反させる壺形のみ得られた。外反の形状やサイズによって下記のとおりに分けた。

### 中型壺

口縁部を強く外反させ、口唇部は玉縁状に成形するもの。

### 大型壺

a：口縁部をラッパ状に外反させ、略「T」字状に成形するもの。

b：口縁部を強く外反させ、口唇部を略「L」字状に成形するもの。

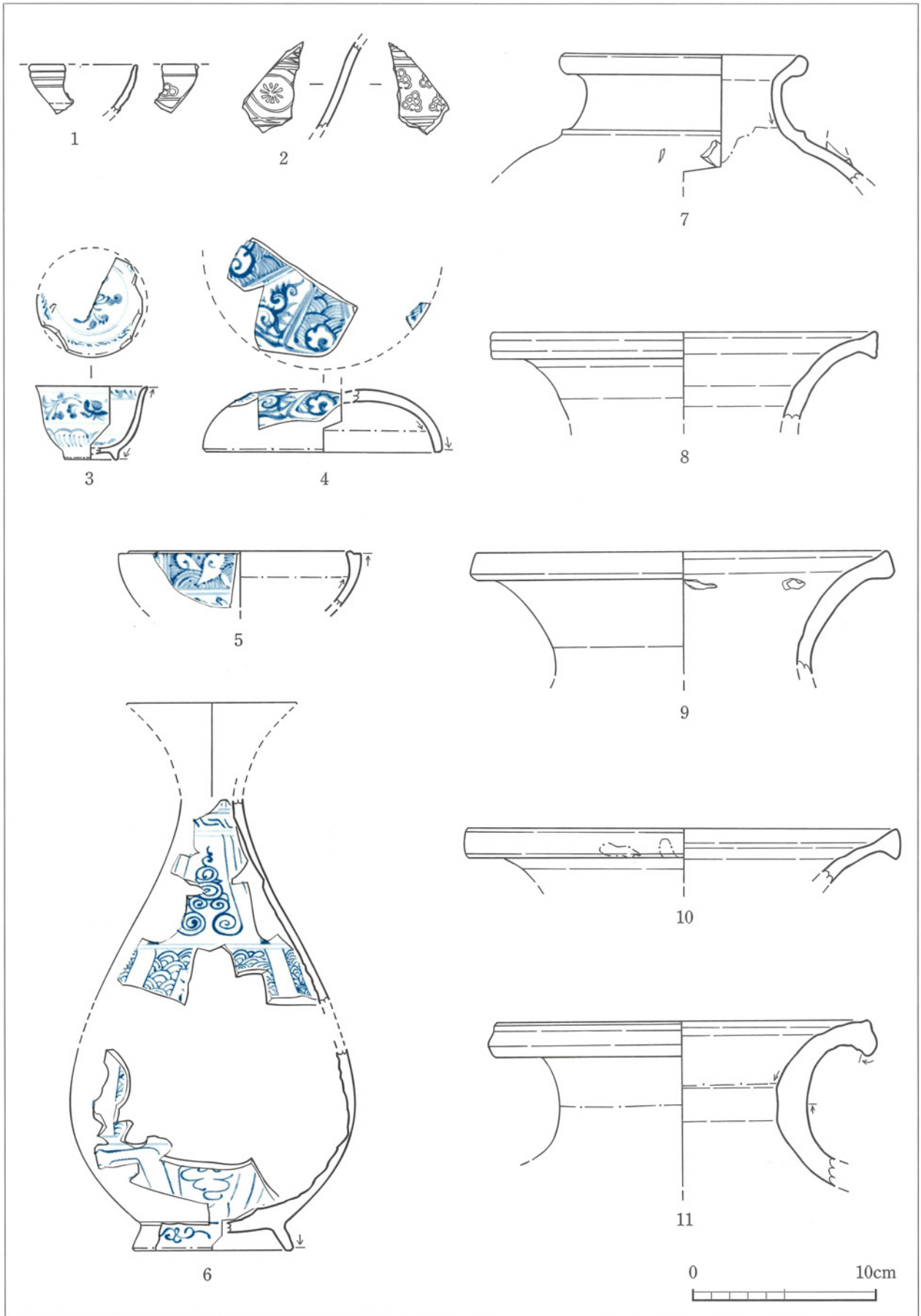
第13表 タイ産褐釉陶器出土一覧

分類 層序	壺			合計
	口縁部			
	大型 a	大型 b	中型	
Ⅱ層	2			2
Ⅲa層	4		1	5
Ⅳ層	3	1	1	5
Ⅴ層			1	1
Ⅴ層貝溜り	3			3
合計	12	1	3	16

第14表 韓国・ベトナム・タイ産陶器等観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	出土地点
第47図 1 図版43・44の1	碗	— — —	灰褐色の微粒子	内外に灰釉を施釉	白象嵌による沈線と竹管文	しー8 Ⅲ a
” 2 ” 2	”	— — —	”	”	” 沈線と花文 竹管文	しー9 Ⅲ b
” 3 ” 3	杯	6.0 4.2 2.9	灰白色粗粒子 黒粒子は散見できる。	口唇部と畳付け露胎。 高台内は鉄銹。	菊唐草文 略蓮弁文	さー11 Ⅴ
” 4 ” 4	合子の蓋	13.0 — —	灰白色粗粒子	内外面に施釉 合わせ口とその内面は露胎。外底面に鉄銹。	下がり蓮弁文により区画。 その中に渦巻文と波文充填。	す・しー6 Ⅰ かー15 Ⅱ
” 5 ” 5	”の身	13.0 — —	”	”	区画され波文が充填。 全体の構図は不明。	すー6 Ⅰ
” 6 ” 6	瓶	— — 8.6	”	素地に白化粧土後に透明釉を施す。 畳付けは露胎。外底面には薄い紺釉	雷文・下がり蓮弁文 ・青海波・ラマ式蓮弁文・唐草文	さ11・12 Ⅴ こー12 Ⅴ
” 7 ” 7	中型壺	13.4 — —	灰紫色で粗粒子 白・茶色の粒子を混入。	縁部内面から外面に黒釉を施釉。 外面に2次焼成が観察される。	肩部に凸帯を1条巡らす。	さー10・12 Ⅴ
” 8 ” 8	大型壺 a	20.8 — —	”	褐釉を内外面に施釉。釉薬の剥落が著しい。	不明。	いー3 Ⅳ
” 9 ” 9	”	22.8 — —	” 混入物が上記と同じ じだが僅かに散見	” 口縁内面に重ね目 痕が3ヶ残る。	”	さー10・11 Ⅴ
” 10 ” 10	”	23.4 — —	灰白紫色で粗粒子 暗茶・白色の粒子が散見。	褐釉を内面に施釉 するが2次焼成を受け 手触りがザラザラする。	”	いー10 Ⅱ
” 11 ” 11	” b	20.2 — —	灰紫色で粗粒子 白・茶色の粒子を混入。	褐釉を縁部内面から 外面に施釉。	”	けー5 Ⅴ



第47図 (図版43・44) 韓国産陶磁器 (1・2)、ベトナム産陶磁器 (3~6)、タイ産陶器 (7~11)

### 13. タイ産半練（土器）

#### （1）蓋（第49図1、第48図）

縁部70点・鈕9点が出土している。全形のわかるものとしては、第49図1がある。外底面の形状は弧状を呈し、それに対応して内面も弧状に窪み、その最深部である中央に鈕がつく。縁部は内側に折り曲げ、その折り曲げた先端部は内器面に密着しない。鈕の形態は、宝珠形が6点、饅頭形が2点、破損による形態不明のものが1点出土している。第48図1～4・第49図1は宝珠形、第48図5・6は饅頭形である。素地には、光沢のある微砂粒や赤褐色の細粒が多量にみられる。器面は橙白色や乳白色などの淡い色調を呈するものが多いが、僅かに暗褐色のものもある。素地中央は器面の色調とは異なり、灰白色・暗褐色を呈するものが多く、破損した断面部からみるとサンドイッチ状となる。

第48図19は、他の蓋資料と若干形状を異にするもので、外底面が平坦になる。底面には、僅かに糸切り痕が確認できる。縁部の形態も他とはやや異なり、内側の折り曲げた部分に約1.2cm幅程の平坦面をもつ。鈕の形態は、欠失のため不明。

#### （2）身（第49図2～11）

細片資料が殆どではあるが、今までの他遺跡での出土傾向に比べ、その出土量はかなり多い。壺形・鉢形(?)の2器種がある。素地の特徴や色調などは、蓋資料とほぼ同様である。2～7は、壺形の口縁資料である。すべて大きく外反し、ラップ状に開く。口縁内面には、口唇部に沿って沈線が1条巡るが、沈線の幅には個体差があり、狭いものと広いものがある。2は、頸部まで残る資料で、頸部下に細沈線が1条巡る。7には、外面から内面にかけて朱色の顔料(?)を塗布した痕跡がみられ、特に内面にその朱色がよく残る。10は、壺の頸部下から胴部にかけての資料と思われる。文様は、まず頸部下に沈線を巡らし、その下に蜜甘の房のような沈文を横に並べて施文するものを1組として、それを上下に2組施す。その下の胴部には、縦位に、蛇行するミミズ腫れ状のものや左右が鋸歯状となる浮文状のものが交互にみられる。頸部下の文様帯上には、朱色の顔料(?)が塗布されている。胴部の内器面には、ボツボツとした凹凸が数多くみられ、あて具の痕かと思われる。11は、壺の底部資料と思われるもので、外器面には平行叩き文がみられる。火を受けたためか、外器面はやや暗褐色を呈する。

8は、口縁部の細片資料で、全体形は不明。口縁はやや内湾し、口縁上端で屈曲して直立する。口唇部に刻み目、口縁外面には横位沈線2条が確認できる。

9は、鉢形になるかと思われる口縁資料である。口唇部外端が外側に突出し、口唇部は蓋受け状に窪む。同一形状の口縁資料がもう1点得られているが、同一個体であるかは不明。

第15表 タイ産半練（土器）観察一覧（蓋）

挿図番号 図版番号	部 位	特 徴	出 土 地 点
第48図 1 図版45の 1	鈕 部	鈕は宝珠形で、その最大径は3.3cm。 器面の色調は乳白色。	おー2 I
〃 2 〃 2	鈕 部	鈕は宝珠形で、その最大径は2.6cm。 器面の色調は、乳白色・橙白色。	こー12 V貝溜まり
〃 3 〃 3	鈕 部	鈕は宝珠形で、その最大径は2.6cm。 器面の色調は橙白色であるが、一部灰白色を呈する。	うー3 IV
〃 4 〃 4	鈕 部	鈕は宝珠形で、その最大径は2.5cm。 器面の色調は橙白色。	きー13 II
〃 5 〃 5	鈕 部	鈕は饅頭形で、その最大径は、2.2cm。 器面の色調は、灰白色。	えー10 V
〃 6 〃 6	鈕 部	鈕は饅頭形で、その最大径は2.3cm。 器面の色調は橙白色。	かー6 IIIa
〃 7 〃 7	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角形の断面形を呈する。 器面の色調は、橙白色。直径13.5cm。	おー2 V
〃 8 〃 8	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角形の断面形を呈する。 器面の色調は、外面が桃白色、内面は暗褐色。 直径12.6cm。	おー15 IV
〃 9 〃 9	縁 部	縁部の折り曲げた先端部の立ち上がりは、やや微弱である。 器面の色調は桃白色。直径12.0cm。	おー11 II
〃 10 〃 10	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角形の断面形を呈する。 器面の色調は、橙白色。 直径12.0cm。	おー10 II
〃 11 〃 11	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角形の断面形を呈する。 器面の色調は茶白色。直径12.6cm。	きー16 V
〃 12 〃 12	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、丸味を帯びた突帯状の断面形 を呈する。器面の色調は茶白色。 直径12.2cm。	きー8 II
〃 13 〃 13	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角状の断面形を呈する。 器面の色調は、灰色。 直径12.4cm。	おー12 II
〃 14 〃 14	縁 部	縁部の折り曲げた先端部は、やや三角形の断面形を呈する。 器面の色調は、橙褐色。直径13.4cm。	こー12 IV

## (蓋)

挿図番号 図版番号	部 位	特 徴	出 土 地 点
第 48 図 15 図版45の 15	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、細い突帯状の断面を呈する。 器面の色調は、乳白色。 直径13.8cm。	うー2 V
〃 16 〃 16	縁 部	縁部の折り曲げた先端部は、やや湾曲し、外側を向く。 器面の色調は、乳白色。 直径13.0cm。	おー8 基壇内V
〃 17 〃 17	胴 部	欠失のため、鈕は形状不明。器面の色調は桃白色。	おー9 基壇内V
〃 18 〃 18	縁 部	縁部の折り曲げた先端部が、三角形状の断面形を呈する。 器面の色調は、茶褐色。 直径9.4cm。	さー15 V
〃 19 〃 19	縁 部	縁部の内側に折り曲げた部分が平坦面を成し、その先端部は丸味を帯びた突帯状の断面形を呈する。 平坦となる外底面には、糸切り痕が確認できる。 器面の色調は乳白色。直径11.0cm。	えー2 I
第 49 図 1 図版46の 1	全 形	鈕は宝珠形で、その最大径は、2.6cm。 縁部の折り曲げた先端部は、丸味を帯びた突帯状の断面形を呈す。器面の色調は、外面が灰白色、内面が茶褐色。 直径12.8cm。	うー9 Ⅲa

## (身)

(cm)

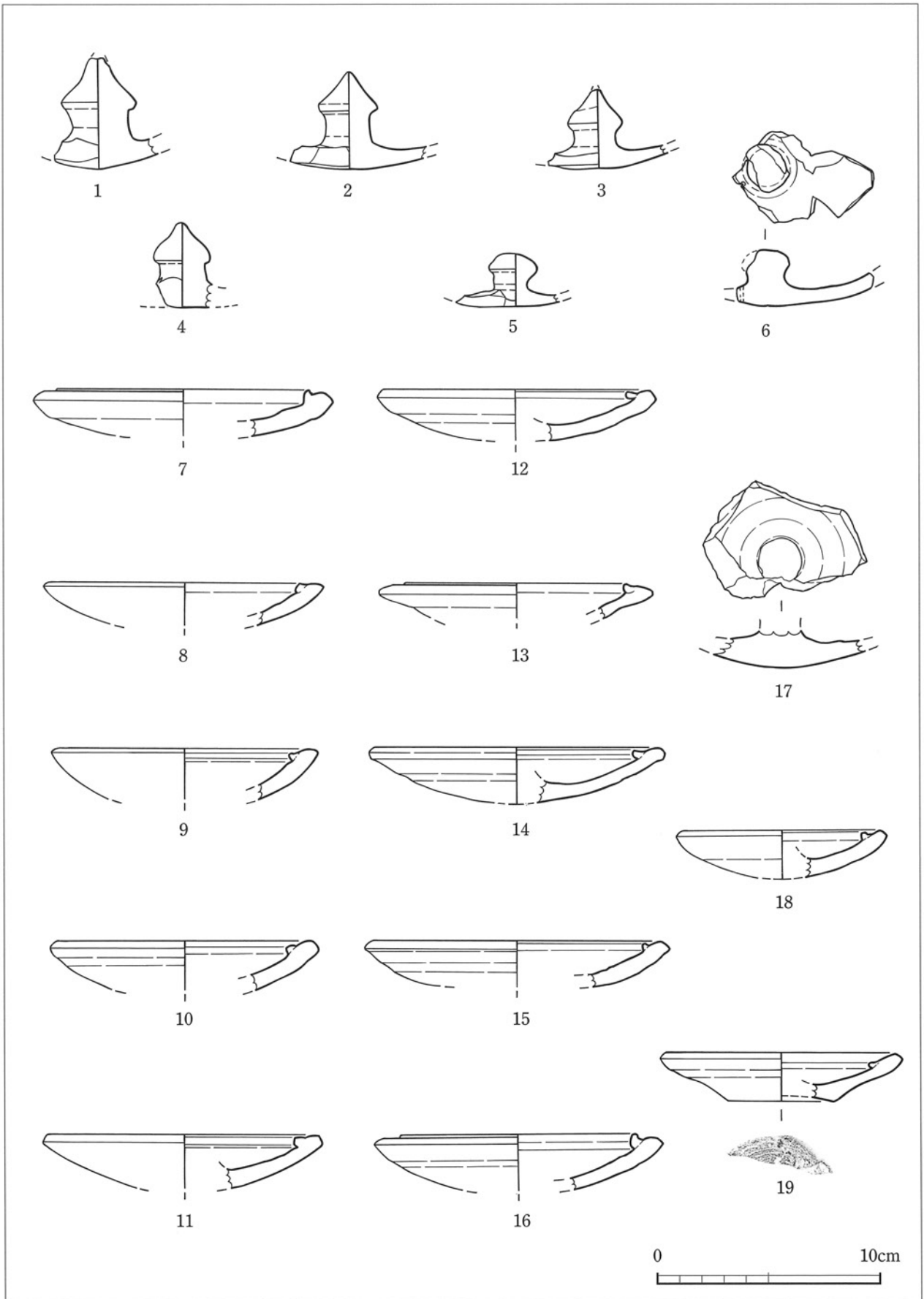
挿図番号 図版番号	部 位	口 径 器 高 底 径	特 徴	出 土 地 点
第 49 図 2 図版46の 2	壺 形 ・ 口縁部	13.1 — —	器面の色調は、外面が茶褐色、内面は乳白色を呈す。	しー9 V貝溜まり
〃 3 〃 3	壺 形 ・ 口縁部	14.0 — —	器面の色調は、橙白色を呈す。	うー2 V
〃 4 〃 4	壺 形 ・ 口縁部	14.0 — —	器面の色調は、橙白色を呈す。	えー3 V
〃 5 〃 5	壺 形 ・ 口縁部	12.0 — —	器面の色調は、橙褐色を呈す。	えー5 V
〃 6 〃 6	壺 型 ・ 口縁部	14.8 — —	器面の色調は、橙白色を呈す。	かー16 IV



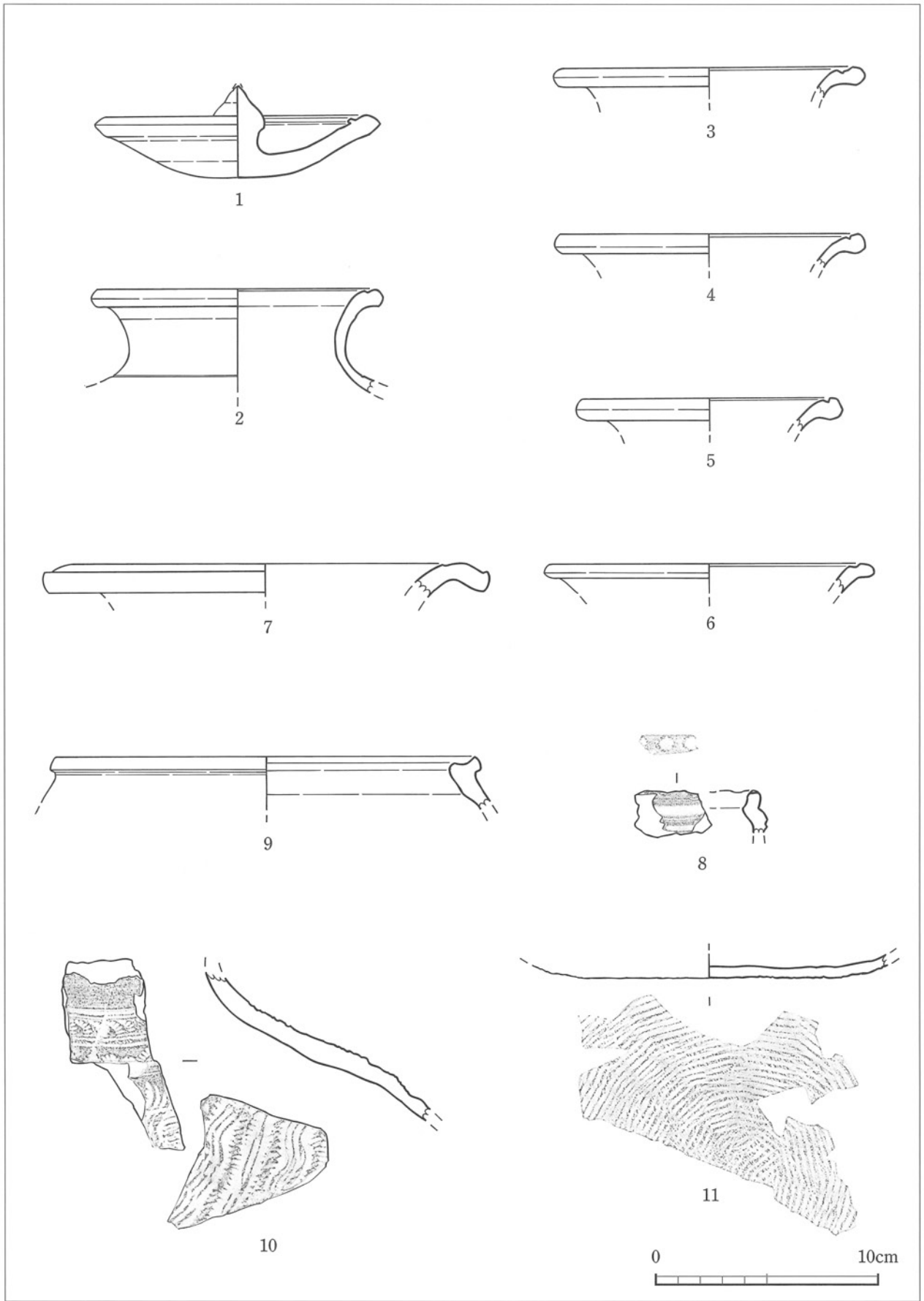
(身)

(cm)

挿図番号 図版番号	部 位	口 径 器 底 高 径	特 徴	出 土 地 点
第 49 図 7 図版46の 7	壺 型 ・ 口縁部	20.2 — —	内外面に朱色顔料(?)の塗布が部分的に確認できる。器面の色調は、橙白色を呈す。	う-4 IV
〃 8 〃 8	器種不明 ・ 口縁部	— — —	器面の色調は、乳白色を呈す。	お-15 II
〃 9 〃 9	鉢形(?) ・ 口縁部	19.3 — —	器面の色調は、茶白色。	か-6 V
〃 10 〃 10	壺 形 ・ 胴 部	— — —	外器面の頸部下に朱色顔料(?)の塗布が確認できる。器面の色調は、外器面が橙白色、内面は暗褐色を呈す。	え-3・き-6 V
〃 11 〃 11	壺 形 ・ 底 部	— — —	器面の色調は、外器面が暗褐色、内面は乳白色を呈す。	う-2 V



第48図 (図版45) タイ産半練 (土器) : 蓋 (1~19)



第49図 (図版46) タイ産半練(土器) : 蓋(1)・壺形(2~7・10・11)・鉢形?(9)・器種不明(8)

## 14. 円形土製品 (第50図1～7)

第50図に特徴的なものを示した。厚さが平均約1.2cm、直径19.8cmの扁平な製品である。器形は下面より僅かに反りながら端部に至り、上面を若干窪ませる器形である。端部は丸味を帯びながらやや直に立ち上げるが、上面端部は粘土が未調整のまま残る。下面には細かい草痕が観察され、まれに、朽痕も見られる。器面調整は上面を篋で、下面はナデのようである。本製品群は端部に見られる粘土のシワ痕や未調整の状況が、他の標品の特徴とほぼ同じことより型成形成品かと思われる。第16表に個々の観察を示した。

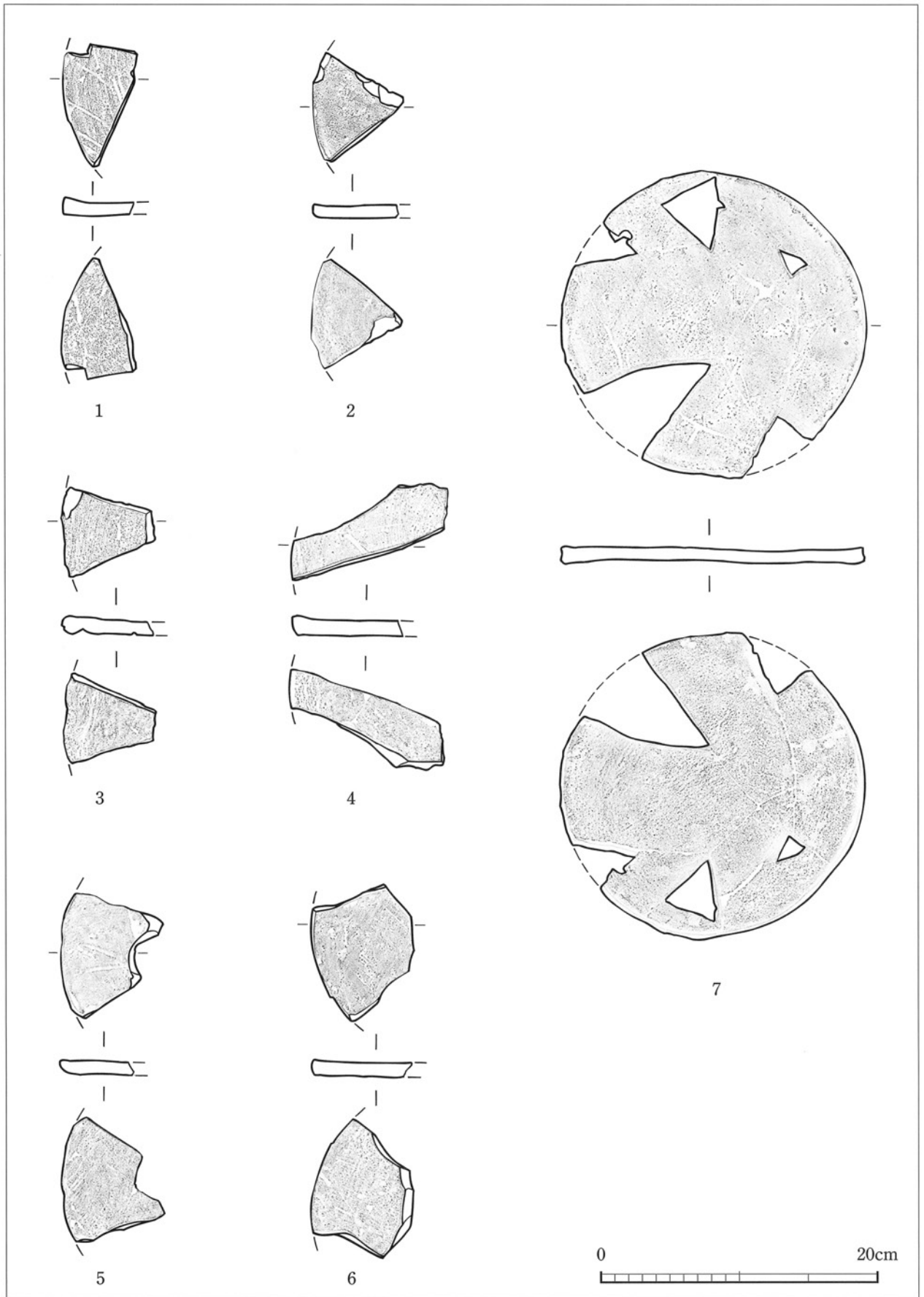
県内においては、「首里城の京の内跡」<sup>註</sup>より報告が成されている。

〈註〉 金城亀信・上原 静他『首里城跡 京の内跡発掘調査報告書（I）—京の内北地区の遺構調査—』  
沖縄県文化財調査報告書第132号 1998年 3月

第16表 円形土製品観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	径 端部厚さ	素地	色調	器面調整	特徴	出土地点	
第50図 図版47の	1 1	22.0 1.2	淡黄白色で砂質 黒・白色粒子 淡白色筋条土	暗褐色 淡黄白色 赤茶褐色	篋調整 ナデ	他のものより反りが強い。 下面に細かい葉が顕著に 観察される。	さ-11 Ⅲ a
〃 〃	2 2	15.6 1.0	淡赤褐色で泥質 赤・ガラス質の 粒子。〃	赤褐色 淡赤褐色 赤褐色	〃	小振りな造り。	さ-11 Ⅴ
〃 〃	3 3	— 1.4	淡桃褐色で砂質 黒・白色粒子 淡白色筋条土	淡桃褐色 端部のみ 淡紫色	〃	下面に細かい葉が顕著に 観察される。 朽痕や素地の捻れが見ら れる。	〃
〃 〃	4 4	— 1.4	淡橙褐色で砂質 黒・白色粒子 淡白色筋条土	淡橙褐色 端部から 下面は橙 褐色	〃	下面には細かい葉が見ら れる。 素地に捻れが見られる。	さ-12 Ⅴ
〃 〃	5 5	20.0 1.0	〃 泥質 ガラス質粒子を含 む。	淡い橙褐 色	器面が剥げ 不明。	筋条の白土が蛇行する 状況が観察される。 手に粉末が付着する。	不明
〃 〃	6 6	19.4 1.2	灰褐色で泥質。 ガラス質粒子を 含む。	灰褐色	篋調整 ナデ	下面には細かい葉が見ら れる。	こ-12 Ⅳ
〃 〃	7 7	22.0 1.2	淡橙褐色で砂質 黒・白色粒子 淡白色筋条土	淡い橙褐 色	〃	〃 上面に朽痕が見られる。	さ-11 Ⅴ



第50図 (図版47) 円形土製品 (1~7)

## 15. 瓦質土器

本地区出土の瓦質土器は23点で、第Ⅱ層からの出土が数多く見られた。確認された器種は鉢・炉の2種類であった。以下、器種別に略述する。

### 植木鉢 (第51図1・2)

第51図1・2とも植木鉢で、篋による波状凸帯を巡らしたものである。1は口縁部に波状凸帯が3条施され、2条1組のものが口部に、空間を設けて肩部に1条の凸帯を施している。胴部については破片のため文様は不明である。2は胴下半部の資料で、1組の波状凸帯を巡らしその上位に蓮華文と菊葉文が見られる。

### 底部 (第51図3)

3は鉢形の底部資料である。幅1.6cmの高台を巡らすもので、やや開きぎみに立ち上げる。

### 炉 (第51図4)

4は炉の胴部資料と思われるものである。胴部に坊主(?)の顔を貼り付け、沈線を2条巡らし上位には雷文を下位に菊花状のスタンプ文を施したものである。

第17表 瓦質土器観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	分類	口 径 器 高 高台径	色調 (内面) (外面)	文 様	備 考	出土地点
第51図 1 図版48の 1	植木鉢	29.8 — —	明橙褐色	波状凸帯菊 葉文	内面に赤褐色の顔料を塗っ ているようである。湧田焼。	しー6 Ⅱ
” 2 ” 2	”	— — —	明灰色	”	内・外面共に明灰色で、中は 灰色。湧田焼	せー7 Ⅱ
” 3 ” 3	底部	— — 13.5	灰褐色		全面的に灰褐色。混入物に ガラス質の鉱物を含む。 湧田焼か判然としない。	しー11 Ⅰ
” 4 ” 4	炉	— — —	”	坊主・沈線・ 雷文・菊花文	内・外面共に明灰色で、 中は灰色。湧田焼かどうか 判然としない。	不明

## 16. 備前陶器 (第51図5～8、第52図)

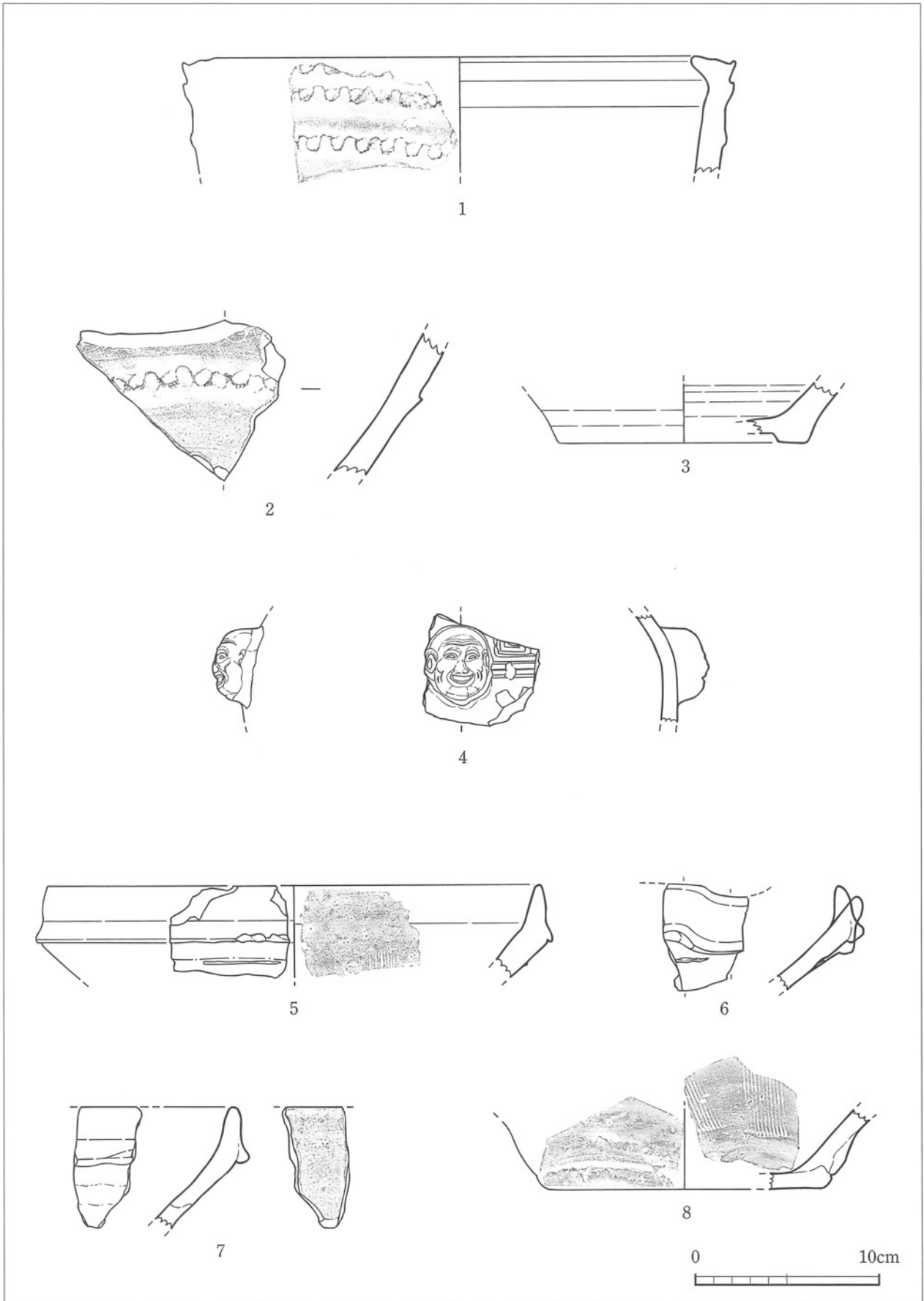
播鉢・大甕等が得られた。播鉢と大甕を第51図5～8、第52図に示した。播鉢はいずれも口縁部を「く」字状に折り曲げ、凸帯状に張り出すものである。播り目は櫛状のもので底面より播り上げる。

大甕はいずれも口部を捻り返しによって玉縁状に成形し、縁部を直に立ち上げ肩の張る器形である。器面には自然釉の白濁釉が見られ、素地には白色の角礫が散見できる。

第18表 備前陶器観察一覧

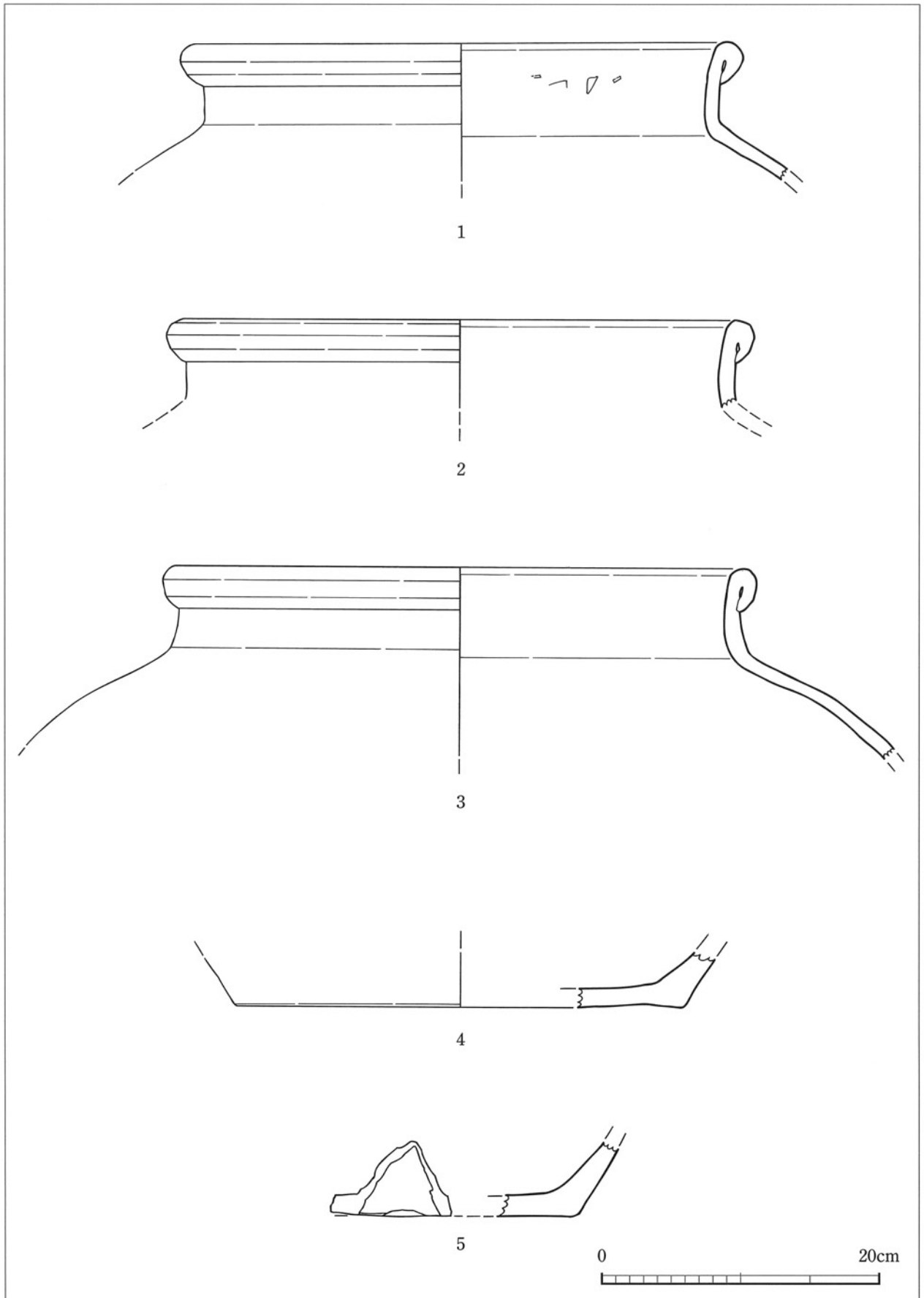
(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	出土地点
第51図5 図版48の5	播鉢	26.6 — —	灰白色と淡紫褐色のサンドウイッチを呈する。白色の小レキ等を混入。山土。	口縁部内外に黄褐色の自然釉が見られる。	なし	え-2 II
” 6 ” 6	”	— — —	”	黄褐色の自然釉が部分的に見られる。	”	け-7 III a
” 7 ” 7	”	— — —	”	不明。	”	く-8 III a
” 8 ” 8	”	— — 15.0	淡橙褐色と灰白色 白色の小礫とガラス質の鉱物等を混入。	不明。 2次焼成品。	” 播り目は10本一組?	う-9 V
第52図1 図版49の1	大甕	40.6 — —	灰褐色で粗粒子。 白色の粒子を混入。	外面に白濁色の自然釉が掛かる。	不明。	こ-10・11 さ-9・10 V
” 2 ” 2	”	42.5 — —	”	白濁色の自然釉が口縁部内面に見られる。	”	き-6、 こ-10・11 さ-10 IV
” 3 ” 3	”	43.4 — —	”	頸部以下の胴部に白濁色の自然釉が掛かる。	”	く-8 III a
” 4 ” 4	”	— — 32.0	”	内底面に白濁色の自然釉が見られる。	”	こ・さ-11 V さ-12 IV
” 5 ” 5	”	— — —	”	”	”	さ-9 III a



第51図 (図版48) 瓦質土器：植木鉢 (1・2) ・鉢 (3) ・炉 (4)、備前陶器：播鉢 (5～8)





第52図 (図版49) 備前陶器：大甕 (1~5)

## 17. 瓦

高麗系瓦・大和系瓦・明朝系瓦の3種が得られた。量的には圧倒的に明朝系瓦が多く、次いで高麗系瓦が見られた。以下、高麗系瓦より記述する。

### 高麗系瓦 (第54図、第55図1・2)

第19表に示した通り、すべて平瓦の破片で171点が得られた。層位では第V層からの出土が多く、上位層へは暫時少なく出土する傾向にある。この傾向は街路地区でも同様である。第53図に街路地区を含めた出土分布図を示した。出土分布より西側(玉陵より)に出土する傾向が見られる。

その中より、特徴的なものを抜き出し、第54図、第55図1・2に示した。54図2～6は「癸酉年高麗瓦匠造」の銘が見られる資料である。個々の資料の観察一覧は第20表に示した。

### 大和系瓦 (第55図3～5)

軒丸瓦・丸瓦・平瓦が僅かに確認された。その内の3点を第55図3～5に示した。3は軒丸の破片で蓮華文と珠文が見られる。珠文は細い線で繋がれている。色調は表裏面が橙灰褐色で芯部を灰色のサンドイッチ状を呈している。その9の第I層より出土。

5は丸瓦の玉縁の破片で、色調は橙灰褐色を呈する。凸面に羽状の叩き文、凹面には紐圧痕や糸切り痕が観察される。玉縁側面と側面・側面内側は丁寧にヘラ調整が施されている。出土地点は不明。

### 明朝系瓦

最も多く得られた瓦群である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の4種が得られた。その中で、軒丸瓦と軒平瓦の特徴的なもの第57～59図に示した。

#### 軒丸瓦 (第57・58図)

- A：瓦当文が凹状に表現され、花卉が花芯を取り巻くもの。(灰色)
- B：瓦当文が凸状に表現され、花芯から花卉が生み出されているもの。(灰色・赤色)。
- C：瓦当文が凸状に表現され、花芯を幅広の花弁が取り巻くもの。(赤色)
- E：瓦当文が凹状に表現され、花芯が蔓状に巻いているもの。(灰色)

#### 軒平瓦 (第59図)

- A：瓦当文が凹状に表現され、花卉が花芯を取り巻くもの。(灰色)
- B：瓦当文が凸状に表現されたもの。
- C：瓦当文が凸状に表現され、花芯や花びらを格子や線等で描くもの。(灰色・赤色)

量的には第21・22表に見られるように、軒丸・軒平ともにA・B・Cが、それぞれ群をなしていることが理解できる。上原静氏の<sup>註</sup>編年によるとAグループが16世紀中頃、Bグループが17世紀中頃、Cグループが18世紀代にそれぞれ位置づけられている。

〈註〉 上原 静「首里城跡、西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』No.14 1994.11

第19表 高麗系平瓦出土一覧

層序	色調	灰 色		サンドイッチ状		合 計
		角	縁	角	縁	
I層			8		8	16
II層			2	1	8	11
III a層		1	6		30	37
IV層			3		8	11
V層			20	1	46	67
V層貝溜まり					1	1
基壇内III層磔敷き面					1	1
基壇内V層			6	1	5	12
基壇内V層炭集中部					3	3
土壙No1 (西)					1	1
土壙No不明			2			2
不明				1	8	9
合 計		1	47	4	119	171

第20表 高麗系瓦観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	分類	色調	厚さ	文 様	備 考	出土地点
第54図 1 図版50の 1	平 瓦	淡灰褐色	2.2	羽状叩き文	焼成良好。広端角部片で表面部に狭いへら削り見られる。2次焼成痕が残る。細紐圧痕が観察される。	う-10 基壇内V
” 2 ” 2	”	灰褐色	1.7	羽状叩き文 銘入り	”。断面の切り込み面は狭い。銘入りであるが、不明瞭。	不明
” 3 ” 3	”	”	1.5	”	”	Z-1 V
” 4 ” 4	”	”	1.4	”	” 分割目安痕が2状見られる。	え-4 V
” 5 ” 5	”	”	1.7	”	銘入りであるが不明瞭。	う-11 V
” 6 ” 6	”	表面は暗褐色	2.2	太めの羽状叩き文。 銘は不鮮明。	表面は2次焼成を受けている	え-9 基壇内V
第55図 1 図版51の 1	”	淡い橙褐色	1.7	羽状叩き文	焼成良好。広端角部片で表面部に狭いへら削り見られる。細紐圧痕が観察される。叩き文間に空白が見られる。	え-7 V
” 2 ” 2	”	淡い赤褐色	1.5	”	叩き文間に空白が見られる。	不明

第21表 明朝系瓦（軒丸）出土一覽

層序	色調分類	地区	灰色				赤色				合計
			A	B	E	不明	A	B	C	不明	
I層		P	6	8		1		5	1	1	22
		G	1	1		8		2	2		14
II層		P	8	7	1	3	1	5	5	3	33
		G	3	11	2	10		1	2	2	31
II層 磔敷き面		P	1	1		1		2	1	1	7
		G									0
IIIa層		P		4		4			1		9
		G	4	2		14		4	3		27
IV層		P	2	1					1		4
		G	5	1		5					11
V層		P				2					2
		G	7			3				3	13
基壇内III層 磔敷き面		P						1			1
		G									0
瓦溜まりNo.1		G	3	7	1	2					13
土壇 No.1		P						3			3
土壇 No.4		P		1					1		2
土壇 No.5		P	1								1
土壇 No.6		P				1					1
		G				1					1
土壇No不明		P						1			1
		G	2								2
V層竪穴状遺構		P				1					1
V層土留め遺構		G	2								2
シーリ		P		1							1
南斜面ミゾ		G		3							3
不明		P						1			1
合計			45	48	4	56	1	20	21	11	206

※ P=公園地区、G=街路地区

第22表 明朝系瓦（軒平）出土一覽

層序	色調分類	地区	灰色				赤色		合計
			A	B	C	不明	C	不明	
I層		P	4	5	3	3	6	2	23
		G	3		1	4	4		12
II層		P	2	1	1	3	5	1	13
		G	2	1	1	4	1		9
II層磔敷き面		P	2				1	1	4
		G							0
IIIa層		P	1	1				1	3
		G	5	1	2	3			11
IV層		P	1				1		2
		G	5			7			12
V層		P							0
		G	4	1		6			11
瓦溜まりNo.1		G	2	4		1			7
土壇 No.1		P	2		3		1		6
土壇 No.2		P	1						1
土壇 No.4		P		1			1		2
土壇 No.6		P				1			1
		G	2						2
溝状遺構		P				1			1
石段		G					1		1
合計			36	15	11	33	20	6	121

※ P=公園地区、G=街路地区

第23表 明朝系瓦（軒丸）観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	分類	素地	色調	特徴	出土地点	
第57図 図版52の	1 1	軒丸	A	灰褐色 茶褐色・ガラス質の鉱物を混入	淡黄銅色	花芯は格子形。 周辺2次的に円形に打割 打割痕が見られる。	そー7 I
” ”	2 2	軒丸	A	” ”	”	花卉から花卉が見られる。 唐草は観察されず。	そー7 II
” ”	3 3	軒丸	A	”	”	花卉を幅広に成形。 花芯は縦位に凹線文。	しー11 II
” ”	4 4	軒丸	A	”	”	花芯にV字状の凹線を施す。 漆喰の付着が見られる。	くー16 IV
” ”	5 5	軒丸	A	”	灰褐色	文様はシャープな唐草が 2本観察される。 漆喰が付着。	すー14 I
” ”	6 6	軒丸	A	”	”	花芯は円形でV字状の凹線。 茎は左に屈曲。 漆喰が付着。	しー14 II 礫敷き面
” ”	7 7	軒丸	A	” 芯部は灰黒色。 ”	”	文様は不鮮明。 漆喰が付着。	くー16 V 堅穴状遺構
” ”	8 8	軒丸	E	”	”	蔓状の文様。全体は不明。	すー13 II
第58図 図版53の	1 1	軒丸	B	赤灰褐色 茶褐色・ガラス質の鉱物を混入	赤銅色	花芯は無文の凸形。	そー10 I
” ”	2 2	軒丸	B	” ”	黄銅色	” 花芯・花卉を切る形で凹線 が見られる。	せー7 I
” ”	3 3	軒丸	B	”	赤黄銅色	花芯は格子形。 ” 文様は不鮮明。	そー7 I
” ”	4 4	軒丸	B	”	淡黄褐色	” 文様は上記に比べると鮮明。	そー8 II
” ”	5 5	軒丸	B	” 焼成不良。	赤褐色	文様は不鮮明。 花芯は格子形。 漆喰が付着。	しー7 II
” ”	6 6	軒丸	C	” 焼成良好。	”	文様は鮮明。 漆喰が付着。	不明
” ”	7 7	軒丸	C	”	”	”	さー15 II

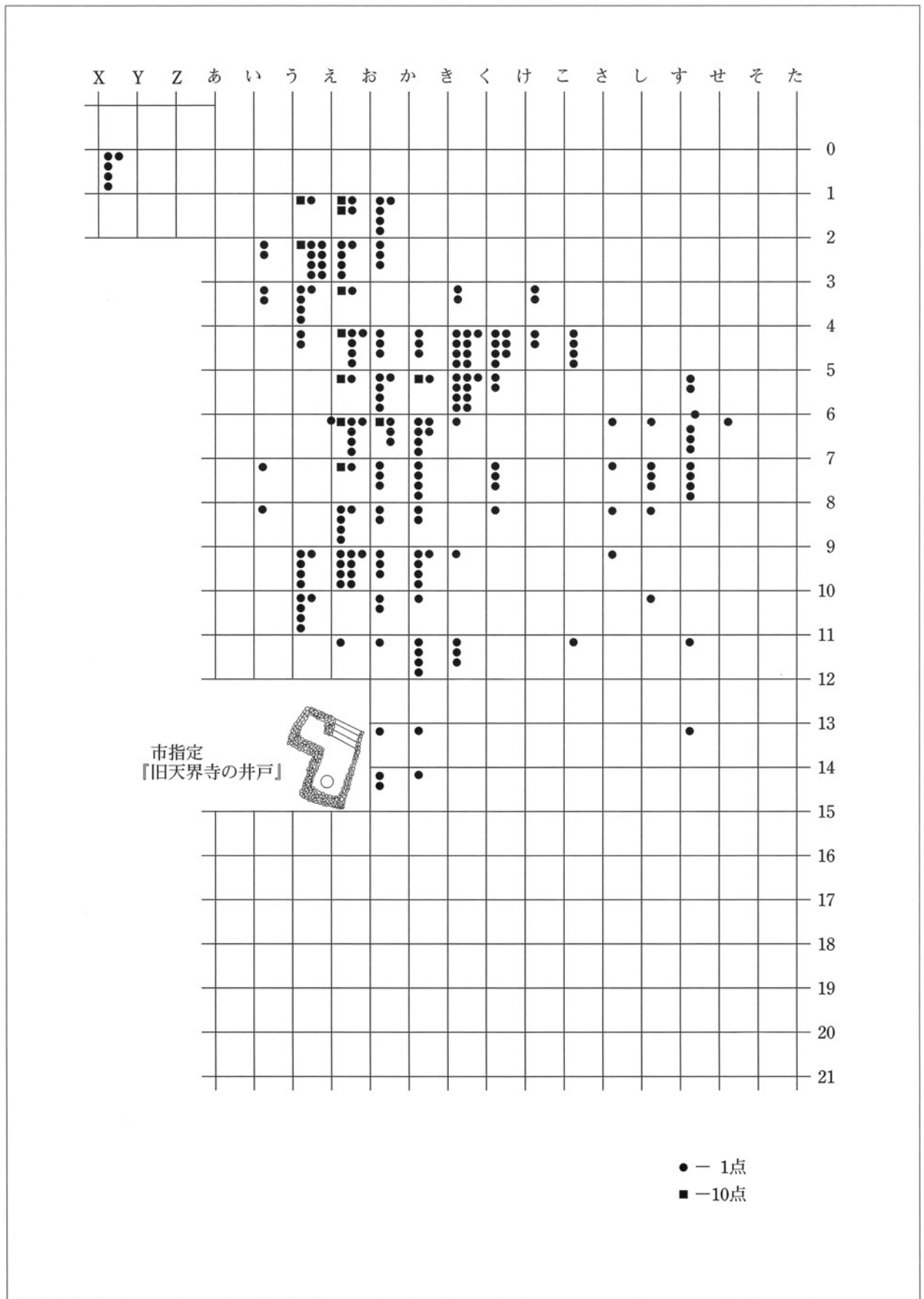
第24表 明朝系瓦（軒平）観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	分類	素地	色調	特徴	出土地点	
第59図 図版54の	1 1	軒平	A	黄褐色・灰黒色のサンド ウイッチ。白色・ガラス 質の鉱物が散見。	灰 黄色	凸文の花芯を花卉が取り 巻く文様は不鮮明。	こー15 II 磔敷き面
〃 〃	2 2	軒平	A	赤褐銅色	淡赤 褐色	花芯は格子形。 文様は不鮮明。	たー8 II
〃 〃	3 3	軒平	A	淡黄銅色 白色粒子・ガラス質の 鉱物を混入	黄灰 色	〃 葉文は単独に描かれる。 漆喰が付着。	せー11 II
〃 〃	4 4	軒平	B	淡灰黒色 茶褐色・ガラス質の鉱物 を混入	淡黄 褐色	全体を凸文で表現。	しー7 III a
〃 〃	5 5	軒平	B	芯部を淡灰白色 淡黄褐色のサンドウイッチ。	〃	〃	し・すー6 I
〃 〃	6 6	軒平	C	淡黄褐色 〃	〃	花芯は格子形 文様は不鮮明。	こー7・6 I
〃 〃	7 7	軒平	C	淡赤褐色 茶褐色・赤褐色の粒子 を混入	淡赤 褐色	〃 文様は鮮明	すー6 I
〃 〃	8 8	軒平	C	〃	〃	〃 上記に比べるとやや寸詰まり。	す・しー6 I
〃 〃	9 9	軒平	C	〃	赤褐 色	〃 瓦当面に2条の凸線が横走。	しー14 II 磔敷き面

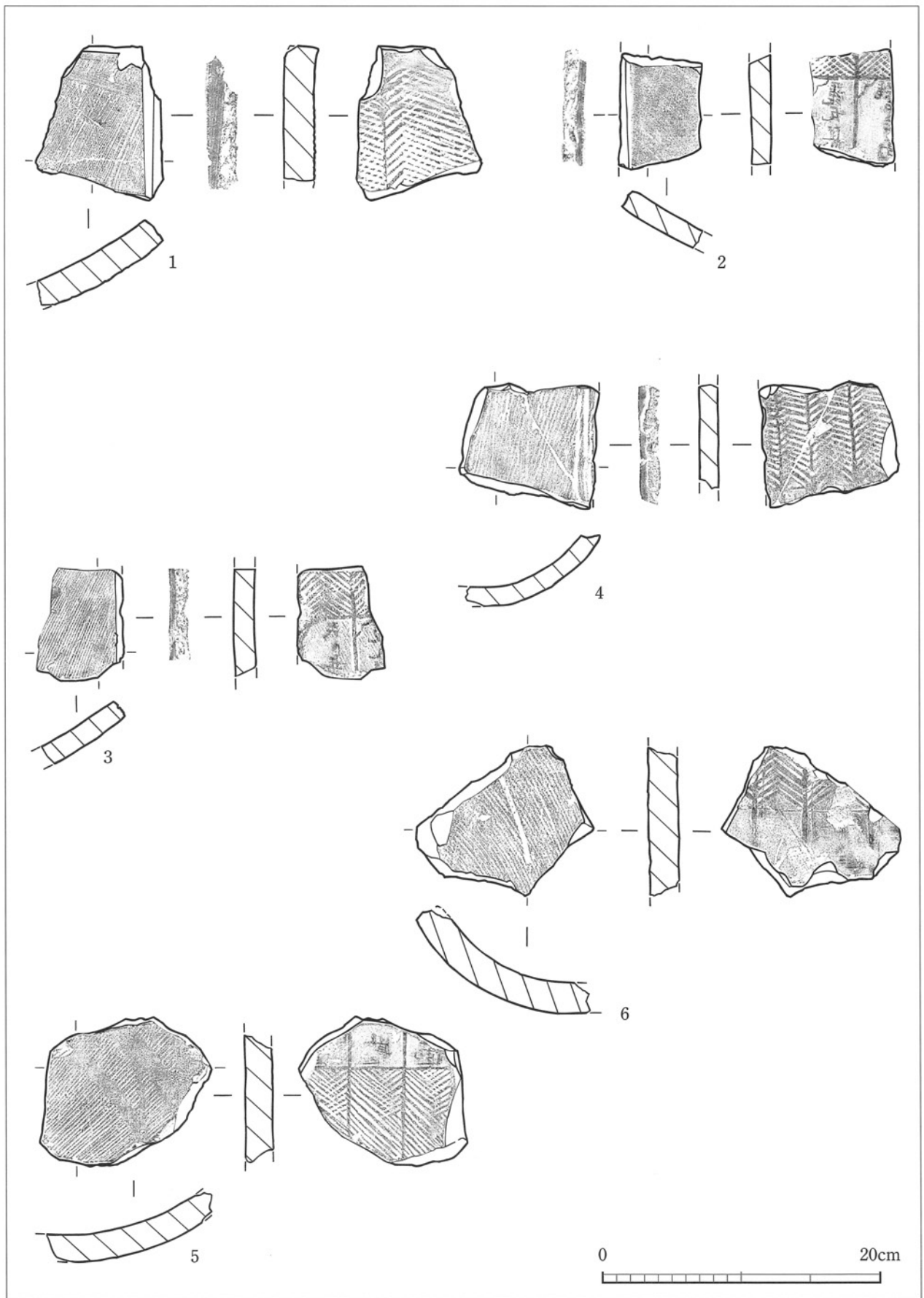
第25表 埴観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	形状	成形 技法	色調	触感 混入物	厚さ	特徴	出土地点	
第61図 図版55の	1 1	I	A	灰褐色系	b	5.2	厚手で重厚感のある。	さー14 II 磔敷き面
〃 〃	2 2	II	A	赤褐色系	a	3.5	I類を焼成後に2分割。 裏面は未調整。	すー12 II
〃 〃	3 3	III	A	灰褐色系	a	3.3	全面丁寧に調整。 濃い灰色呈する。	えー7 III b
〃 〃	4 4	III	A	〃	a	3.5	〃	くー8 III a
〃 〃	5 5	III	A	灰褐色系	a	3.0	厚手で重厚感のある。 漆喰が付着。	くー16 V 堅穴状遺構

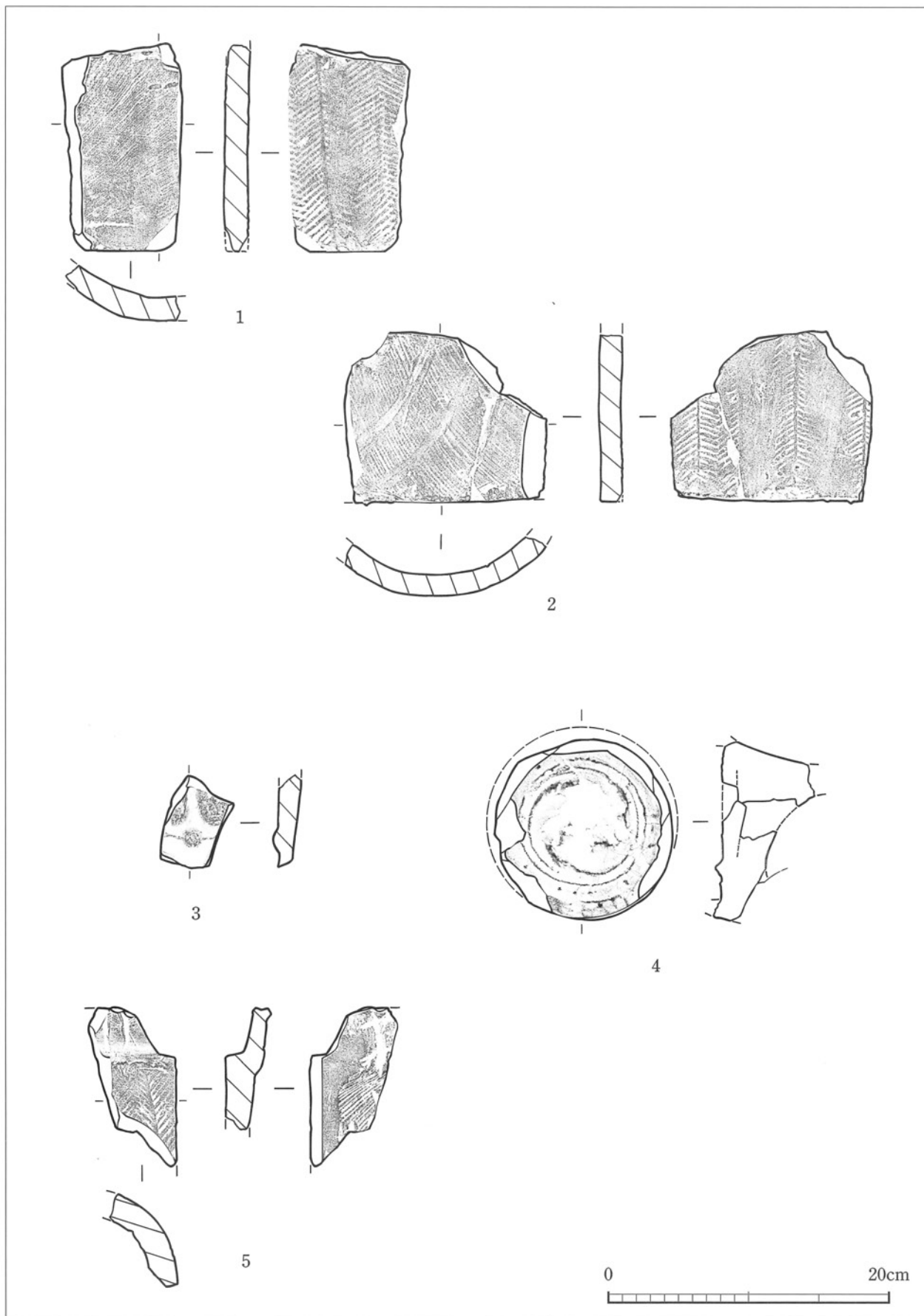


第53図 高麗系瓦出土分布図

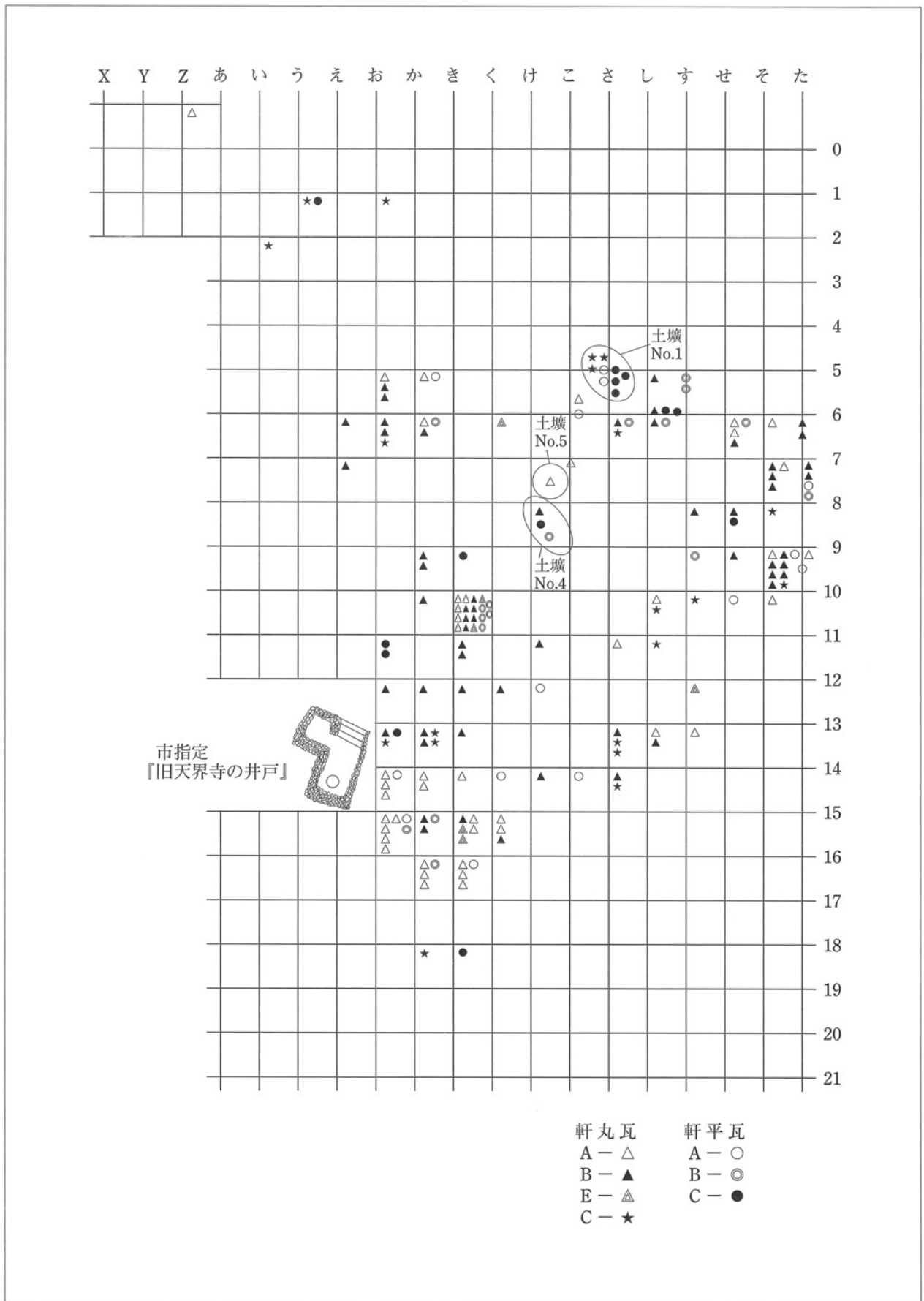


第54图 (图版50) 高麗系瓦：平瓦 (1~6)

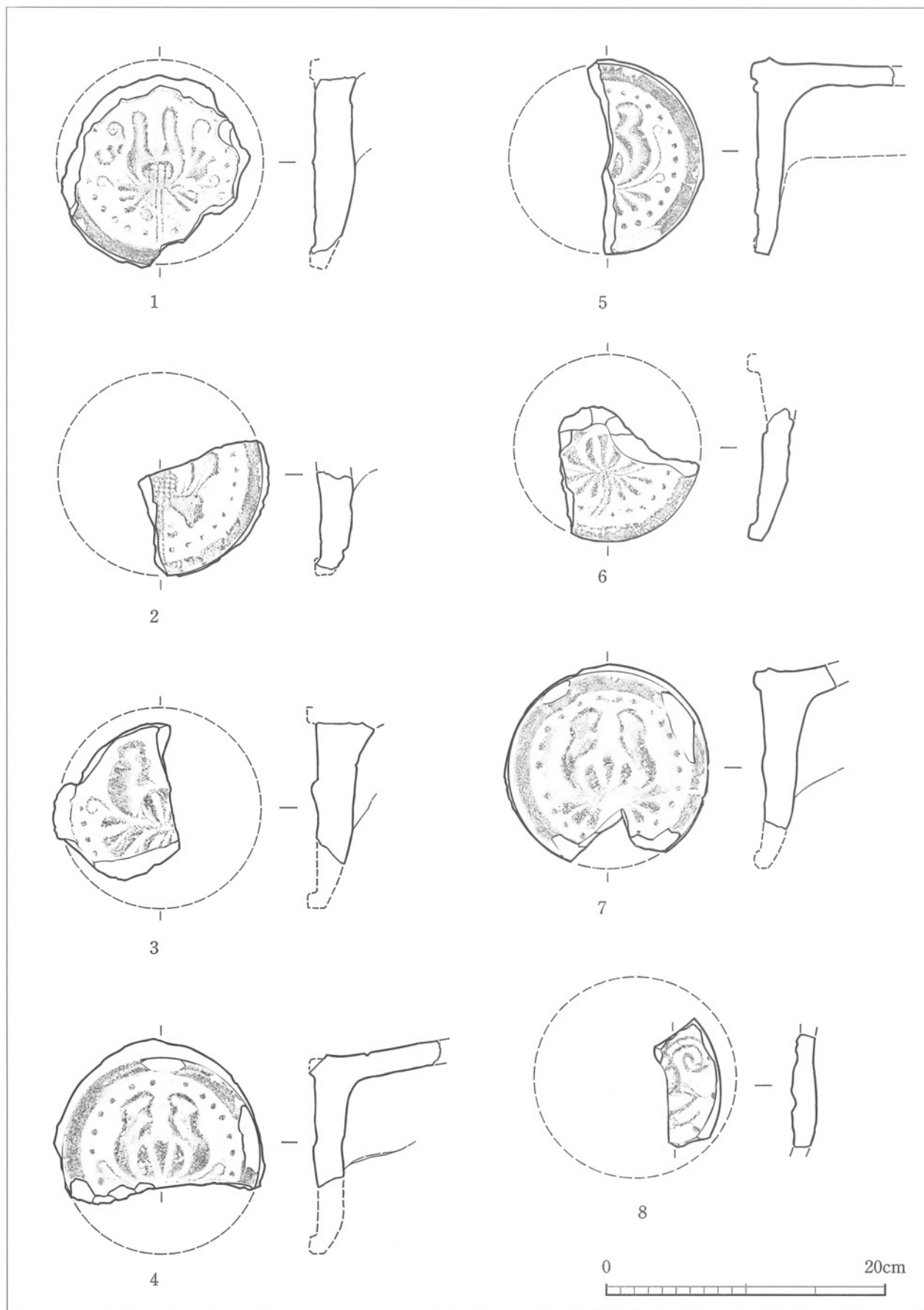




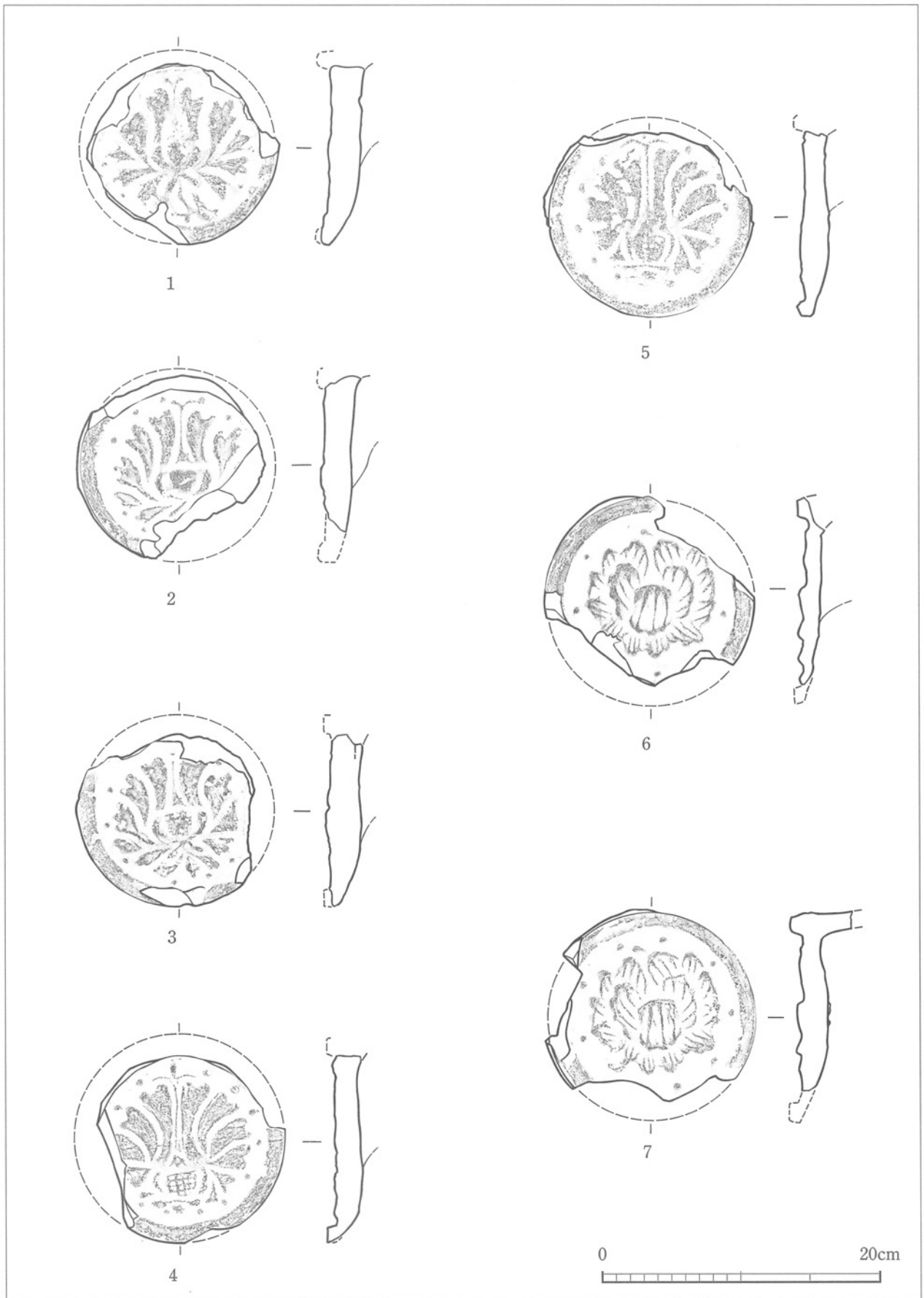
第55図 (図版51) 高麗系瓦：平瓦 (1・2)、大和系瓦：軒丸瓦 (3・4)・丸瓦 (5)



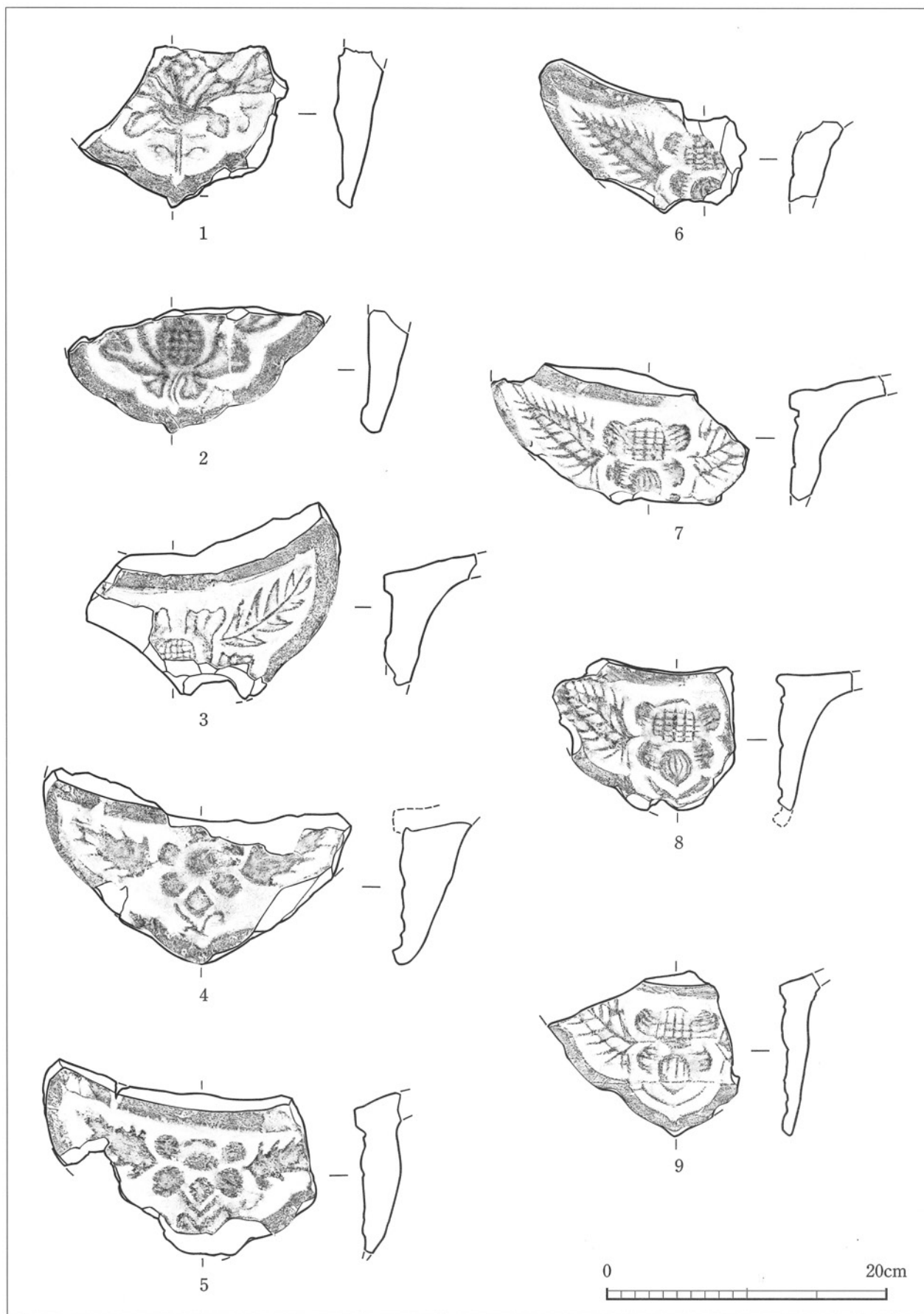
第56図 軒瓦出土分布図



第57图 (图版52) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~8)



第58图 (图版53) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~7)



第59图 (图版54) 明朝系瓦：軒平瓦 (1~9)

## 18. 埴 (第61図1～5)

第26表に示したとおり破片で711点得られている。街路地区を含めると総数931点を数える。層別には街路地区同様に第Ⅱ層・第Ⅲ層からの出土が最も多い。その中で土壌No.4・5からの428点の出土は圧倒的で、公園・街路地区を含めた総数の4割以上を占める出土であった。

分類は街路地区と同じ方法で行った。但し、新しいものが得られたので、形状分類は追加した。第61図1～5に特徴的なものを図示した。個々の観察は第25表に示した。参考されたし。

以下、分類概念を示す。

### 形状

I類：平面形が方形で断面が平坦なもの。

II類：平面形が3角形で断面が平坦なもの。

III類：平面形が方形で断面端部を階段状に成形し、底面にL字の突起が付くもの。

IV類：平面形が長方形で方柱状のもの

### 成形技法

A：素地が単独なもの

B：素地に化粧土を施すもの

### 色調

1：灰褐色系、2：白色系、3：赤褐色系

### 触感と混入物

a：手触りが滑らかなもの、 b：手触りザラザラして緻密なもの、

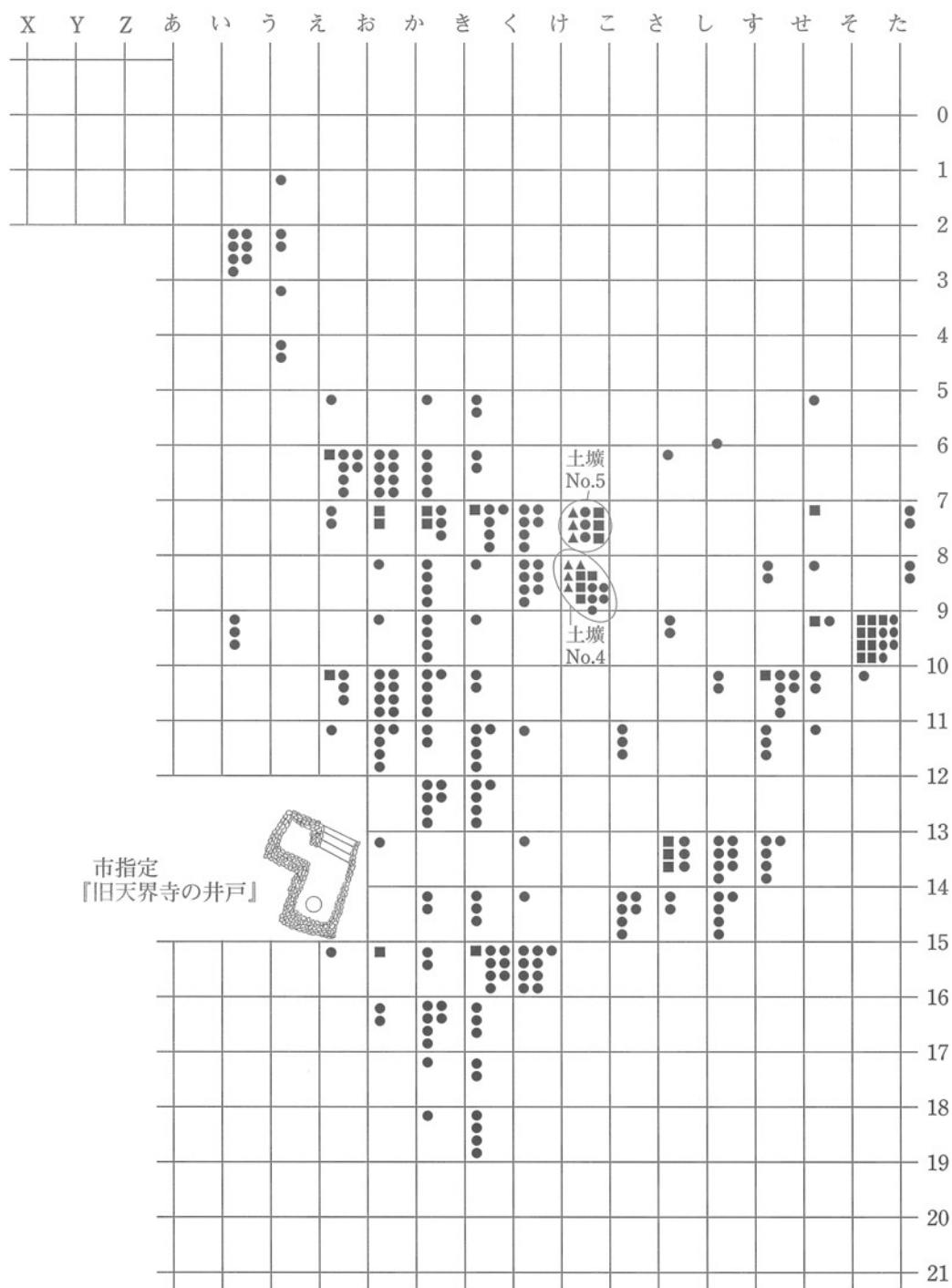
c：指頭に粉末がつくもの、 d：粉殻を含むもの。

第26表に示したとおり、形状ではI類の方形タイプが圧倒的に多く、次いでIII類のL字形、II類の3角形が続く。この出土状況は街路地区とは異なっていてII類・III類が逆転した出土状況である。

成形技法はB：素地に化粧土を施すものは灰褐色系のみに限られ、街路地区と同様な出土で限定的な使われかたが伺われた。色調は灰褐色系が最も多く、赤褐色系・白色系と続く。注目されるのは赤褐色系が多く得られていることが挙げられる。触感等はaグループが殆どであるが、cの粉末がつくものは白色系に多く見られ街路地区でも同じ傾向が見られた。

公園・街路地区を含めた埴の分布図を第60図に作成したところ、本堂の基壇跡と南側のI地区や公園南東・南西部に比較的集中して見られた。

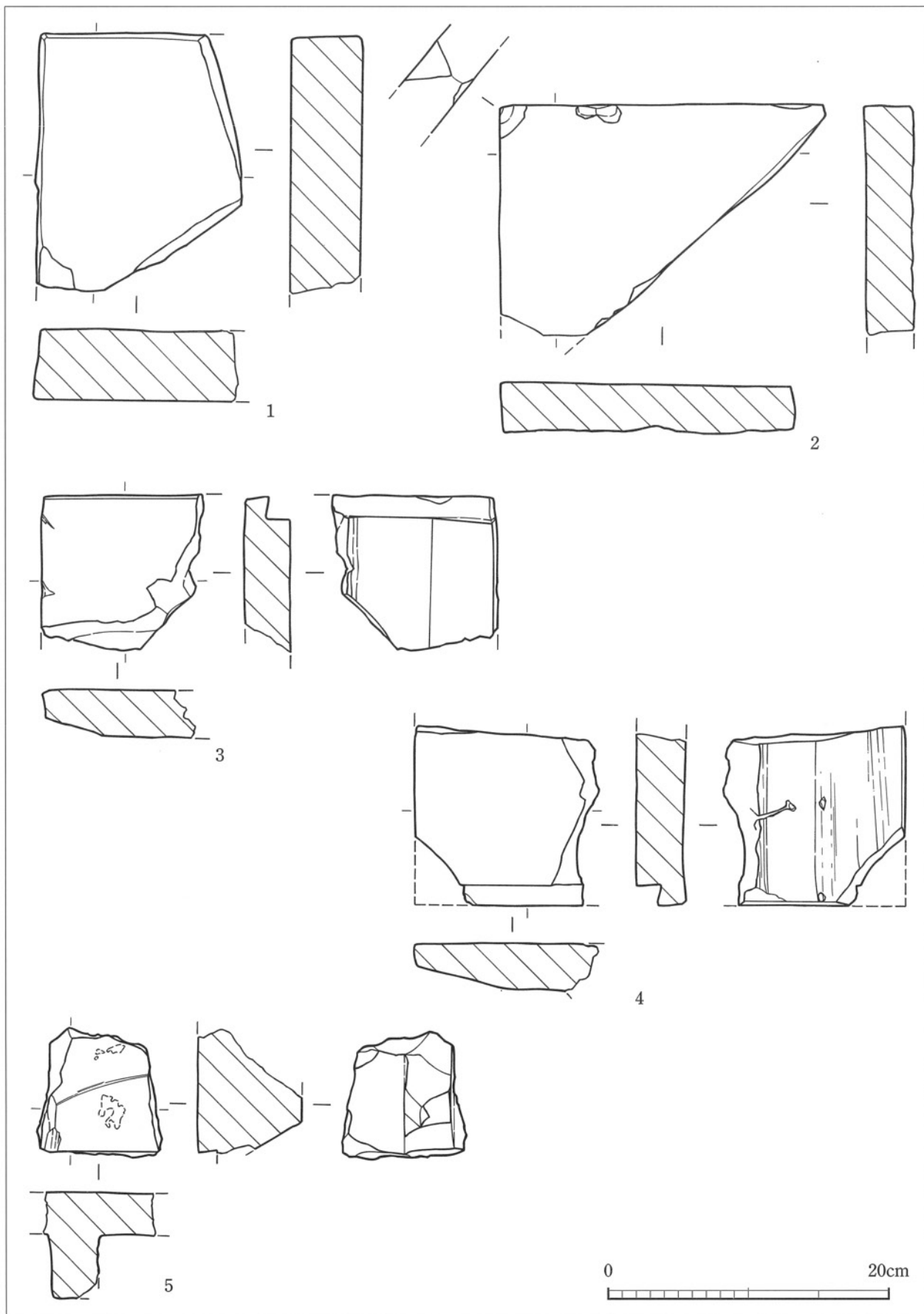




- - 1点
- - 10点
- ▲ - 50点

第60図 埴出土分布図





第61図 (図版55) 埴 : I類 (1) ・ II類 (2) ・ III類 (3~5)

## 19. 銭貨 (第63～66図)

第27表に示したとおり、公園地区・街路地区を含めて完形・破片で424点の出土が見られた。街路地区でも報告したように最も古いものは、中国新代の貨泉（初鑄年14年）で新しいものでは、近代まで幅広い年代の銭貨が多種多様に得られた。その中で最も多く見られたものは、「無文銭」で次に洪武通宝や寛永通宝等であった。ここでは、街路地区で紹介した資料も一括して報告したい。

それらの資料の中で判読可能な資料をピックアップして、下記のとおり年代別に分けた。

- A：13世紀代以前の宋銭（貨泉～紹興元寶）
- B：14世紀後半から15世紀前半の明・朝銭（洪武通寶～朝鮮通寶）
- C：17世紀前半からの清銭・本邦銭（康熙通寶から道光通寶）
- D：19世紀代から近代までの本邦銭
- E：中・近世相当期の無文銭

その結果、第27表を見られるとおり、洪武・永楽通宝を中心としたBグループは第V層、寛永通宝を中心としたCグループが第II層にそれぞれ卓越していることが窺える。銭貨の出土状況からも時間的な差異と質的な変化が窺えられる。

第27表 年代別出土状況

層序	分類		貨泉～宣和通寶		洪武通寶～朝鮮通寶		康熙通寶～寛永通寶		判読不能・不明		本邦銭		無文銭・雁首銭		合計	
	P	G	P	G	P	G	P	G	P	G	P	G	P	G	P	G
I層	1	3		2	10	6	5	6		1	7	11	23	29		
II層	7	5	3	1	12	16	8	11			15	13	45	46		
II磔敷面			1		2		2				2	1	7	1		
III層		8		3		1		13				17	0	42		
IIIa層	11		3		2		19				7		42	0		
IIIb層	2		1				2						5	0		
IV層	4	4	1	5			7	8			1	8	13	25		
V層	13	6	7	12			5	11				8	25	37		
V貝溜まり	3		2				3					1	9	0		
V層炭集中部	2		4				4					1	11	0		
基壇		1											0	1		
V層	2	1		1				1			1	1	3	4		
排水遺構								1					1	0		
根固め石内	1											1	2	0		
竪穴状遺構	1												1	0		
溝状遺構		3				1							0	4		
敷石内												1	0	1		
石組み												1	0	1		
ウラゴメ						1							0	1		
攪乱										1			0	1		
不明	1		1					3			1		3	3		
土 壁	II地区No2							1					0	1		
	II地区No3		8		2			2					0	12		
	III地区No218							1					0	1		
	III地区No228				1								0	1		
	III地区No285				1								0	1		
	III地区No292		1										0	1		
土 壇	No1					1							0	1		
	No不明											1	0	1		
土 壁	No12							1					1	0		
	No61											1	1	0		
	No102					1							1	0		
土 壇	No1(西)			1									1	0		
	No1					4							4	0		
	No5					1						1	2	0		
	No6			1									1	0		
	No7					1							1	0		
	No8	1											1	0		
No不明					3		2				1	6	0			
合計	49	40	25	28	36	26	59	57	0	2	40	62	209	215		
	89		53		62		116		2		102		424			

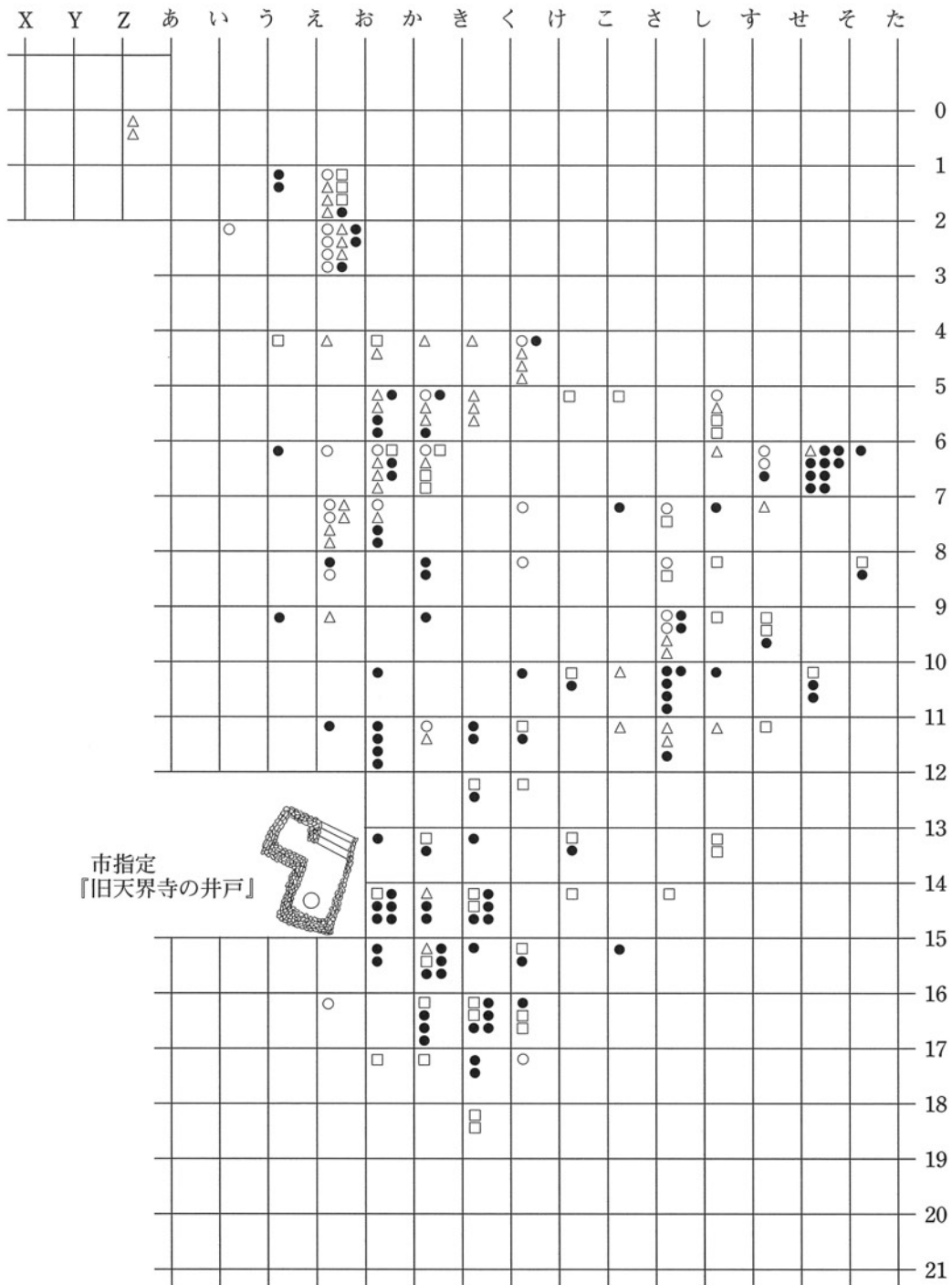
※ P=公園地区 G=街路地区  
本邦銭は現・近代のもの





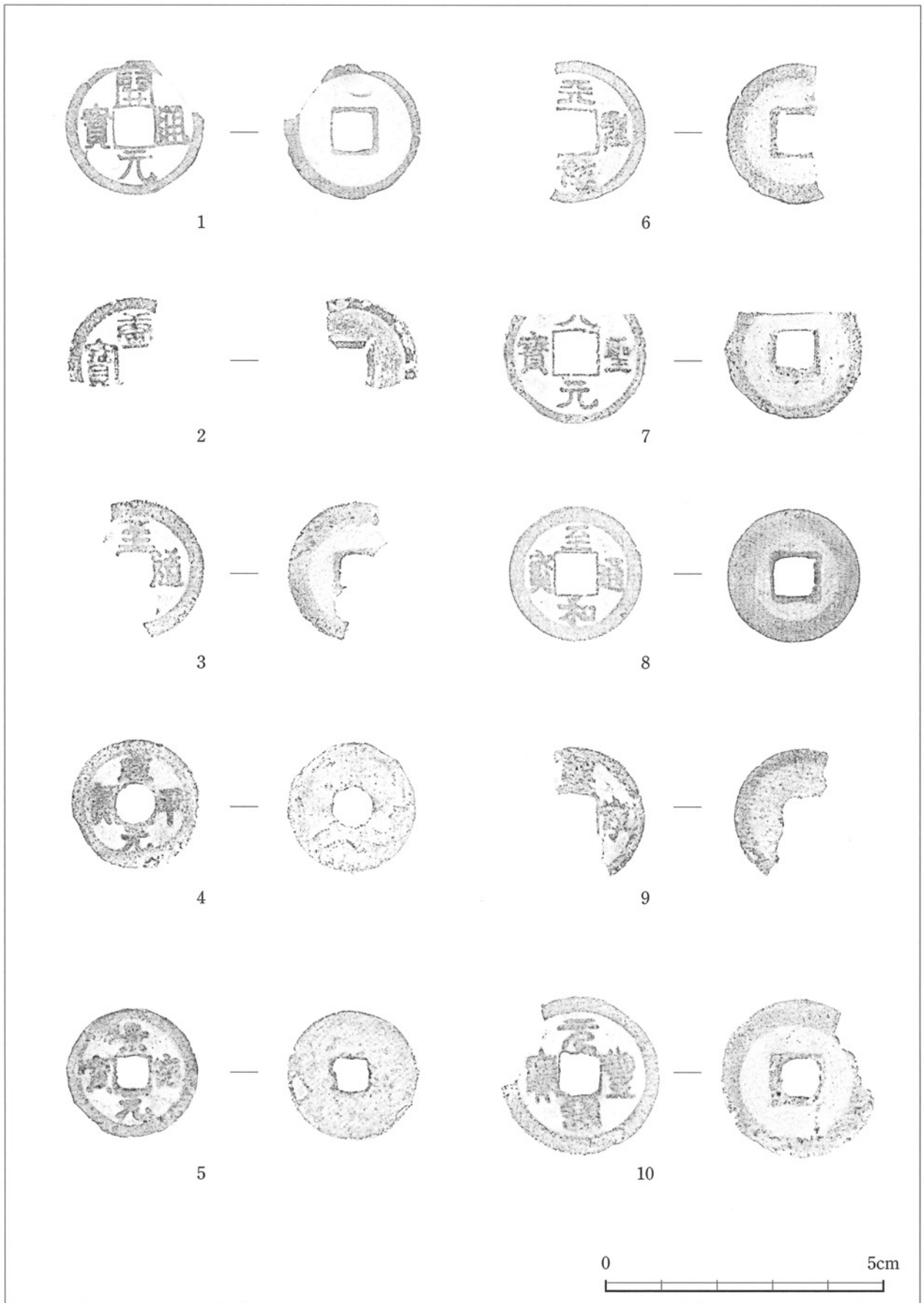
(cm, g)

挿図番号	計測番号	貨幣名	時代	初鑄年	書体	法 量				背文	残存率	地区	出土地点	備考
						外径	孔径	厚さ	重さ					
	133	判読不能				—	—	—	0.40			え-5・Ⅳ層		
	99	判読不能				—	—	—	0.10		東	し-9・Ⅲa層		
	196	判読不能				—	—	—	0.10		東	さ-12・Ⅱレキ敷面		
第66図6	176	判読不能				2.36	0.68	0.99	2.10			え-8・Ⅴ層炭集中部		
	101	無文銭				2.00	0.96	0.06	1.00		東	さ-11・Ⅲa層		
	71	無文銭				2.05	0.62	0.60	1.30			う-7・Ⅱ層		
	22	無文銭				2.80	0.68	0.10	1.70		東	せ-7・Ⅱ層	縁をおとす? 加工?変形している。	
	192	無文銭				2.02	0.65	0.09	1.40		東	し-11・Ⅰ層		
	44	無文銭				1.70	0.70	0.09	0.60		東	せ-7・Ⅱ層		
第66図10	5	無文銭				1.75	0.90	0.10	0.80		東	け-11・Ⅰ層		
第66図9	135	無文銭				1.66	0.78	0.09	0.70			え-12・Ⅳ層		
	57	無文銭				0.91	0.45	0.08	0.20		東	さ-10・Ⅰ層		
	65	無文銭				0.72	0.40	0.14	0.10		東	し-8Ⅱ層根固石内		
第66図7	43	無文銭				2.06	0.78	0.11	1.70		東	せ-7・Ⅱ層		
第66図8	24	無文銭				2.08	0.85	0.11	1.40		東	せ-7・Ⅱ層		
	105	無文銭				2.07	0.74	0.07	1.00		東	せ-7・Ⅲa層		
	102	無文銭				2.10	0.76	0.07	1.00		東	さ-11・Ⅲa層		
	27	無文銭				2.11	0.63	0.07	1.50		東	せ-7・Ⅱ層		
	194	無文銭				2.39	0.51	0.13	2.60		東	す-10・Ⅰ層		
	104	無文銭				2.25	0.63	0.09	1.60		東	せ-7・Ⅲa層		
	202	無文銭				2.25	0.58	0.12	2.40		東	グリット不明		
	193	無文銭				2.20	0.74	0.11	1.90		東	こ-16・Ⅱレキ敷面		
	42	無文銭				2.18	0.76	0.05	1.20		東	せ-7・Ⅱ層		
	26	無文銭				2.11	0.66	0.08	1.50		東	せ-7・Ⅱ層		
	56	無文銭				2.23	0.69	0.09	1.50		東	そ-9・Ⅰ層		
	46	無文銭				1.68	0.76	0.06	0.20		東	せ-11・Ⅱ層		
	106	無文銭				—	0.61	0.10	0.60		東	く-5・Ⅲa層		
	103	無文銭				—	—	0.10	0.50		東	さ-11・Ⅲa層		
	59	無文銭				—	0.60	0.11	0.30		東	こ-8・Ⅱ層		
	76	無文銭				2.02	—	0.10	0.70			さ-10・Ⅱレキ敷面		
	35	無文銭				—	—	0.10	0.20		東	せ-11・Ⅱ層		
	100	無文銭				—	—	0.90	0.60		東	す-7・Ⅲa層		
	41	無文銭				1.65	—	0.10	0.40		東	け-14・Ⅱ層		
	31	無文銭				2.28	0.54	0.10	1.70		東	さ-11・Ⅱ層		
	45	無文銭				2.50	0.68	0.08	0.90		東	さ-11・Ⅱ層		
	167	無文銭				—	—	0.10	1.10			う-10・Ⅴ層基壇内		
	160	無文銭				—	—	—	0.40		東	さ-12・Ⅴ貝溜まり		
	198	無文銭				—	—	0.10	0.40		東	そ-7・Ⅰ層		
	33	雁首銭				1.72	0.50	0.15	1.90		東	く-11・Ⅱ層	縁を曲げてたたく	
	10	雁首銭				2.23	0.49	0.15	3.70		東	く-12・Ⅰ層	縁を曲げてたたく小孔有り	
第17図	9	無文銭				2.15	0.70	—	2.38		東	Pit No61		
第18図	4	寛永通寶	江戸	1668年	楷書	2.35	0.65	—	2.58		東	Pit No102		
	210	判読不能				—	—	—	—			Pit No12		
第19図	168	洪武通寶	明	1368年		2.20	0.62	0.14	3.20			土壙 No1 (西)		
第20図1	185	乾隆通寶	清	1735年	隸書	2.51	0.52	0.13	4.20	満州文字	東	土壙 No1		
第20図2	188	乾〇〇寶				—	—	0.12	1.70		東	土壙 No1		
第20図3	187	〇永通〇				2.40	1.10	0.15	2.00		東	土壙 No1		
第20図4	186	寛永通寶	江戸	1668年		1.86	0.66	0.10	1.30		東	土壙 No1	永の文字部分に穴有り	
第21図2	199	寛〇通〇	江戸	1668年		—	—	0.17	1.30		東	土壙 No5	寛永通寶?	
第21図3	200	無文銭				1.77	0.99	0.09	0.60		東	土壙 No5		
第22図1	190	洪武通寶	明	1368年		2.27	0.50	0.16	4.30	一銭	東	土壙 No6		
第22図1	63	寛〇〇〇	江戸	1668年		—	—	0.11	0.60		東	土壙 No7	寛永通寶?	
第22図2	64	無文銭				1.28	1.30	0.07	0.30		東	土壙 No不明		
第23図	189	至元〇寶	元	1285年	草書	2.46	0.36	0.13	3.00	ほぼ完形	東	土壙 No8		
第23図	203	寛永通寶	江戸	1668年	楷書	2.29	0.65	0.11	2.30			土壙 No不明		
第23図	75	判読不能				2.24	0.61	0.14	2.80			土壙 No不明	四角	
第23図	66	判読不能	江戸	1668年		—	—	0.18	1.40		東	土壙 No不明		
第23図1	48	寛〇通寶				2.34	0.67	0.10	1.80		東	土壙 No不明	寛永通寶?	
第23図2	62	〇永通〇				—	—	0.11	1.50		東	土壙 No不明		

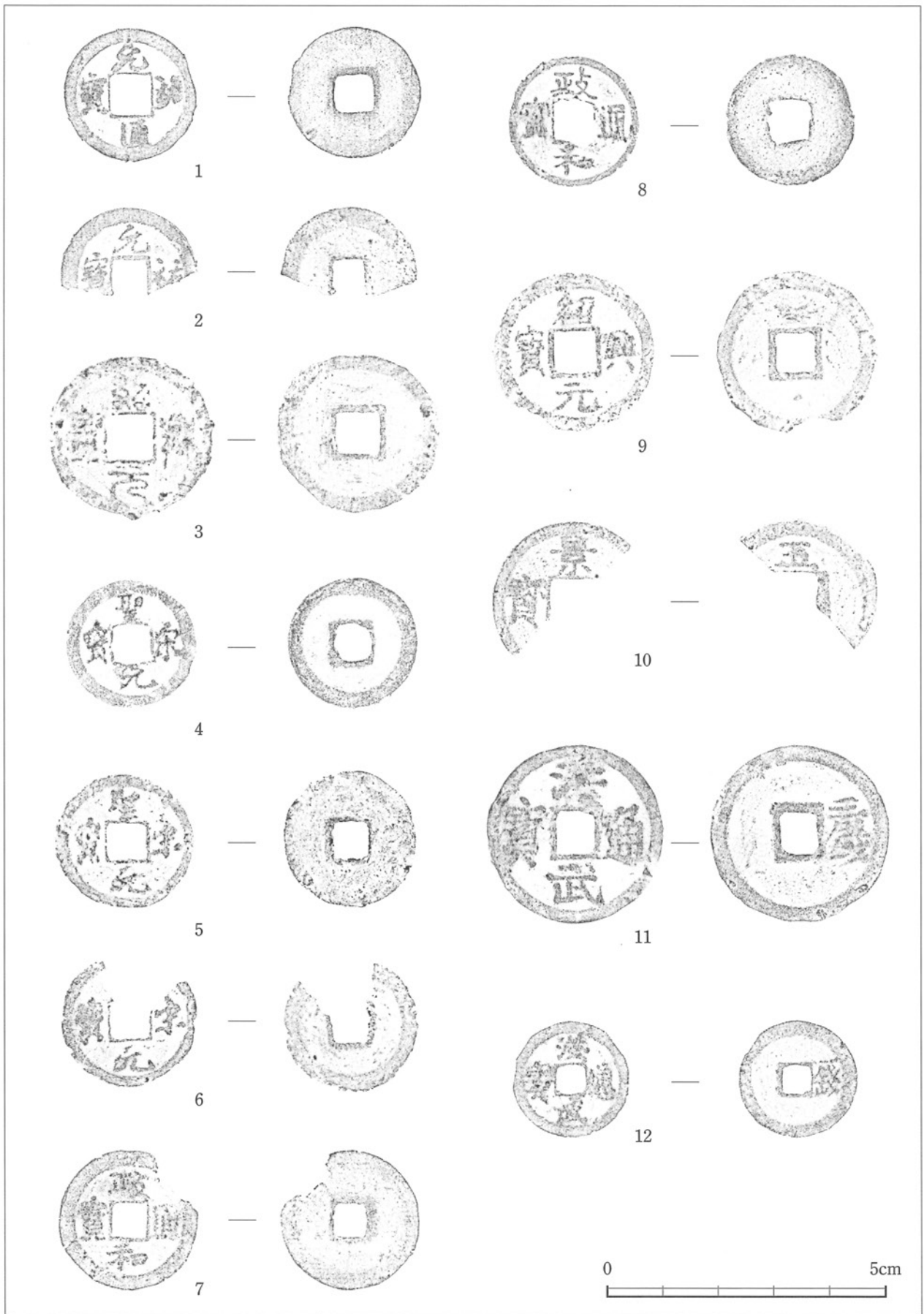


- - A (貨泉～紹興元寶)
- △ - B (洪武通寶～朝鮮通寶)
- - C (康熙通寶～道光通寶)
- - E (無文錢・雁首錢)

第62図 錢貨出土分布図

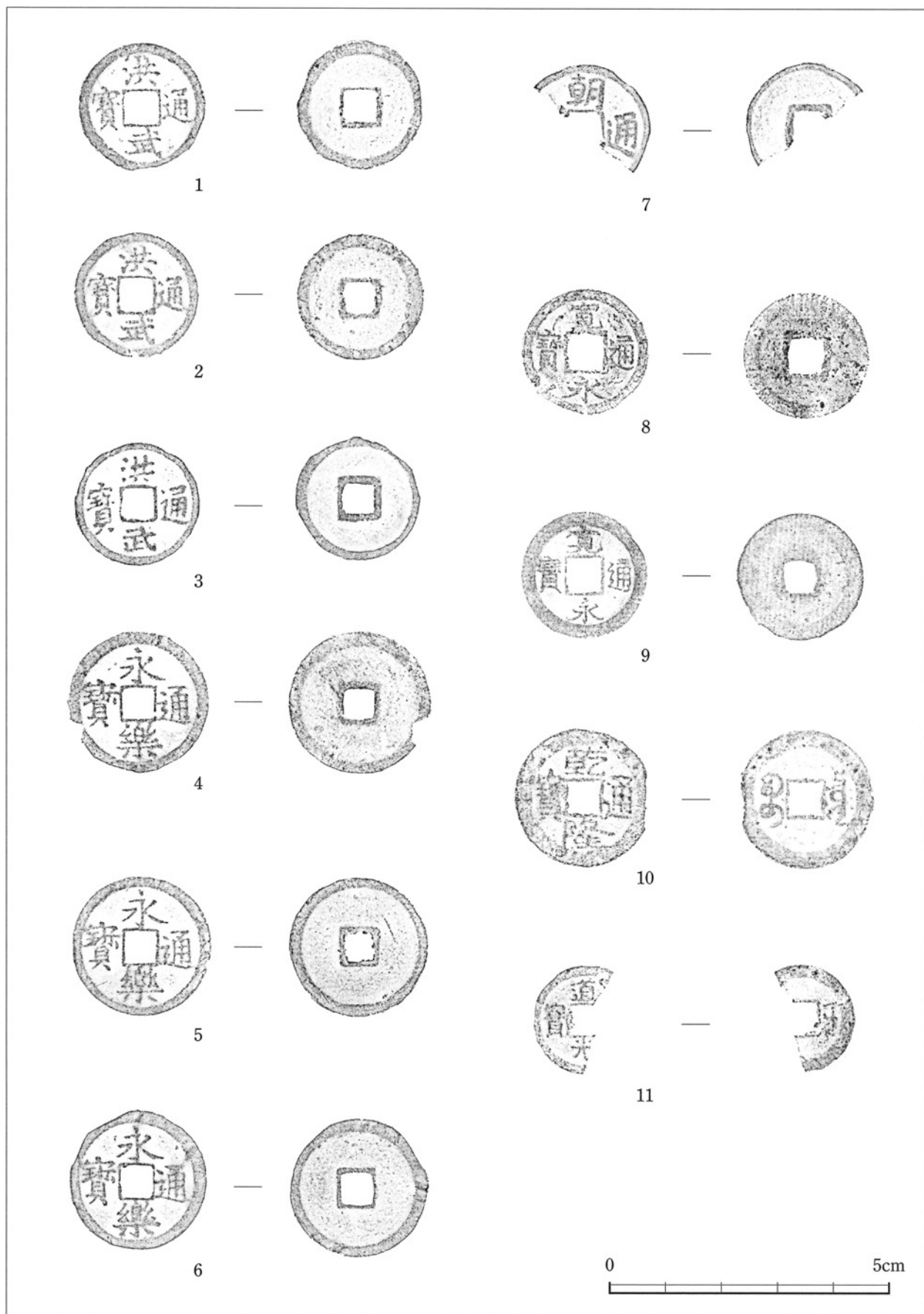


第63図 (図版56) 錢貨 (1~10)

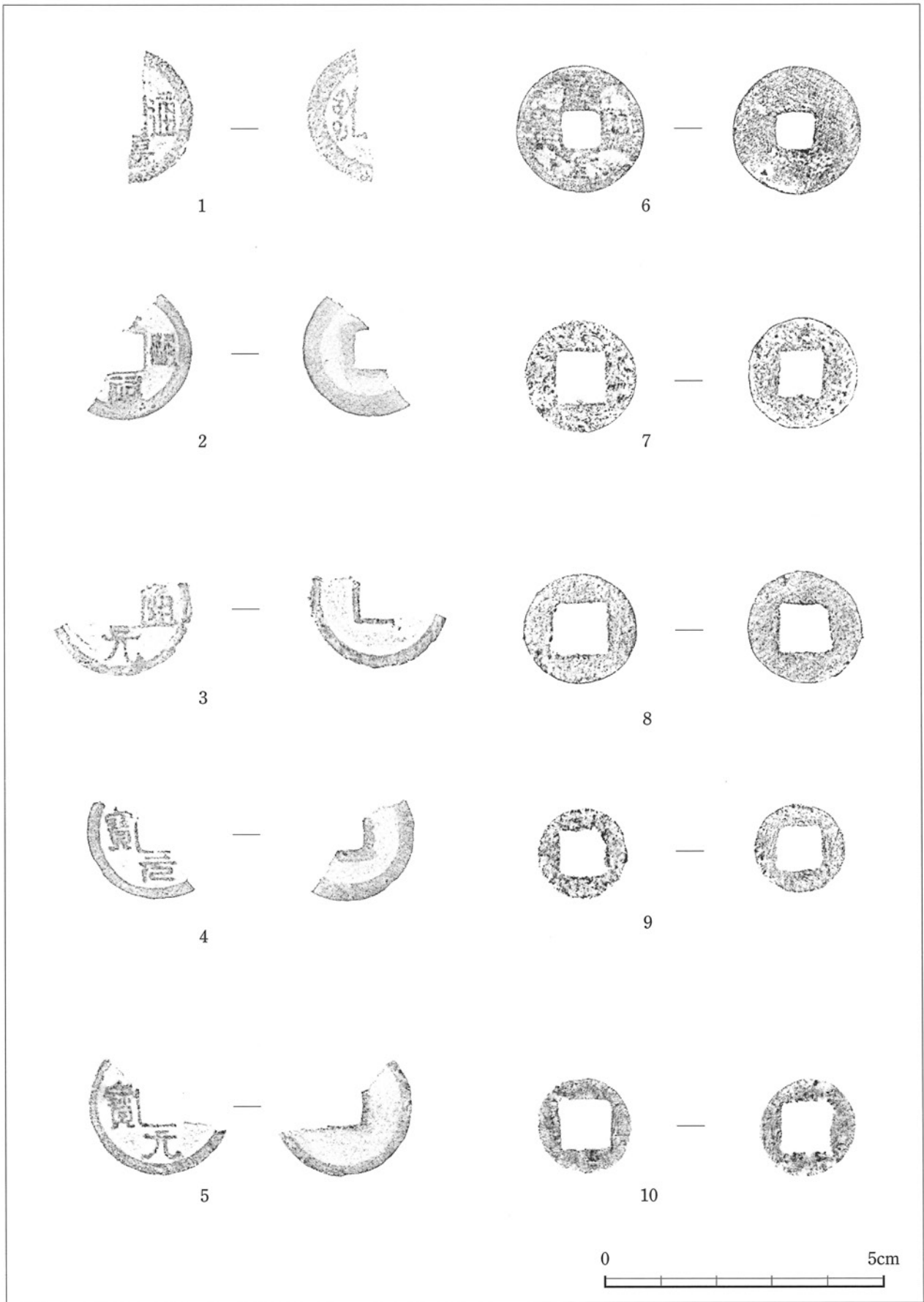


第64図 (図版57) 錢貨 (1~12)





第65圖 (圖版58) 錢貨 (1~11)



第66図 (図版59) 銭貨 (1~10)

## 20. 青銅製品

本地区より得られた青銅製品は、約139点（錢貨は含まない）であった。その殆どは用途不明品であったが、幾つかは用途がわかるものもあった。ここでは用途不明品も含めて報告する。掲載した資料の出土地点・層位・法量等は第29～31表に示した。以下、八双金具より記述する。

### a：八双金具（第67図1～4）

1～4は八双金具と考えられる。1は完形品で全体に長方形を呈する。両端部は魚尾状で体部には丸形の孔を外側へハート形の孔を内側へそれぞれ2孔施す。左右対称の標品である。表面には鍍金が施されているが、部分的に青錆が覆う。2は1の標品と同種のものと思われ、丸形孔より端部にかけての破損品である。表面には鍍金が見られる。本標品は1と比べて薄手で2次的に叩き延ばしたものと思われる。

3も端部の破損品で、1・2に比べると幅広の標品であるが、本標品も2と同様に2次的に延ばし再利用されたものと思われる。表面には鍍金後に沈線と細かい円弧状の点描を施しているが全体の構図は不明。4も3と同様に扁平に引き延ばされものであるが、表面には鍍金は見られない。剥落したものと思われる。体部にハート形の孔の他に約2mmの粗孔が穿たれている。2～4の標品はその形状より2次製品として機能したものと思われる。

### b：鎧金具？（第67図5）

三角状の端部の両サイドに、細かい刻みが見られる。その端部に約2mmの孔が穿たれている。断面をやや「 $\neg$ 」状に成形、鎧本体に貼り付けるものと思われる。鍍金は施されてなく全体に青錆が見られる。

### c：鋏（第67図6）

6は半球の傘状に成形されたもので、内面には軸の剥離痕が見られる。かなり薄手の標品である。

### d：座（第67図7・8）

7は長方形の金具に傘付の割ピンを施したものである。青錆によって両品とも固着している。8も円形の傘付きの割ピンで、その頭部に環状のリング（直径2cm）が付く。

### e：切羽（第67図9）

刀の鏢に添える薄い金具である。楕円形を呈し、周辺にギザギザの刻みが施されている。体部には刀身に合わせて二等辺三角形の孔が穿たれている。

#### f：燭台（第67図10・11）

10は笠部が一部欠けているが、全形が理解できる標品である。笠部には中央に孔が穿たれ、そこへ蠟燭を立てる針部を通して、針部は上端約3/4は尖らせ、残りの下端部には笠部より抜けない様に架かりの段を設け、断面六角形に成形している。笠部の裏面に墨書らしきものが観察されるが判然としない。

11の標品も燭台の上部品であるが、扁平に叩き延ばされたものである。中央の孔は破損が著し。

#### g：釘（第68図1・2）

1・2ともに頭部より一端くびれ先端部へ至る、断面方形の小振りな釘である。表面には青錆が観察されるが、鉄釘と比べる残存状況は良好である。その特質を生かして建築用でなく、調度品などに用いられたものと判断される。

#### h：留具（第68図3・4）

3は調度品の留具と考えられるものである。葉っぱ状に成形し端部で軸が通るように弧状に折り曲げている。体部に本体に接着するための小孔が3箇所穿たれている。実測図の上端の孔には鉄錆が付着しており、鉄釘が用いられたことが窺えられる。

4は扁平な板状のもの断面を長方形に折り曲げたものである。丸味のある端部には約2mmの小孔が穿たれている。

#### i：装飾金具（第68図5～7）

5は端部を葉っぱ状に開き、体部に突起を有するものである。孔は3箇所穿たれているが、中央の孔に前述した突起が充填されている。表面・側面には鍍金が丁寧に施されるが、部分的に青錆が見られる。裏面には鍍金は見られない。

6も端部の標品で全体的に羽状を呈する。上部は弧状に折り曲げられ下部には破損しているが約4mmの孔が穿たれているのが観察される。表面には菊花文と蔓草が沈線によって描かれている。

7は蝶が羽を閉じ、何かに（菊花？）留まっている姿を立体的に模したものである。鍍金は見られない。

#### j：円形状金具（第68図8・9）

薄い扁平のもので、中央に孔が施されている。8の縁は波状に見られるが、破損が著しく判然としない。表面には打痕による円弧文を連続させ紐状に描かれている。また、端部に孔が見られるが破損しているため判然としない。鍍金は見られず青錆が吹き出ている。9は菊花状のもので中心の孔には、2重に折り曲げられた真鍮が割ピン状に施されている。

#### k：指ぬき（第69図1）

内径が約1.9mmで両サイドを細目に成形したものである。幅広の箇所には約1mmの打痕を施されている。

### l：用途不明（第69図2～6）

2は短冊状に破損した標品で、表面に細かい文様が陰刻されている。文様は長軸に沿って幅約6mmで区画され内面に沈線と円弧を組み合わせた文様が描かれている。全体の構図は不明。表面と右側面には鍍金されている。

3の標品は断面「C」字状のもので、表面に鍍金が施されている。その形状より何らかの端部に覆うものと思われる。4は薄い長方形のもので中央に約3mmの孔が穿たれたものである。表裏面に鍍金が施されている。5は渦巻き状標品で表面に細かい打痕が観察される。表面は鍍金が成されている。6の標品は内部を空洞にした円柱状のもので、中央に細い凹が巡る。鍍金は施されていない。

### m：簪（第69図7～9）

簪は総数6点得られた。その中で特徴的な標品を図示した。

7は細身の簪で完形品である。スプーン状の頭部は竿部に対してきつく折り曲げ（ほぼ90度）たものである。首部と竿部は六角形を呈するが、首部下の4cmの箇所で見交差させ頂点をずらしている。

8も細身の完形品で頭部を耳搔き状にしたものである。首部は丸く竿部はかなり薄く扁平である。

9の標品は全体に柳葉状を呈したものである。頭部は僅かに折り曲げ、孔らしきものが観察される。本標品は簪かどうか判然としないが、全体の形状から取りあえず本項に含めた。

### n：煙管（第70図1～8）

煙管は総数15点得られた。

雁首を1～3に示した。1・2は首部に肩を設けるもので、左側面で接合したものである。3は首部に肩を設けず、ラウに至るものである。雁首内にラウの木質が残る。

吸口は4～6に示した。1は肩付の吸口で、接合面が見られるが上下が不明。5・6は細長いもので、肩付が見られないものである。接合面が観察されるが上下は不明。

7・8は火皿より吸口までの全体を青銅で制作されるもので、ラウ部は緩やかに膨らむ形を呈する。7は火皿が欠損したもので、接合面は上面で見られる。8は完形品で接合面が火皿から吸口まで上面において観察される。

第29表 青銅製品（煙管）計測一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	種類	全長	最大幅	火皿径	重量	出土地点
第70図 図版63の 1	雁首	3.9	1.1	0.9	8.2	さー9・Ⅲa層
2	〃	3.6	1.2	0.8	7.5	しー12・Ⅱ層礫敷き面
3	〃	4.6	1.1	0.9	9.4	せー11・Ⅰ層
4	吸口	3.8	1.1	0.7	3.6	しー11・Ⅱ層
5	〃	6.9	1.1	0.7	9.9	しー11・Ⅱ層
6	〃	8.9	1.1	0.7	13.8	しー7・Ⅰ層シーリ
7		11.8	1.0	0.8	8.3	すー7・Ⅰ層
8		19.8	1.0	1.2	44.4	不明

第30表 青銅製品計測一覧

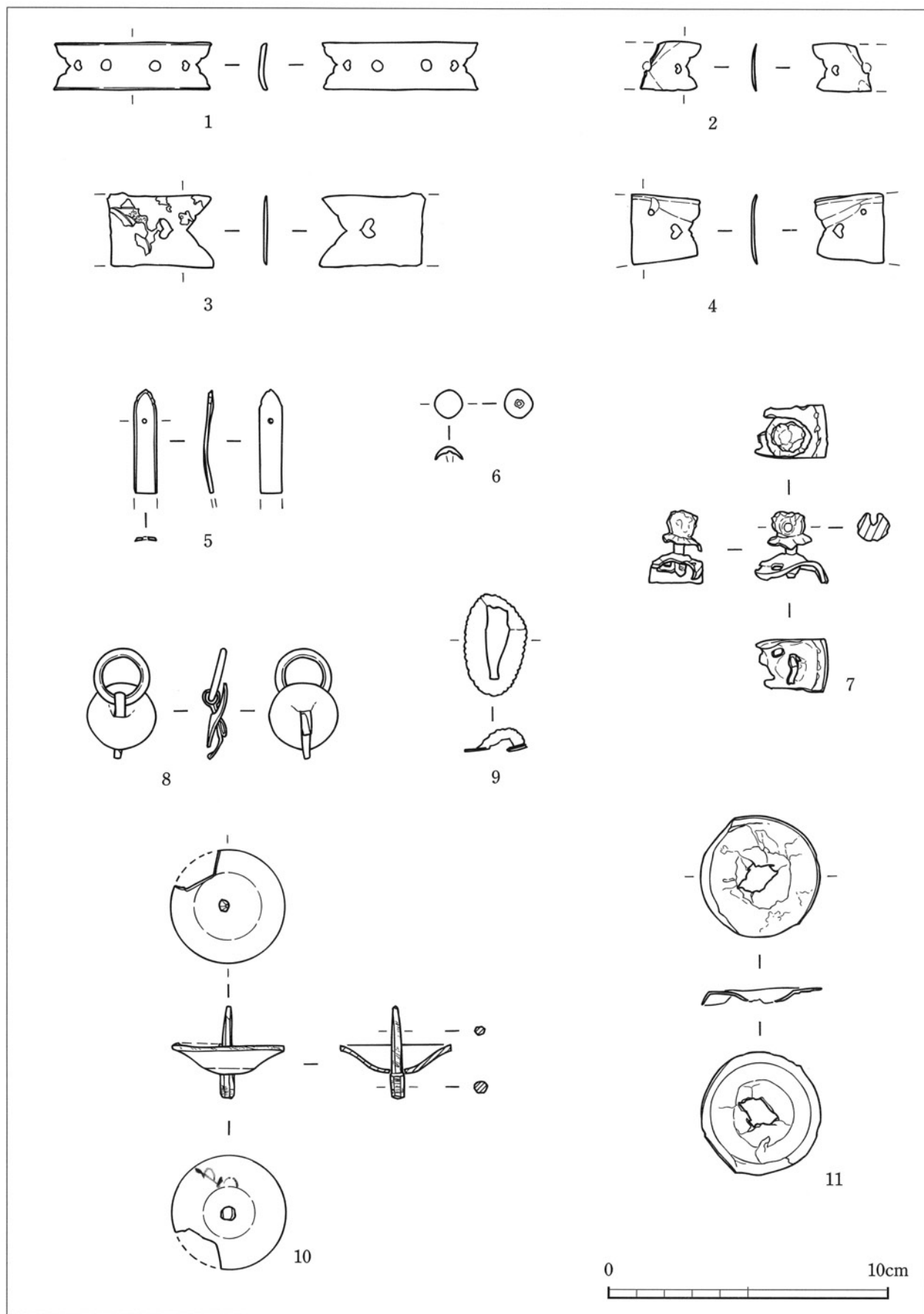
(cm, g)

挿図番号 図版番号	種類	法 量				出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	厚さ	重量		
第67図1 図版60の1	八双金具	5.6	1.7	0.20	9.0	し-11・V層貝溜まり	孔径0.4cm
” 2	”	2.0	1.7	0.05	1.5	し-11・V層貝溜まり	
” 3	”	4.7	3.5	0.10	6.0	う-3・V層	
” 4	”	3.4	3.5	0.10	4.3	すせそ-8,9・II層	孔径0.2cm
” 5	鍔金具	3.7	0.8	0.10	2.1	く-17・V層	孔径0.15cm
” 6	鋌	—	—	0.10	0.5	く-16・V層竪穴状遺構	径1cm
” 7	座	2.6	1.9	0.20	10.3	え-5・V層	高さ2.6cm
” 8	”	—	—	0.05	7.1	す-12・II層	最大径2.4cm リング径2cm
” 9	切羽	3.7	2.2	0.05	2.5	け-4・V層	
” 10	燭台	—	—	0.20	14.9	し-11・I層	最大径4cm 残存高3.3cm
” 11	”	—	—	0.10	8.8	不明・I層	径4.4cm
第68図1 図版61の1	釘	3.6	0.9	0.30	2.7	く-17・II層	
” 2	”	3.9	0.8	0.45	3.1	す-7・IIIa層	
” 3	留具	1.7	2.0	0.10	1.5	く-16・V層竪穴状遺構	孔径0.2cm
” 4	”	2.0	1.1	0.05	1.8	さ-10・IV層	
” 5	装飾金具	3.2	1.7	0.10	3.5	さ-8・V層	孔径0.3cm
” 6	”	6.7	1.8	0.10	8.5	し-11・V層貝溜まり	
” 7	”	3.2	2.0	0.10	3.8	さ-12・V層	
” 8	円形状金具	4.65	2.85	0.10	4.8	こ-12・IV層	
” 9	”	2.95	2.9	0.10	3.2	く-6・IV層	
第69図1 図版62の1	指ぬき	1.4	1.7	0.10	2.6	そ-10・I層	高さ1.5cm
” 2	用途不明	3.5	1.0	0.30	11.5	え-10・I層	
” 3	”	7.7	0.50	0.05	2.9	え-5・V層	
” 4	”	6.3	1.1	0.05	2.3	え-4・IV層	
” 5	”	—	0.30	0.01	1.7	こ-11・V層貝溜まり	
” 6	”	6.0	0.70	0.20	13.2	せ-10・II層磔敷き面	

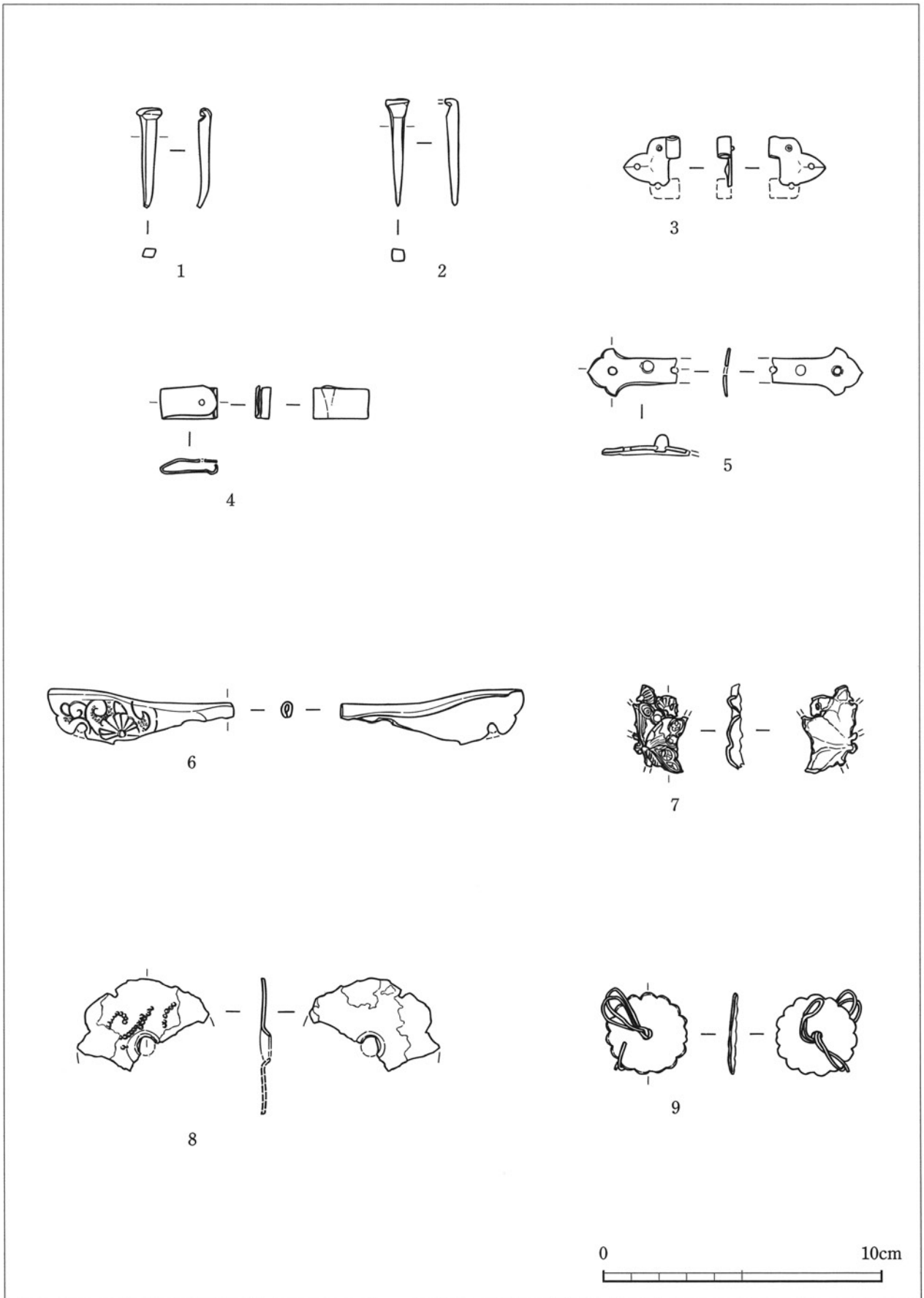
第31表 青銅製品(簪)計測一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	全長	頭部幅	筭部幅		重量	出 土 地 点
			最大	最大		
第69図7 図版62の7	14.5	0.8	0.4	0.2	6.2	す-5・II層磔敷き面
” 8	18.4	0.5	0.6	0.3	7.8	け-15・II層
” 9	8.9	0.65	0.7	0.3	5.2	さ-10・V層

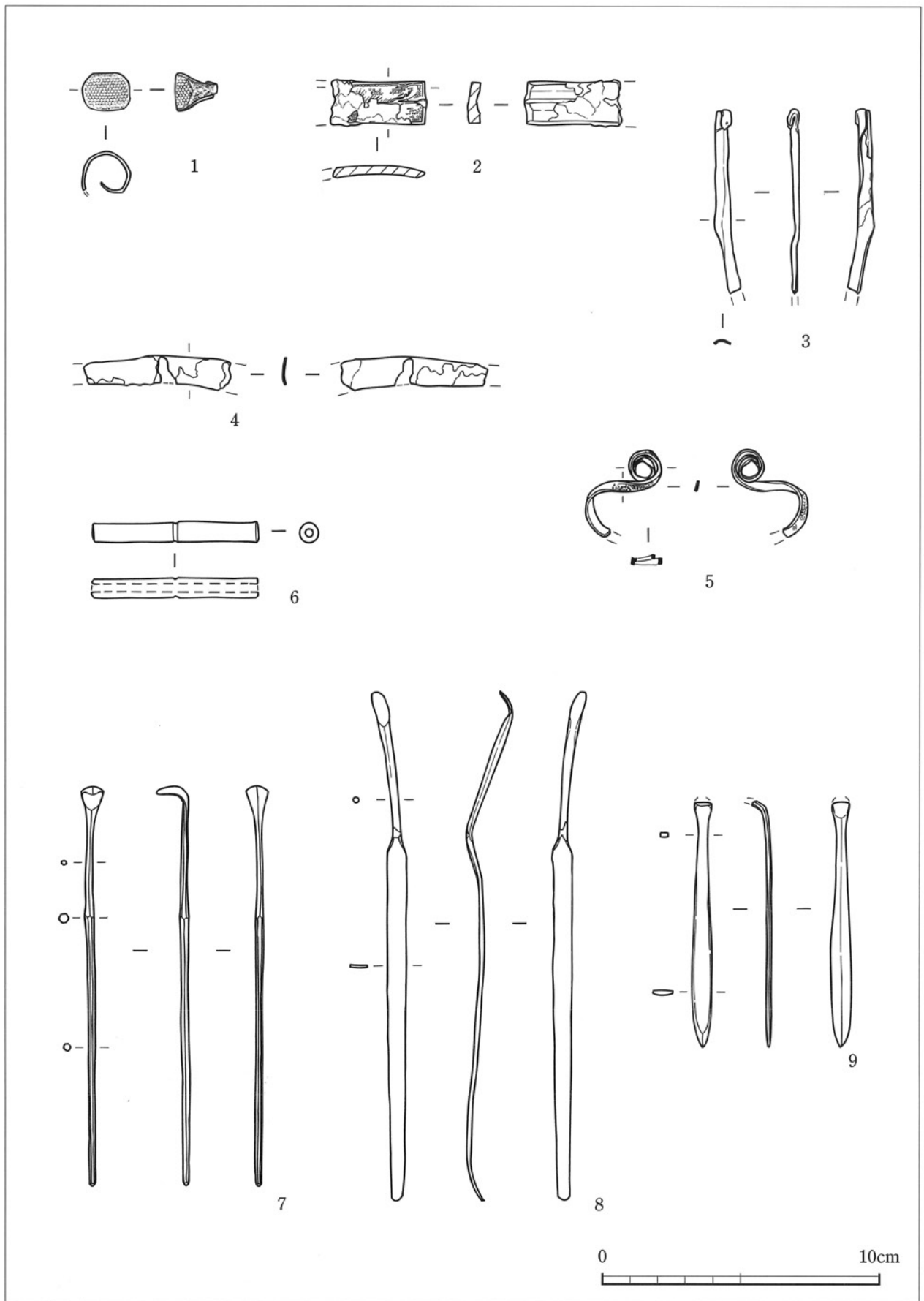


第67図 (図版60) 青銅製品：八双金具 (1~4)・鎧金具 (5)・鋌 (6)・座 (7・8)・切羽 (9)・燭台 (10・11)

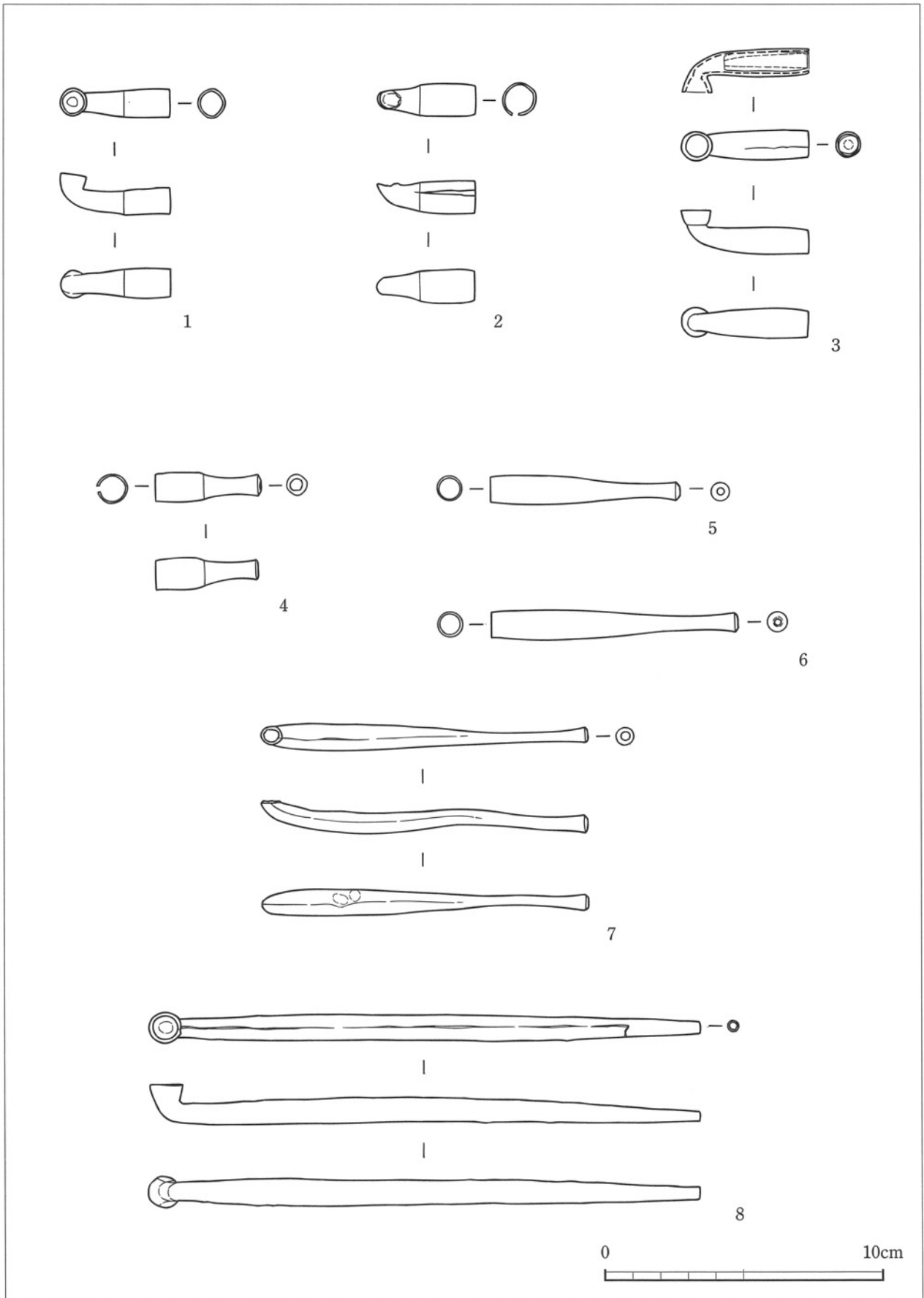


第68図 (図版61) 青銅製品：釘 (1・2) ・留具 (3・4) ・裝飾金具 (5～7) ・円形状金具 (8・9)





第69図 (図版62) 青銅製品：指ぬき (1) ・用途不明 (2~6) ・簪 (7~9)



第70図 (図版63) 青銅製品：煙管 (1~8)

## 21. 鉄製品

第32表に示したとおり、総数264点得られた。その殆どが、鉄錆による腐食が著しく、その種類を判別するのに困難なものであった。中でも、最も多く確認されたものは、鉄釘であった。鉄釘はそのサイズによっていくつかの種類が見られた。

その他に、用途の判明したものには、鉄鋸・刀子・毛抜き・金具類などであった。個々の出土と計測は第33表に示した。以下、鉄釘より略記する。

### a：鉄釘（第71図1～15）

鉄釘は完形・破片を含めて総数207点得られた。その殆どが鉄錆に覆われているが、中には鉄錆が僅かに付着したものも見られた。鉄釘には頭部より細身に成形し鉄錆が不顕著なもの（1～6）と頭部よりやや寸胴に成形し鉄錆が顕著なもの（7～15）とに大きく分けられる。量的には後者が圧倒的に多い。後者は建築用に用いたものと思われるが、前者はその他（調度品など）にも使用された可能性が高い。

また、全形を窺える資料112点を対象に頭部から先端部の長さを1.65cm（5分）刻みに細分を試みた。

その結果、3.4～5.0cm（1寸5分）と6.7～8.3cm（2寸5分）に偏在して見られ、層的には第II層、第V層に集中して出土していることが窺える。

第32表 鉄製品出土一覧

層序	種類																		合計			
	釘	鋸	ヤリ鉋	錐	棒状製品	鋸	刀子	ナイフ	毛抜き	金具類	錘	針	蹄鉄	叉状製品	鉄球	急須のツル	鉄鍋?	釣り針		板状製品	不明	
I層	14				2	1			1	1			1	1		1	1	1	1	1	1	26
II層	53	1		1	1		1	1			1				1					2	3	65
II層礫敷き面	7			1									1								1	10
IIIa層	22													1						3		26
IIIb層	5																					5
IV層	10						1															11
V層	38	1		1		3				4										1	3	51
V層貝溜り	39	1				1						1								3	1	46
基壇内V層	4																			1		5
V層竪穴状遺構	1																					1
II層根固め石内	1	1																				2
土壇 No.6																					1	1
不明	13		1																		1	15
合計	207	4	1	3	3	5	2	1	1	5	1	1	2	2	1	1	1	1	1	12	10	264

**b : 鉄鏝 (第72図1~4)**

本地区より5点得られた。いずれも、矢頭が直刃の小振り鉄鏝である。1~3はほぼ同形のタイプのもので、4がやや細身のものである。2は盛り土からの採集品であるが、その形状や他の製品と比較検討すると第V層の時期に帰属するものと思われる。

**c : 刀子 (第72図5・6)**

2点を示した。6は全形をやや知り得る資料で、切先から茎部に架け棟が反り、茎部で一端屈曲するものである。刃部の断面は三角形を呈し、僅かに残った茎部は長方形である。刃渡りが約11.3cmを測り、重さは25.6gを計る。

5も破損品であるが似たような造りである。

**d : 毛抜き (第72図7)**

完形品であるが、錆が全体に見られ腐食が著しい。全長5.8cm、幅5mm、厚さが約1mm、重さは2.5gを測る。かなり薄手の標品である。

**e : 金具類 (第72図8~12)**

8は頭部に円弧を設けた一次製品である。9は端部を三角状に折り曲げ頭部を作ったものである。10は前2者とは異なり幅広のもので、略楕円状に折り曲げたものである。

11・12は端部を逆「し」の字状に折り曲げたものである。

**f : 用途不明 (第72図13)**

13に示したもので、幅約1cmで厚さが4mmの細長い標品である。両端は欠損しているが、上端部中央に孔が僅かに観察される。針のように用いたか判然としない。

第33表 鉄製品計測一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	種類	最大長	最大幅	厚さ	重量	グリッド	層序
第72図 図版65の1	鏝	6.6	1.6	1.0	10.5	さー10	V層
" 2	鏝	6.7	1.5	1.1	11.6	不明	I層
" 3	鏝	6.5	1.5	1.2	15.4	えー5	V層
" 4	鏝	8.0	1.2	0.9	11.4	さー11	V層貝溜り
" 5	刀子	6.6	1.3	0.4	9.3	さー10	IV層
" 6	刀子	10.8	1.6	0.7	25.6	さー10	II層
" 7	毛抜き	5.8	6.0	0.1	2.5	せー10	I層
" 8	金具類	4.1	1.6	0.5	6.9	さー12	V層
" 9	金具類	2.8	2.3	0.8	7.3	くー5	V層
" 10	金具類	2.3	2.0	0.5	8.9	さー12	V層
" 11	金具類	6.0	0.8	0.4	7.5	そー10	I層
" 12	金具類	4.2	1.3	0.6	9.2	えー6	V層
" 13	用途不明	6.9	0.9	0.3	5.2	こ・さー11	V層貝溜り

第34表 鉄製品（釘）計測一覧

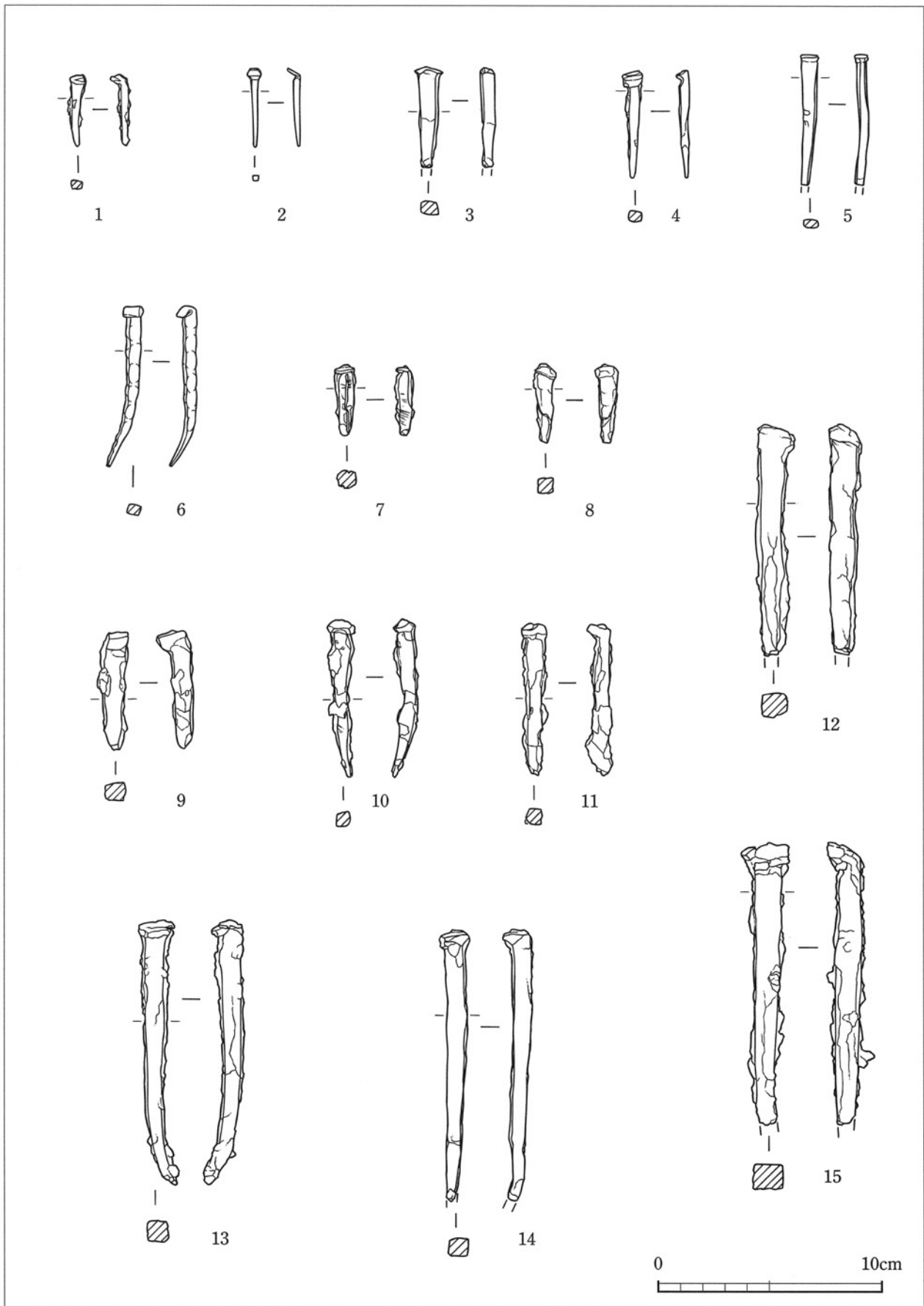
(cm, g)

挿図番号 図版番号	計測No.	種類	最大長	最大幅	厚さ	重量	グリッド	層序
第71図1 図版64の1	219	釘	3.2	0.5	0.4	1.5	しー10	Ⅲa層
〃 2	229	釘	3.5	0.2	0.2	0.8	さー12	V層
〃 3	227	釘	4.5	0.8	0.6	8.1	せー11	Ⅱ層
〃 4	218	釘	4.8	0.6	0.5	3.2	さー11	Ⅱ層
〃 5	226	釘	5.9	0.7	0.4	5.7	すー9	Ⅱ層
〃 6	228	釘	7.2	0.5	0.5	8.7	さー12	V層
〃 7	224	釘	3.1	0.8	0.8	3.3	すー7	Ⅱ層
〃 8	223	釘	3.5	0.7	0.7	4.0	すー6	Ⅱ層
〃 9	9	釘	5.3	0.9	0.8	14.1	うー7	Ⅱ層
〃 10	12	釘	7.1	0.6	0.6	9.6	さー11	V層貝溜まり
〃 11	100	釘	6.8	0.8	0.7	9.8	さー11	V層
〃 12	225	釘	10.4	1.2	1.1	41.0	さー10	Ⅳ層
〃 13	221	釘	11.9	1.0	1.0	38.5	さー11	V層
〃 14	222	釘	12.2	0.8	0.8	33.2	しー11	Ⅱ層
〃 15	220	釘	12.7	1.3	1.3	62.7	うー3	Ⅳ層

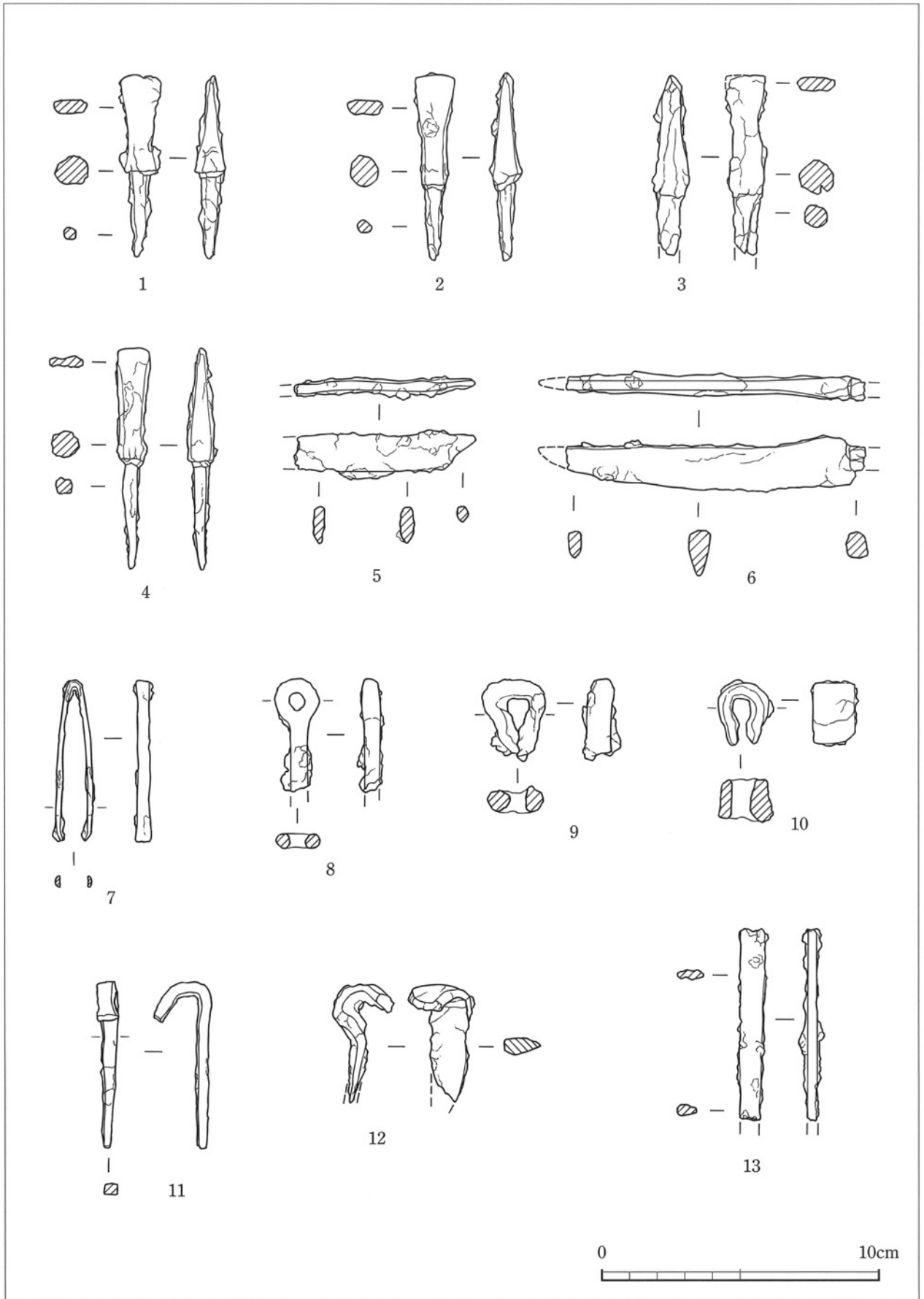
第35表 鉄製品（釘）長さ別出土状況

(cm)

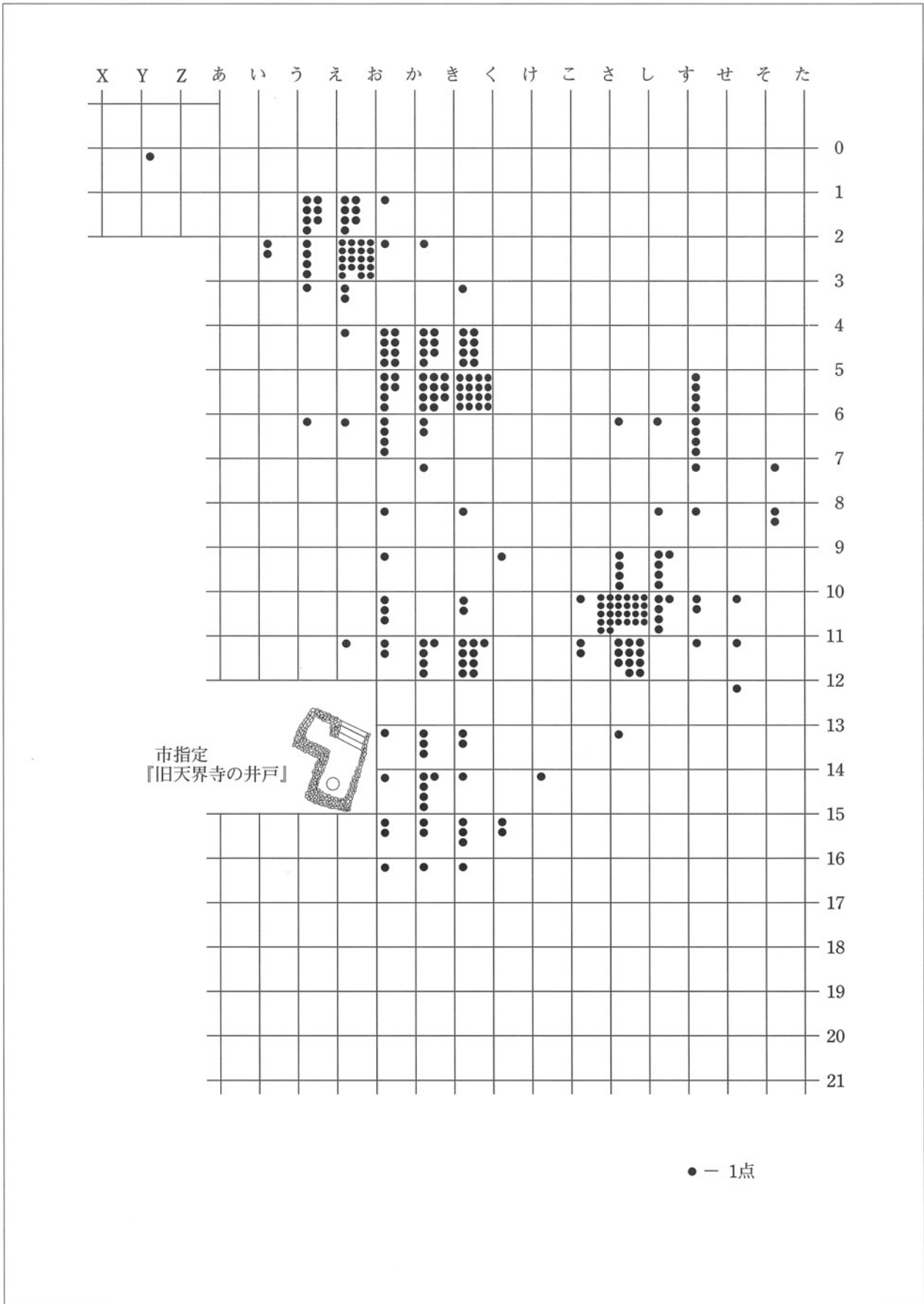
層序	長さ	5分	1寸	1寸5分	2寸	2寸5分	3寸	3寸5分	4寸	4寸5分	5寸	合計
		0.5~1.7	1.7~3.3	3.4~5.0	5.1~6.6	6.7~8.3	8.4~9.9	10.0~11.6	11.7~13.2	13.3~14.9	15.0~16.5	
Ⅰ層				1	1	1	1					4
Ⅱ層			1	12	6	6	3		3			31
Ⅱ層磔敷き面			2	1				1				4
Ⅲa層			1	8	2						1	12
Ⅲb層				1				1				2
Ⅳ層			1	2	1			1	1			6
V層			1	8	6	2	1	2	1			21
V層貝溜まり			1	11	4	5	1					22
Ⅱ層根固め石内					1							1
基壇内Ⅲ層磔敷き面				1								1
基壇内V層					1				1			2
V層竪穴状遺構					1							1
不明			1	4								5
合計		0	8	49	23	14	6	5	6	0	1	112



第71図 (図版64) 鉄製品：釘 (1~15)



第72図 (図版65) 鉄製品：鍬 (1~4) ・刀子 (5・6) ・毛抜き (7) ・金具類 (8~12) ・用途不明 (13)



市指定  
『旧天界寺の井戸』



第73図 釘出土分布図



## 22. 玉類

本地区より出土した玉類は、第36表に示したとおり62点の出土が見られる。街路地区と同様に第IV層以外の全ての層から得られている。層位的には第II・III層の上位層からの出土が顕著である。

種類としては、勾玉・棗玉・平玉・丸玉等<sup>註</sup>が得られた。量的には平玉が最も多く、色調も淡い緑色のものが圧倒的であった。その玉の中には、貝の真珠層を張り付けたと思われる資料も幾つか見られた。その平玉を2種に細分を試みた。以下、勾玉より記述するが、掲載した資料を含め出土したものについての観察は、第37表に譲る。参考されたし。

### a：勾玉（第74図1～3）

勾玉は3点得られている。いずれも小振りなものである。1は全体を淡黄銅色の皮膜で覆って光沢が見られる。頭部の背面部が一部剥落しており、内部の淡い緑色の本体部が観察される。2は表面の皮膜が剥落したものと見られ全体に緑色を呈する。1・2ともガラス質と思われる。

3は端部片で淡い灰色を呈する。表面は丁寧に研磨が施され光沢が見られる。石製品と思われる。

### b：棗玉（第74図4・5）

棗玉は3点得られている。その内2点を図示した。4は淡い桃褐色を呈し、白い筋が螺旋状に体部を巡る。5も白・緑・茶色を練り混み、螺旋状に巻き上げたものである。あと1点は図示していないが計測番号4に類似したものである。

### c：平玉（第74図6～16）

丸玉の上下を僅かに押し潰したもので、2種に細分した。

1種：縦軸が直径よりも長いもの（第74図6～9）

2種：縦軸が直径よりも短いもの（第74図10～16）

### d：丸玉（第74図17）

丸玉は僅か2点のみの出土である。その内の1点のみを図示した。色調は白濁色を呈し、半透明なものである。

### f：装飾品？（第74図18）

直径1.5cmの赤玉で、下部に割ピンが装着されている。赤玉の表面は貝の真珠層によって薄く覆うが、剥落が著しい。割ピンは鉄錆の付着が顕著である。さ-10の第V層貝溜まりよりの出土である。

第36表 玉類出土一覧

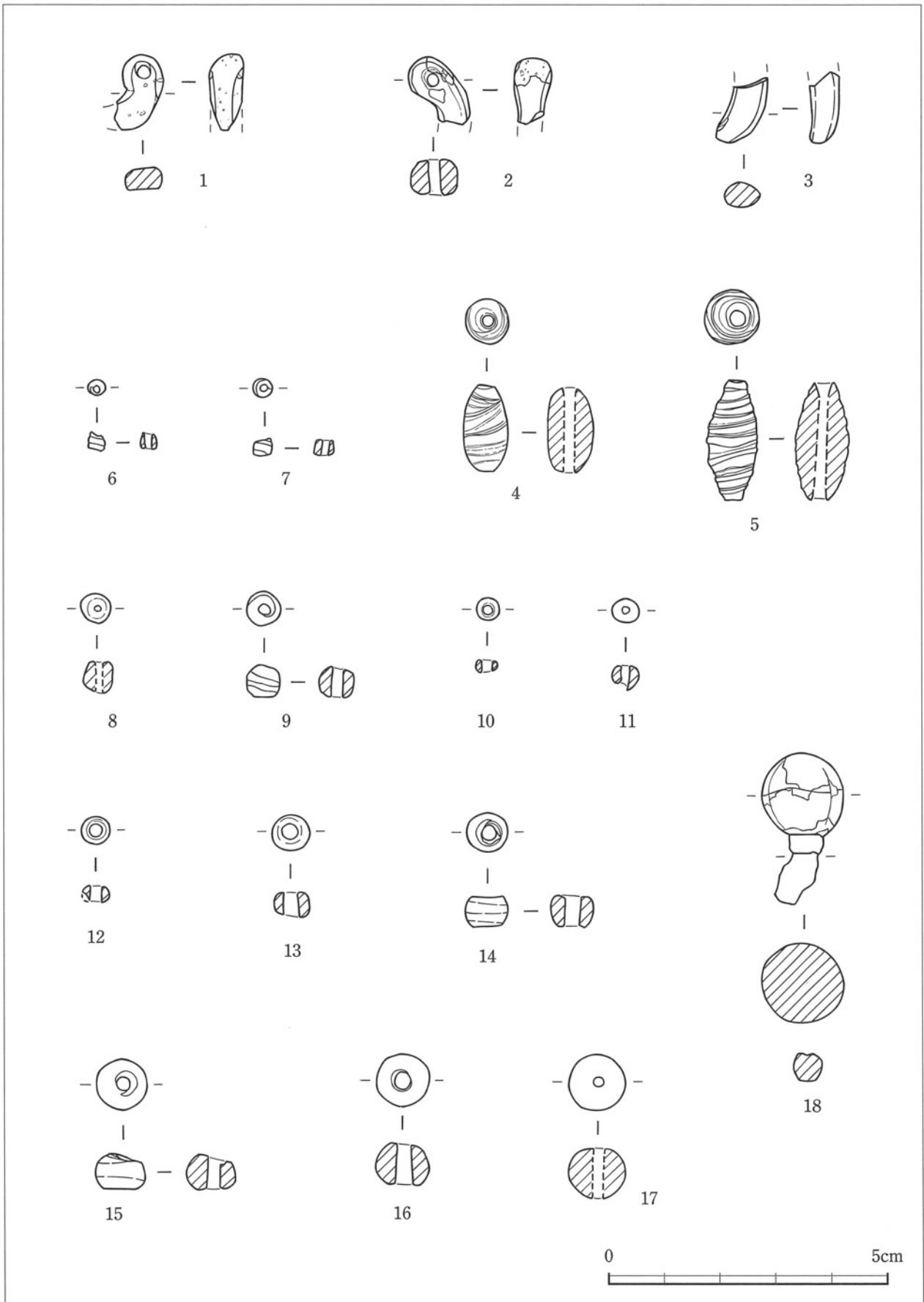
層序	分類	勾玉	棗玉	平玉		丸玉	合計
				1種	2種		
I層			1	3	12	1	17
II層		1		3	10	1	15
II層磔敷き面			1	2	2		5
IIIa層		1	1	3	11		16
IV層							0
V層				1	1		2
V層炭集中部				1			1
基壇内V層		1			1		2
II層根固め石内					2		2
不明					2		2
合計		3	3	13	41	2	62

〈註〉藤田富士男『考古学ライブラリー52玉』ニューサイエンス社 1989年

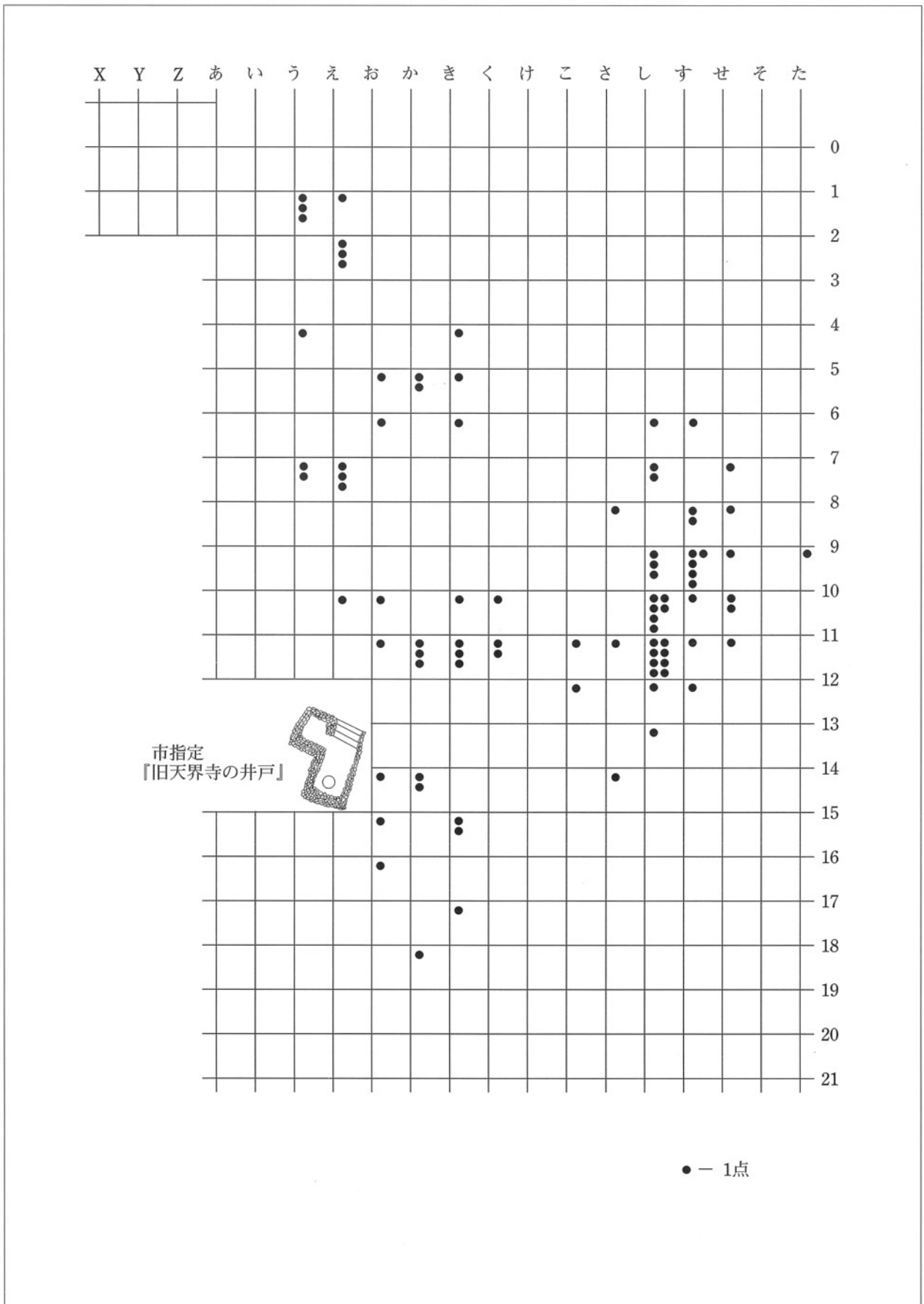
第37表 玉類観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	種類	形状	法 量				色 調	備 考
				最大径	高さ	孔径	重量		
第74図1 図版66の1	せー12 第Ⅱ層	勾玉		1.43 (長さ)	0.5 (幅)	0.25	0.775	淡緑色	尾部を欠損する。 風化が進み条線が縦位に観察される。
"	2 えー8 基壇内V層	"		1.2 (〃)	0.85 (〃)	0.2	0.898	黄銅色	尾部は欠損。表面は皮膜が覆う。体部は淡緑色。 光沢あり。
"	3 すー11 第Ⅲa層	"		1.4 (〃)	0.51 (〃)		0.553	緑白色	頭部は欠損。光沢あり。 石製品？
"	4 すー12 Ⅱ層礫敷面	棗玉	縦楕円	0.74	1.55	0.18	1.209	淡桃色 白色	体部の淡桃色と白い筋が巻き上げている状況 が観察される。
"	5 しー12 第Ⅲa層	"	"	0.94	2.15	0.24	2.647	淡緑色・白 色・赤茶色	3色による巻き上げ。
"	6 さー12 第Ⅴ層	平玉	長方形	0.28	0.26	0.12	0.021	淡緑色	表面に巻き上げの稜線が見れる。 両端部に裁断痕が残る。
"	7 しー10 第Ⅲa層	"	"	0.31	0.27	0.12	0.035	"	"
"	8 しー12 第Ⅰ層	"	"	0.55	0.58	0.2	1.323	赤色	僅かに気泡や横位に走る条線が観察される。
"	9 えー8 基壇内V層炭集中部	"	"	0.59	0.56	0.2	0.228	淡青色	側面には、横位に走る条線が残る。
"	10 しー10 第Ⅲa層	"	扁平	0.38	0.22	0.19	0.039	淡緑色	表面に貝粉が僅か残る。 横位の条線も観察される。
"	11 くー11 第Ⅱ層	"	"	0.49	0.45	0.16	0.113	淡緑色	いわゆるソーダ色。光沢はなし。 下端部に裁断痕が残る。
"	12 かー12 第Ⅰ層	"	"	0.5	0.34	0.17	0.086	淡緑色	表面に貝の真珠層の皮膜が僅かに観察される。 僅かに横位に走る条線が残る。
"	13 くー12 第Ⅱ層	"	"	0.67	0.46	0.29	0.316	淡青色	表面に貝粉が見られるが判然としない。 側面には、横位に走る条線が残る。
"	14 えー8 基壇内V層	"	"	0.73	0.53	0.35	0.356	"	表面に貝の真珠層の皮膜が僅かに観察される。 僅かに横位に走る条線が残る。
"	15 さー9 第Ⅴ層	"	略台形	0.9	0.64	0.36	0.558	淡白色	透明。 部分的に剥離し白濁色が表面に観察される。
"	16 しー10 第Ⅲa層	"	"	0.94	0.76	0.32	0.792	"	"
"	17 しー12 第Ⅰ層	丸玉	円形	1.02	0.89	0.20	1.323	"	半透明。全体に白濁色を呈する。 孔径が小さく比較的重量感のある標品。
"	18 さー10 V層貝溜まり	"	"		1.5		5.2	赤 色	表面に貝の真珠層の皮膜が僅かに観察される。僅かに 横位に走る条線が残る。金属部を含めて残存長2.2cm
8	しー11第Ⅲa層	平玉	扁平	0.39	0.22	0.19	0.033	淡緑色	表面に貝粉が見られるが判然としない。
9	しー11第Ⅲa層	"	略台形	0.9	0.82	0.33	0.775	淡青色	透明。光沢あり。
10	しー11第Ⅲa層	"	長方形	0.38	0.32	0.14	0.064	淡緑色	横位に条線が走る。
11	しー11第Ⅲa層	"	"	0.32	0.25	0.13	0.034	"	いわゆるソーダ色。裁断痕が残る。
13	すー10第Ⅲa層	"	扁平	0.35	0.67	0.19	0.125	淡緑色	2個連結。裁断痕あり。
14	すー10第Ⅲa層	"	"	0.35	0.22	0.15	0.036	"	表面に貝の真珠層の皮膜が観察される。
15	第Ⅲa層	"	"	0.47	0.33	0.16	0.115	"	"
16	第Ⅲa層	"	"	0.41	0.31	0.12	0.095	芥子色	本来は白玉？。風化が著しい。
17	第Ⅲa層	"	略台形	1.17	0.99	0.36	1.601	"	" 半透明。
18	第Ⅲa層	"	"	0.44	0.41	0.14	0.144	淡緑色	透明。
19	しー13第Ⅲa層	"	扁平	0.4	0.24	0.17	0.037	緑緑色	表面に貝の真珠層の皮膜が観察される。

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	種類	形状	法 量				色 調	備 考
				最大径	高さ	孔径	重量		
20	う-8 第Ⅱ層礫敷き面層	平玉 1	長方形	0.28	0.22	0.16	0.021	〃	表面に気泡や条線がみられる。光沢はなし。
23	さ-15 第Ⅱ層	〃 1	〃	0.32	0.38	0.13	0.046	〃	いわゆるソーダ色。表面に真珠層の皮膜が観察される。
24	し-8 第Ⅱ層	〃 2	扁平	0.3	0.25	0.19	0.024	〃	〃
25	し-8第Ⅱ 層根固内	〃 2	〃	0.35	0.23	0.16	0.034	〃	表面に貝の真珠層の皮膜が観察される。
26	し-9 第Ⅱ層	〃 2	〃	0.27	0.16	0.13	0.013	〃	いわゆるソーダ色。表面に真珠層の皮膜が観察される。
27	し-9 第Ⅱ層	〃 2	—	0.23	0.14	0.1	0.005	〃	〃 表面に真珠層が観察されるが判然としない。
29	し-12 第Ⅰ層	〃 1	略台形	0.54	0.4	0.12	0.156	白色	全体に風化が著しく白濁色を呈する。
31	し-12 第Ⅰ層	〃 1	長方形	0.77	0.83	0.14	0.848	〃	半透明。
32	し-12 第Ⅱ層根固	〃 2	扁平	0.44	0.27	0.23	0.051	淡緑色	表面に条線がみられる。光沢はなし。
33	し-14 第Ⅱ層礫敷面	〃 1	長方形	0.51	0.47	0.16	0.137	〃	〃。側面に陥没がみられ内部、白濁色が観察される。
34	す-7 第Ⅱ層	〃 2	扁平	0.35	0.23	0.15	0.043	淡緑色	表面に貝の真珠層の皮膜が観察される。
35	す-9 第Ⅱ層	〃 2	〃	0.35	0.25	0.14	0.033	白色	全体に風化が著しく白濁色を呈する。
36	す-9 第Ⅱ層	〃 2	扁平	0.36	0.2	0.14	0.026	淡緑色	孔がずれている。表面に条線がみられる。光沢はなし。
37	せ-7 第Ⅱ層	〃 1	長方形	0.34	0.31	0.18	0.057	赤紫色	表面に条線がみられる。
38	せ-8 第Ⅱ層	〃 2	略台形	0.44	0.33	0.15	0.113	淡緑色	透明。裁断痕が観察される。
39	せ-11 第Ⅱ層	〃 2	〃	0.45	0.36	0.22	0.086	〃	いわゆるソーダ色。光沢なし。条線が見られる。
40	せ-11 第Ⅱ層	〃 1	長方形	0.36	0.37	0.16	0.047	〃	〃。表面に捻りの凹線、端部に裁断痕が観察される。
41	た-10 第Ⅱ層	〃 2	扁平	0.28	0.18	0.1	0.023	青紫色	光沢なし。
42	う-5 第Ⅰ層	〃 2	略台形	0.36	0.29	0.22	0.053	淡緑色	表面に条線がみられる。
43	う-8 第Ⅰ層	丸玉	円形	1.21	1.19	0.23	0.899	白玉	半透明。風化が著しい。
44	え-11 第Ⅰ層	平玉 2	略台形	0.4	0.33	0.15	0.073	淡青色	表面に条線がみられる。端部に裁断痕が観察される。
45	く-12 第Ⅰ層	〃 2	〃	0.4	0.31	0.13	0.067	淡緑色	透明。表面に気泡や条線がみられる。
47	し-11 第Ⅰ層	棗玉	縦楕円	0.75	1.42	0.16	1.089	淡桃色	白条線が巻き上げ状態で観察される。
48	し-11 第Ⅰ層	平玉 2	扁平	0.47	0.3	0.18	0.079	淡緑色	孔は長楕円、表面に気泡が見られる。光沢なし。
49	し-12 第Ⅱ層礫敷面	〃 2	〃	0.38	0.2	0.2	0.036	〃	表面に真珠層が観察されるが判然としない。
51	す-13 第Ⅱ層礫敷面	〃 2	〃	0.41	0.29	0.11	0.095	〃	〃。金色に輝く箇所あり。
52	第Ⅰ層	〃 2	〃	0.43	0.24	0.15	0.066	〃	透明。表面に気泡や条線がみられる。
53	第Ⅰ層	〃 2	〃	0.4	0.24	0.18	0.058	〃	光沢なし。条線が観察される。
54	第Ⅰ層	〃 2	略台形	0.34	0.3	0.16	0.034	〃	いわゆるソーダ色。光沢なし。条線あり。
55	不明	〃 2	扁平	0.41	0.26	0.18	0.061	〃	光沢なし。気泡や条線が観察される。
56	不明	〃 2	略台形	0.32	0.24	0.14	0.027	〃	〃
57	せ-10 第Ⅰ層	〃 2	〃	0.94	0.47	0.17	0.183	〃	いわゆるソーダ色。光沢なし。条線あり。
61	こ-12 第Ⅰ層	〃 2	扁平	0.35	0.2	0.15	0.039	〃	透明。条線が観察される。
62	す-10 第Ⅰ層	〃 2	〃	0.45	0.2	0.15	0.069	〃	気泡と条線が観察される。



第74图 (图版66) 玉類：勾玉 (1~3) · 棗玉 (4·5) · 平玉 (6~16) · 丸玉 (17) · 裝飾品? (18)



第75図 玉類出土分布図

## 23. 石製品

石製品は碁石・砥石などが得られている。その他に用途の不明な資料も出土している。以下、碁石より略述する。各資料の観察は第38表に示した。

### a：碁石（第76図1～5）

本地区からは10点得られた。良好の資料を第76図1～5に示した。分類概念は街路地区の報告書に依った。その中で5の資料は淡い茶褐色を呈し、素地が陶質土器に類似したものである。

本標品は、碁石の代用品かと思われる。本標品は石製品ではないが、碁石と捉え取りあえず本項に含めた。

第38表 石製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	分類	径(幅) 厚さ 重量	観 察 事 項	出土地点
第76図 1 図版67の 1	碁石	I-W	2.2 0.7 3.7	白色。表面に剥離痕が見られ 底面はガラス質皮膜が残り光 沢を帯びる。2次焼成品？	く-12 I
” 2 ” 2	”	II-W	2.2 0.6 4.2	乳白色で光沢を帯びる。	し-11 II
” 3 ” 3	”	II-B	2.1 0.5 2.7	灰黒色。	く-12 I
” 4 ” 4	”	”	2.2 0.5 3.5	黒色。光沢を帯びる。	く-12 I
” 5 ” 5	碁石 代用品	?	2.2 0.5 3.2	土器質で淡茶褐色。断面を凸 型を呈す。	し-11 I
” 6 ” 6	砥石	短冊型	1.8 0.7 10.4	頂部は塔型に調整。角は丁寧 に研磨。裏面は平坦に研磨。	い-4 V
” 7 ” 7	”	”	1.8 0.6 8.9	頂部は平坦に成形。 裏面は平坦に研磨。	え-10 I
” 8 ” 8	”	不定形	— — 16.7	淡い茶褐色の軽石。表面に小 孔が見られる。	え-10 III a

### b：砥石（第76図6～8）

第76図6～8に示した。6・7は短冊状の砥石で下端部を欠損した資料である。上端部には紐を通すための孔が穿たれている。

8は軽石製の砥石で全体の断面が「C」字状を呈する。上端部には幅約1.5cmの「U」字状の凹部が見られる。主に正面と上端部が使用したものと思われる。その他にも、裏面や側面に磨痕が残る。

### c：用途不明

第76図9～11に示した。9は扁平の石板状を呈するものである。表面・側面は丁寧に研磨が施されているが、裏面は石材の自然面が観察され節理面で剥がれたようである。また、裏面には右側へ約1cmの鉄錆が観察される。残存長は5.5cm、横幅3.3cm、厚さ0.4cm、重量11.1gを計る。しー12の第V層より出土。

10・11は手触りが滑らかなもので鑽石と思われる。10は表面に透かし彫りを施したものである。11も丁寧に研磨調整が施されたものである。両品はセットと思われる。10の法量が残存長4.2cm、残存幅が2.6cm、重量8.78gを計る。こー14の第IV層より出土。11が4.6cm、幅が2.1cm、重量3.82gを計る。こー12の第V層より出土。

## 24. 陶製品

人形と用途不明の2種が得られた。以下、人形より略述する。個々の観察は第39表に示した。

### a：人形（第77図1～4）

第77図1～4に示した。1は袈裟を纏った坊主の立像の人形と思われるものである。内部は空洞に成形され、底面には約4mmの孔が穿たれている。

2は獣形の人形で眉と目の部分が観察される。獅子（シーサー）の顔面かと思われる。3・4は直接は接合できないが、同一個体と思われるものである。魚の背鰭から尾鰭の型物で、裏面に張り合わせの箇所が観察できる。表面の色調は淡い黄銅色を呈しているが、部分的に白化粧土の付着が観察できる。元々は全体的に白化粧土が塗られていたものと思われる。

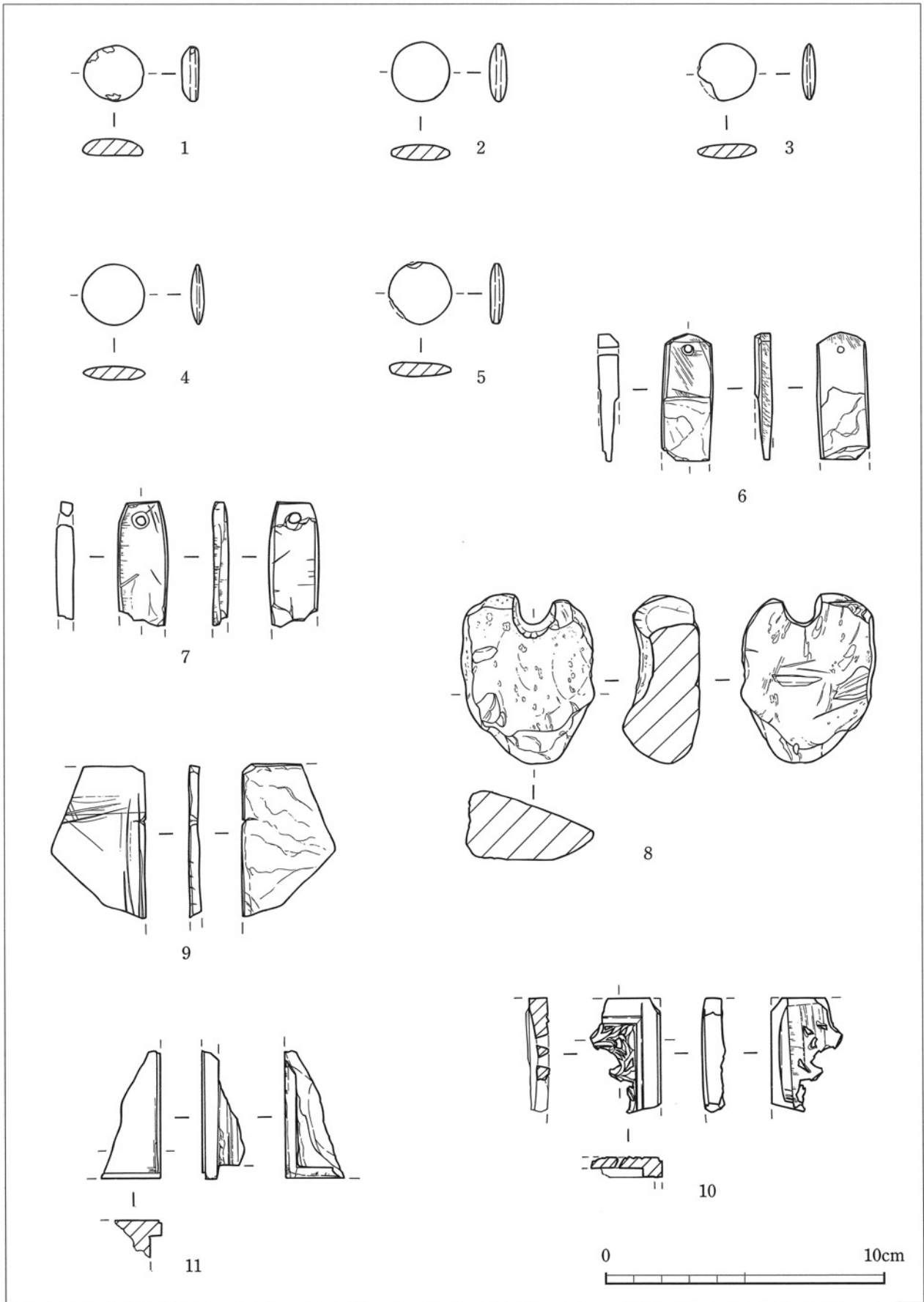
### b：用途不明（第77図5）

第77図5に示したもので、上端部に角を残し方形に破損したものである。表面には型押しにより右回転の巴文が施されている。裏面と上端部には炭痕の付着が観察される。色調は表裏面とも橙褐色を呈するが、芯部は灰褐色である。素地は粗粒子で茶褐色の粒子やガラス質の鉱物が散見できる。特にガラス質の鉱物はキラキラ反射して目に付く。さー7の第V層より出土。

第39表 陶製品（人形）観察一覧

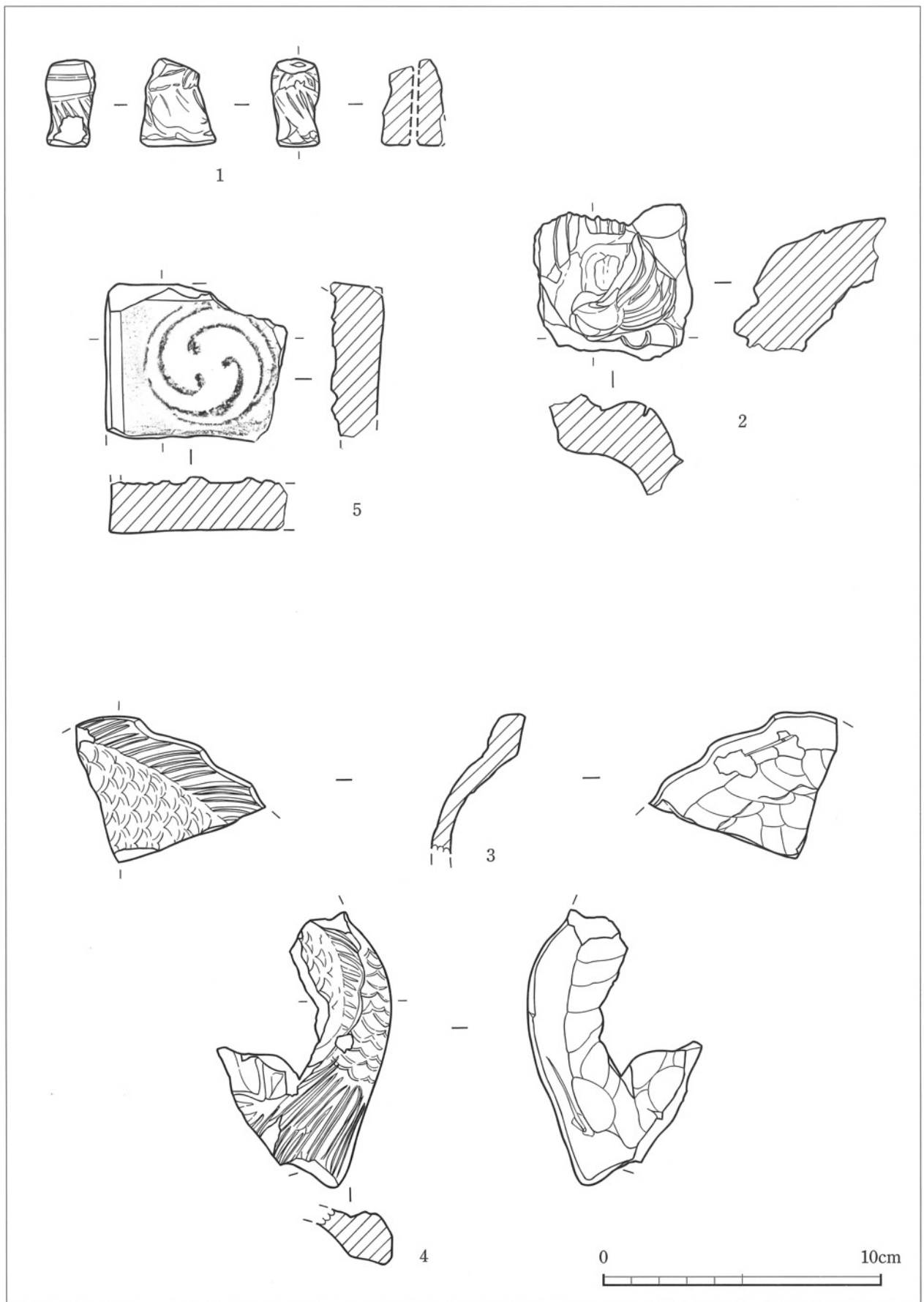
挿図番号 図版番号	出土地点	分類	径(幅) 厚さ 重量	観察事項
第77図 1 図版68の 1	えー7 Ⅲ a	ヒト形	— —	素地は細かい。淡い赤褐色呈する。
〃 2 〃 2	け・こー6 Ⅱ	獣形	— —	素地は細かい。淡い橙褐色呈する。 表裏面に2次焼成を受け煤痕が付着。
〃 3・4 〃 3・4	しー11 Ⅰ	魚形	— —	型成形。素地は細かい。淡い黄銅色呈する。 黄銅色を呈し、芯部灰黒色である。

〈註〉内間 靖 「碁石」『天界寺跡』P 101 那覇市文化財調査報告書第42集 那覇市教育委員会 1999年



第76図 (図版67) 石製品：碇石 (1~4) ・碇石代用品 (5) ・砥石 (6~8) ・用途不明 (9~11)





第77図 (図版68) 陶製品：人形 (1~4) ・用途不明 (5)

## 第Ⅶ章 ま と め

以上、発掘調査の成果について述べた。調査に至る経緯については、第Ⅰ章でも述べたとおり沖縄県都市計画課による首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査であった。調査は法面・東地区と限られた範囲であったが、多大な成果が得られた。ここでは、前年度に報告した街路地区<sup>註1</sup>も含めて、いま一度整理して若干の要点に触れまとめとしたい。

天界寺の来歴については、景泰年間（1450～56年）に尚泰久王によって建立されたことが「琉球国由来記」等の文献に記載されている。文献資料によると境内には大門・方丈・寢室・東房・西房等が建ち並び、さらに次代の尚徳王によって大宝殿が建立され、大規模な施設が展開していたことが知られている。ところが、万暦年間（1576年）には火災によって焼失し、順治年間（1644～61年）に復旧され琉球王国が処分（1879年）される頃までの約230年間の長きに亘り存在したことが窺うことができる。その後、<sup>註2</sup>一帯は廃寺のまま明治末まで存在したとのことである。

ところが、1700年に描かれた「首里古地図」の天界寺を見ると、いわゆる「七堂伽藍」と言われている施設が見られず、僅かに正門・本堂・寢室（？）等の建物が描かれているのみである。

一方、首里城の北側に接して立地している円覚寺には個々の施設等が詳細に描かれて大規模な施設（七堂伽藍等）が整備されていることが窺える。

このような天界寺の変遷は、第1尚氏から第2尚氏への政権交代や円覚寺や玉陵の造営・創建、さらに菩提寺から宗廟への質的变化等が関わっていることが文献より窺うことが読みとれる。

さて、発掘調査は天界寺の持つこのような歴史的な背景を踏まえ、具体的には「首里古地図」に描かれている天界寺を参考に発掘調査を進めた。以下、主な層序・遺構・遺物について述べる。

### 層 序

層序を街路地区と公園地区で比較すると、街路・法面地区では第Ⅳ層（地山）、第Ⅴ層（15世紀前後～）、第Ⅳ層（赤土造成土）、第Ⅲ・Ⅱ層（17世紀中葉～）、第Ⅰ層（戦後層）の土層が確認され、一方、公園・東地区では基本土層は第Ⅳ層（地山）、第Ⅴ層（街路地区と同層）、第Ⅳ層（混土層で遺物は第Ⅴ層と同じ）、第Ⅲ層（上位層は19世紀後半～）、下位層は赤土造成層で街路地区の第Ⅳ層）、第Ⅱ・Ⅰ層（攪乱層）の各層がそれぞれ確認された。

このことより、街路地区での第Ⅲ・Ⅱ層が公園・東地区では欠落していることが理解できる。さらに、東地区の北側では第Ⅱ・Ⅰ層が第Ⅵ層（地山）へ直接堆積が見られ、北側では削平が著しいことが理解できた。ちなみに、街路地区での基本的な層序は、南側の綾道大道側で顕著に確認された（図版8の3）。

これらのことより、東地区では少なくとも2回大規模な造成工事が行われていたことが想定された。1回目が順治年間の復旧時期と2回目が三殿内の造営の時期が考えられる。街路地区も同時期に実施されたものと思われる。

### 遺 構

遺構は第Ⅴ層に伴う遺構と第Ⅱ・Ⅲ層に伴う遺構に大きく分けられる。さらに、第Ⅴ層の遺構は集落跡と天界寺に関する遺構に細分される。

集落跡と想定された遺構は第Ⅳ層（地山）面において検出された数多くのピット群が挙げられる。このピット群は掘立柱の建物の柱穴と考えられ、Ⅰ地区の竪穴状遺構やプランの確認されたⅢ地区

建物跡が該当するものと思われる。その他のピット群については、プランを押さえることが困難であった。

天界寺の創建時の遺構と考えられるものとしては、ピットの中で「か・き-4・5・6」一帯で見られた掘り込みが深く径の大きいピットが考えられ、一概に掘立柱の建物とは捉えがたいピット群が該当するものと思われた。これらのピットについても先述したピット群と合わせて、今後の課題としたい。その他に、「け・こ-5・6」で検出された円弧状の遺構もグスク期の集落には見られないもので、宗教施設に伴うものと解した。創建時期に伴う遺構は、層序の項でも述べたように、順治年間の復旧工事でかなり造成整理されたものと思われる。

第Ⅱ・Ⅲ層に伴う遺構としては、本堂跡の基壇や参道・土留石垣遺構、その背面に展開する2棟連結（掛け造り）の建物跡等が確認された。これらの施設は「首里古地図」に描かれた建物跡と想定された。注目されるのは順治年間の復旧工事によって、本堂跡と参道・土留石垣の造成工事が行われるが、主軸ラインが東へ11度ずれており、通常禅宗の寺院は主軸に対して施設が展開することが知られている。本遺跡の主軸のずれは当初からのものなのか、それとも新旧があるのか今後の課題かと考える。

その他に、瓦・埴等が一括で破棄されたと思われる土壌No.4・5や街路地区で検出された瓦溜まりなどの遺構は、廃寺後（明治末頃）に果樹園等の造園工事に伴うものと思われる。

## 出土遺物

遺物は中国産陶磁器を始め、韓国産・ベトナム産・タイ産・本土産・沖縄産等の各種の陶磁器が得られた。その他に、瓦・埴・銭貨・青銅・鉄製品・玉・石・陶製品等多種・多様なものが得られた。

ここでは、中国産陶磁器（白磁・青磁・青花）の碗・皿等に絞って時間軸に述べたい。

白磁は碗・皿・杯・盤・壺・香炉・蓋等が出土した。白磁は主に14世紀後半～16世紀までの出土であった。碗類は14世紀後半～15世紀前半の外反碗が僅かに見られた。皿・杯類は量的に得られ、15世紀代～の直口皿とそれに伴う杯類。15世紀後半～16世紀前半の外反皿が顕著であった。

青磁は碗・皿・壺・盤・水滴等が得られた。青磁は14世紀中葉～16世紀までが主な出土であった。

碗類は14世紀後半～15世紀前半のものが量的に数多く見られた。特に、雷文帯碗が数多く得られた。皿類も碗類と同様な出土状況であった。

青花は白磁・青磁に比して量的には少ないが、器種としては碗・皿・壺・水注・高足杯（仏飯器）等が見られた。時期的には15世紀後半～19世紀代と年代幅のものが得られた。

碗類は15世紀後半～16世紀前半の唐草文碗系は少なく、17世紀後半の印判手のものや18世紀～19世紀の広東碗・菊花碗等の各期ごとに出土が見られた。その中で、16世紀代の碁ヶ底タイプの小皿は顕著に出土が見られ、白磁皿と同様に注目を引いた。

次に、出土遺物を用途別にみると大きく日常生活品に関するもの、宗教に関するもの、建物に関するものの3種で見ると、その殆どが日常生活品である。直接宗教に関係するもので明らかなものとして、青磁の香炉・壺、青銅製品の花生け・燭台、人形の仏顔、玉類等が挙げられる。建物に関するものとしては、瓦・埴・釘等が考えられた。

以上、層序・遺構・出土遺物など主なものを述べたが、ここではそれら踏まえて、本遺跡の変遷を集落期・天界寺Ⅰ期・天界寺Ⅱ期・廃絶期と大きく4つの時期区分が可能かと考えられる。

以下、各期ごとの概要について述べる。

## 集落期（14世紀後半～15世紀前半）

天界寺創建以前

境内の最下層（第Ⅴ層）に伴う遺構・遺物群である。この時期の遺構としては、天界寺Ⅱ期における造成工事に伴い明確には抑えられないが、第Ⅵ層（地山面）に検出された掘立柱の建物のピット群が考えられる。これらのピット群は、天界寺創建以前のグスク期の集落跡と思われる。天界寺の創建に伴い撤去もしくは移動させられたものと考えられる。Ⅰ地区の竪穴状遺構やプランの押さえられたⅢ地区の建物跡が挙げられる。出土遺物の大半がこの集落に伴うものと思われる。

## 天界寺Ⅰ期（15世紀中葉～17世紀前半）

天界寺創建時～焼失・再建まで

この時期の遺構としては、天界寺Ⅱ期における造成工事に伴い明確には抑えられないが、第Ⅵ層（地山面）に検出された、円弧状の遺構等が挙げられる。また、「か・きー4・5・6」の一带で見られた大型のピット群は、集落跡期の掘立柱の建物跡とは考え難く寺院に伴うものと思われた。

## 天界寺Ⅱ期（17世紀中葉～）

順治年間の再建～

境内の第Ⅱ・Ⅲ層に伴い遺物・遺物群である。18世紀代に描かれている「首里古地図」の建物跡が考えられる。本堂の基壇跡・参道・2棟連結建物跡等が検出された。明朝系の瓦を葺き周辺に埦敷の建物が想定された。

清朝磁器を中心に印判手の碗類が得られている。

## 廃絶期（19世紀後半～戦前まで）

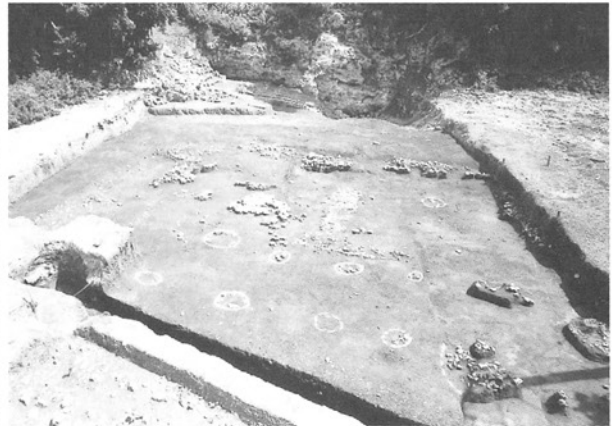
東地区の第Ⅱ・Ⅲ層の時期で、琉球処分後に廃寺になり、その後首里城内の三御嶽を統合、三殿内を建て神女（ノロ）屋敷が存在した時期。

上記の区分は、発掘調査と文献資料を組み合わせる暫定的に設定したものである。今後さらに細かい検討を加えたい。また、沖縄産陶器・本土産陶磁器・自然遺物については、時間の都合上触れることが困難であった。今後、改めて報告したい。

〈註1〉 島 弘・内間靖・仲宗根 啓他『天界寺跡』那覇市教育委員会 1999年 3月

〈註2〉 与那国 暹『天界寺』『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年

# 圖 版



図版1 上 : 本堂跡全景

下左 : 本堂跡右排水路半裁状況

下右上 : I地区建物跡

下右下 : I地区その下位の竪穴状遺構



1：砂利層の露出状況



2：砂利層（礫敷遺構）の露出状況



3：砂利層（礫敷遺構）の完掘状況

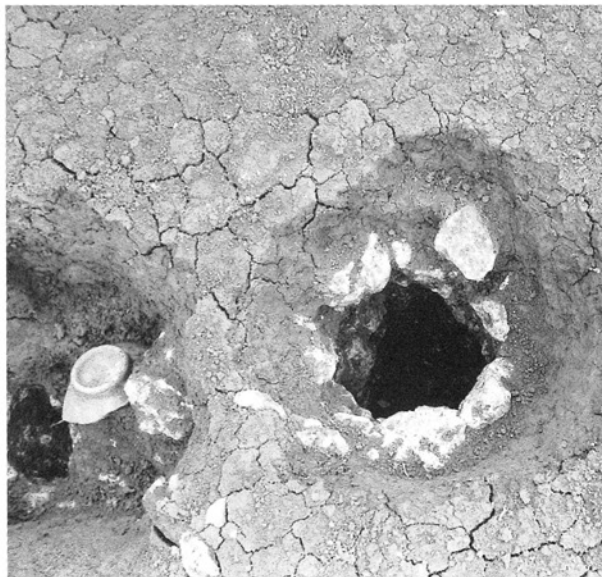
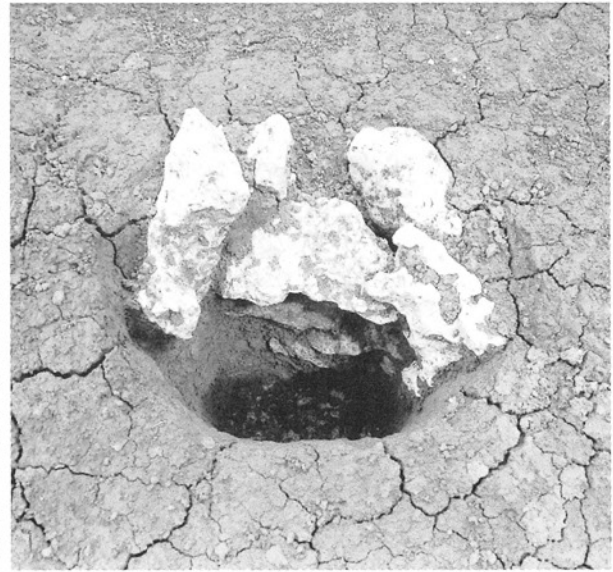
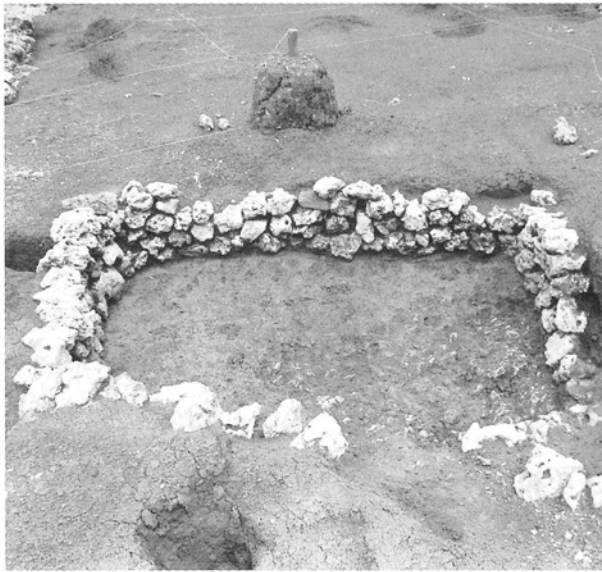


図版3 上：東地区（三殿内跡）の全景  
下：東地区の完掘状況

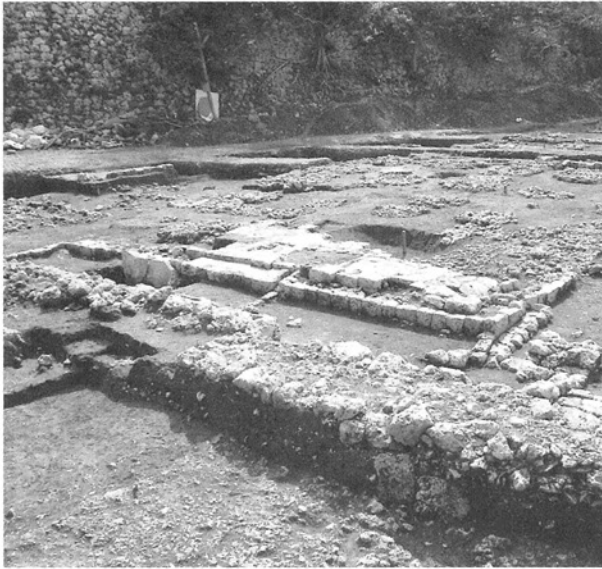




図版4 建物跡と参道 〈上〉左：南側より、 右：北東側より  
〈中〉左：東側より、 右：参道跡  
〈下〉左：南側より、 右：タイ産土器と貝溜り



図版5 主な土壙とピット群 〈上〉左：土壙No.3～5、 右：石積み遺構  
〈中〉左：石積み遺構、 右：ピットNo.41  
〈下〉左：ピットNo.42、 右：円弧状遺構



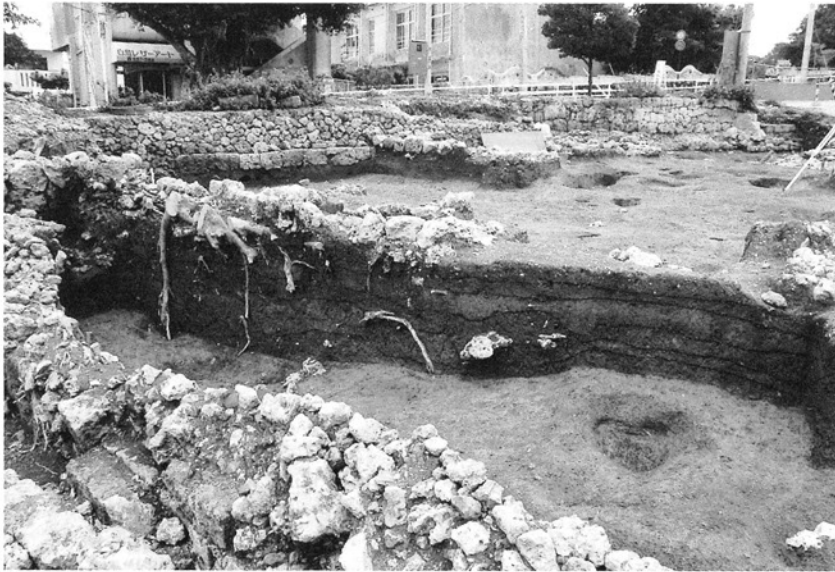
図版6 三殿内と神女（ノロ）屋敷跡 〈上〉左：北西側より、 右：南側より  
〈中〉左：北東側より、 右：北東側より  
〈下〉左：北西側近景、 右：東側より



図版7 神女（ノロ）屋敷と便所遺構 〈上〉左：ノロ屋敷近景、 右：便所遺構  
〈中〉左：1号便所跡、 右：2号便所跡  
〈下〉左：石組（シーリ）遺構、 右：石組半裁



1：きーライン



2：きー7・8グリッド近景



3：すー6 グリッド北東壁



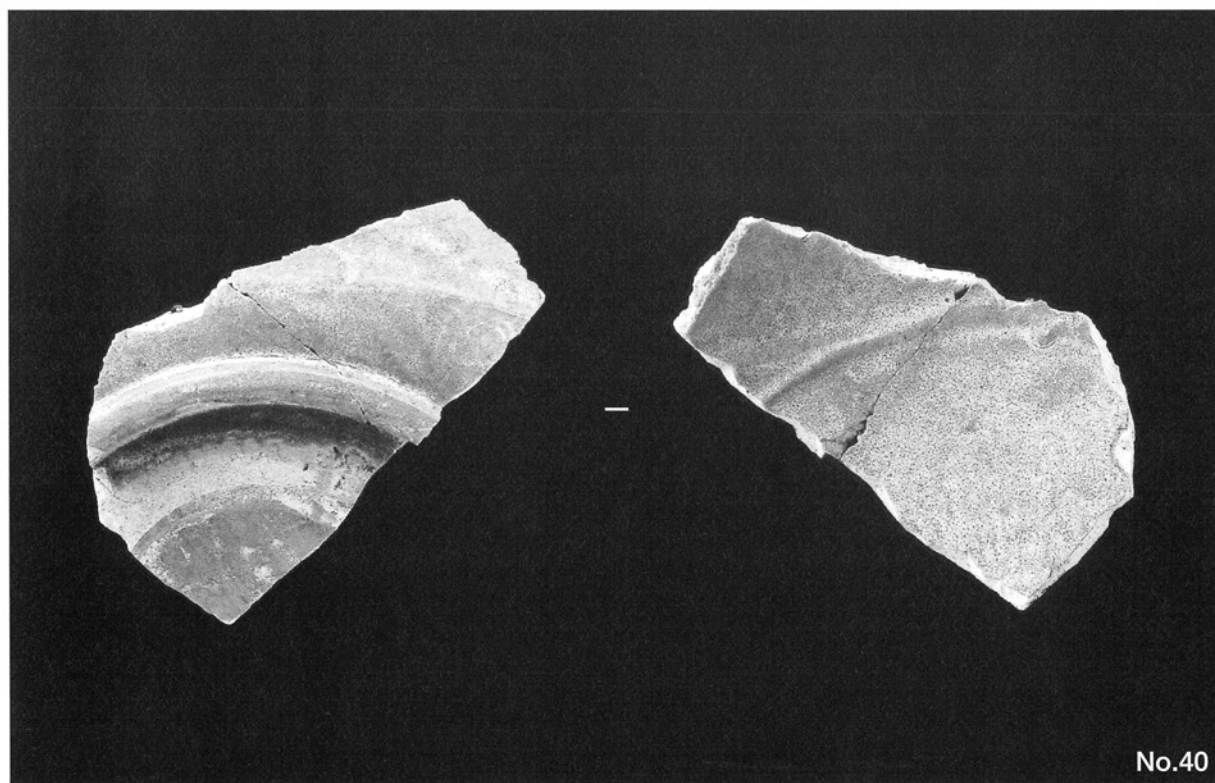
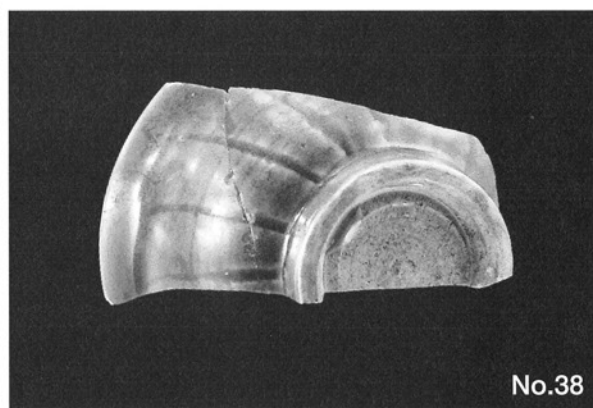
1 : すー8・9・10グリッド近景



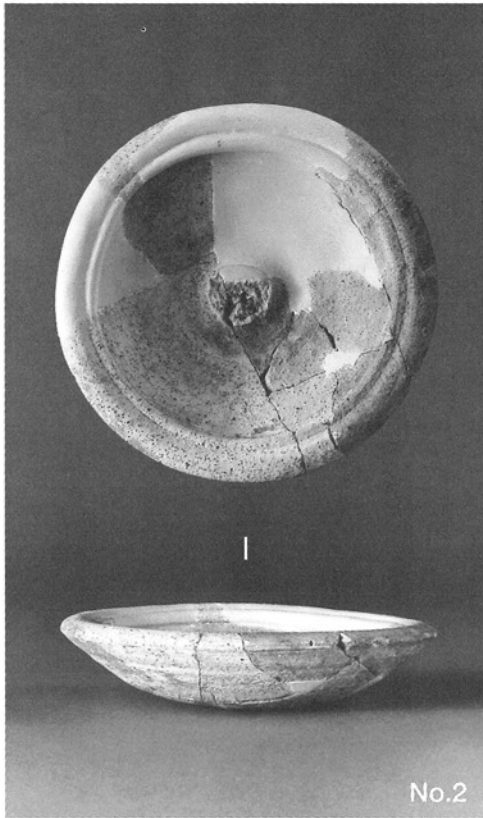
2 : 10ーライン



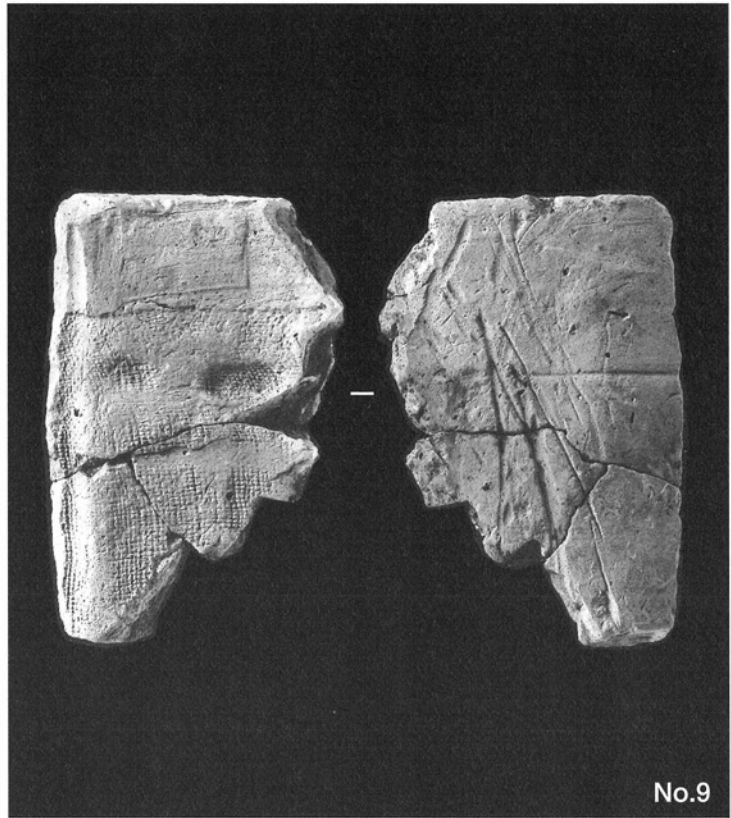
3 : さー10グリッド近景



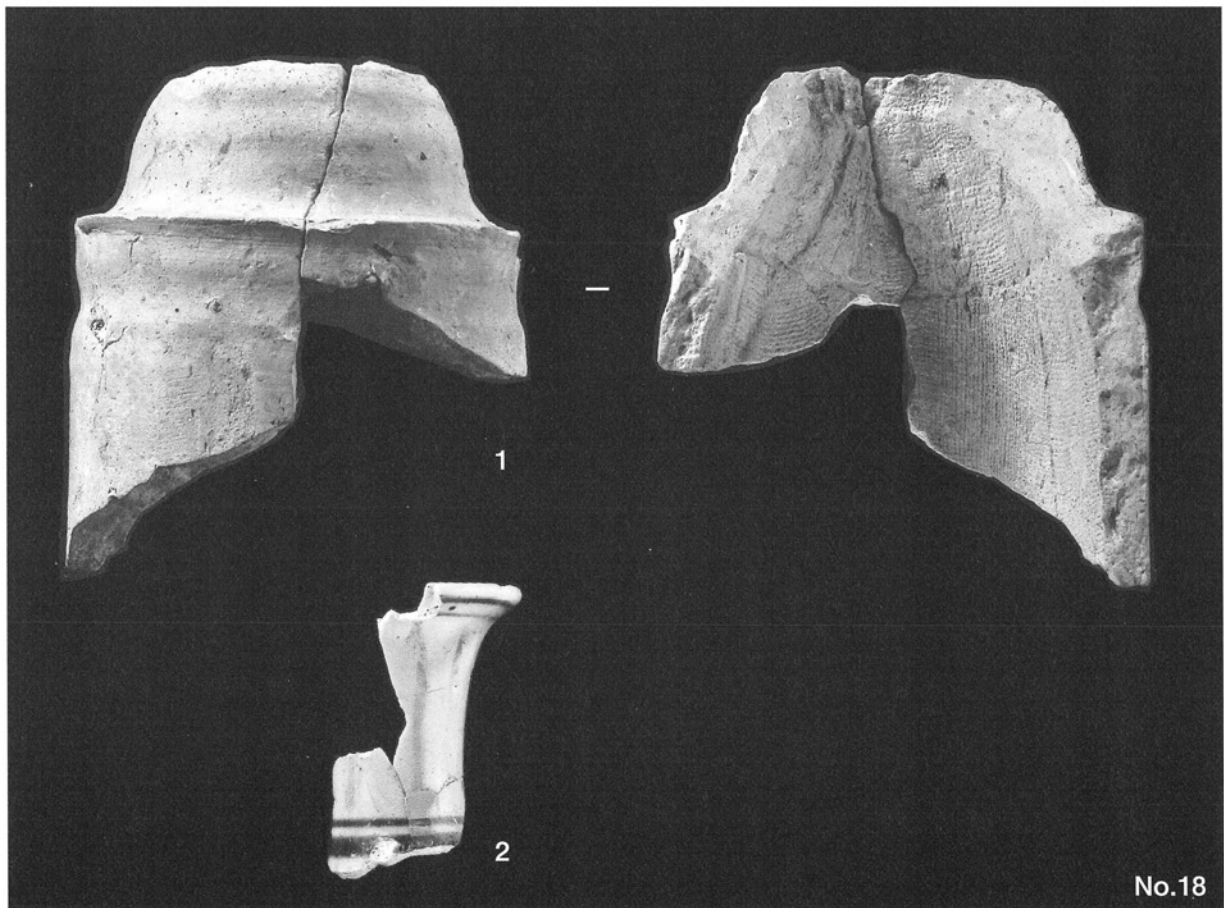
図版10 (第14図) ピット・西 (No.8・9・25・38・40) 出土遺物



No.2



No.9



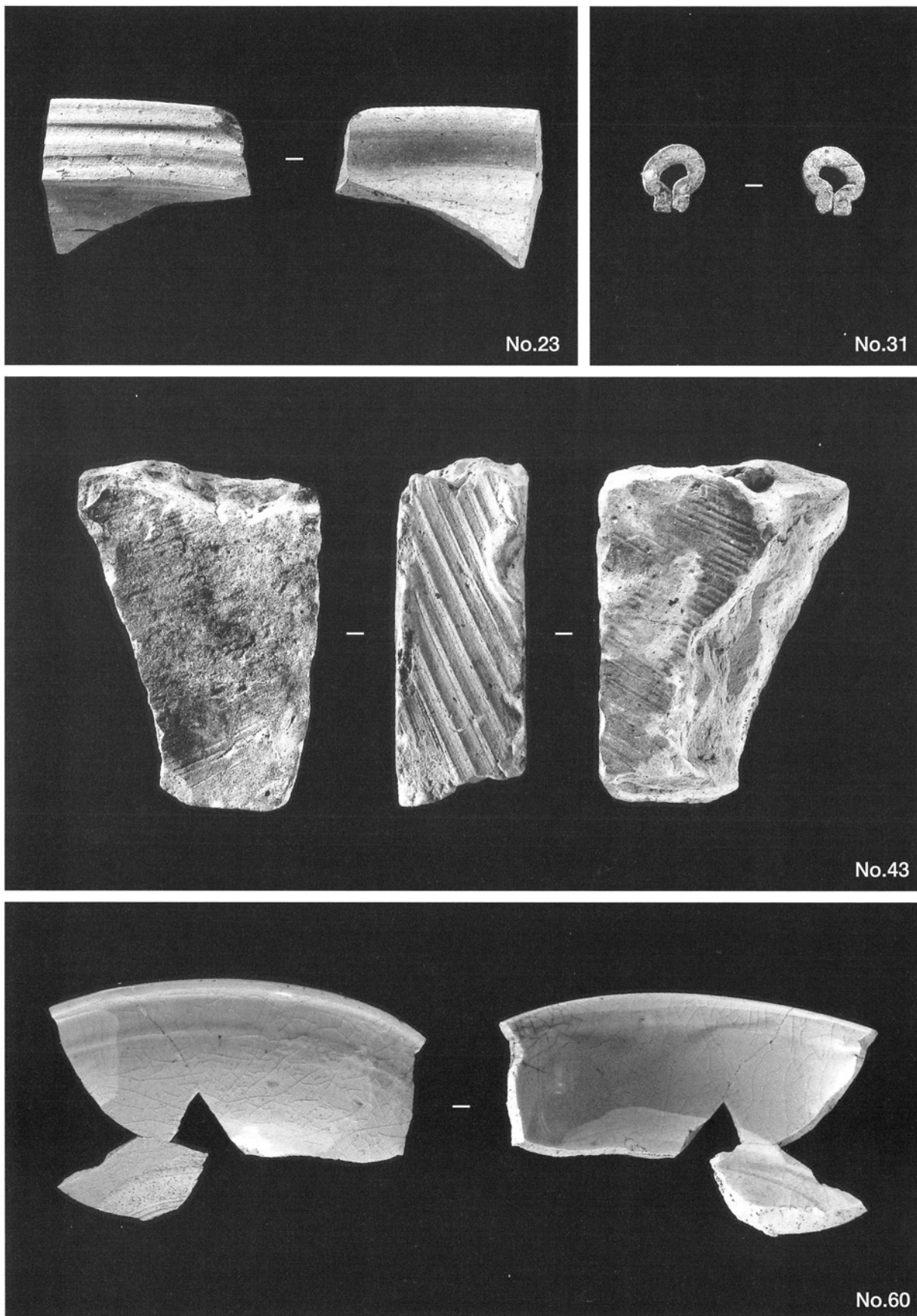
1

2

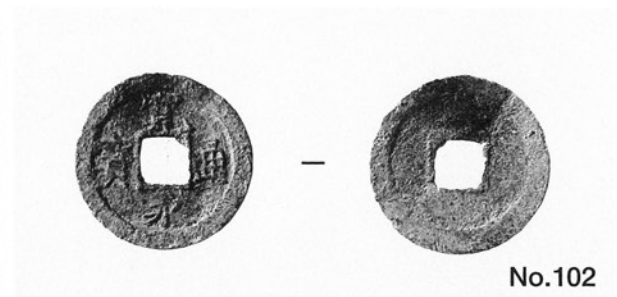
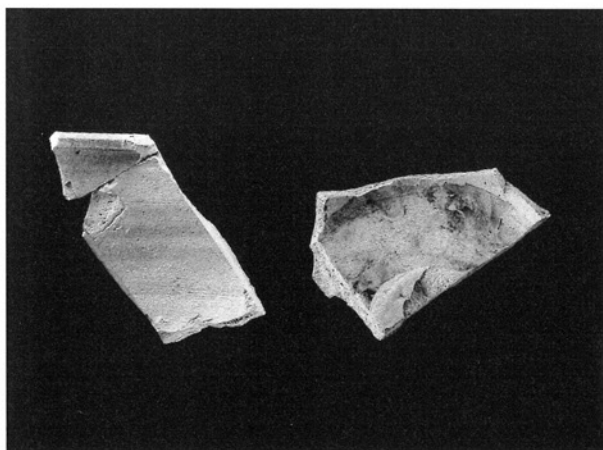
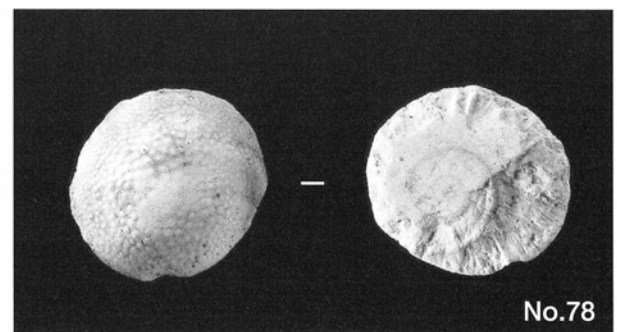
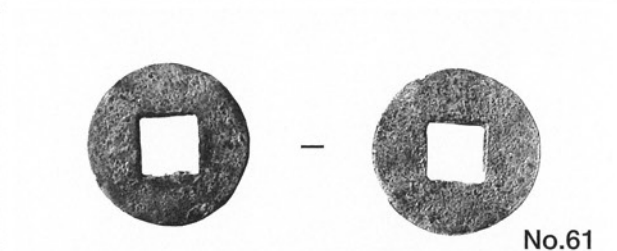
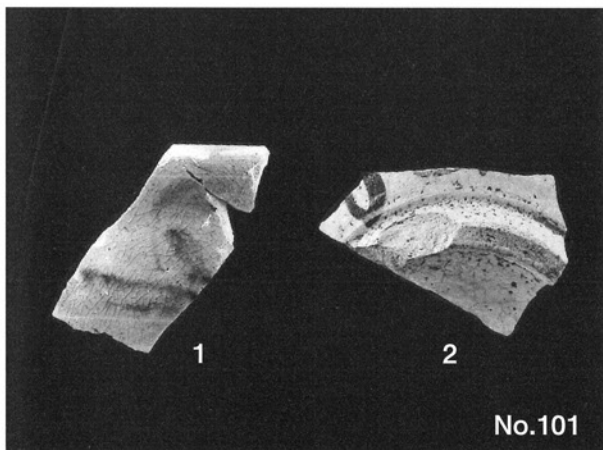
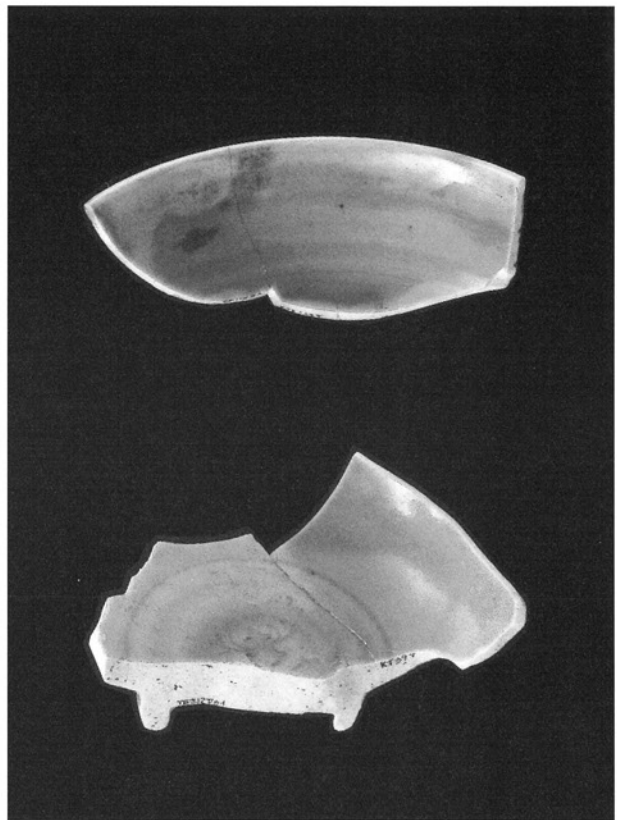
No.18

図版11 (第15図) ピット (No.2・9・18) 出土遺物

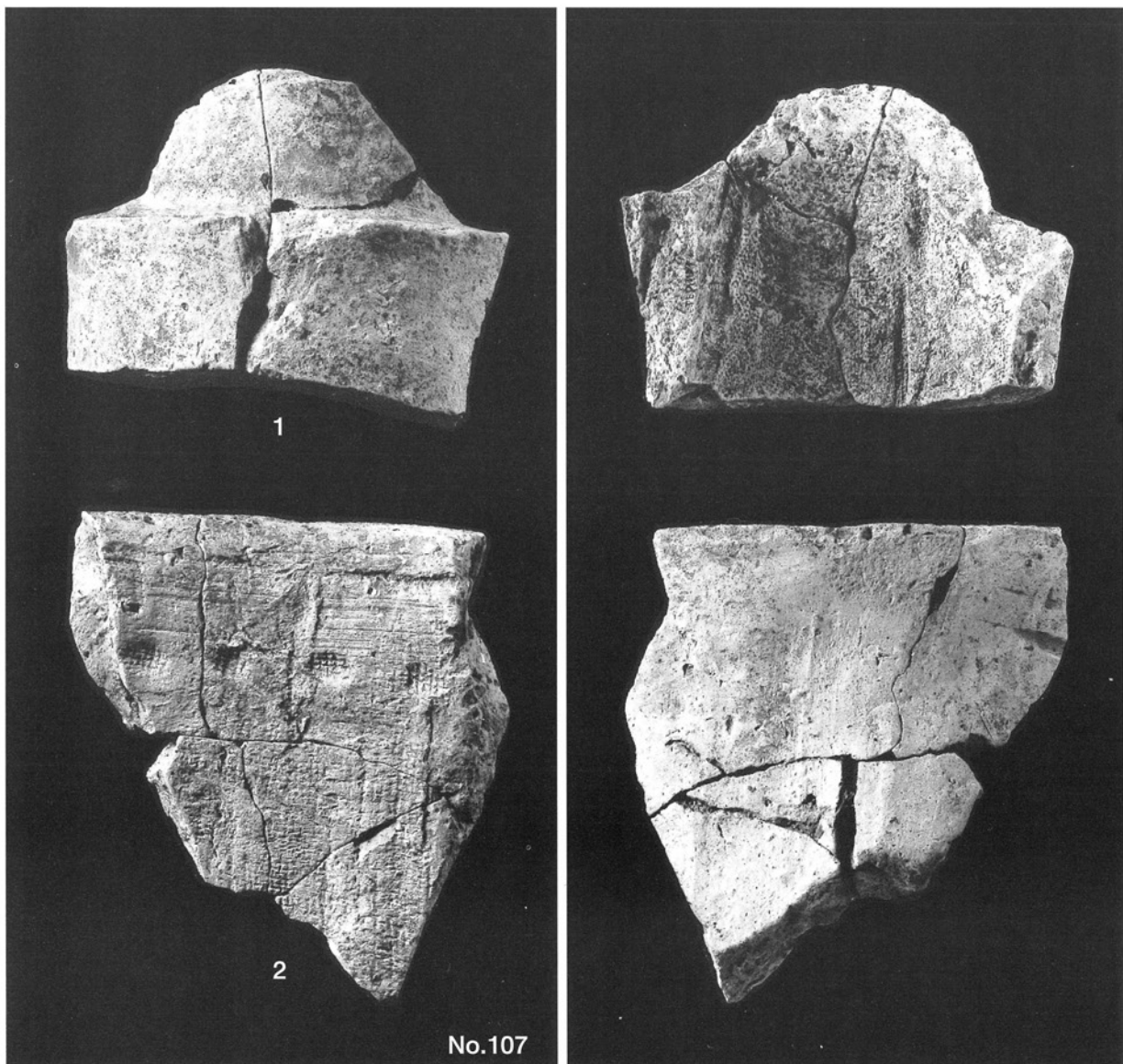
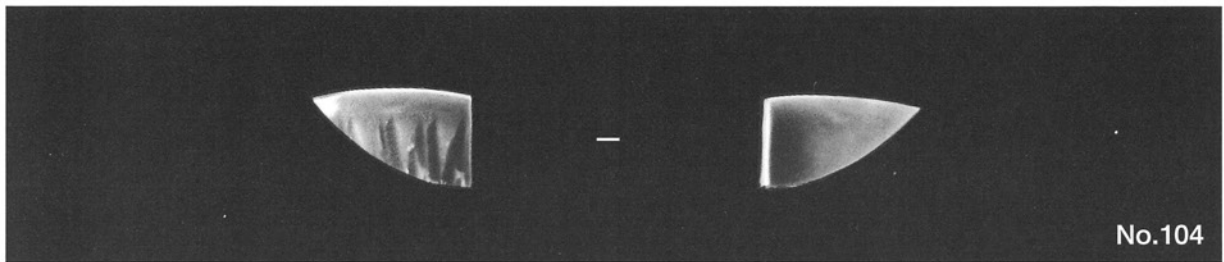
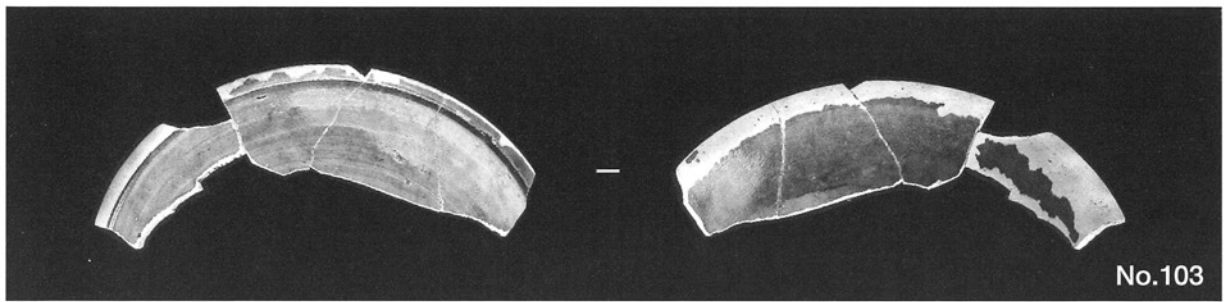




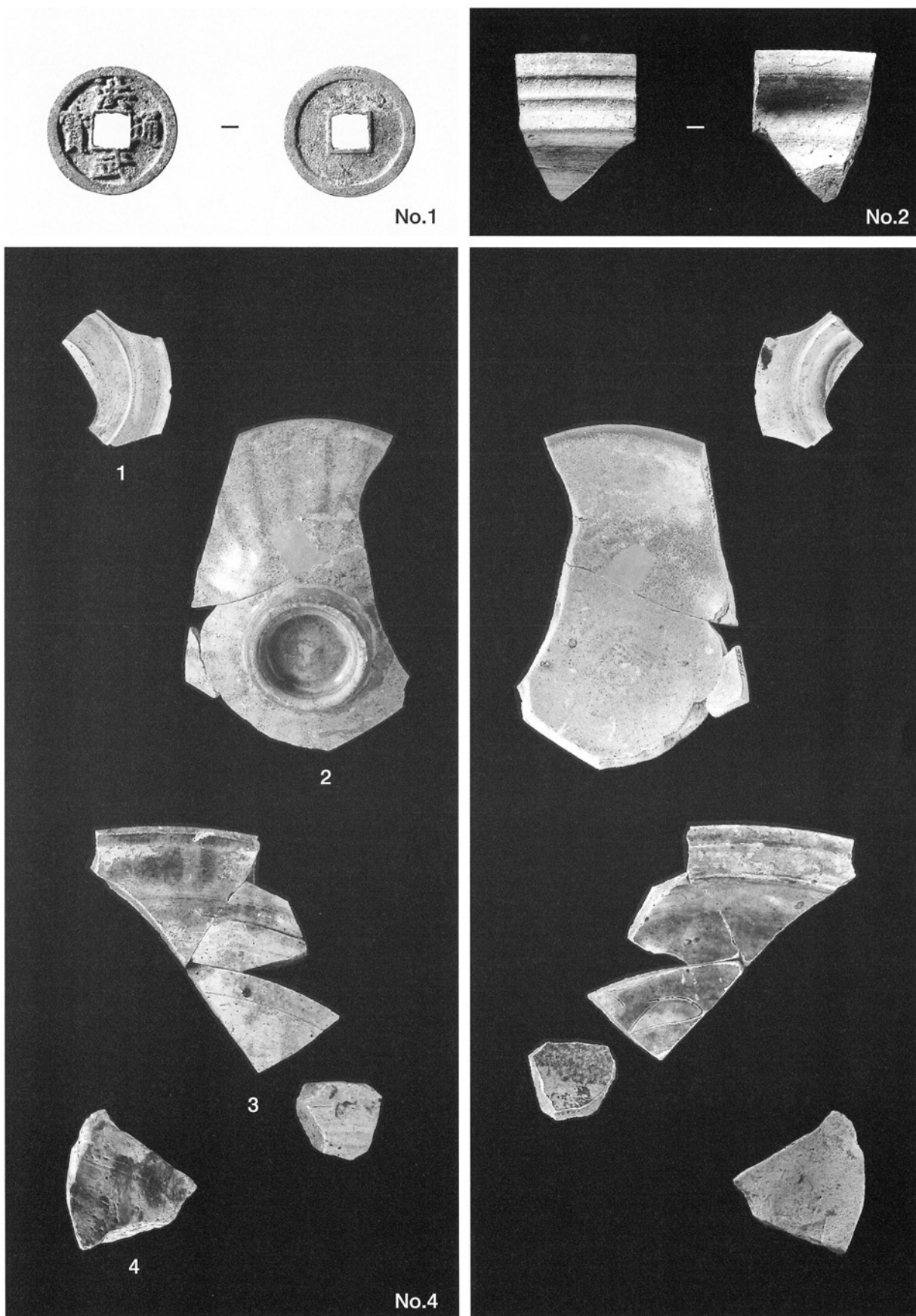
図版12 (第16図) ピット (No.23・31・43・60) 出土遺物



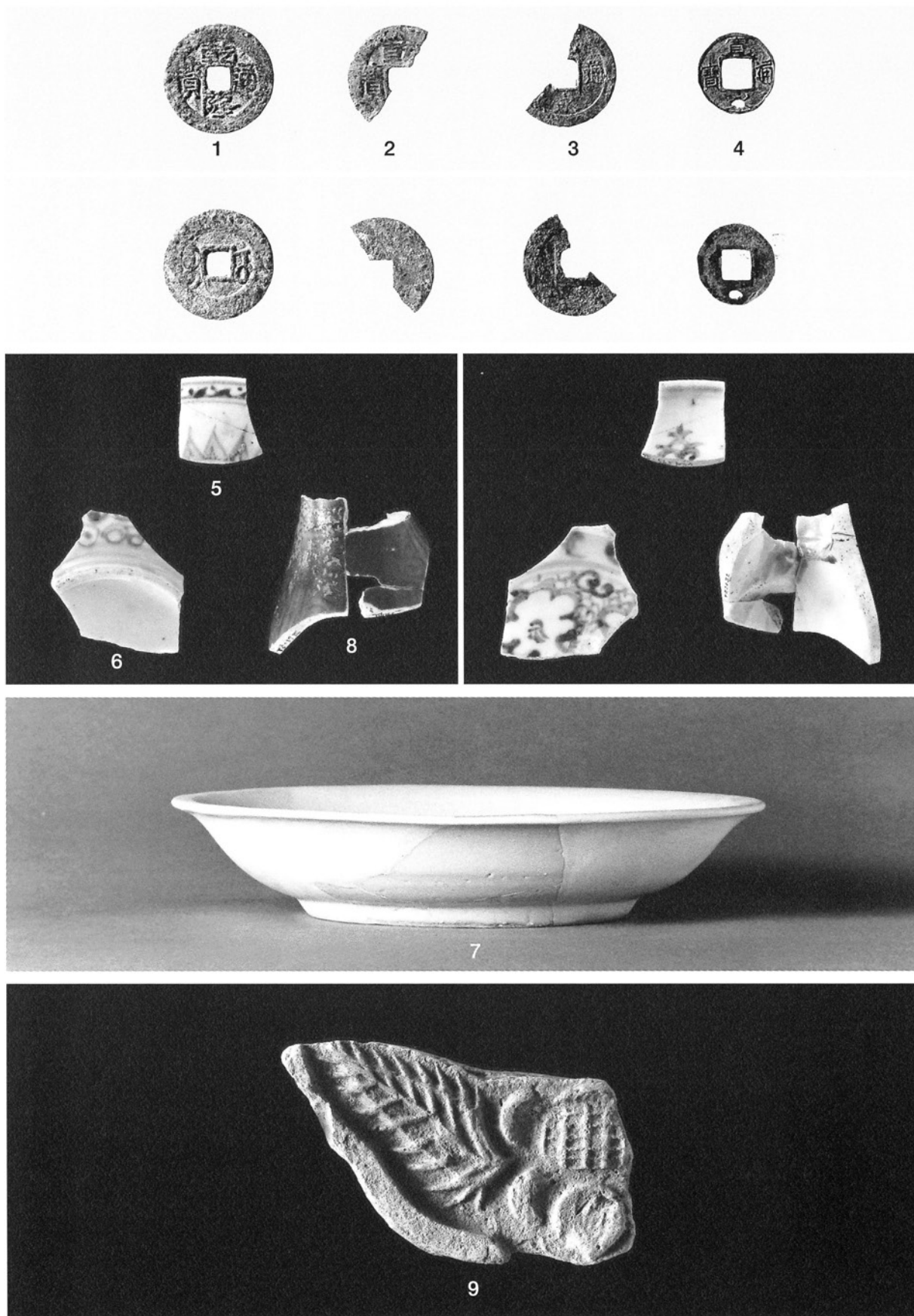
図版 13 (第 17・18 図) ピット (No.49・61・78・101・102) 出土遺物



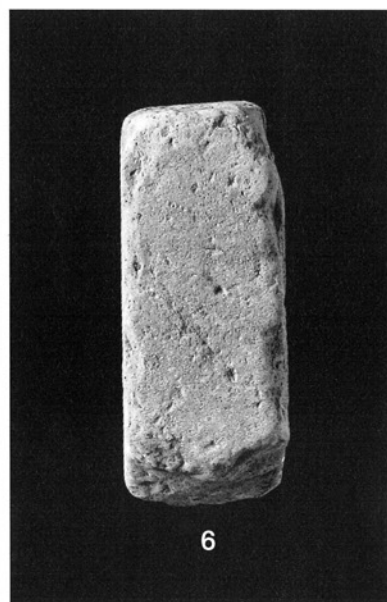
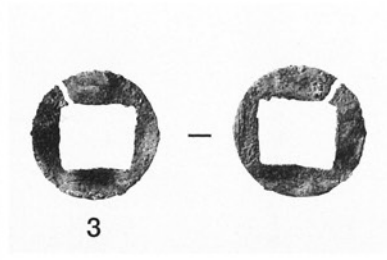
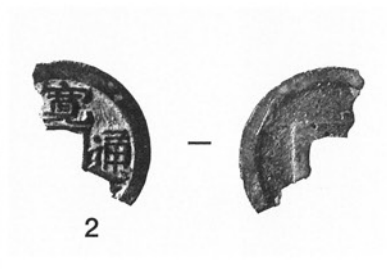
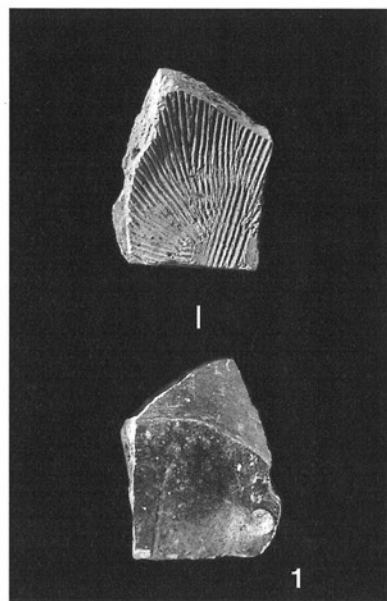
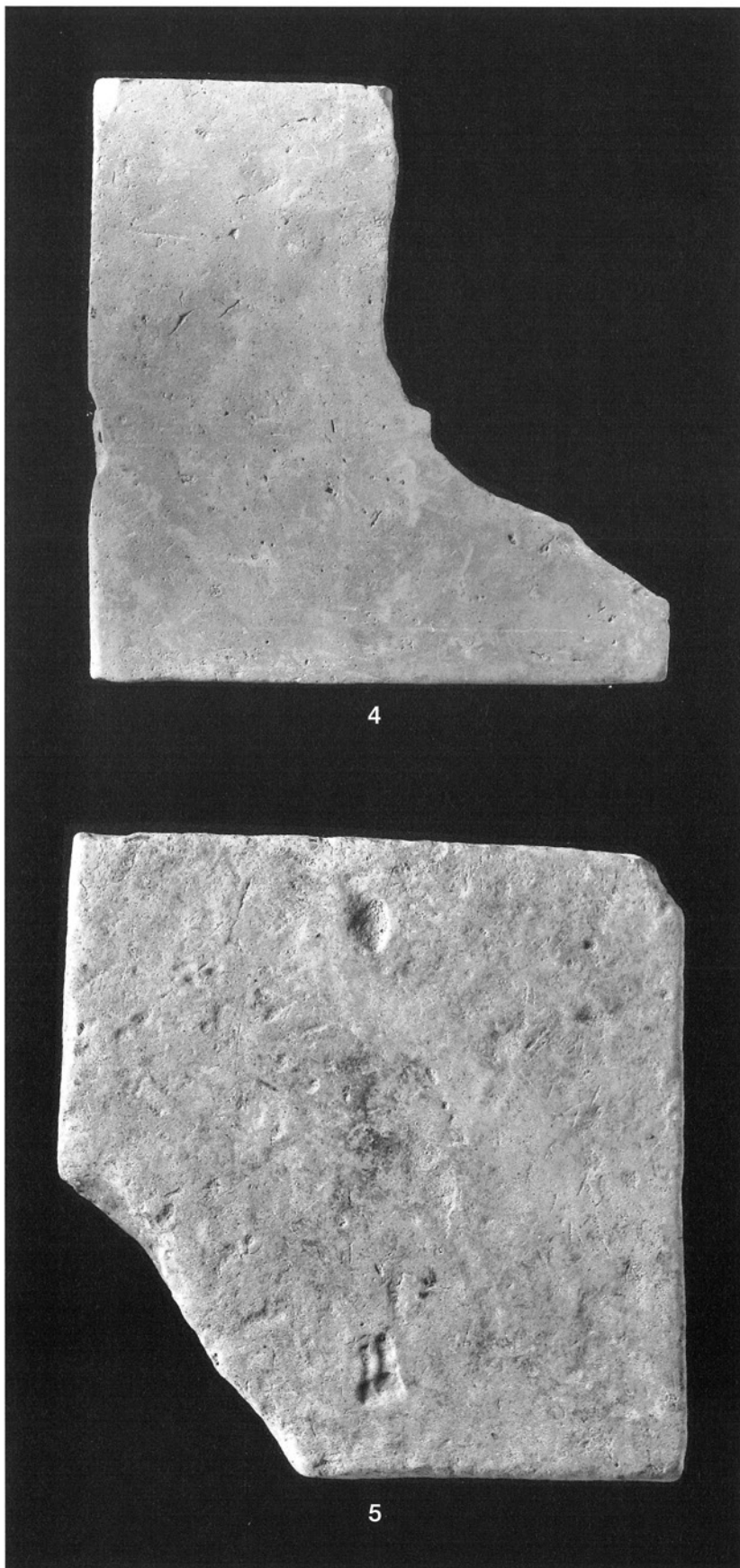
図版14 (第18図) ピット (No.103・104・107) 出土遺物



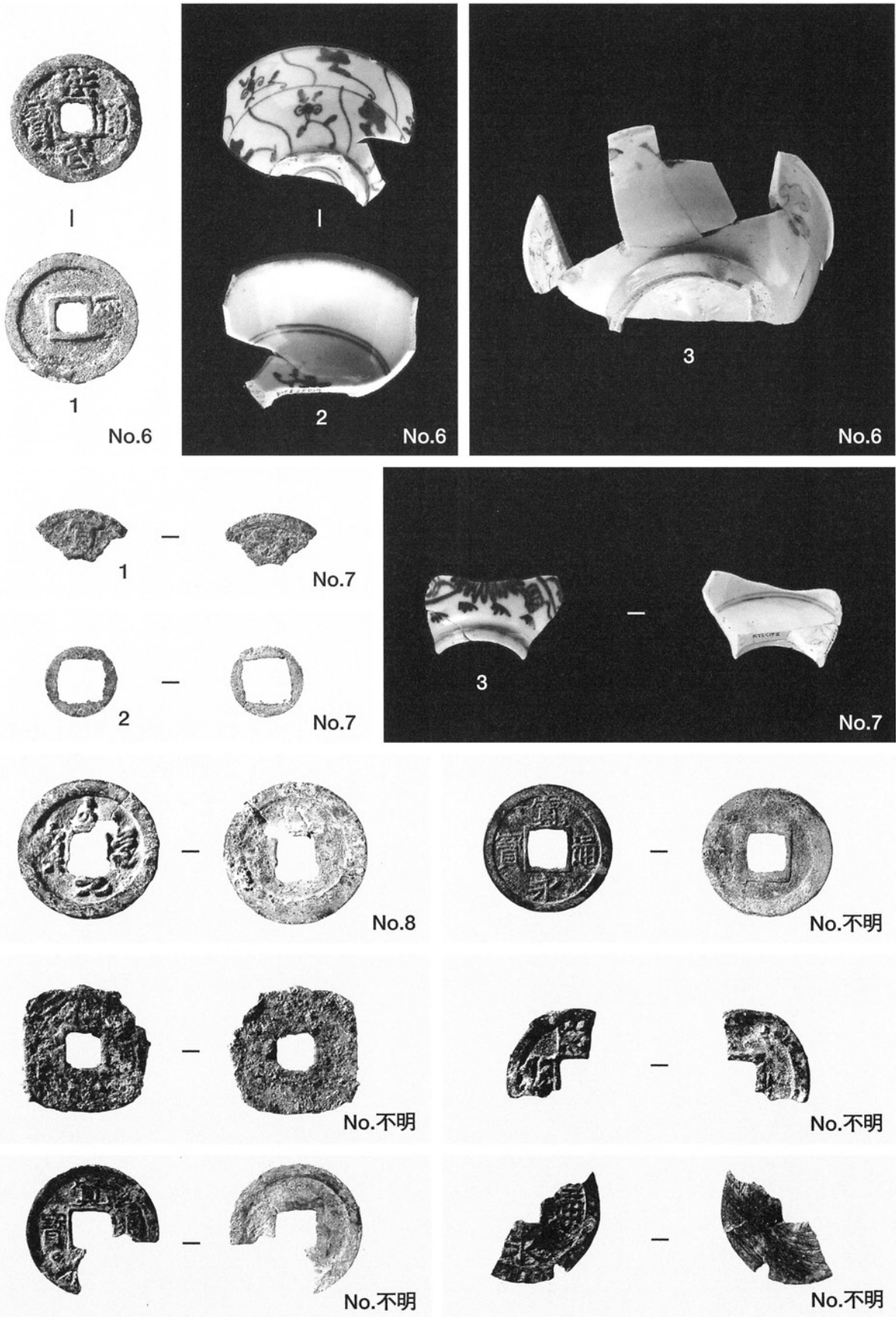
図版15 (第19図) 土壙・西 (No.1)、土壙 (No.2・4) 出土遺物



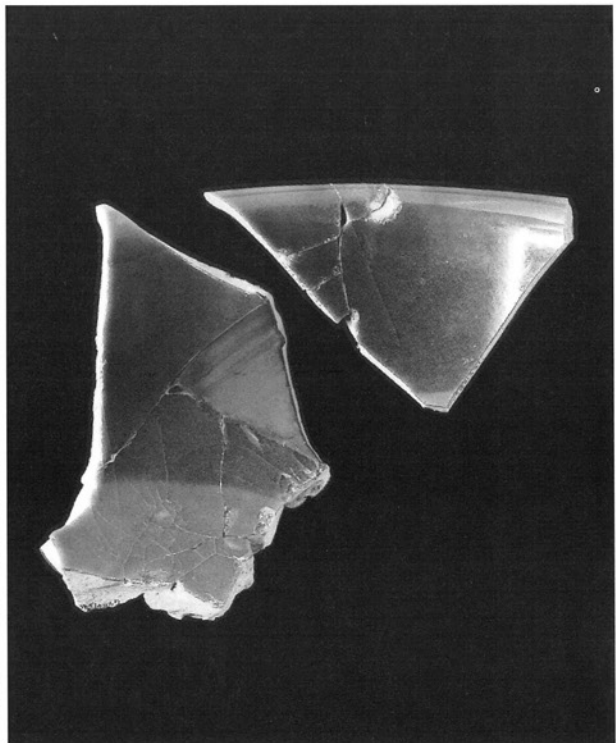
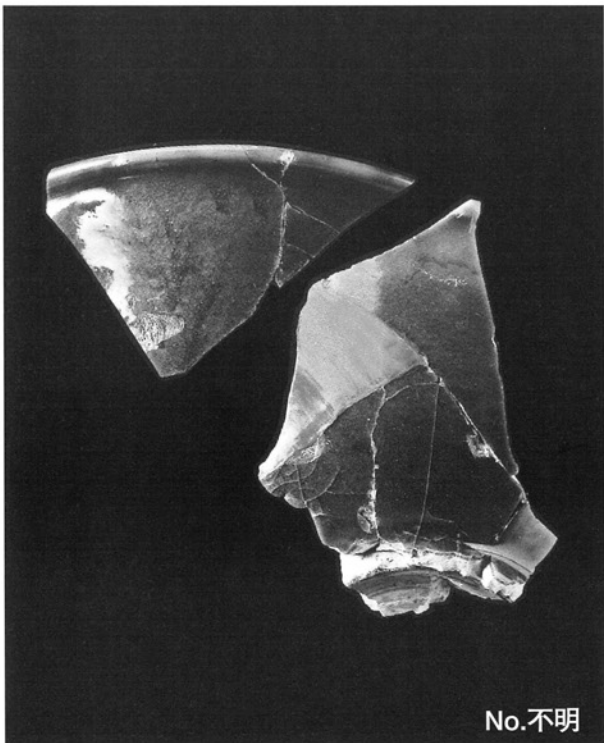
图版 16 (第 20 图) 土壙 (No.1) 出土遺物



图版 17 (第 21 图) 土壙 (No.5) 出土遺物

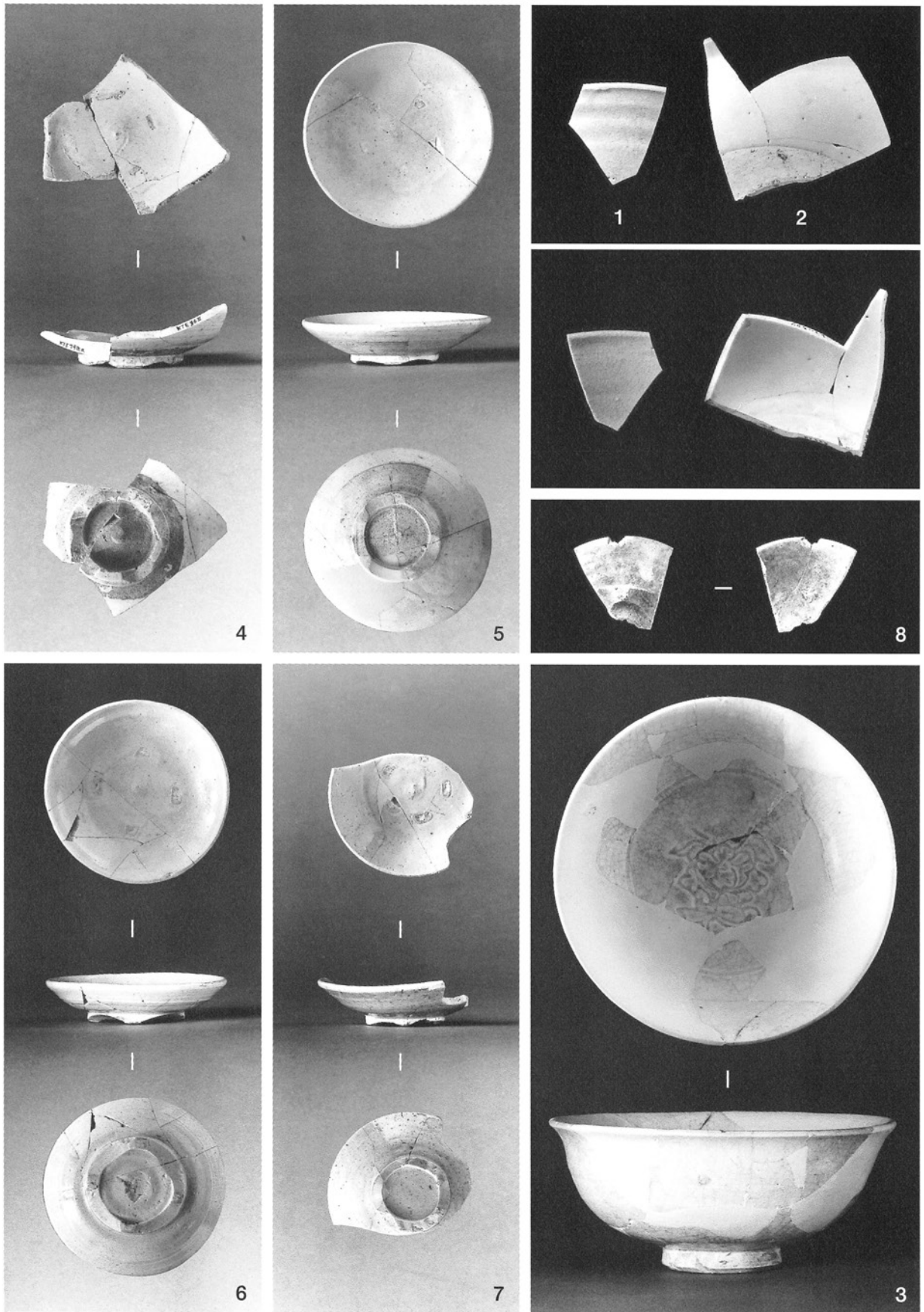


图版 18 (第 22 · 23 图) 土坑 (No.6 · 7 · 8 · 不明) 出土遗物

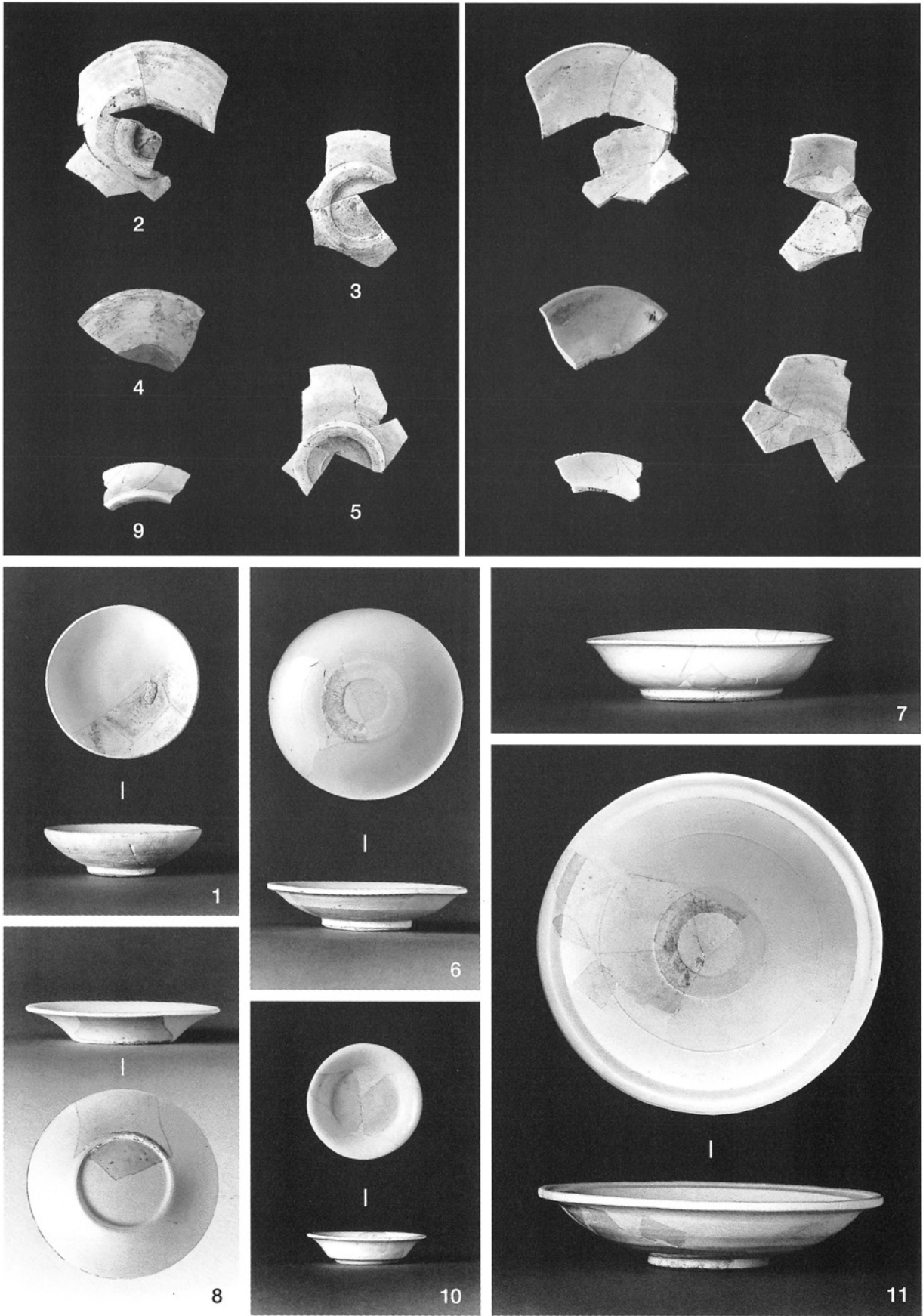


图版19 (第24图) 土壤 (No.不明) 出土遗物

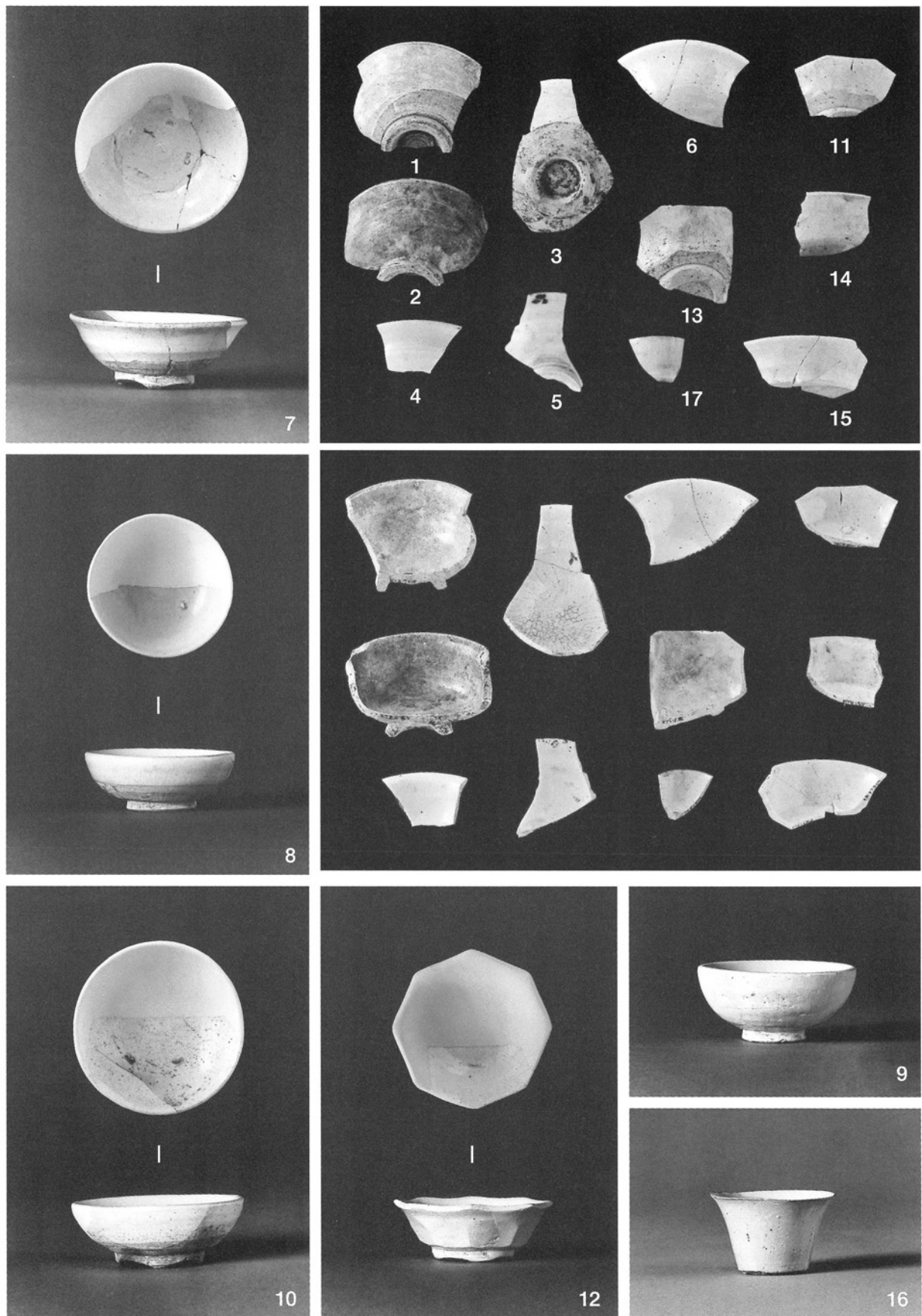




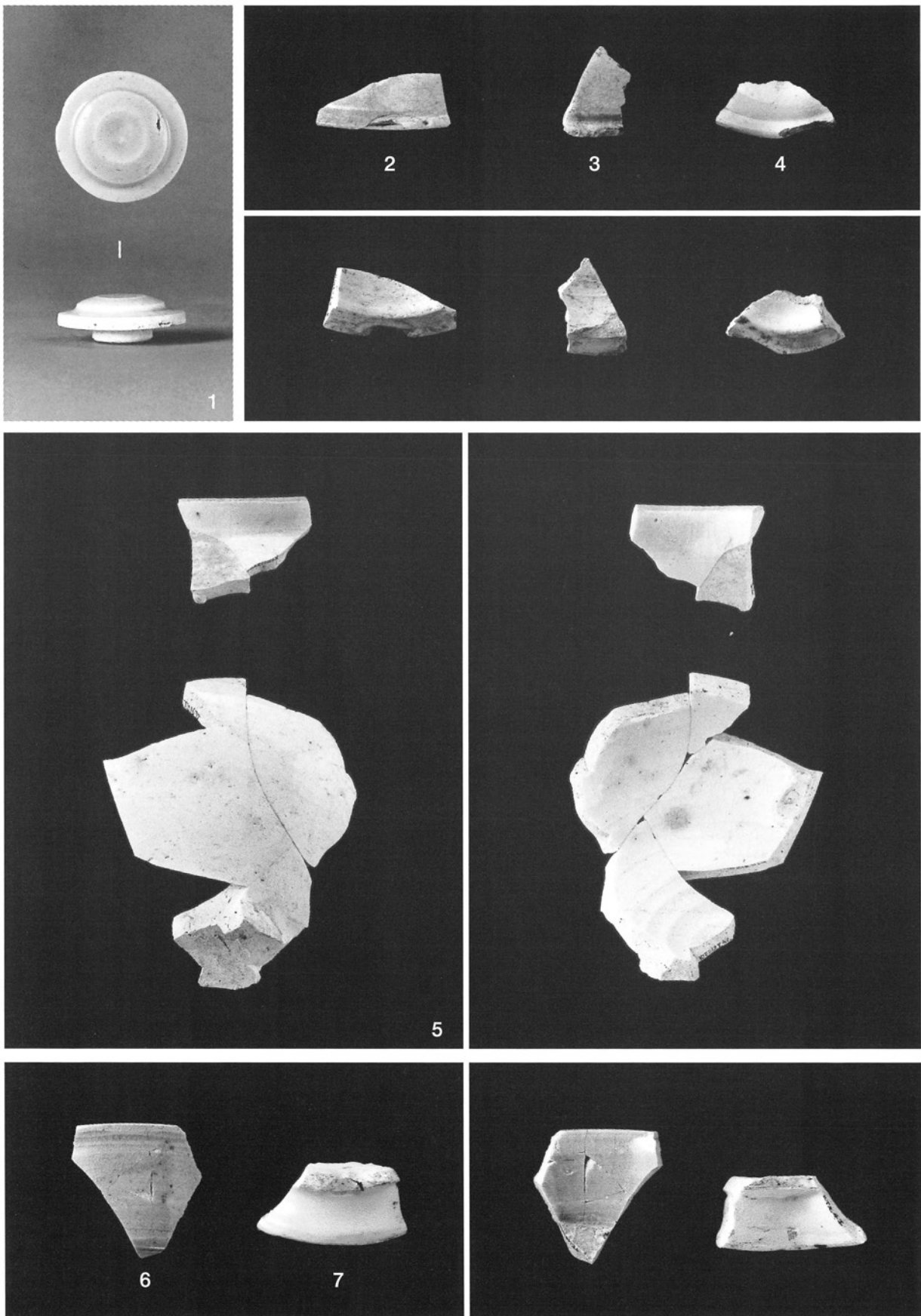
図版20 (第25図) 白磁：碗 (1~3) ・皿 (4~8)



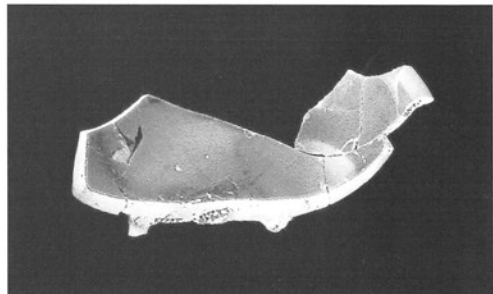
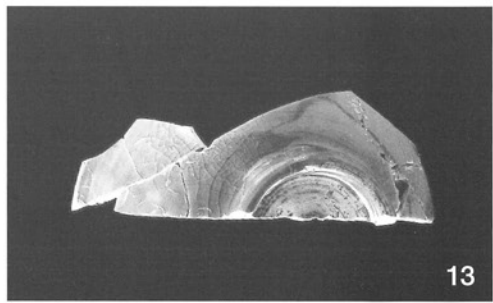
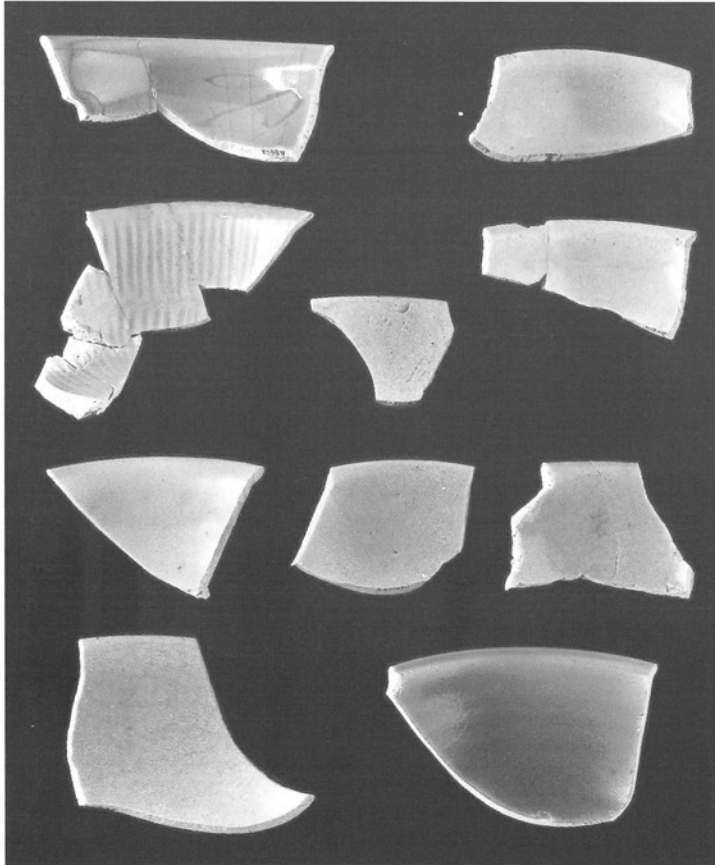
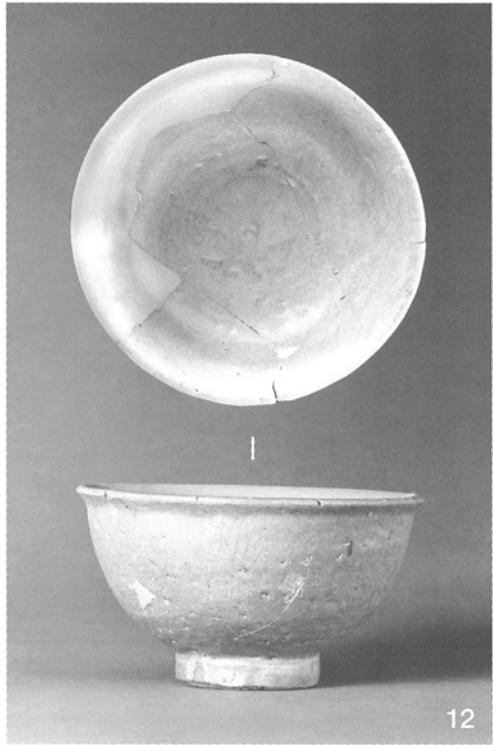
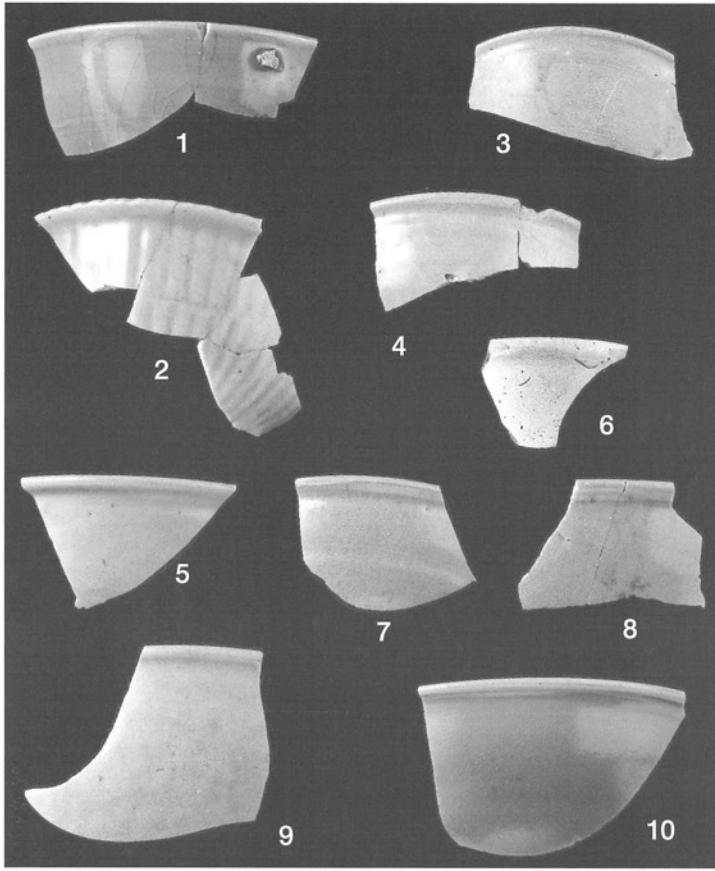
図版21 (第26図) 白磁：皿 (1~10) ・盤 (11)



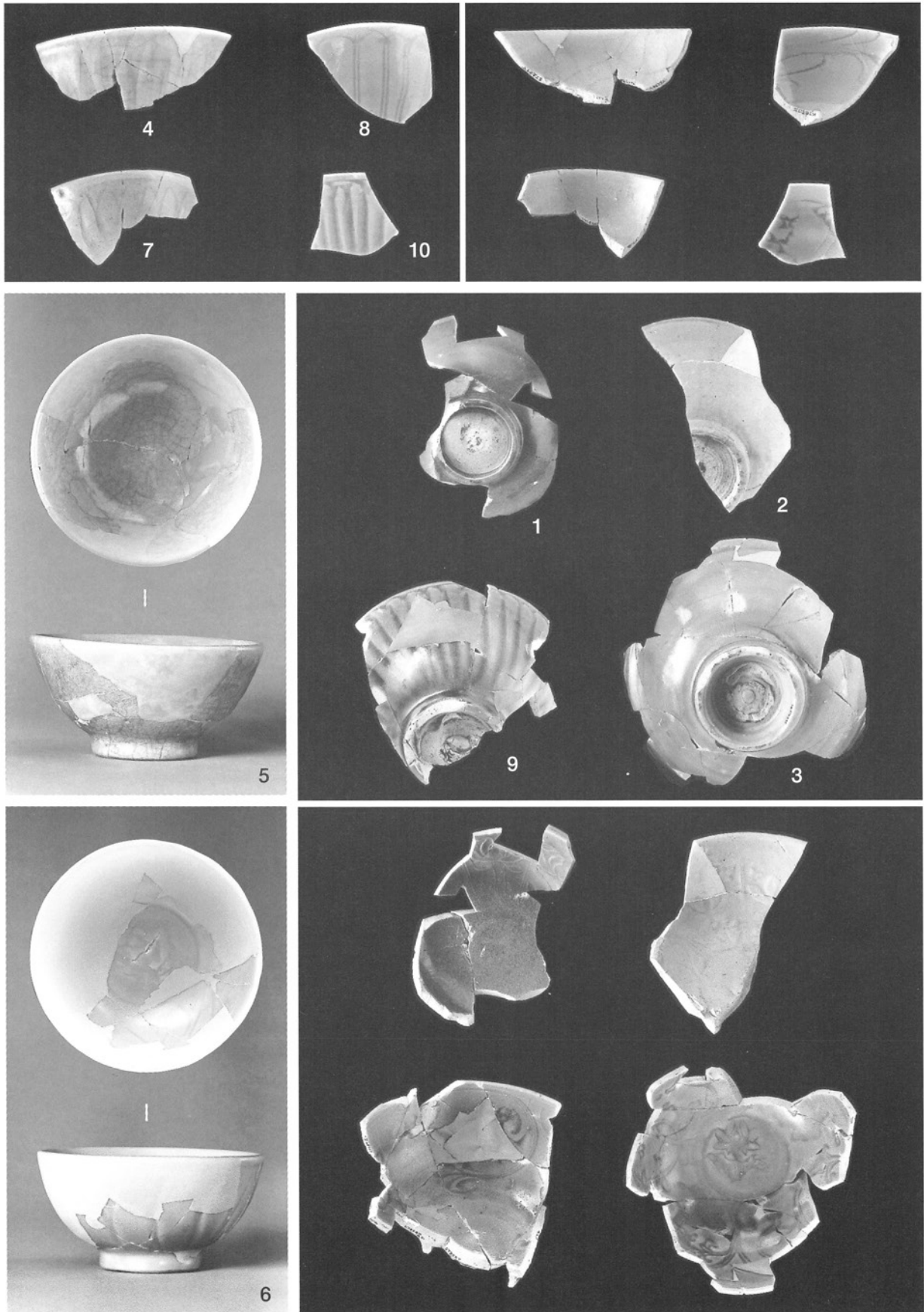
図版22 (第27図) 白磁: 杯 (1~17)



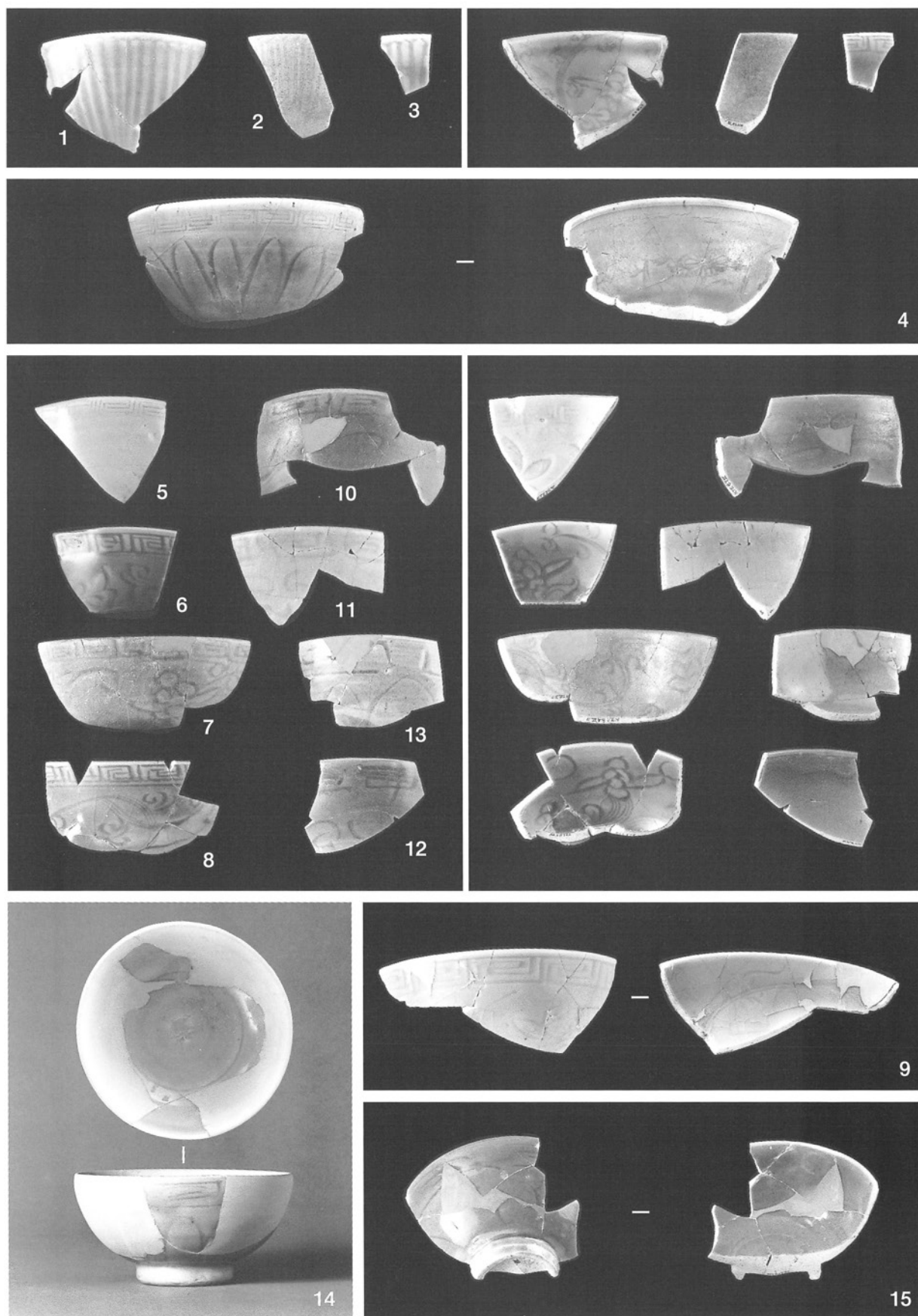
図版23 (第28図) 白磁：蓋 (1~4) ・壺 (5) ・香炉 (6) ・脚台 (7)



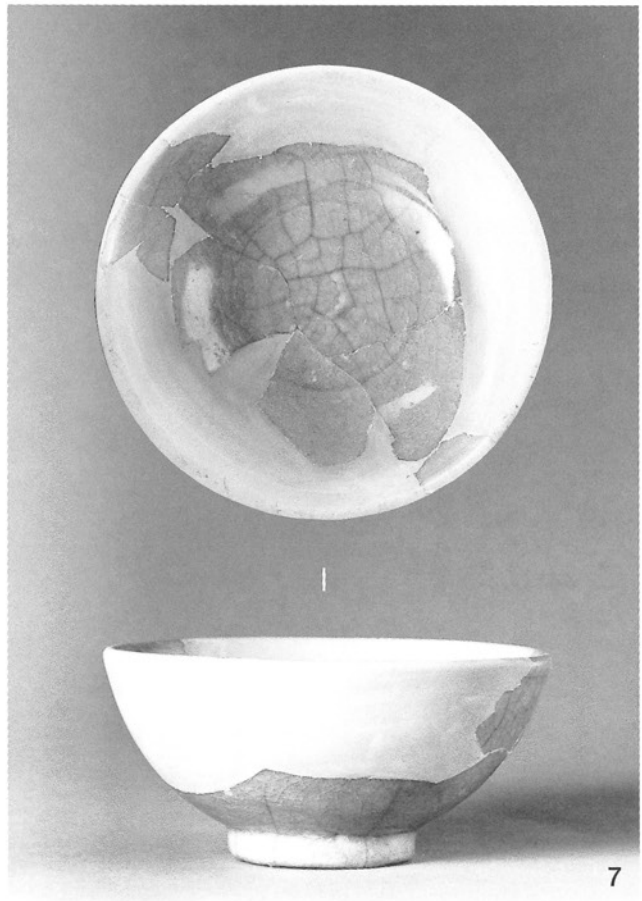
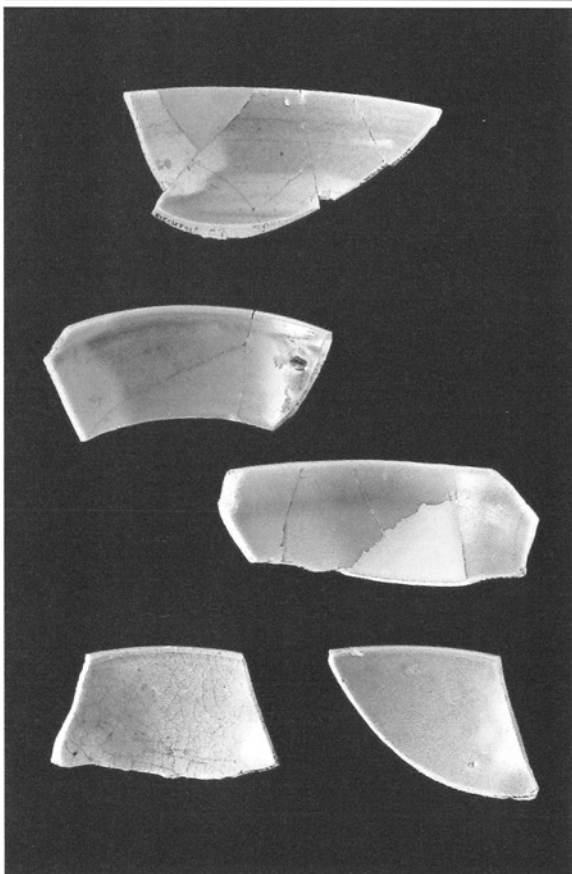
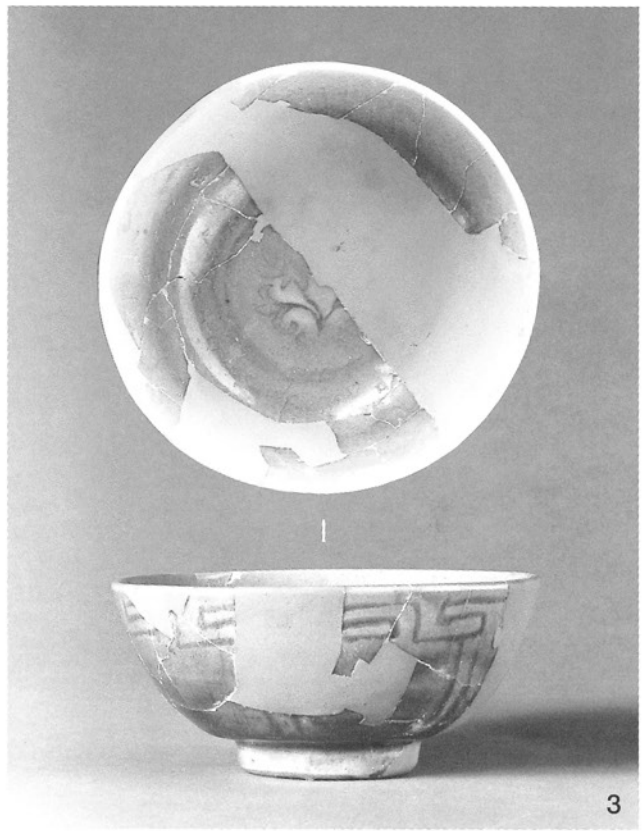
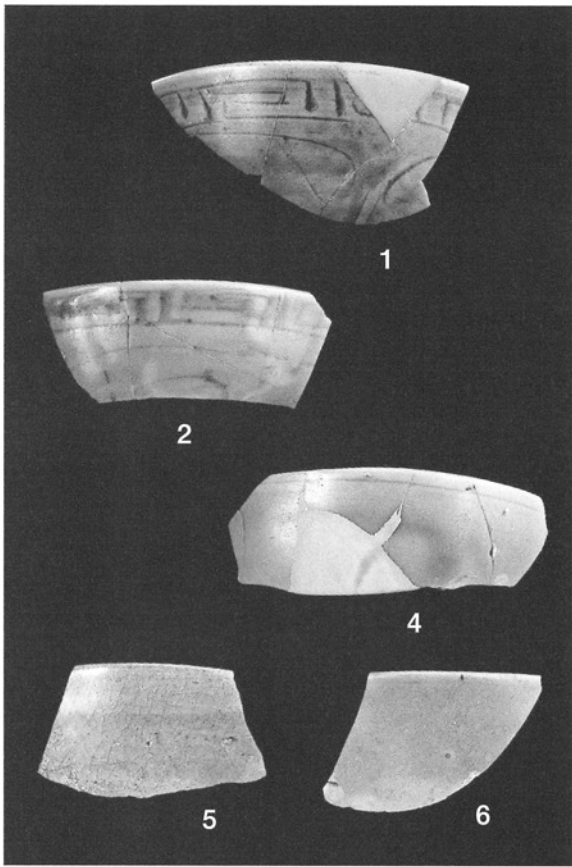
图版24 (第29图) 青磁：碗 (1~13)



图版 25 (第 30 图) 青磁：碗 (1~10)

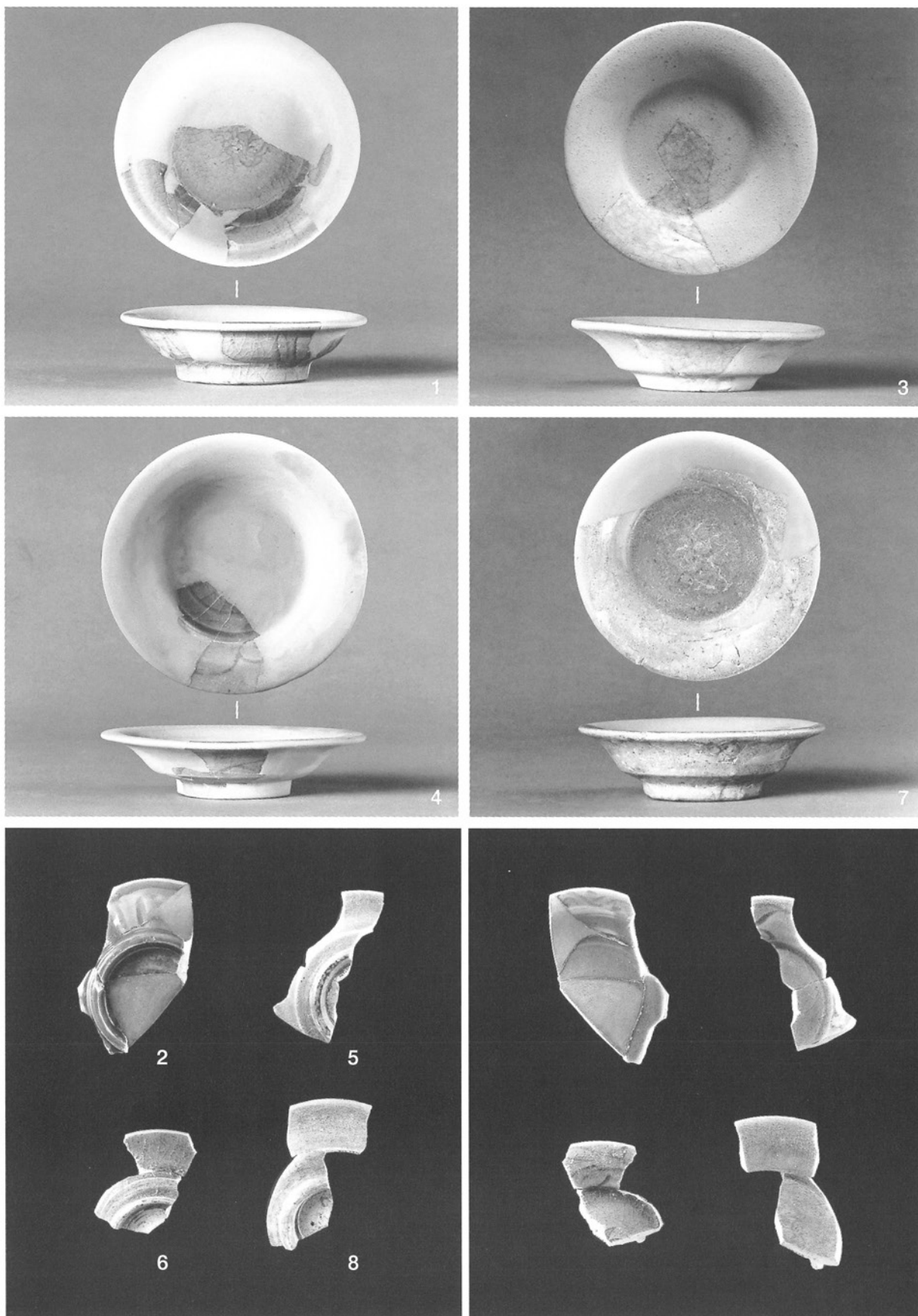


图版26 (第31图) 青磁：碗 (1~15)

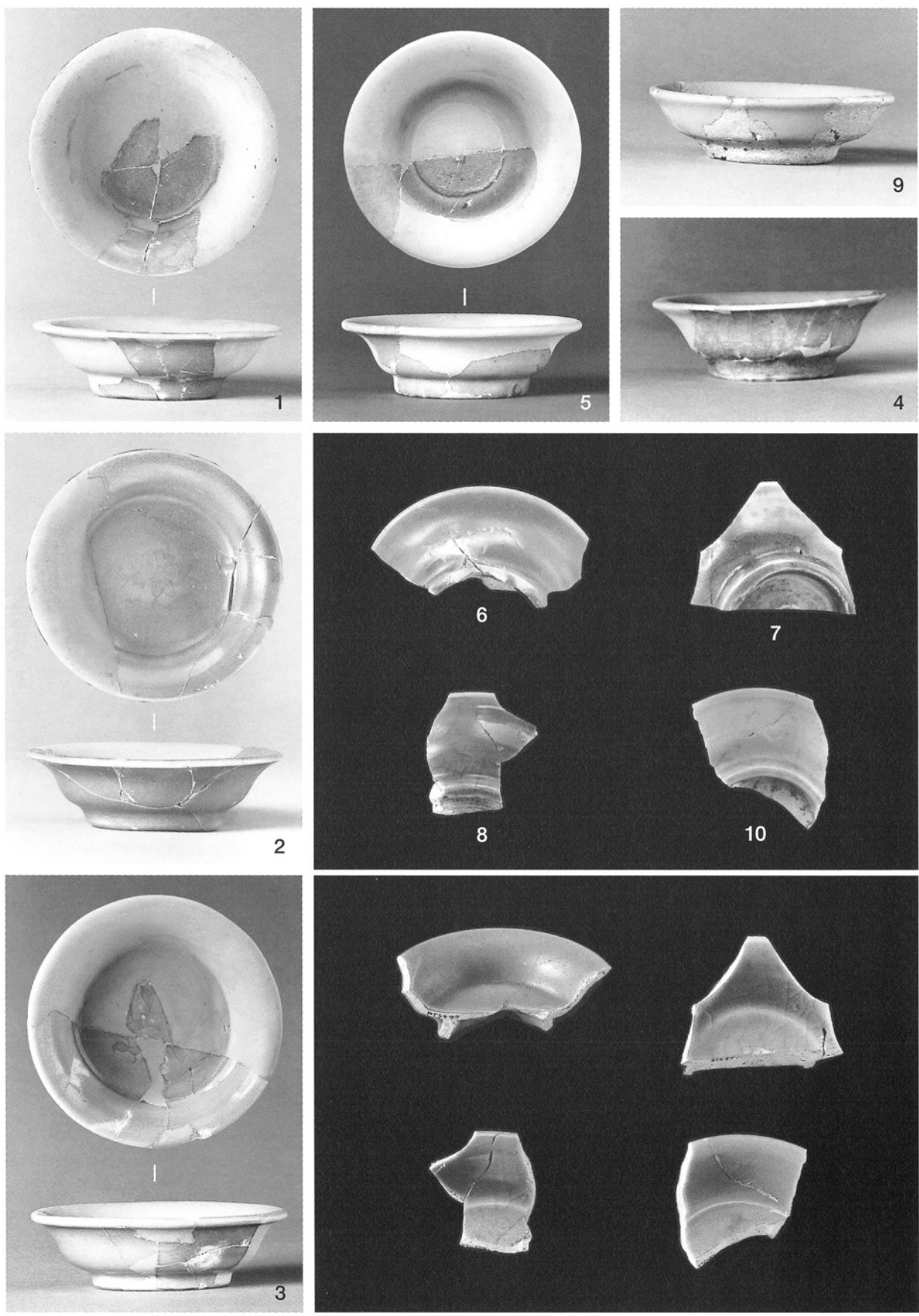


图版27 (第32图) 青磁:碗 (1~7)

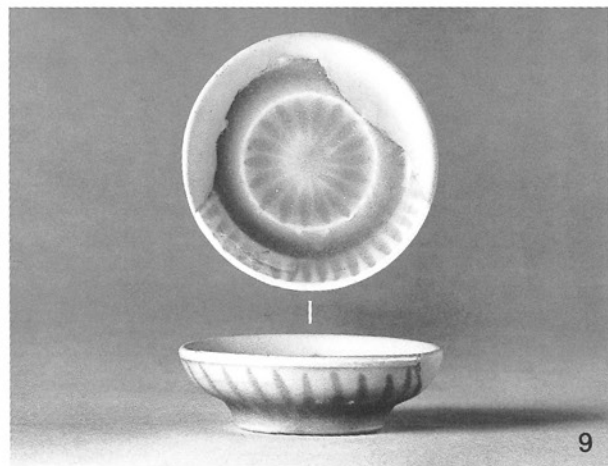
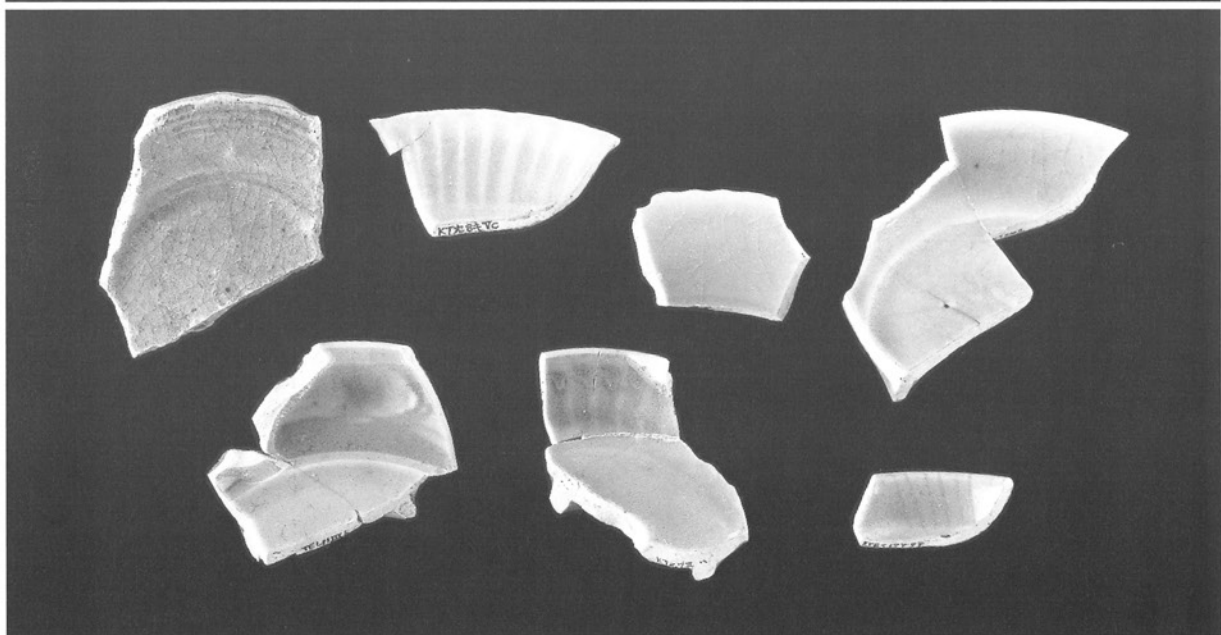
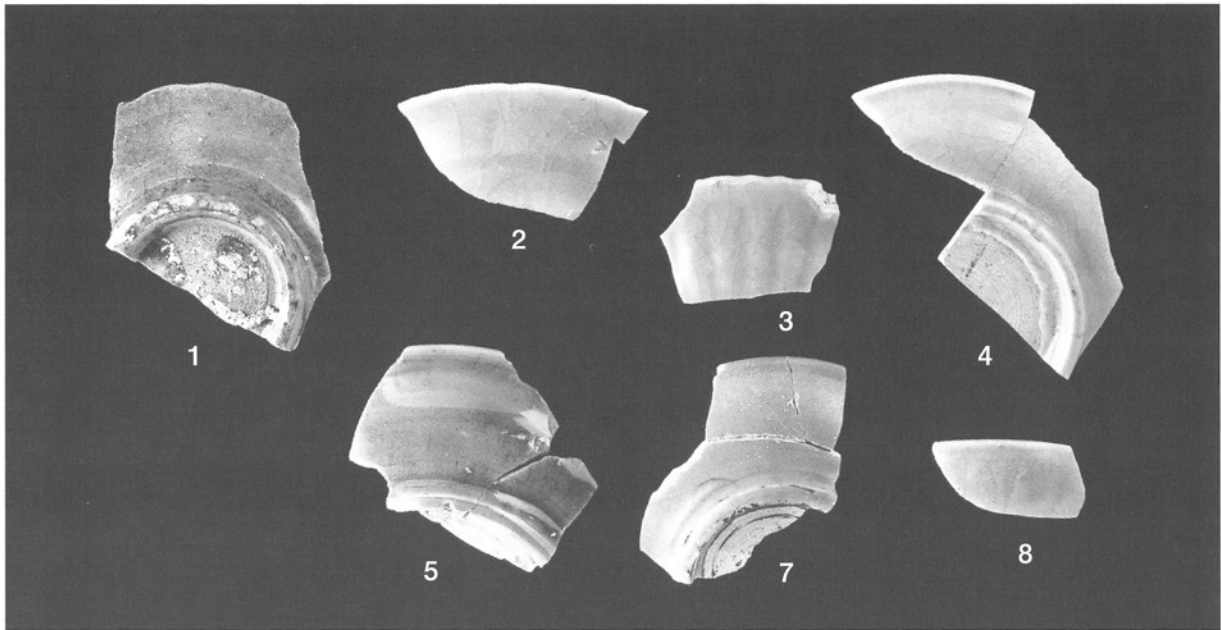




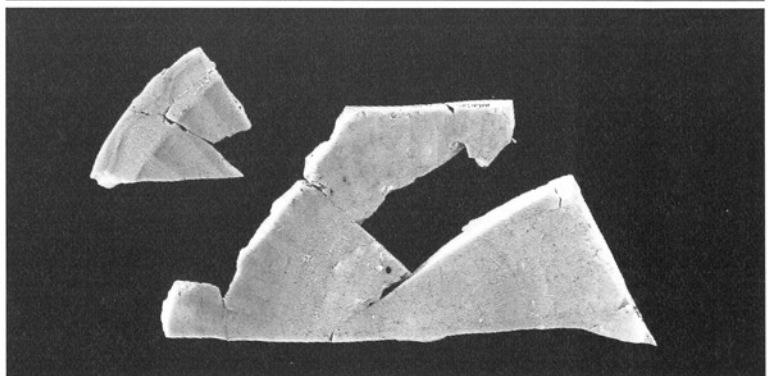
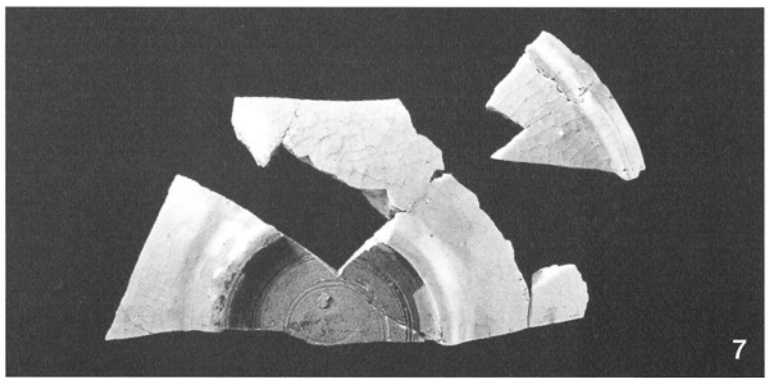
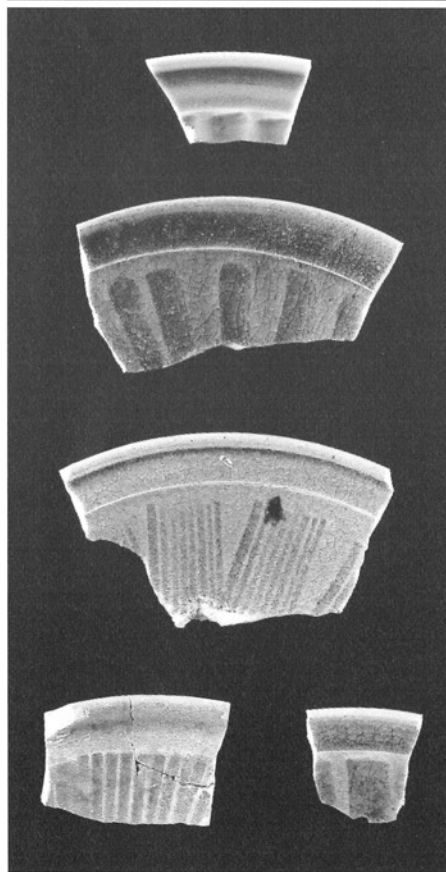
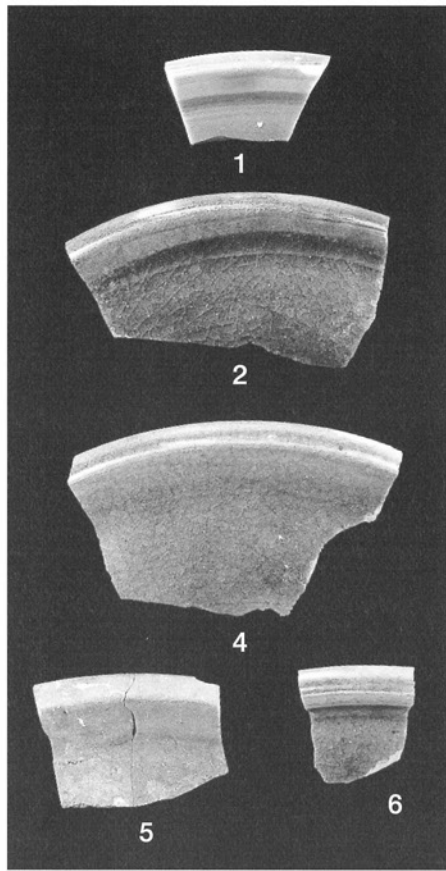
图版28 (第33图) 青磁：皿 (1~8)



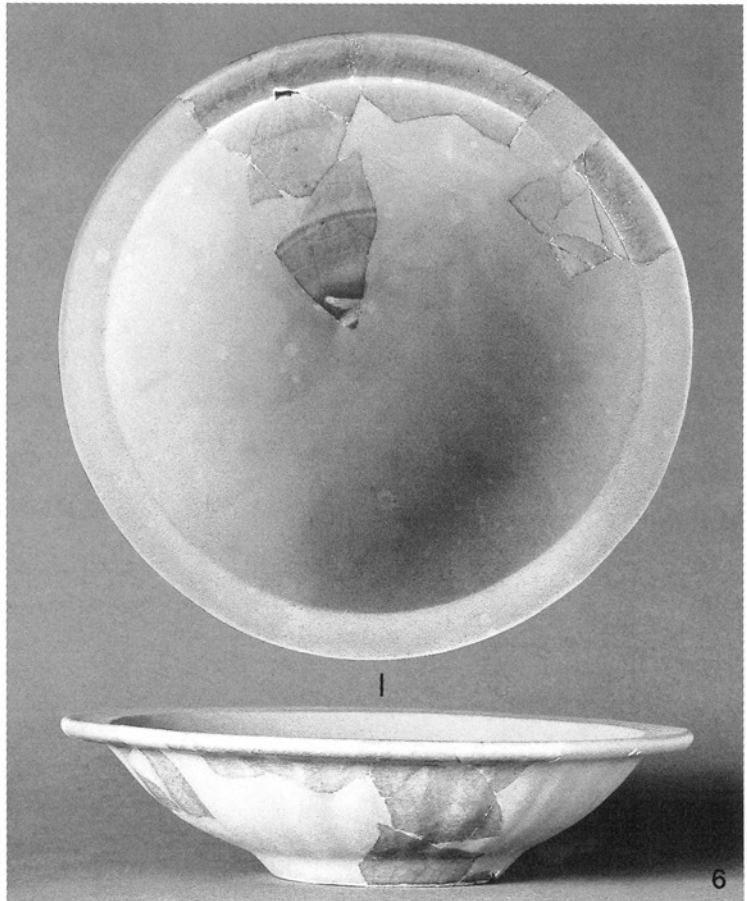
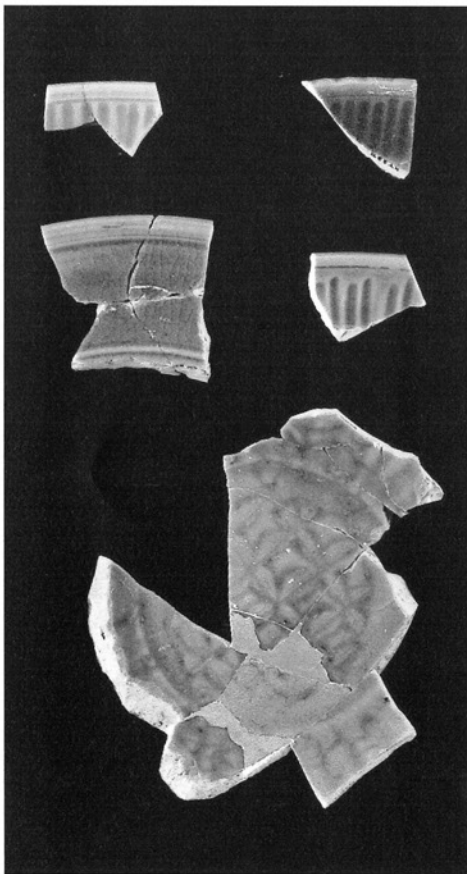
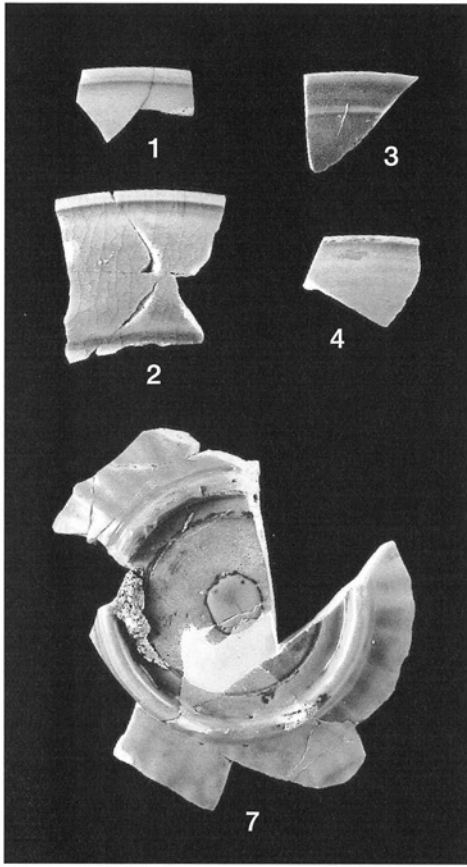
图版29 (第34图) 青磁：皿 (1~10)



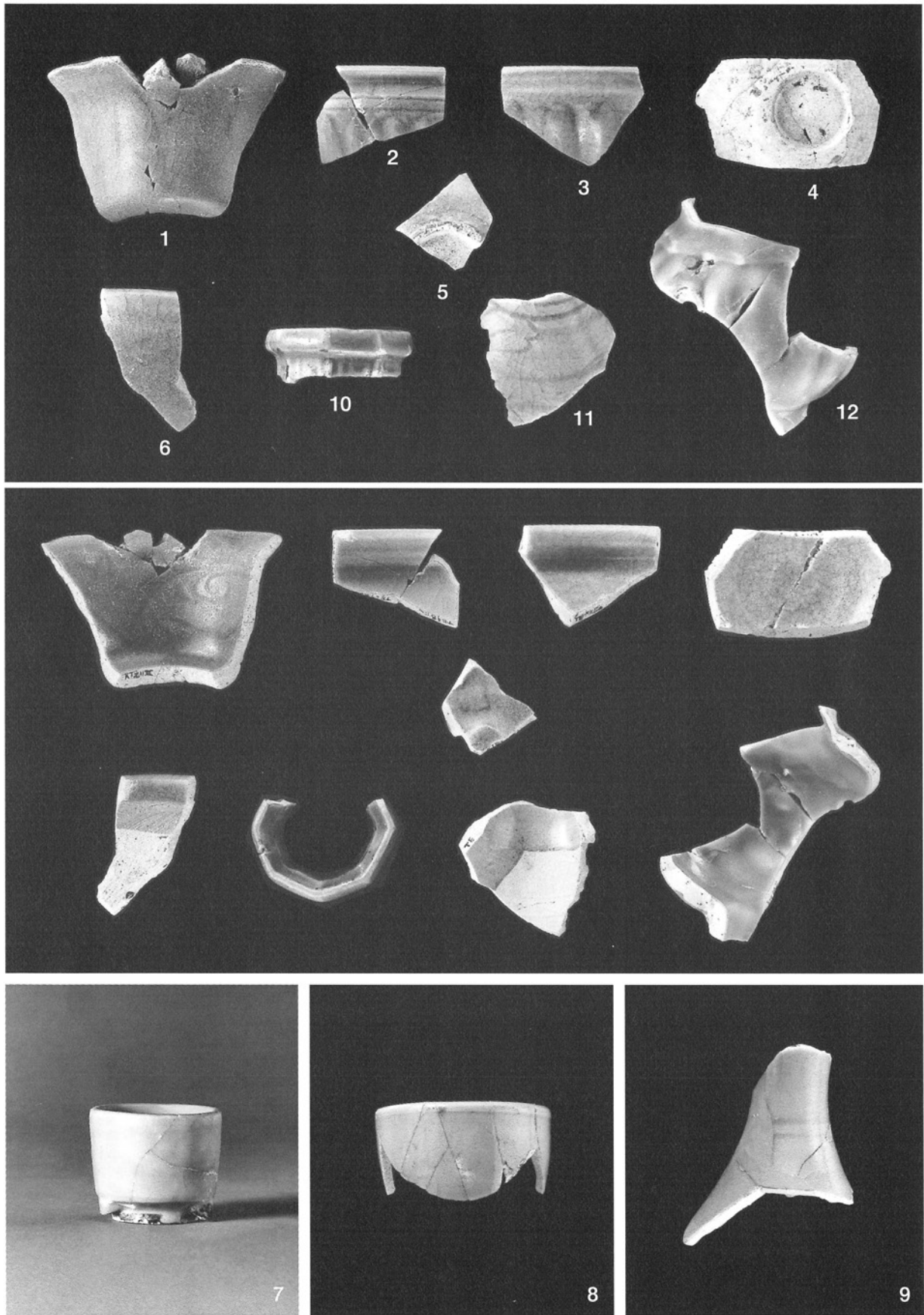
图版30 (第35图) 青磁：皿 (1~9)



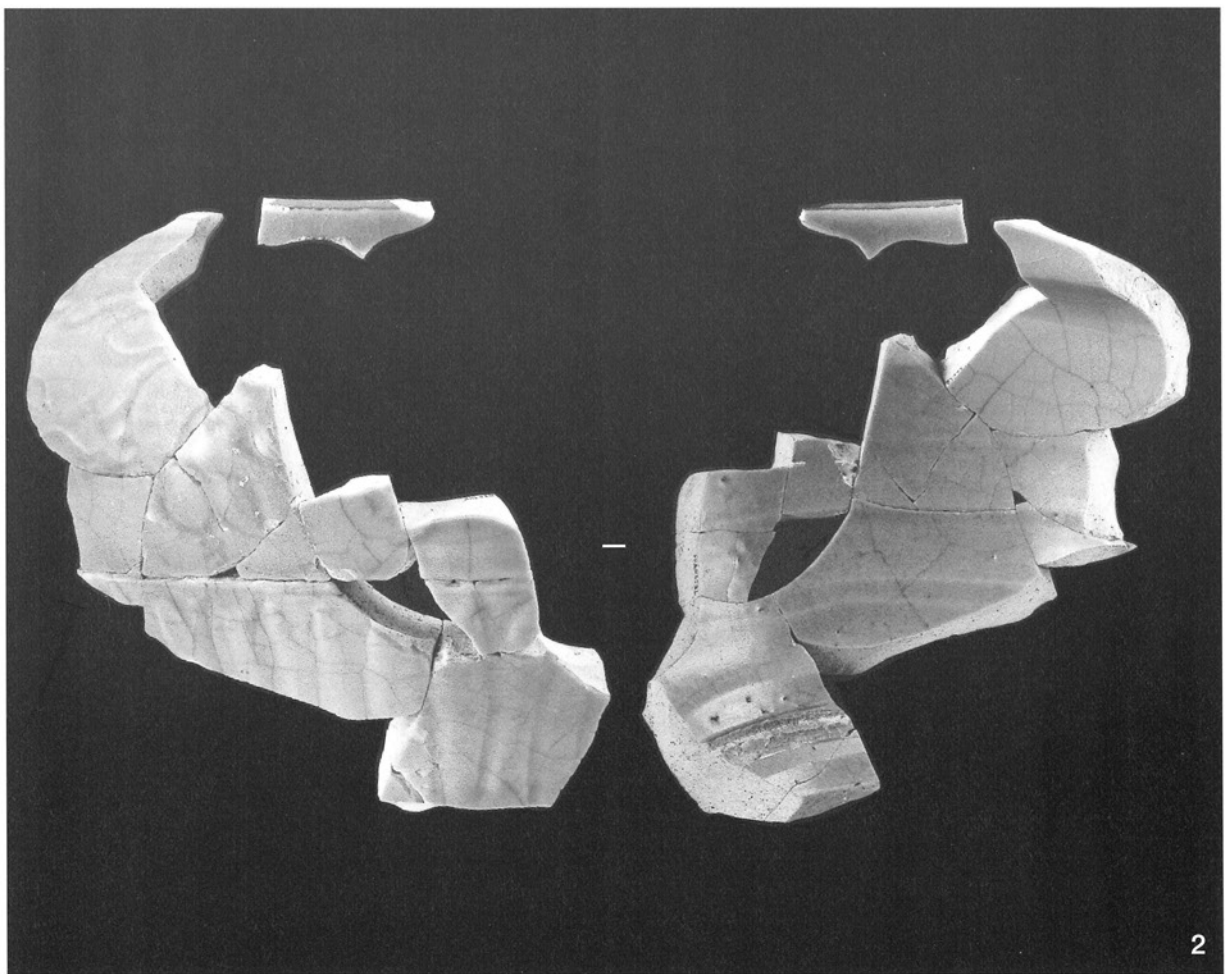
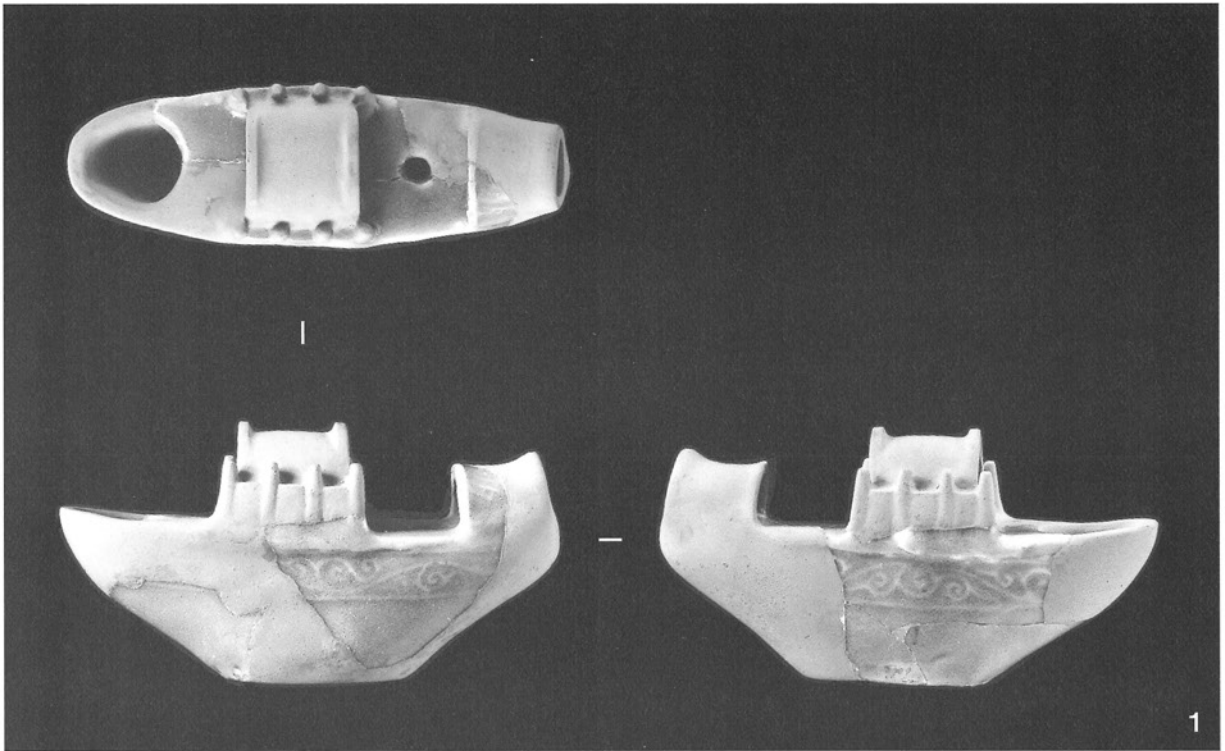
图版31 (第36图) 青磁：盤 (1~7)



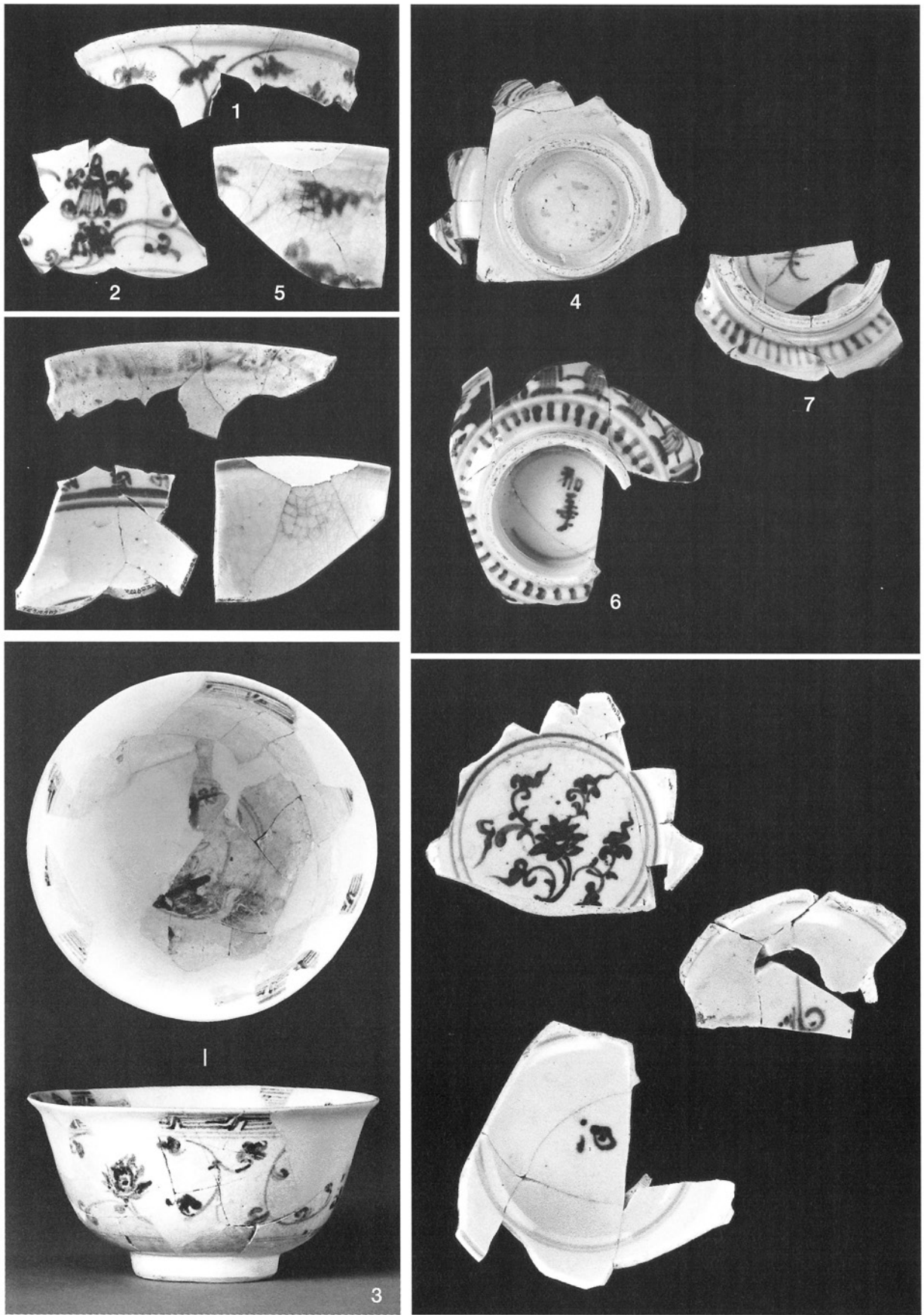
图版32 (第37图) 青磁：盤 (1~7)



图版33 (第38图) 青磁：杯 (1~5) · 搗鉢 (6) · 香炉 (7·8) · 瓶 (9~11) · 袋物 (12)

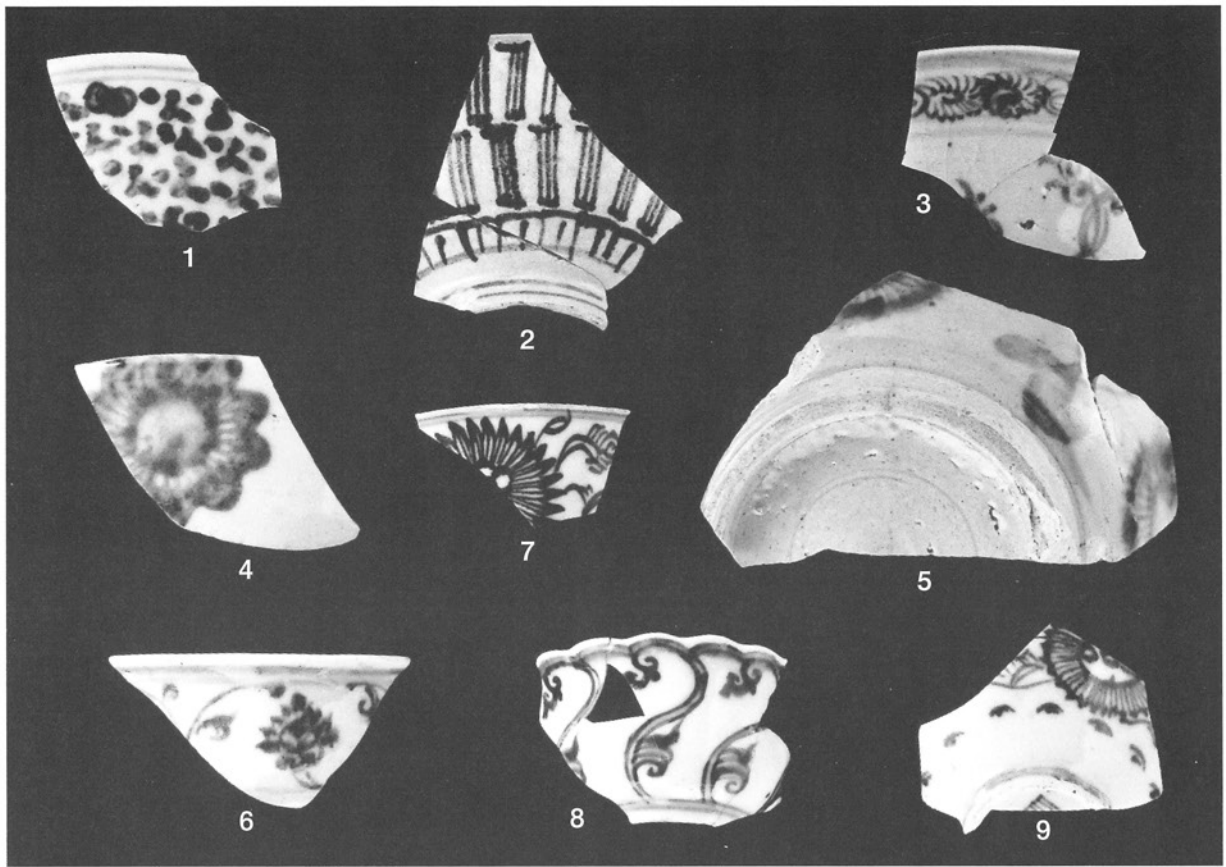


图版34 (第39图) 青磁：水滴 (1) · 壺 (2)



图版35 (第40图) 青花：碗 (1~7)

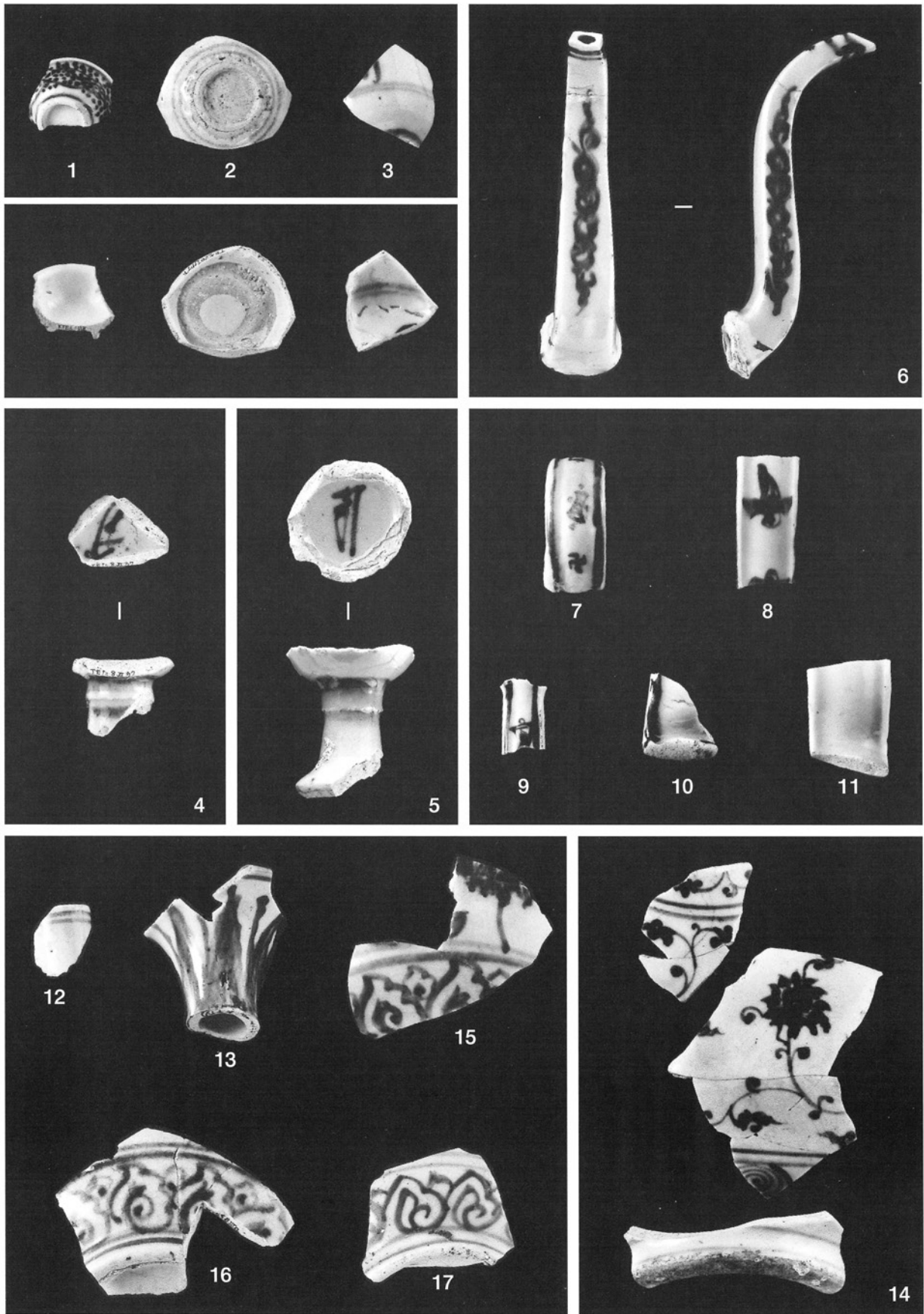




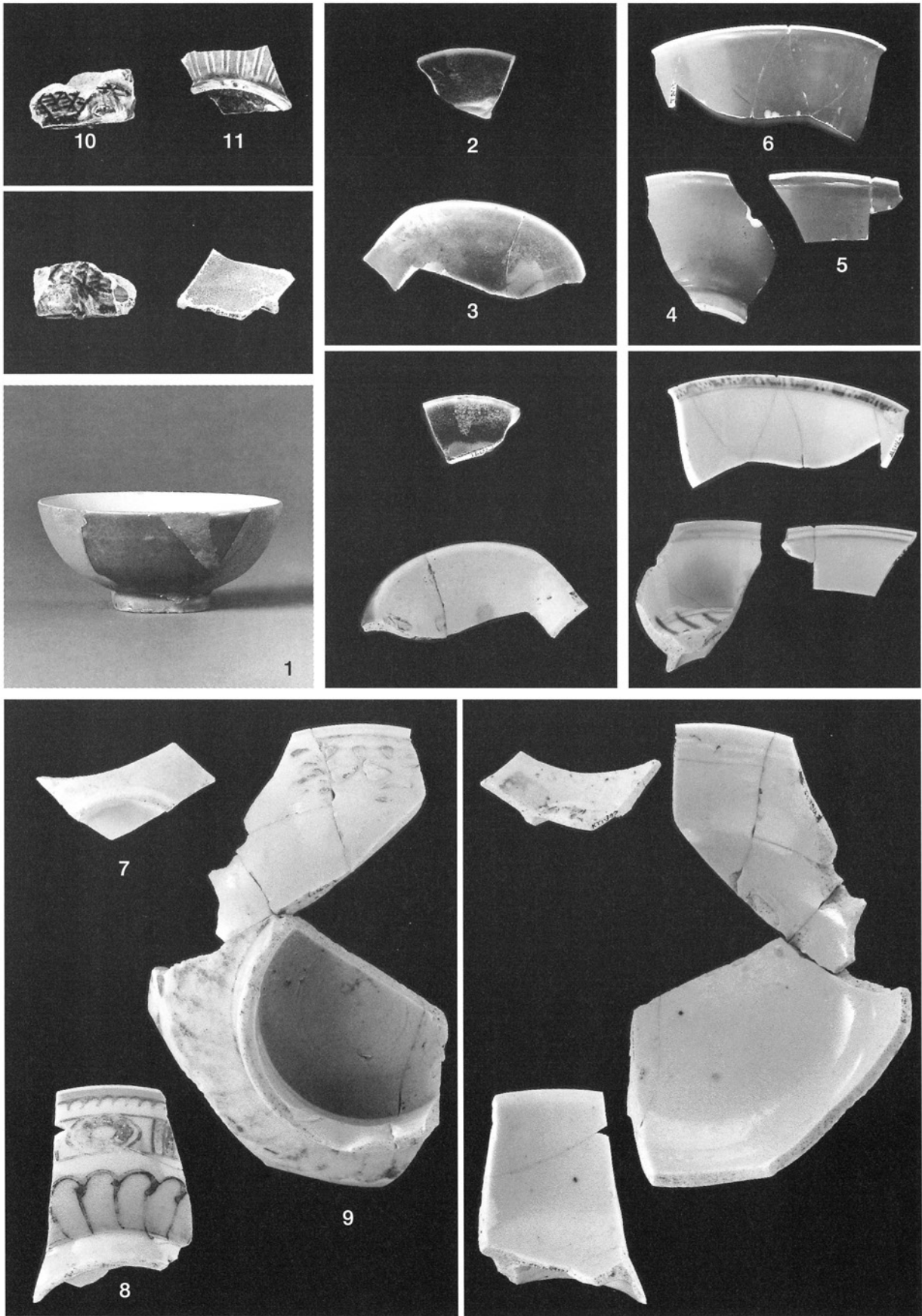
图版36 (第41图) 青花：碗 (1~9)



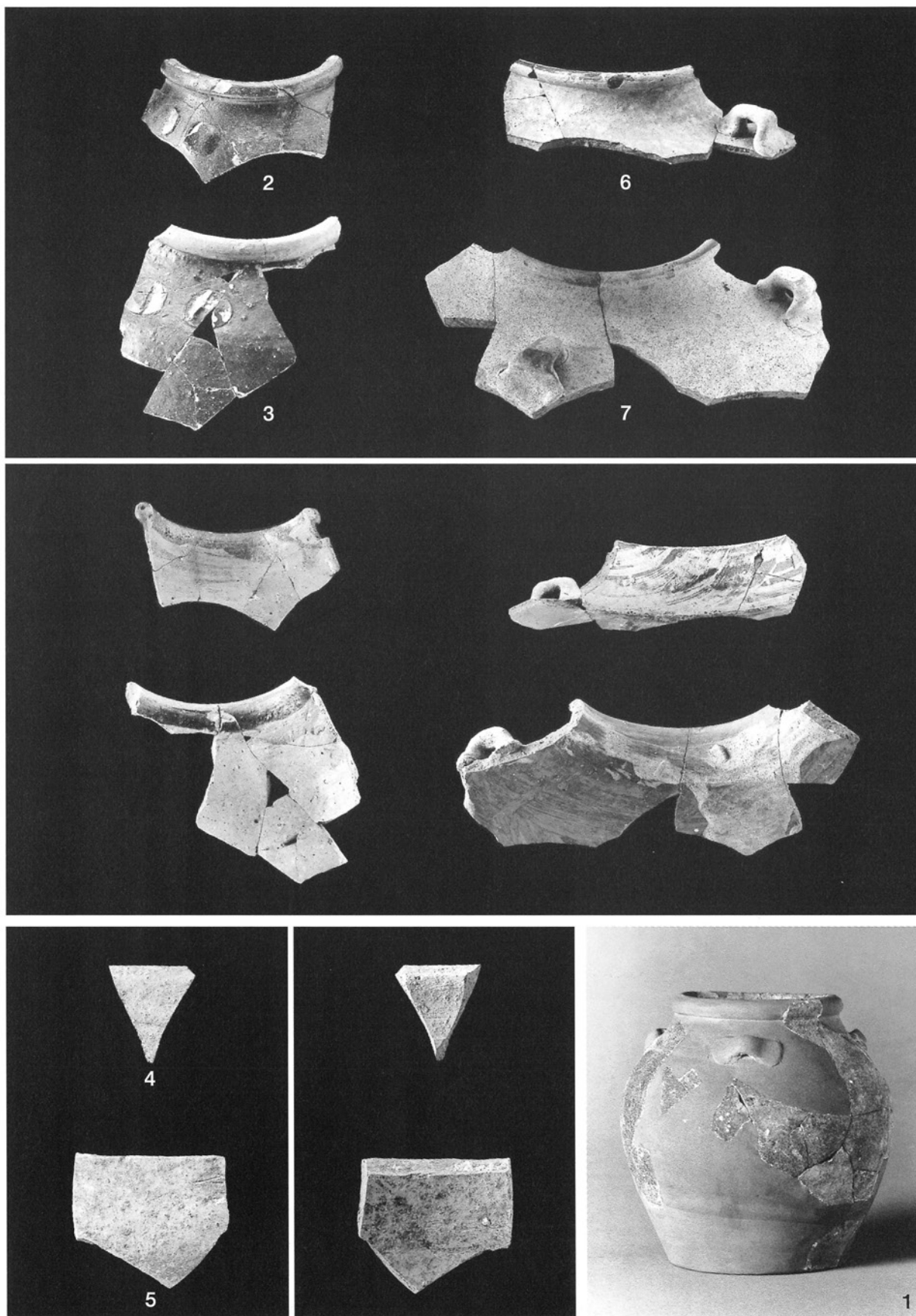
图版37 (第42图) 青花: 皿 (1~6) · 盘 (7)



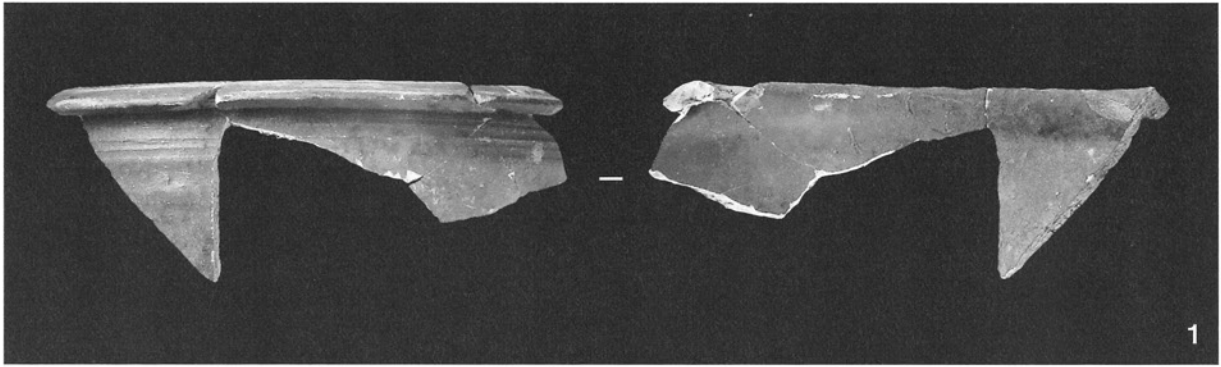
图版38 (第43图) 青花: 杯 (1·2) ·高足杯 (3~5) ·水注 (6~11) ·瓶 (12~17)



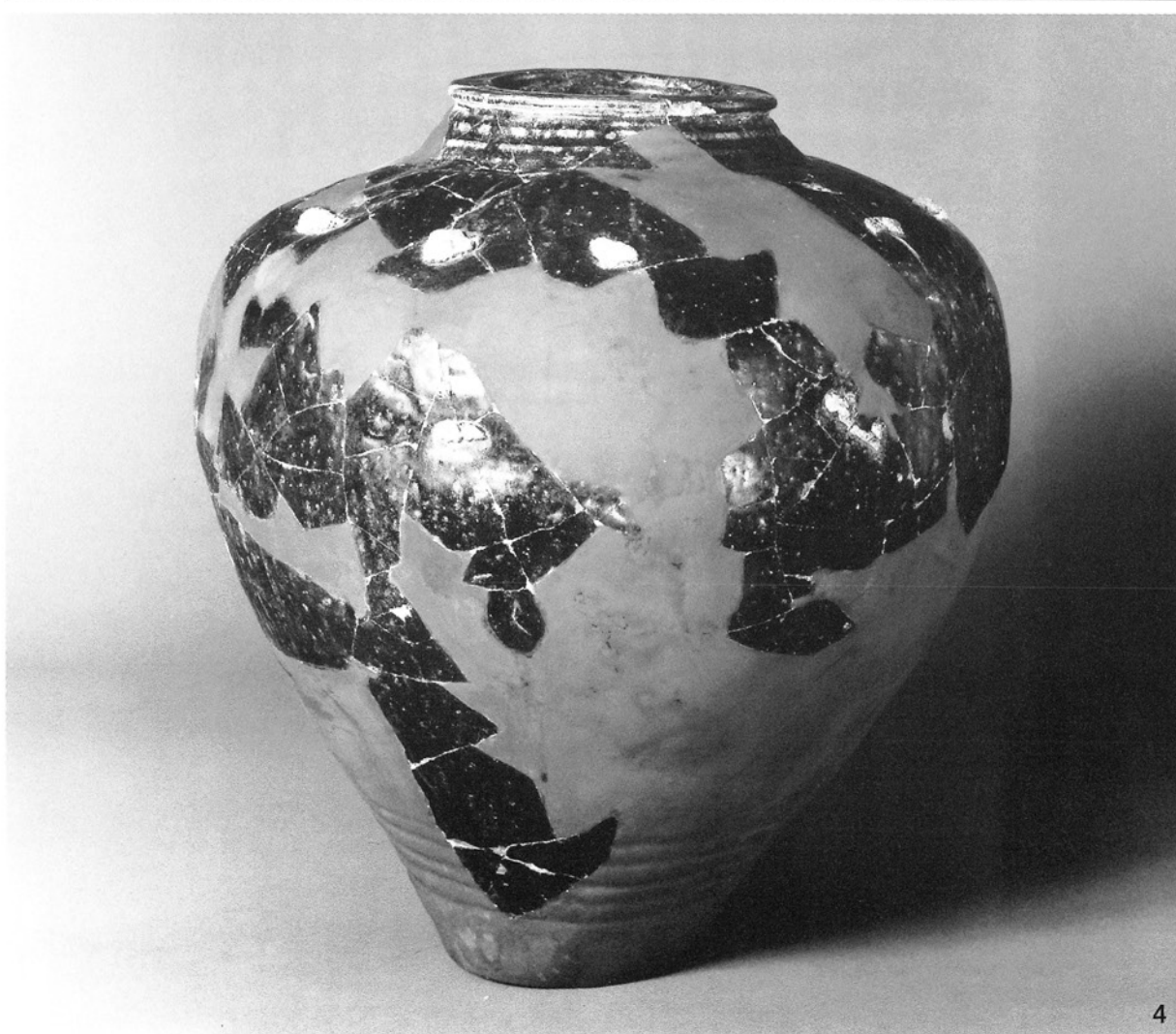
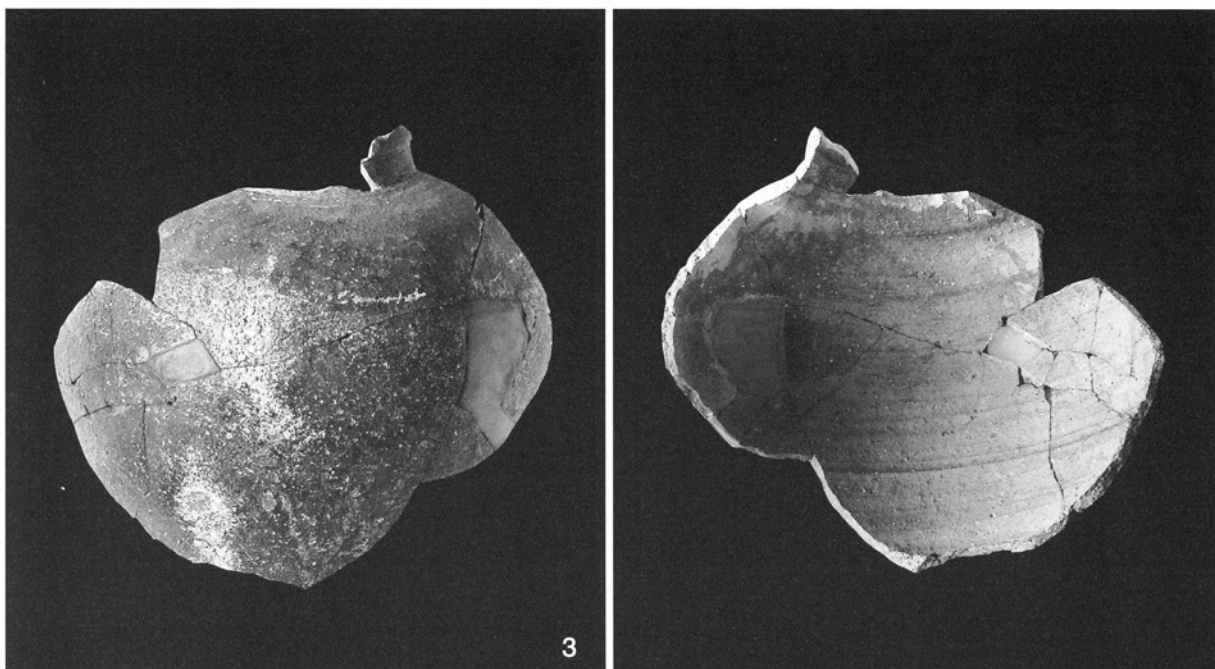
図版39 (第44図) 瑠璃釉：小碗 (1) ・瓶 (2・3)、鉄釉：小碗 (4~6)  
 色絵：碗 (7~9)、三彩 (10)、輩翠釉：皿 (11)



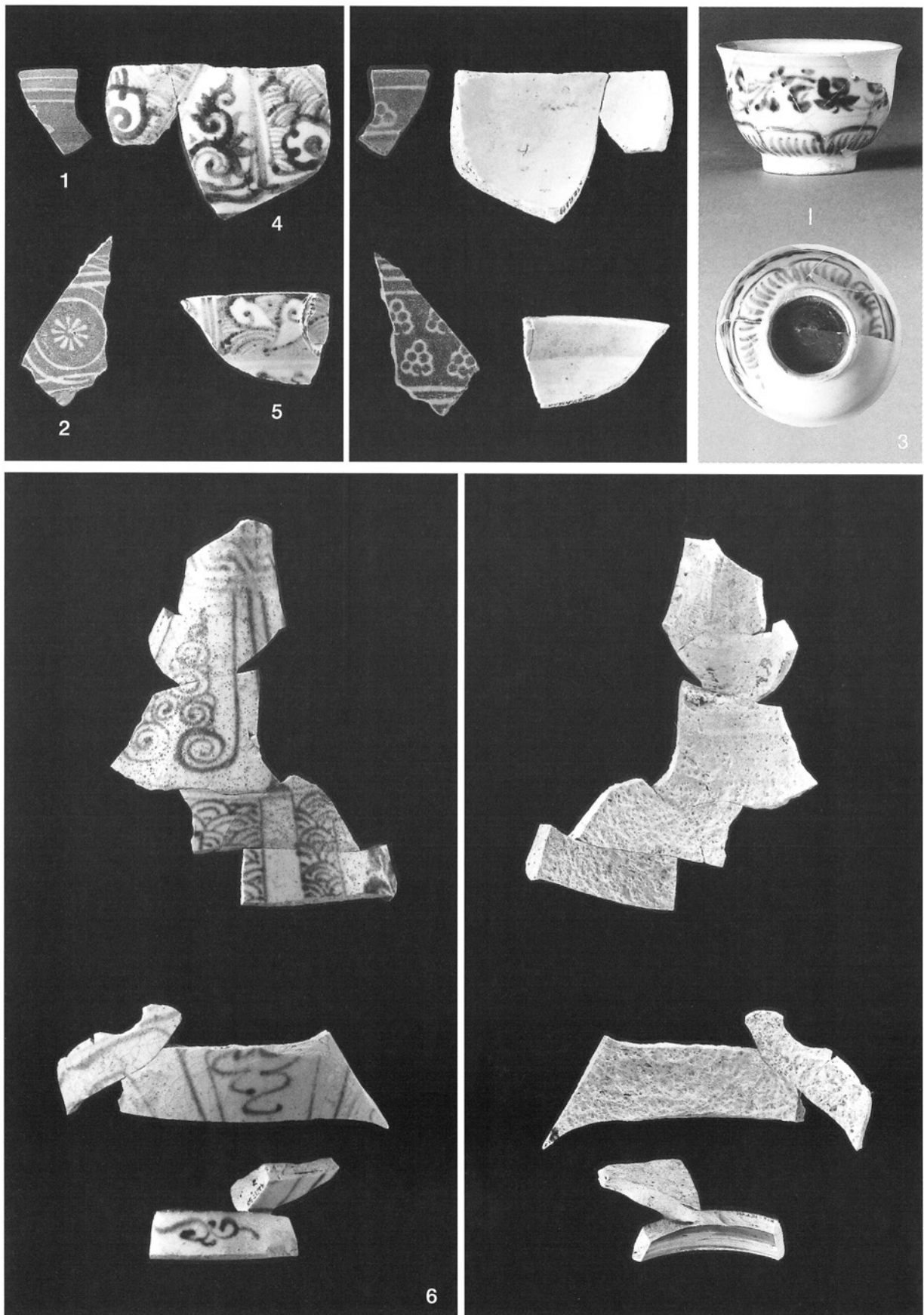
図版40 (第45図) 褐釉陶器：壺 (1~3) ・鉢 (4・5)、白釉陶器：壺 (6・7)



図版41 (第46図) 褐釉陶器：鉢 (1) ・播鉢 (2)

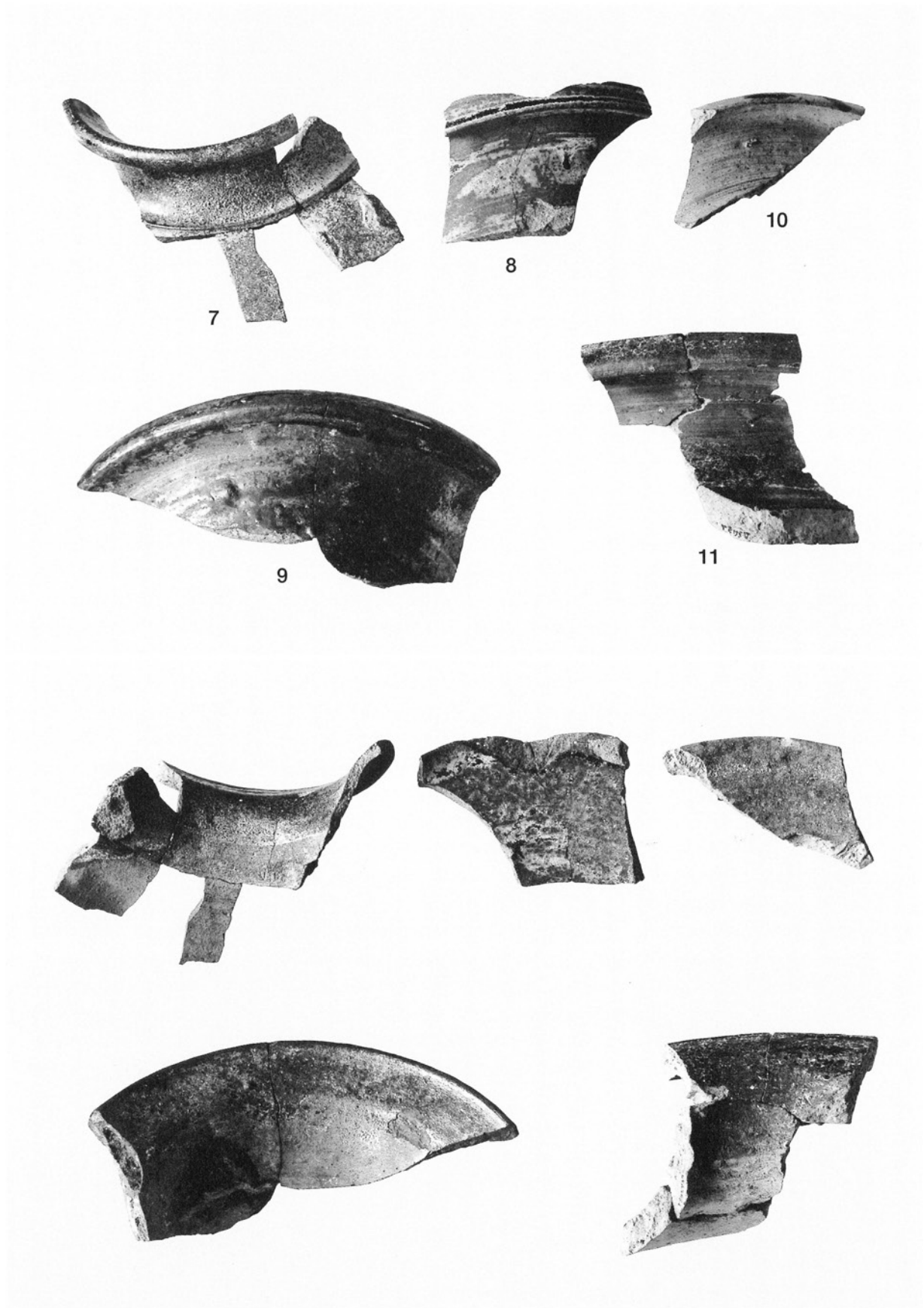


図版42 (第46図) 褐釉陶器：壺 (3・4)

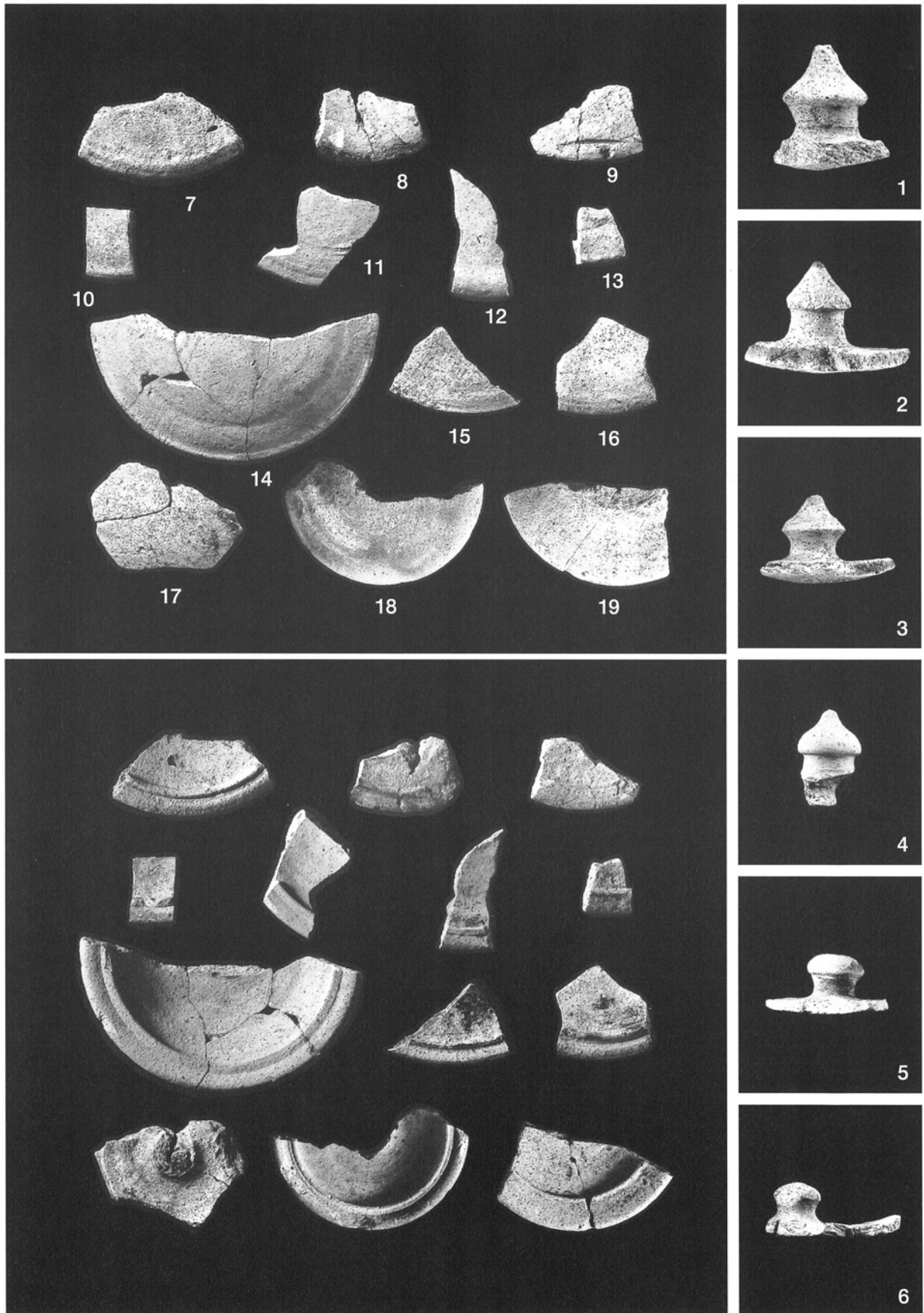


図版43 (第47図) 韓国産陶磁器 (1・2)、ベトナム産陶磁器 (3~6)

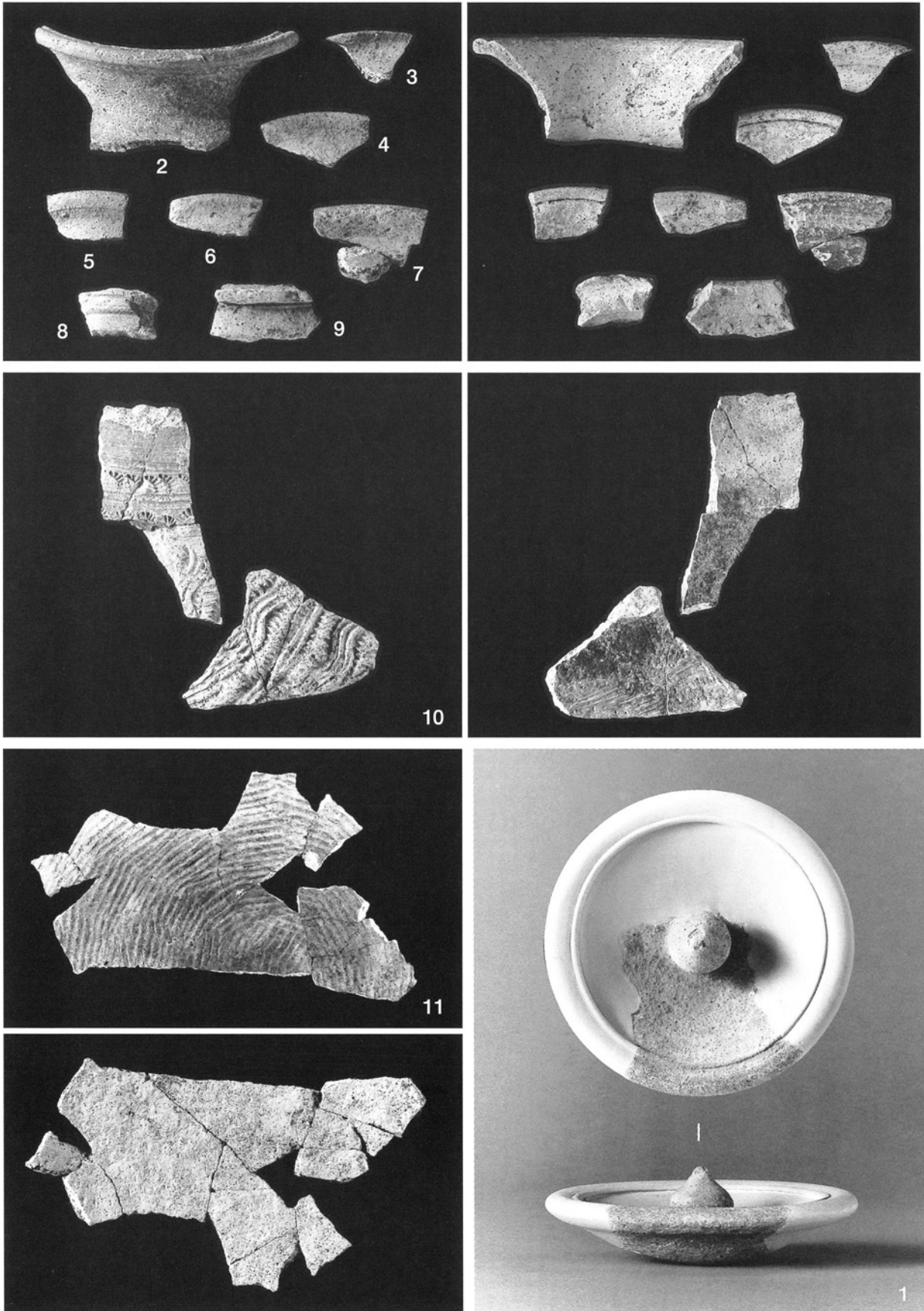




図版44 (第47図) タイ産陶器 (7~11)



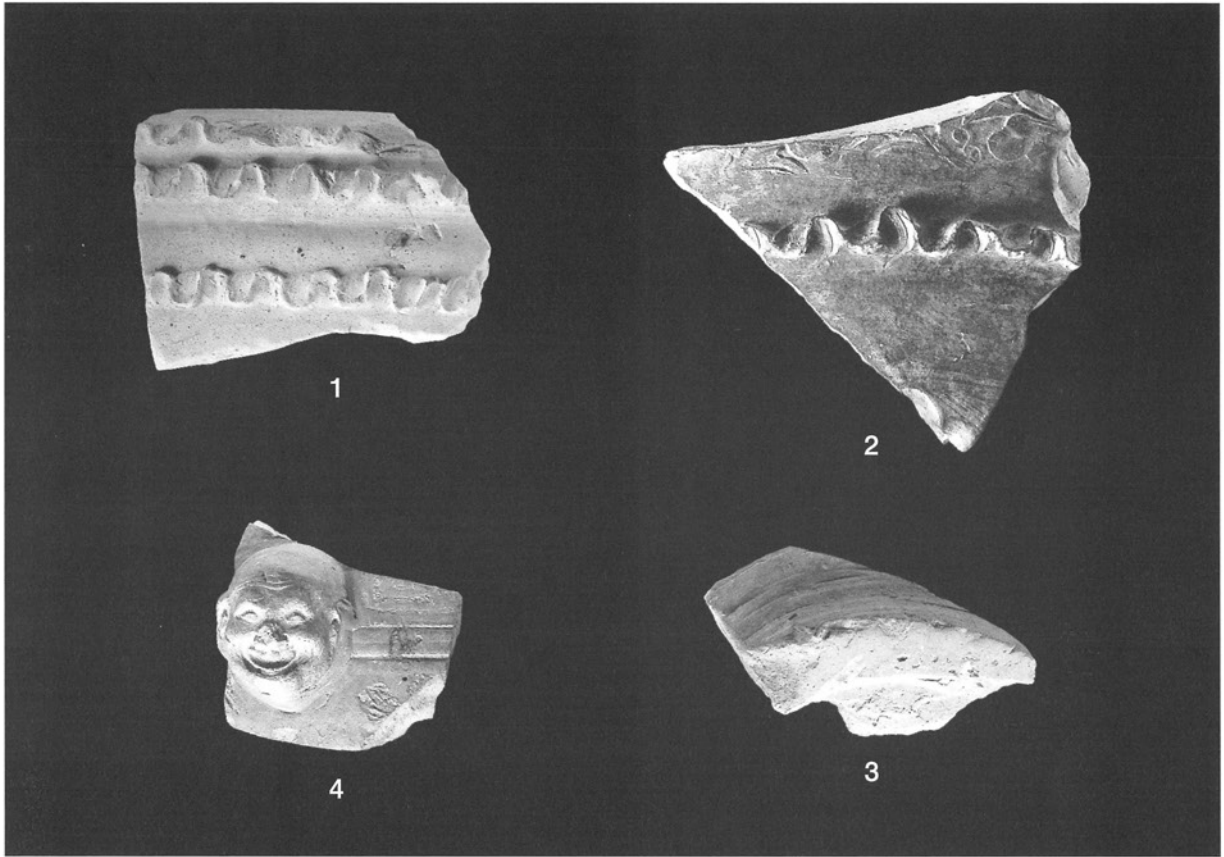
図版45 (第48図) タイ産半練 (土器) : 蓋 (1~19)



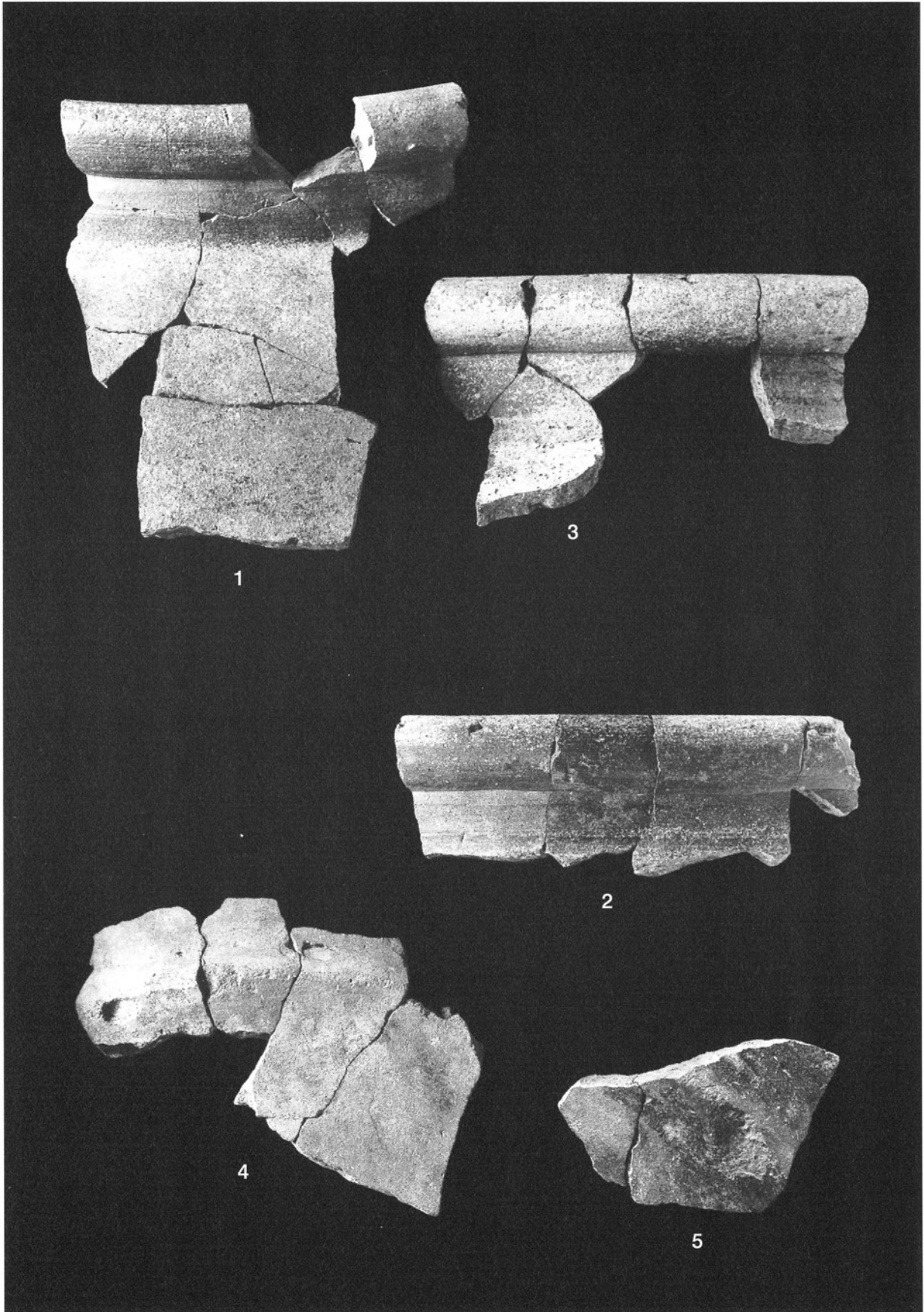
図版46 (第49図) タイ産半練(土器)：蓋(1)・壺形(2~7・10・11)・鉢形?(9)・器種不明(8)



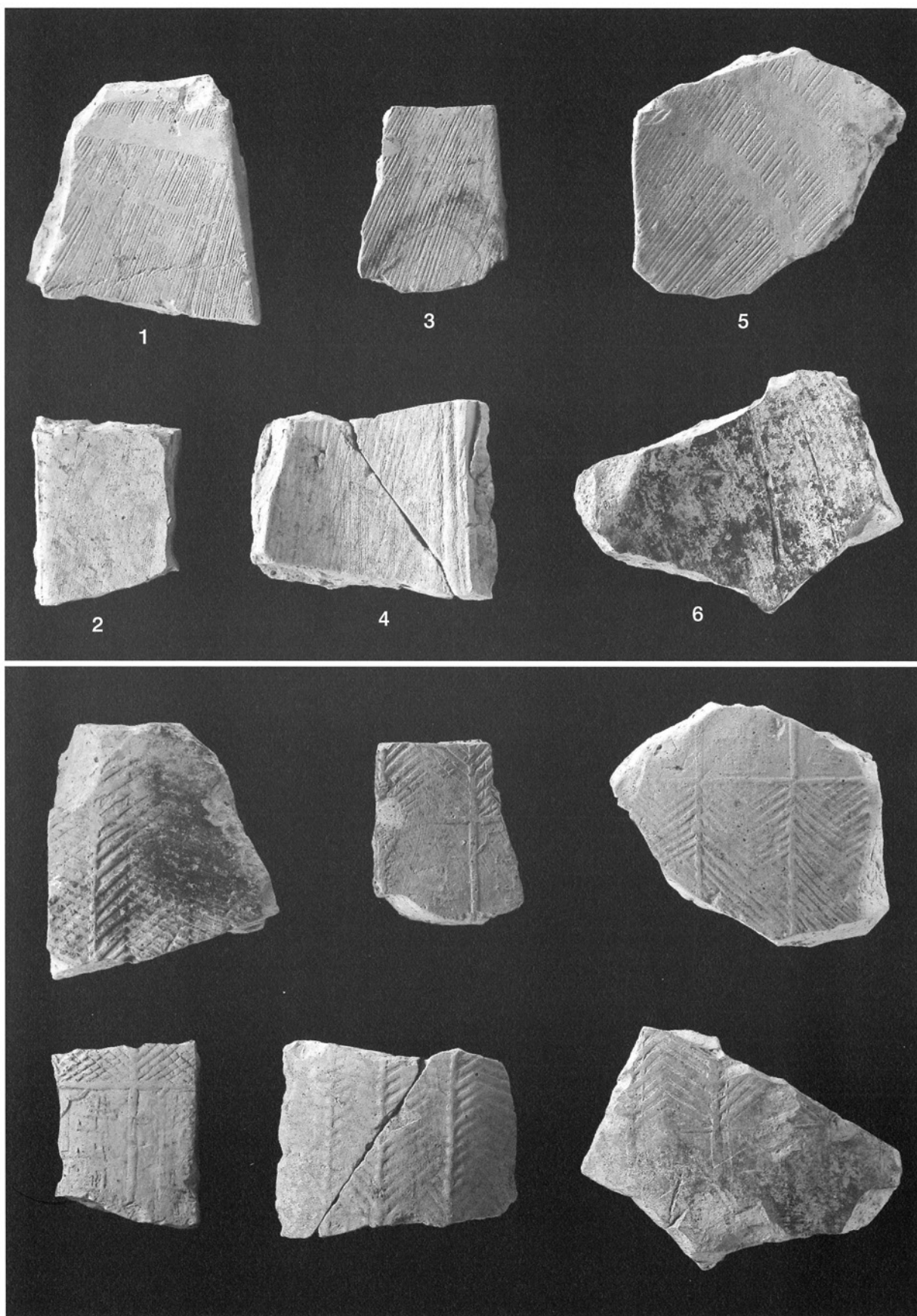
図版47 (第50図) 円形土製品 (1~7)



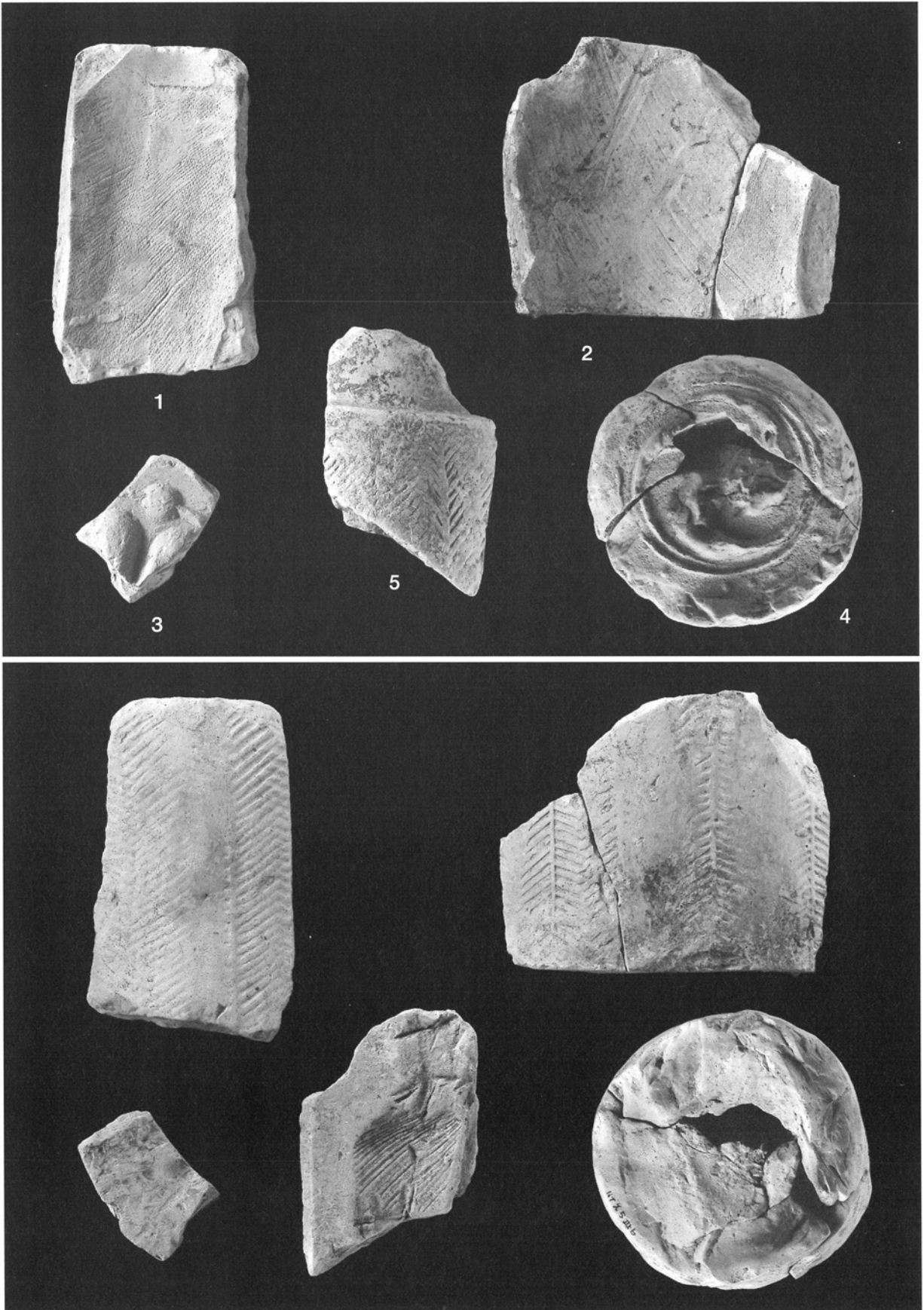
図版48 (第51図) 瓦質土器：植木鉢 (1・2) ・鉢 (3) ・炉 (4)、備前陶器：播鉢 (5～8)



图版49 (第52图) 備前陶器：大甕 (1~5)



图版50 (第54图) 高麗系瓦：平瓦 (1~6)



图版51 (第55图) 高麗系瓦：平瓦 (1·2)、大和系瓦：軒丸瓦 (3·4) ·丸瓦 (5)

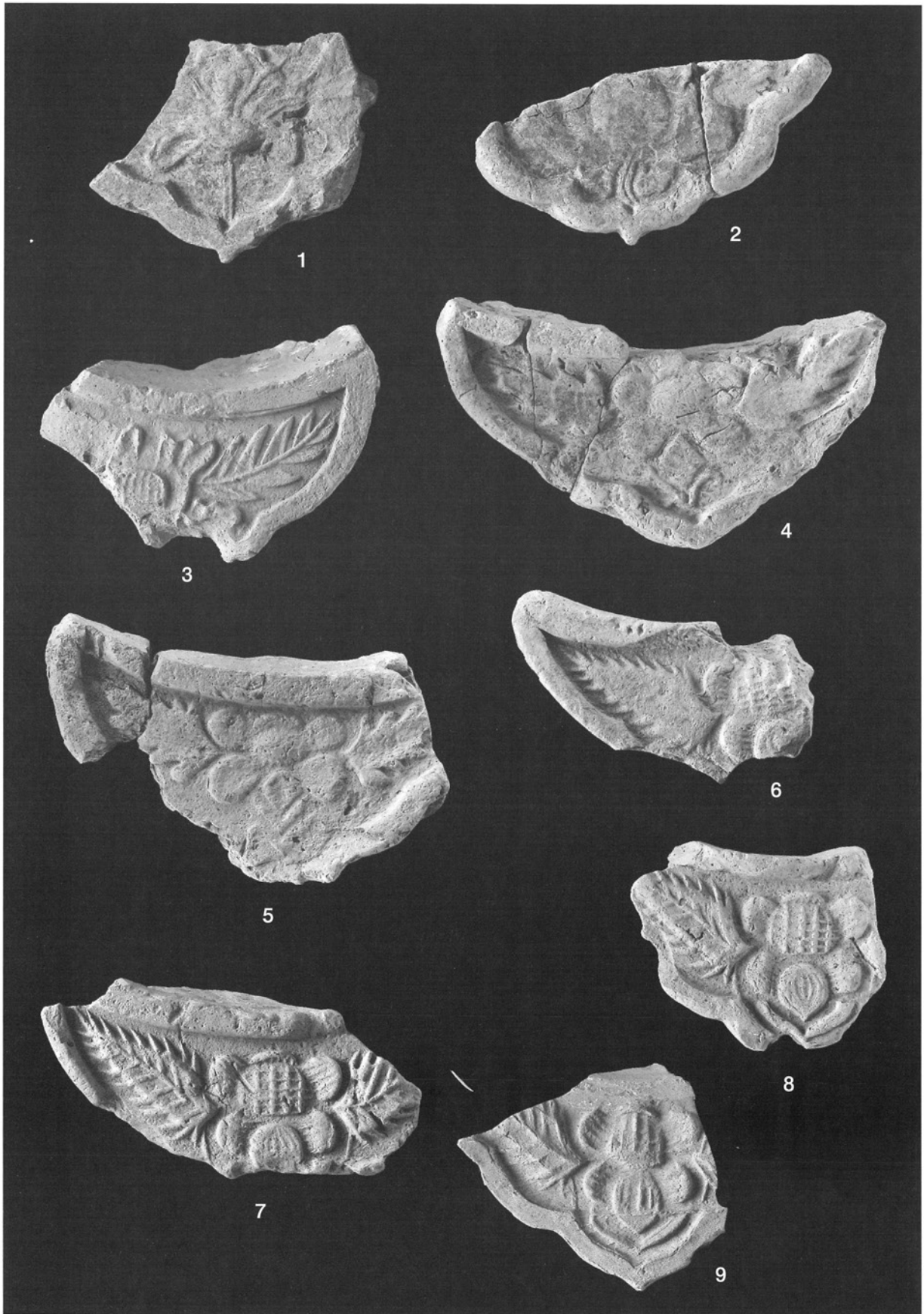




图版52 (第57图) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~8)



图版53 (第58图) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~7)



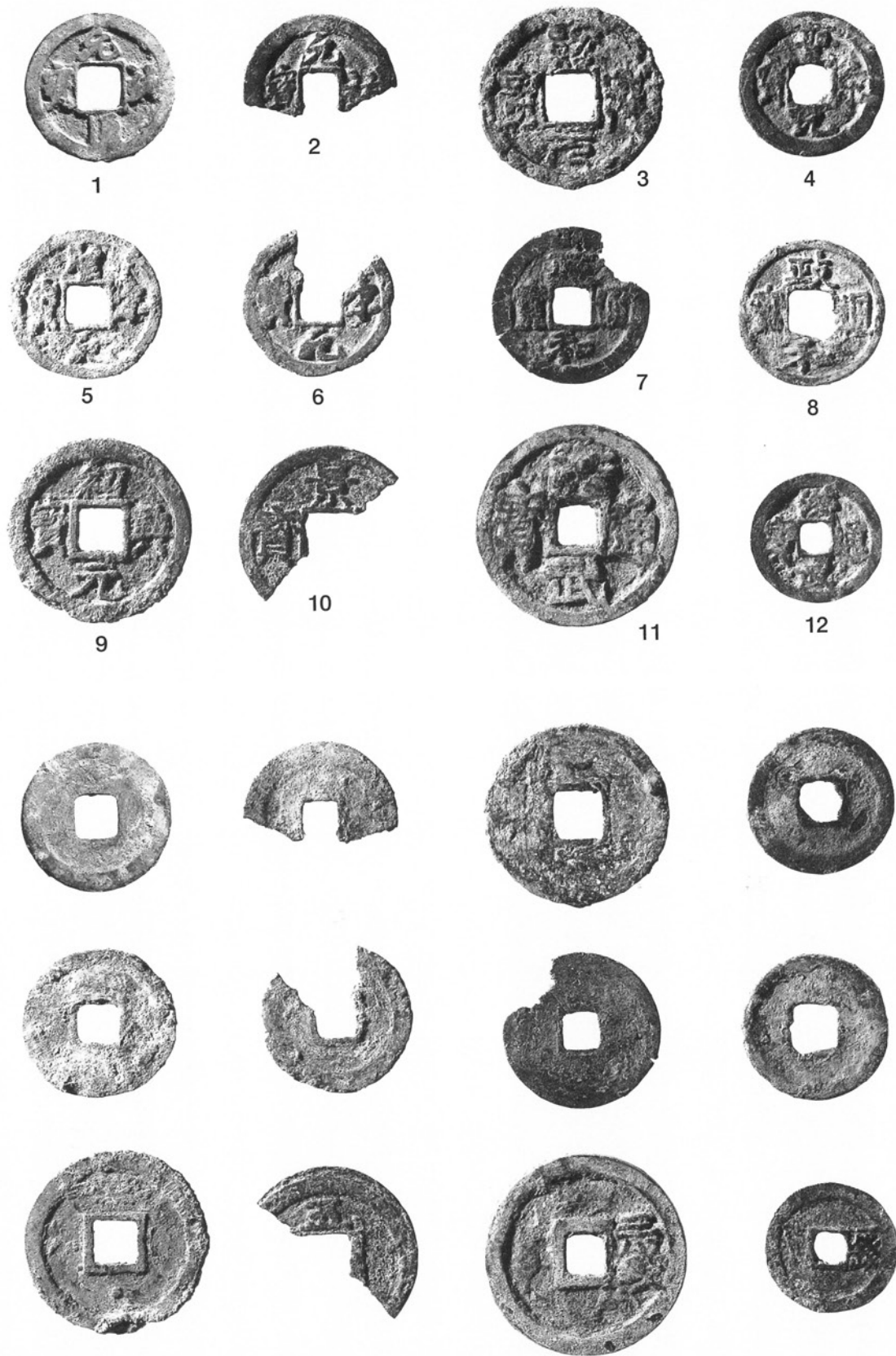
图版 54 (第 59 图) 明朝系瓦：軒平瓦 (1~9)



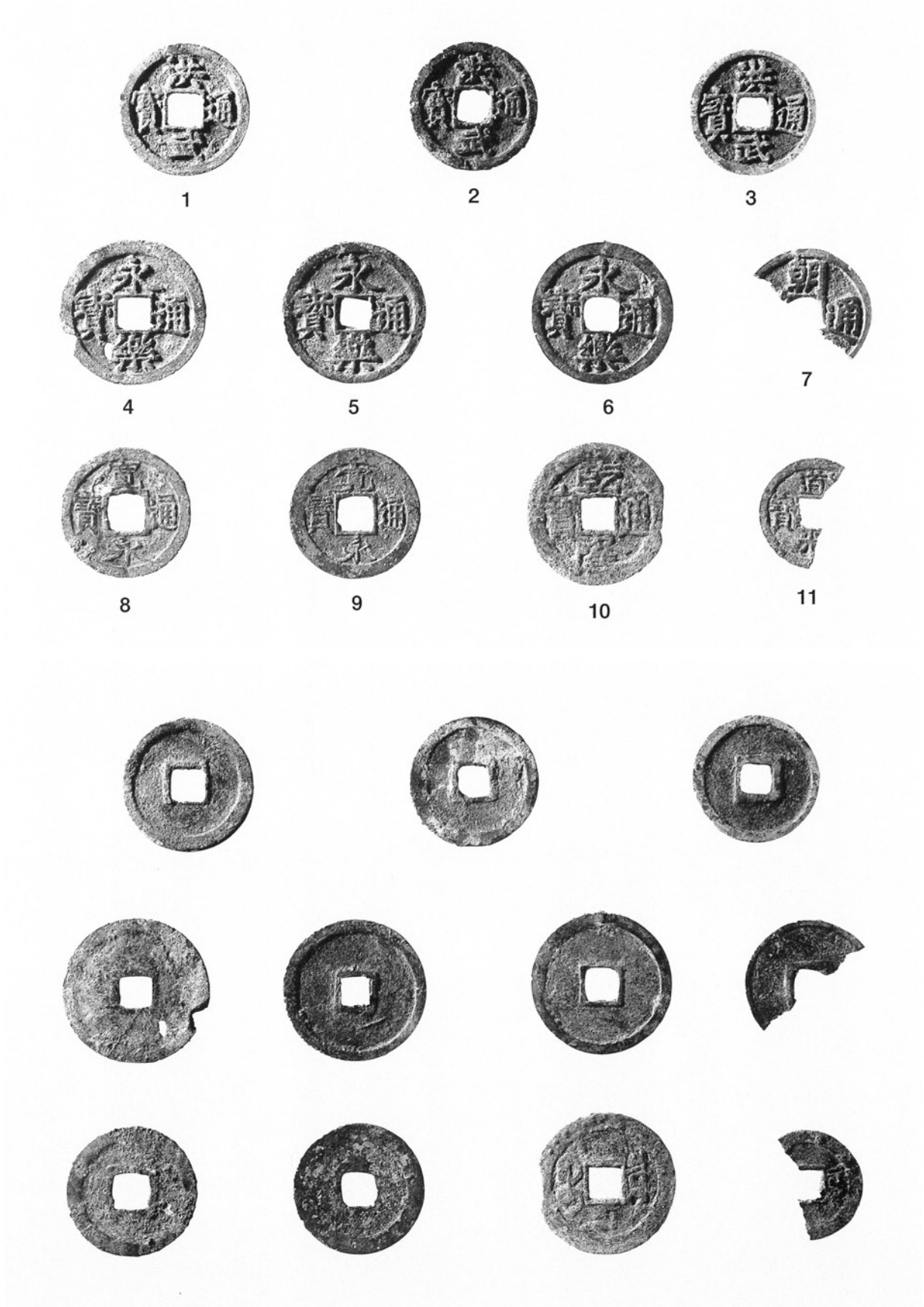
図版55 (第61図) 埴 : I類 (1) ・ II類 (2) ・ III類 (3~5)



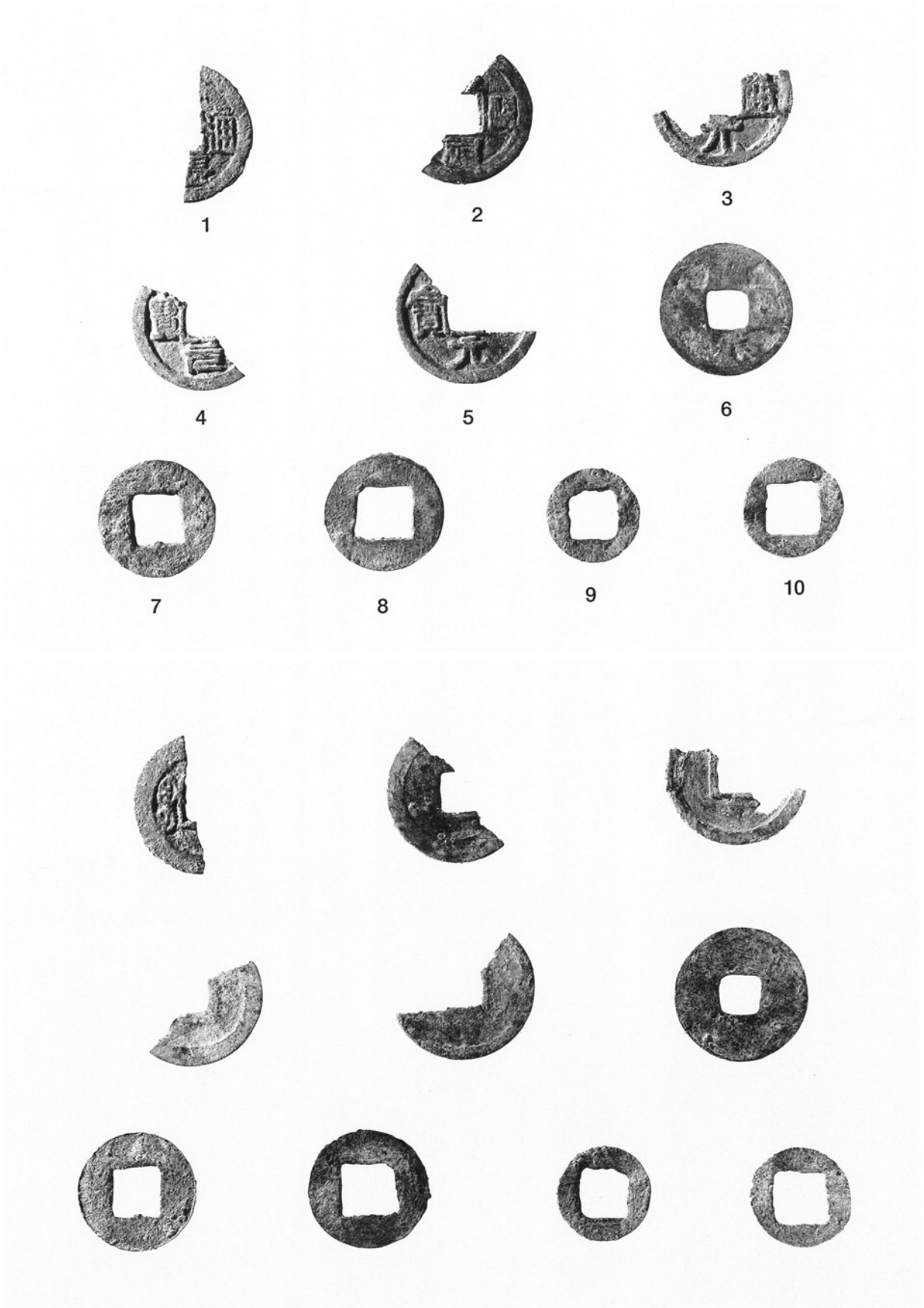
图版 56 (第 63 图) 钱货 (1~10)



图版57 (第64图) 钱货 (1~12)

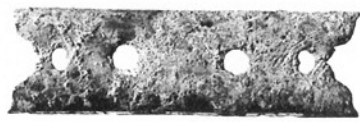


図版58 (第65図) 錢貨 (1~11)



图版 59 (第 66 图) 钱货 (1~10)





1



4



2



3



5



6



7



10



8

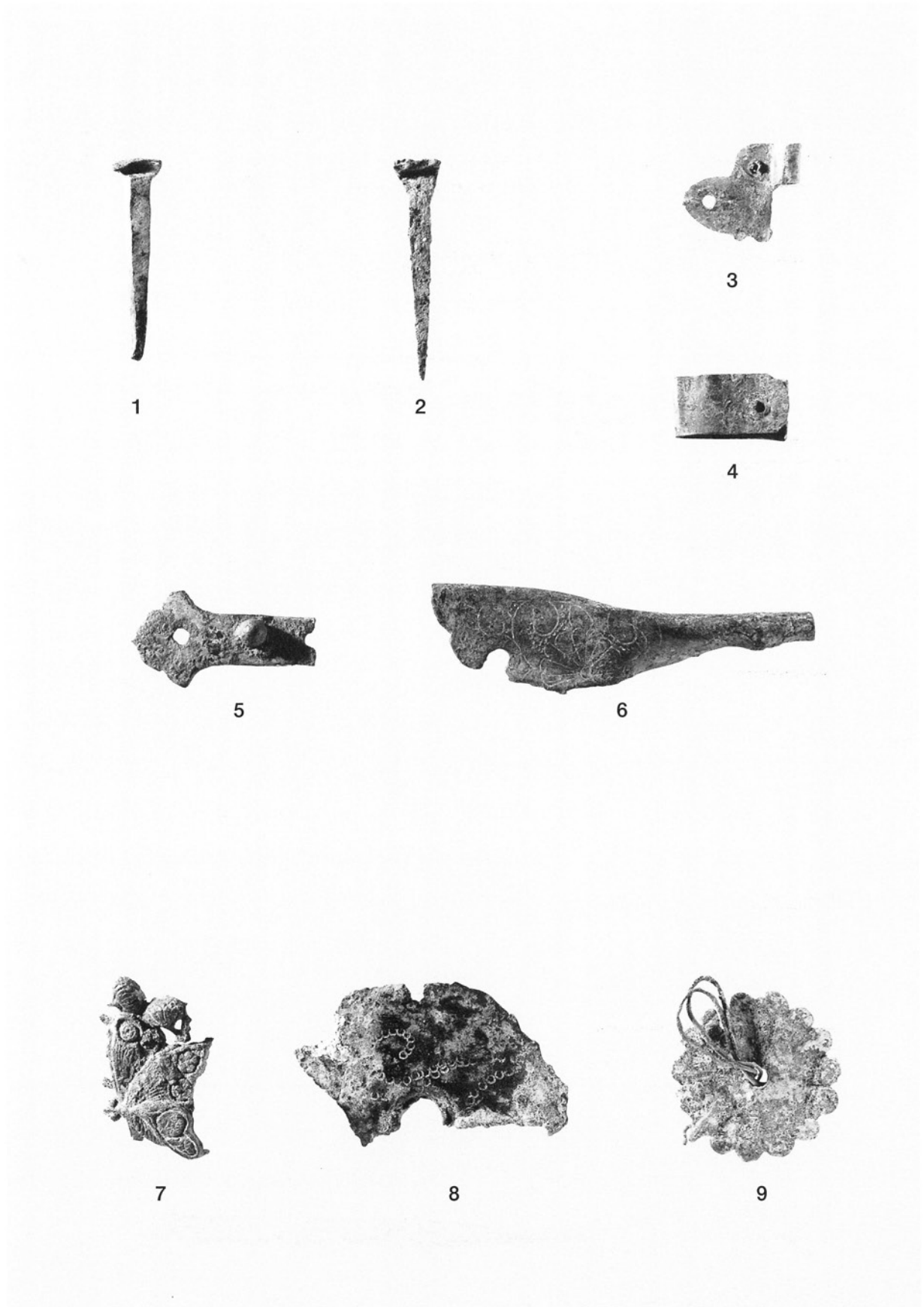


9

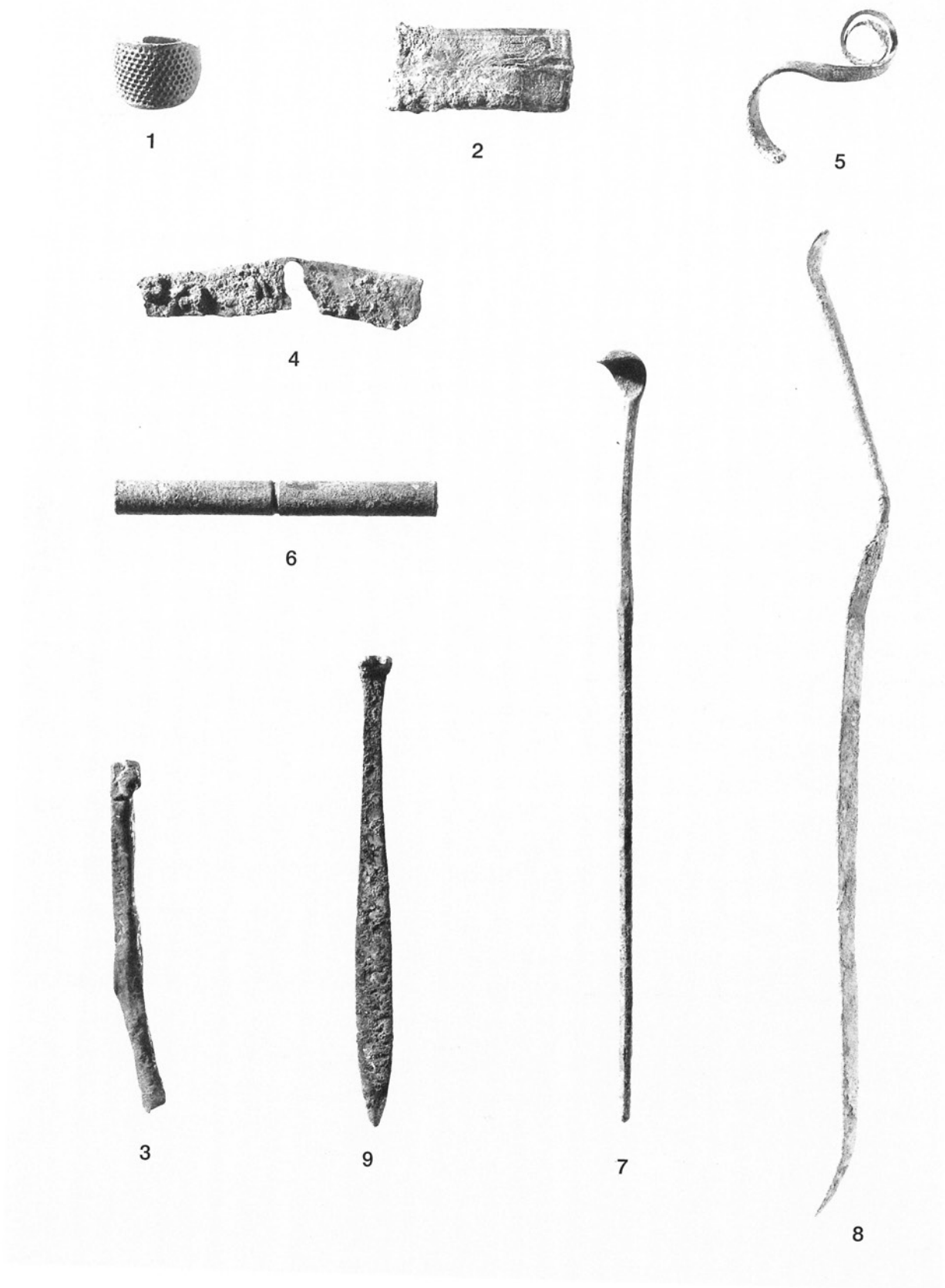


11

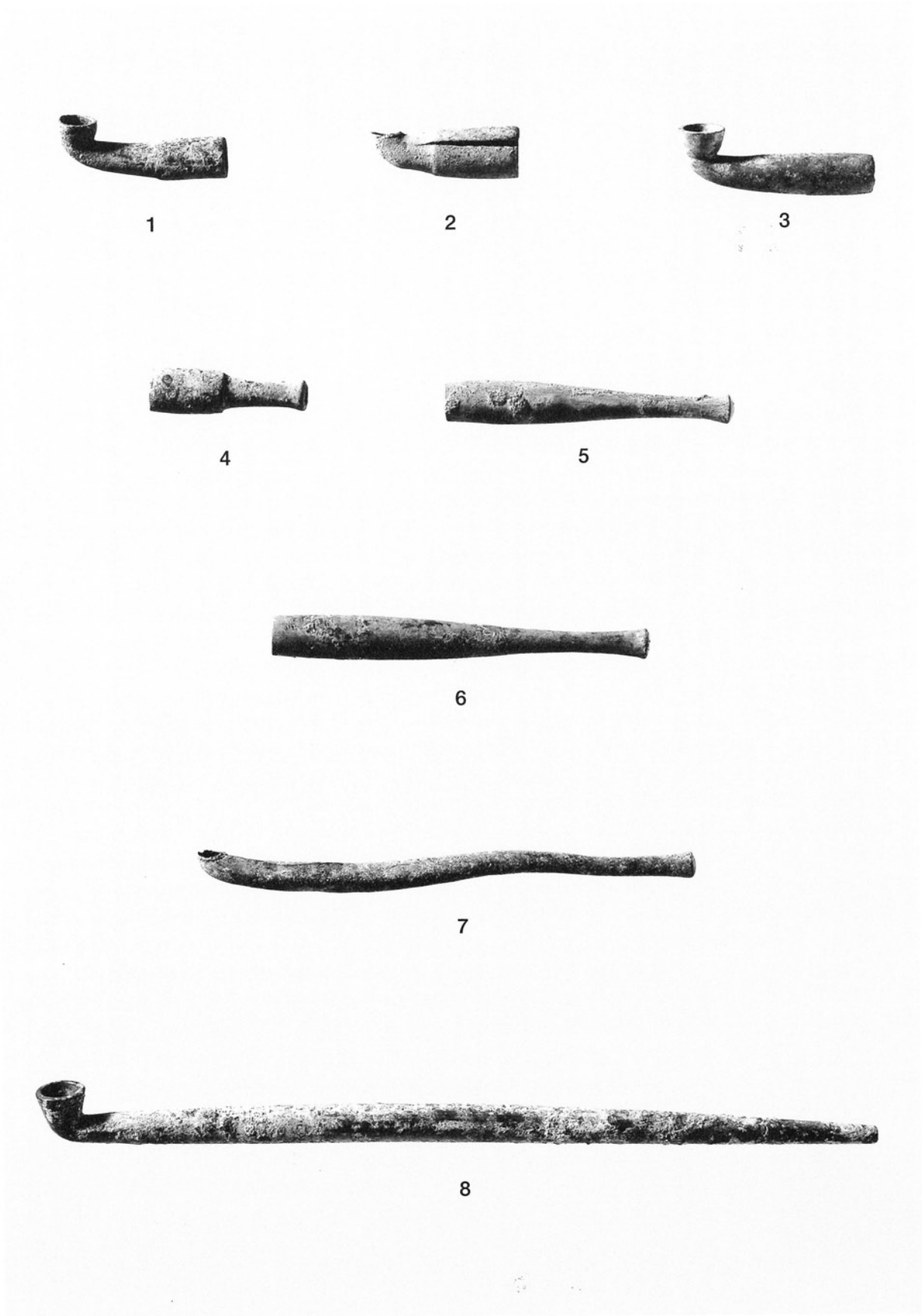
図版60 (第67図) 青銅製品：八双金具 (1~4) ・鍔金具 (5) ・鉾 (6) ・座 (7・8)  
切羽 (9) ・燭台 (10・11)



図版61 (第68図) 青銅製品：釘 (1・2) ・留具 (3・4) ・裝飾金具 (5～7) ・円形状金具 (8・9)



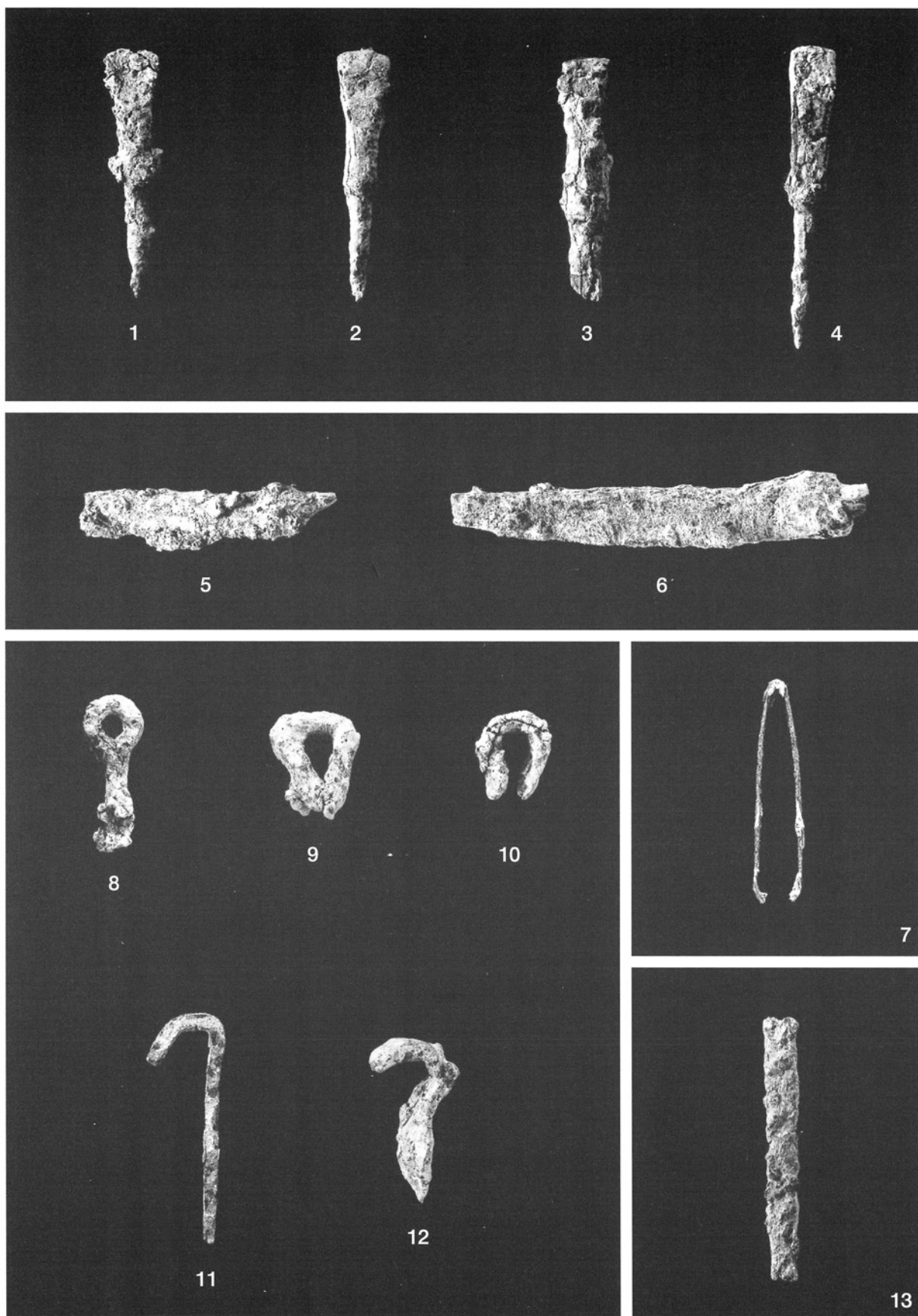
図版62 (第69図) 青銅製品：指ぬき (1) ・用途不明 (2~6) ・簪 (7~9)



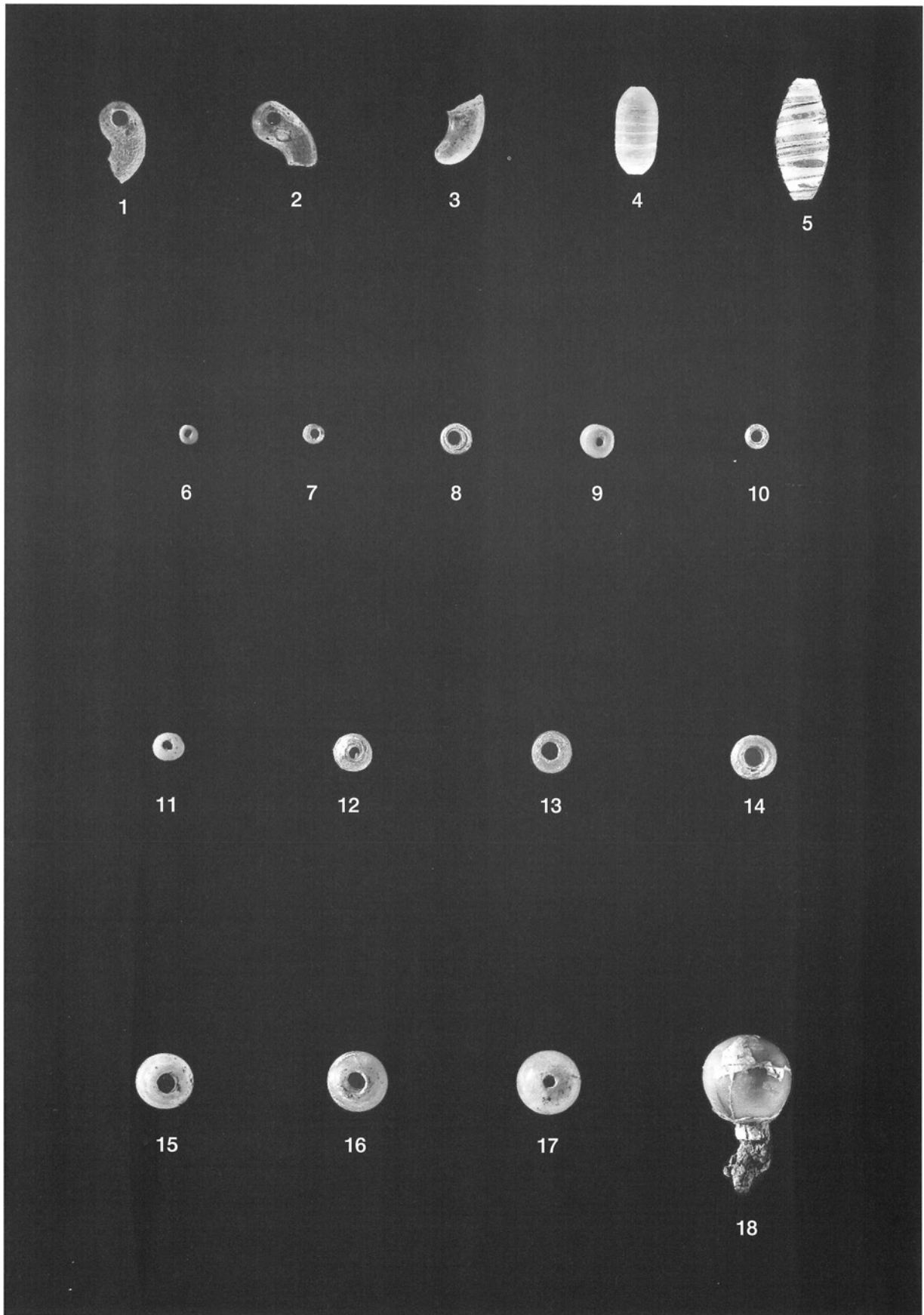
図版63 (第70図) 青銅製品：煙管 (1~8)



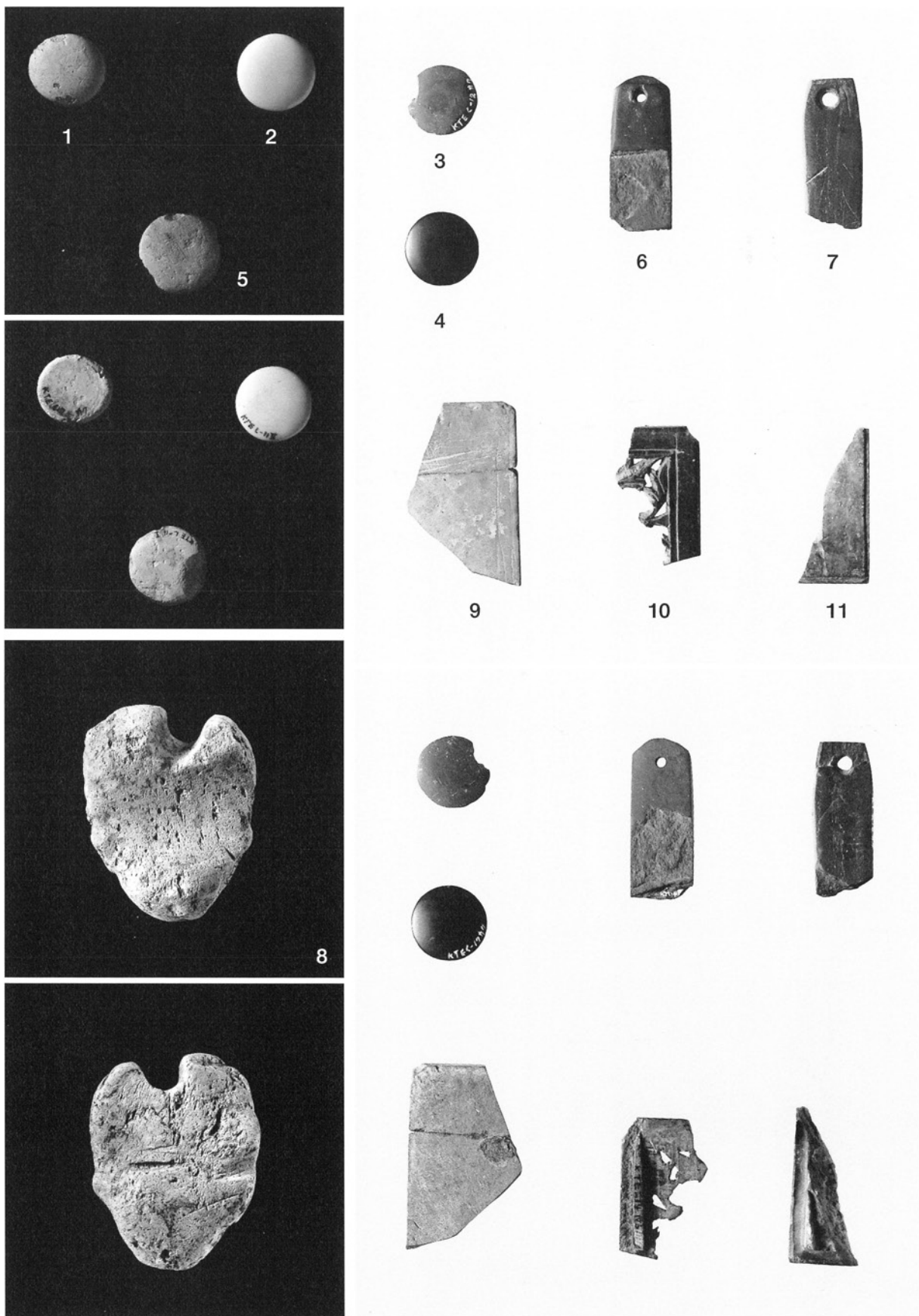
図版64 (第71図) 鉄製品：釘 (1~15)



図版65 (第72図) 鉄製品：鋤 (1～4) ・刀子 (5・6) ・毛抜き (7) ・金具類 (8～12)  
用途不明 (13)

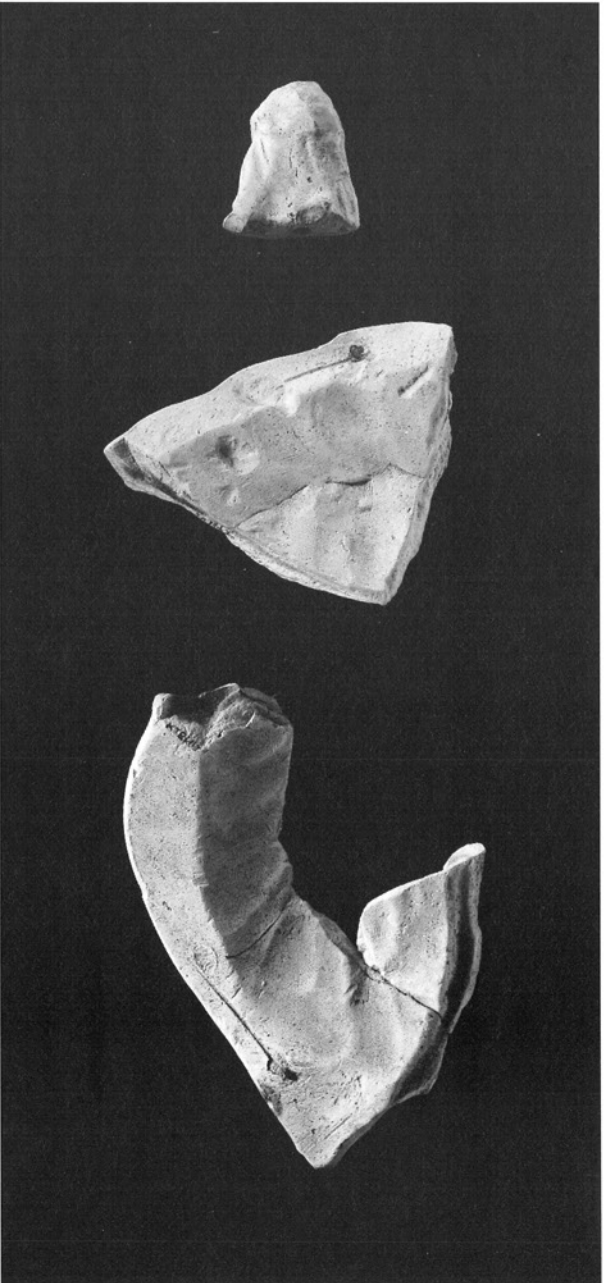
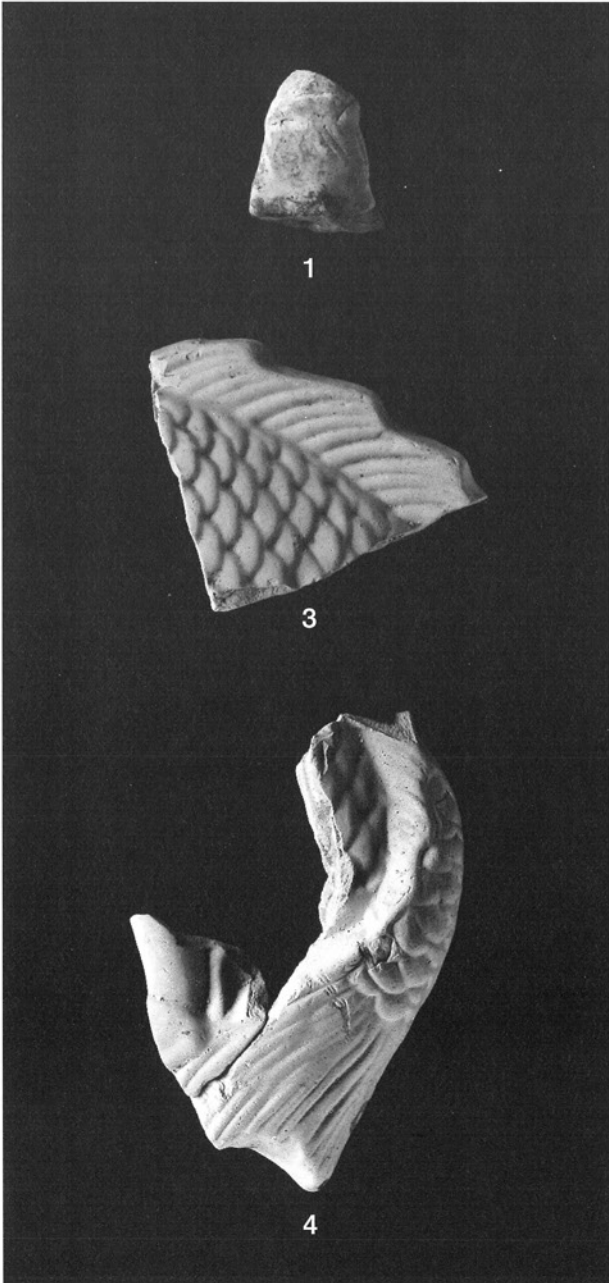
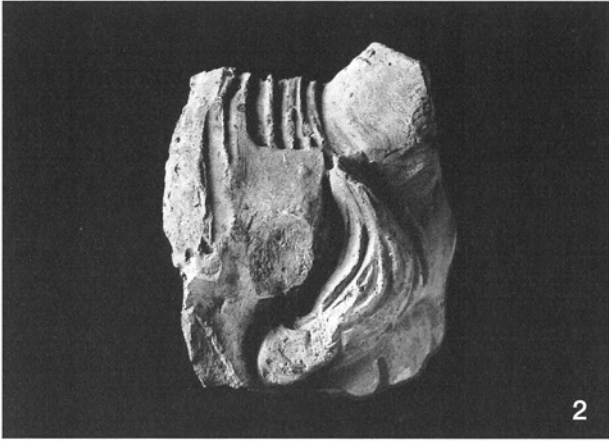


图版66 (第74图) 玉类：勾玉 (1~3) · 棗玉 (4·5) · 平玉 (6~16) · 丸玉 (17) · 裝飾品? (18)



図版67 (第76図) 石製品：基石 (1~4) ・基石代用品 (5) ・砥石 (6~8) ・用途不明 (9~11)





図版68 (第77図) 陶製品：人形 (1~4) ・用途不明 (5)

---

那覇市文化財調査報告書第43集

# 天界寺跡

—首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告—

発行 2000年3月

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編集 那覇市教育委員会文化財課

TEL 098-853-5775

印刷 有限会社 福琉印刷

〒900-0012 沖縄県那覇市泊2-19-8

TEL 098-867-1989

---